地域づくり　1月号別冊

財団法人 地域活性化センター

平成24年度 地域活性化事例集

～アートを活用したまちづくり～










本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

はじめに

現在、地域においては、それぞれの地域の個性や、独自の地域資源を活用し、主体的に地域の活力を生み出そうとする活性化施策が、様々な形で講じられています。

このような中で、地域の自然や文化の中に「アート」を取り入れることで特別な空間を生み出したり、また、「アート」を生み出す人を地域に招き入れ、新たな価値を創造することなどにより地域を活性化させる取り組みが各地で始まっています。

そこで、当地域活性化センターでは、このたび、アーティストに活動の拠点を提供したり、アーティストの創作活動や作品の展示等を通して地域住民との交流を図りながらまちづくり行う事例や、都市や農村の景観を活かしながら、美術作品を展示することなどにより賑わいを創出する事例など、アートを活用した特徴のある取り組み事例について、取りまとめることにしました。

掲載事例の収集にあたりましては、各都道府県から地域における特徴ある取組事例について152事例をご推薦いただきました。

本報告書においては、この中から特に他の自治体においても参考になると思われる53事例を「特集編」、「本編」とし掲載しております。

「特集編」の８事例においては、当センターにおいて現地取材を行い、関係者の方々の生の声を取り上げ、「本編」の45事例については、関係する地方公共団体の担当者または実施主体の方々に執筆いただきました。

さらに、その他の特徴的な99事例については、関係する団体の方々にご執筆頂き「資料編」として掲載しております。

各事例につきましては、取組のきっかけ、取組の内容と実施成果、今後の課題と展望などについてまとめております。

本報告書が、地方公共団体の方々をはじめ、関係者の皆様のご参考になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本報告書の作成にあたり、ご協力いただきました皆様方に厚く御礼を申し上げます。

平成25年１月

地域活性化センター理事長
石　田　直　裕

アートを活用したまちづくり

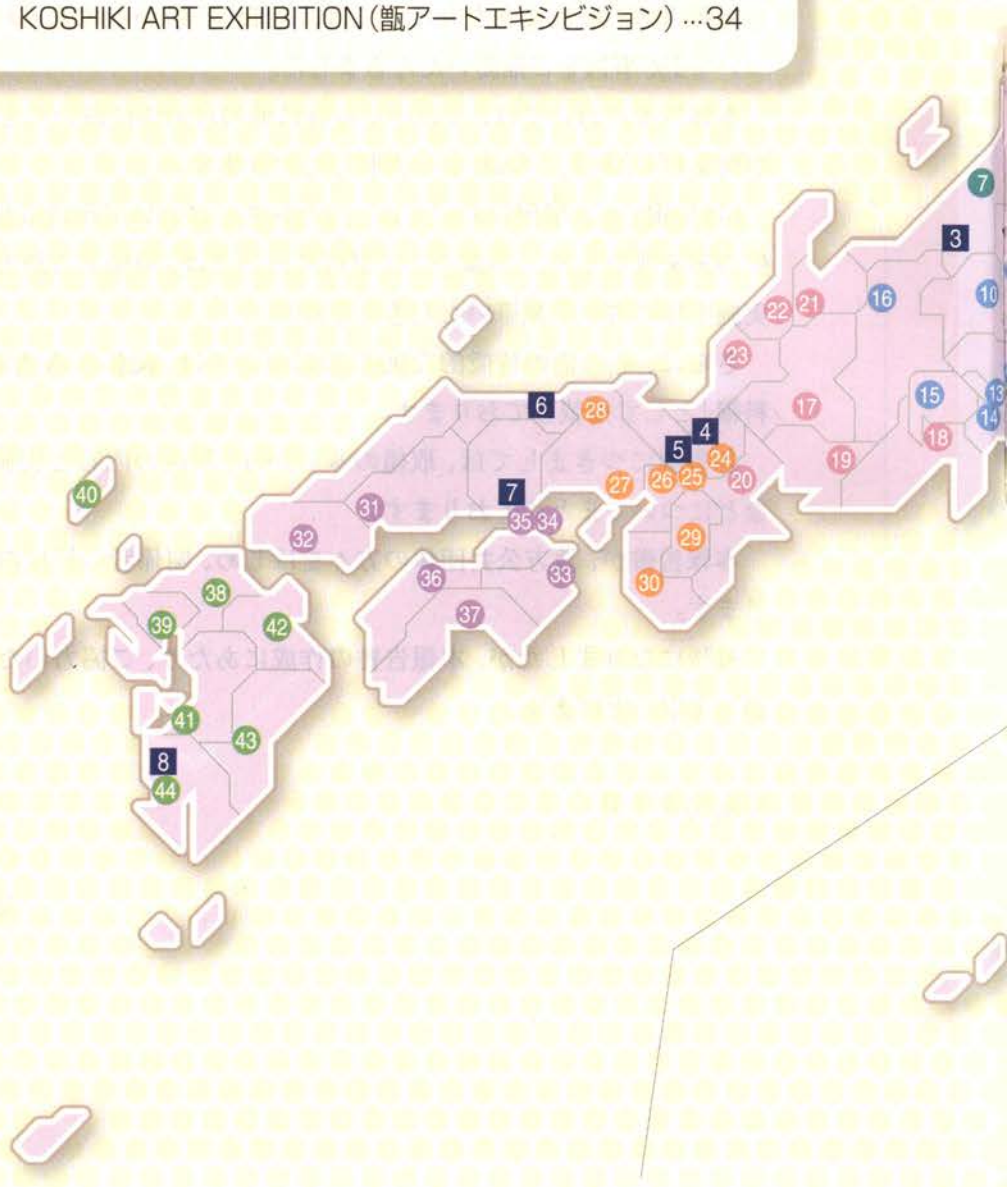
Contents

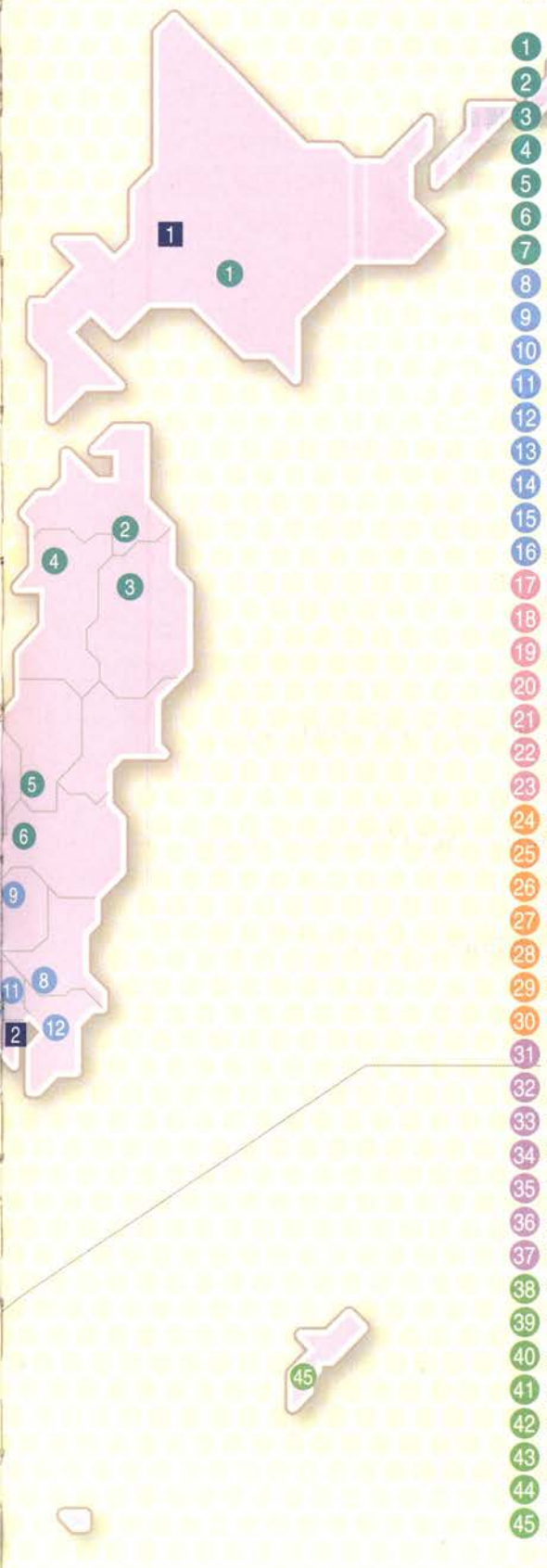
はじめに……1
都道府県目次……2
ご利用にあたって……4

都道府県別目次

特集編８事例

1 北海道　空知地方　炭鉱(やま)の記憶アートプロジェクト……6
2 神奈川県　横浜市　アートによる初黄・日ノ出町地区再生の取組……10
3 新潟県　十日町市 津南町　大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ……14
4 滋賀県　高島市　アートの力で風と土の結びめに……18
5 京都府　京都市　若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり……22
6 鳥取県　鳥取市　鳥の劇場……26
7 岡山県　岡山市　犬島のアートプロジェクト……30
8 鹿児島県　薩摩川内市　「甑島で、つくる。」KOSHIKI ART EXHIBITION(甑アートエキシビジョン)…34





本編45事例

1 北海道　占冠村　シムカプ　アートキャンプ　2011 ……40
2 青森県　十和田市　Arts　Towada ……42
3 岩手県　岩手町　彫刻のあるまち・岩手町 ……44
4 秋田県　三種町　サンドクラフトinみたね ……46
5 山形県　小国町　旧小玉川小中学校利活用事業 ……48
6 福島県　会津坂下町　里山のアトリエ坂本分校Atelier Noko彫刻村 ……50
7 新潟県　新潟市　開港都市にいがた水と土の芸術祭2012 ……52
8 茨城県　取手市　取手アートプロジェクト ……54
9 栃木県　日光市　WATARASE Art Project2012" PARADE" ……56
10 群馬県　桐生市　一店一作家（一工場）運動プロジェクト ……58
11 埼玉県　川口市　川口の匠 ……60
12 千葉県　千葉市　パラソルギャラリー ……62
13 東京都　あきる野市　アートスタジオ五日市 アーティスト イン レジデンス事業 ……64
14 神奈川県　相模原市　アートラボはしもと ……66
15 山梨県　韮崎市　のれんのある街づくり推進事業 ……68
16 長野県　大町市　麻倉（あさくら）プロジェクト ……70
17 岐阜県　美濃加茂市　きそがわ日和 ……72
18 静岡県　富士宮市　まちなかアートギャラリー ……74
19 愛知県　設楽町　奥三河アートフェスティバル ……76
20 三重県　亀山市　アート亀山 ……78
21 富山県　南砺市　寺のまちアートinいなみ ……80
22 石川県　金沢市　金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム ……82
23 福井県　鯖江市　うるしの里中道アート事業 ……84
24 滋賀県　甲賀市　信楽まちなか芸術祭 ……86
25 京都府　木津川市　木津川アート ……88
26 大阪府　高槻市　高槻アート博覧会 ……90
27 兵庫県　神戸市　港で出合う芸術祭　神戸ビエンナーレ ……92
28 兵庫県　養父市　おおやアート村構想推進プラン ……94
29 奈良県　奈良県　奈良・町家の芸術祭ＨＡＮＡＲＡＲＴ（はならぁと） ……96
30 和歌山県　田辺市　芸術文化交流事業 ……98
31 広島県　大竹市　巨石アート（ストーンアート）の取り組み ……100
32 山口県　山口市　メディア芸術を活かした文化的価値創造発信事業 ……102
33 徳島県　徳島市　LEDが魅せるまち・とくしま推進事業 ……104
34 香川県　小豆島町　小豆島　石の魅力創造プロジェクト ……106
35 香川県　直島町　ベネッセアートサイト直島による「家プロジェクト」事業 ……108
36 愛媛県　西条市　「水」と「芸術文化」のまちづくり ……110
37 高知県　高知市　アール・ブリュット美術館運営事業 ……112
38 福岡県　田川市　後藤寺街並み美術館 ……114
39 佐賀県　鹿島市　まちなか博物館 ……116
40 長崎県　対馬市　対馬アートファンタジア事業 ……118
41 熊本県　津奈木町　住民参画型　現代美術プロジェクト／アートプロジェクト ……120
42 大分県　別府市　別府現代芸術フェスティバル2012「混浴温泉世界」 ……122
43 宮崎県　西米良村　西米良芸術祭 ……124
44 鹿児島県　日置市　吹上ワンダーマップ ……126
45 沖縄県　うるま市　島アートプロジェクト事業 ……128

資料編99事例

資料編 ……131

ご利用にあたって

構　成

●本書は、「特集編８事例」「本編45事例」「資料編99事例」により構成されている。

データについて

●自治体の人口及び面積は、平成24年４月１日時点における数値である。

●平成24年４月２日以降の市町村合併による人口及び面積の変更は反映されていない。

そ　の　他

●特集編の本文中に掲載の関係者の役職名や名称等は取材時（平成24年９月～10月）のものである。

●本編は執筆時（平成24年９月～10月）の内容に、一部時点修正（平成24年11月）を加えたものである。

●資料編は事例収集時（平成24年６月）の内容をもとに、一部時点修正（平成24年９月～11月）を加えたものである。

特集編

8事例

北海道空知地方

炭鉱（やま）の記憶アートプロジェクト

～まちの始まり、炭鉱遺産から空知の誇りを取り戻す～

● 北海道空知地方の概要 ●

空知地方は、北海道の中央部からやや西方の、東西約70km、南北約130kmのエリアで、全道面積の約７％を占める。10市14町から成り、人口は合計で約33万人、中央を石狩川が縦走し、南西部にかけて石狩平野が広がっており、稲作を主体に野菜や花など様々な農業が展開されている。明治初期から炭鉱とともに発展してきたが、昭和30年代後半のエネルギー政策の転換により中核である石炭産業が衰退したため、地域再生が課題となって久しい。

取組のきっかけ

（１）基幹産業の消滅とまちの衰退

空知産炭地域は、豊富な埋蔵量と高品質の石炭によって、明治期のわが国の近代化や北海道開拓、第二次大戦後の経済復興を支えてきた。しかし、エネルギー政策の転換に伴う石炭生産の急減に軌を一にするように、人口はピーク時の約80万人から現在は半数以下の33万人程度に減少している。「炭鉱で始まったまちは、炭鉱が無くなれば不要」という心ない声や、炭鉱から派生するマイナスイメージから炭鉱を負の遺産と考える人も多く、地元でもその価値を見出すことができない時期が続いていた。

（２）負の遺産から地域の誇りへ。「元気そらち！産炭地域活性化戦略」の策定

産炭地域の中には、炭鉱のまちという負のイメージからの脱却を図るため、リゾート開発等の大型投資等を行ってきた自治体もあったが、経済環境の悪化等もあり必ずしも期待通りの成果を上げられないでいた。そのような中、平成10年度、北海道空知支庁（現空知総合振興局）は、「そらち・炭鉱の記憶発掘事業」を立案し、空知の原点ともいえる炭鉱関連施設を「炭鉱遺産」と位置づけ、地域住民とともに地域づくりに活用していくこととし、それ以降、民間の炭鉱遺産を活用した自立的、継続的な地域づくりに対する等の支援を進めた。この結果、炭鉱を地域資源として見直す動きが広がり、資料収集やガイド活動等多くの活動が推進されるとともに、活動を通して、地域の事は地域で考える、という主体性も醸成されていった。

同庁では、平成19年度から２年間、「空知産炭地域活性化戦略会議」を設置し、地域づくり団体及び岩見沢市や三笠市を始めとする産炭地等関係11市町を構成員とする調査会議などを通じて活性化策を検討し、平成21年３月、「元気そらち！産炭地域活性化戦略」（以下、「活性化戦略」と言う。）をまとめた。活性化戦略は、経済や環境の立て直しで評価の高いドイツルール工業地帯のIBAエムシャーパーク構想を一部参考にしており、自治体ごとの均等配分を排除した「選択と集中」によって炭鉱遺産の価値と可能性から拠点を配置し、その拠点の「ネットワーク」によって新たな回遊を促すという、エリアマネジメントの発想が取り入れられた。

（３）「炭鉱の記憶アートプロジェクト」

活性化戦略では、空知地方にある14の炭鉱跡地を拠点にし、歴史、アート、産業的自然、ジオロジー、回廊の５つのテーマで分類し、それぞれの拠点同士を結びつける５つのルートを設定している（図１参照）。各拠点の特徴を生かしながら、ストーリー性を持たせてネットワーク化することで、炭鉱遺産への関心を高め、回遊性の向上を図っている。

テーマのひとつである「アート」に関連した取り組みとして、活性化戦略を先取りする形で平成17年度より開催されているのが「炭鉱の記憶アートプロジェクト」（以下、「プロジェクト」と言う。）である。プロジェクトの実施主体であるNPO法人炭鉱の記憶推進事業団（以下、「事業団」と言う。）が、岩見沢市、美唄市や三笠市等に残る炭鉱遺産をプロジェクトの開催地としてピックアップし、これまでに場所を替えながら４か所で開

催しているが、毎回炭鉱遺産の所有者と交渉しながら開催場所を決定しているため、不定期の開催となっている。事業団理事長で、札幌国際大学観光学部教授でもある吉岡宏高氏は、「炭鉱を見に来てください、では訪れる人は少ない。最初に訪れるきっかけはアートだが、帰る時に、炭鉱ってすごいね、と興味を持ってもらえればいい。アートを通して、そこで生きてきた人々の誇りや思い出等、炭鉱の記憶を掘り起こし、かつてそこに暮らしがあったことを伝えたい。」と語る。

以下、「元気そらち！　産炭地域活性化戦略」より。

①歴史（岩見沢～美唄～滝川・上砂川・歌志内～赤平。空知地方にゆかりのある歴史上の人物の足跡を辿る。）
②アート（岩見沢を中心に美唄、三笠、美流渡、万字。炭鉱遺産の空間でアートに触れる。）
③産業的自然（岩見沢～美流渡万字～夕張～栗山。炭鉱遺産と自然を楽しむ。）
④ジオロジー（岩見沢～唐松弥生幾春別～清水沢南部～夕張上流部。地球のドラマを体感。）
⑤回廊（岩見沢～唐松弥生幾春別～芦別。ドライブコース。）

（図1）



取組内容と実施成果

（1）場のインパクトと、アート作品が生み出す新しい現実

プロジェクトでは、北海道に関係するアーティストや札幌市立大学等の協力の下、炭鉱建物内に炭鉱をモチーフにしたアート作品の展示を行っている。鉄道、発電所や社宅等炭鉱関連施設は、ほとんどが閉山後取り壊されたが、高さ40～50mの巨大な立坑櫓やホッパー（石炭を貨車に積み込むための施設）が一部残されており、プロジェクトではそれらの場所を展示スペースとして利用している。予算の制約等から補修は行われていないが、事業団の吉岡氏は、「近代遺産の滅びていく姿から、ここでしか見られない場の力が発信できる。」と語る。開催時は市民団体や地域の学生等が力をあわせ清掃し、作品を展示する場を整えている。吉岡氏は、「場のインパクトに負けないよう、アーティストは苦労しているが、創作にあたっては、当時の事を知ってもらい、その場の文脈にあった作品を制作してもらっている。作品は、新しい現実として、過去から未来に向けたメッセージを発信している。」と語った。

プロジェクトではアート展示の他、周辺炭鉱遺産のフットパスや地域の子供達による写生大会等も同時に実施しており、訪れる人に炭鉱の歴史やそこに生活していた人々の暮らしを知ってもらい、関心を持ってもらう機会を提供している。

これまでのプロジェクトの開催状況は次のとおり（カッコ内は、作品数、展示期間、集客数）。

平成17年度　住友赤平炭鉱（赤平市）（10点、13日間、約400人）
平成21年度　三笠幌内布引立坑（三笠市）（9点、12日間、約700人）



（左から）NPO法人炭鉱の記憶推進事業団
北口博美事務局員、吉岡宏高理事長、
佐藤真奈美研究員、佐々木尊洋事務局員



関係書籍、パンフレット等


旧住友奔別炭鉱立坑跡（三笠市）


旧住友奔別炭鉱内ホッパー（三笠市）


高橋喜代史「ホッパーサウンド」


渡辺俊介「Rとθと連結器」


端聡「過去は未来によって変わり、未来は今によって」

平成23年度　夕張清水沢（夕張市）解体中の火力発電所等（11点、13日間、約1,000人）
平成24年度　奔別炭鉱（三笠市）ホッパー内（31点、13日間、約2,000人）

（2）三笠市での取り組み

「奔別アートプロジェクト」は、平成24年9月22日（土）～10月28日（日）の土日祭日の13日間、昭和46年に閉山した三笠市内にある旧住友奔別炭鉱選炭施設内の石炭積み出しホッパー内で行われ、期間中約2,000人が訪れた。昭和35年に完成したこのホッパーは、長さ100m、幅13m、高さ20mと国内最大級の規模を誇り、閉山から40年以上経過した今日、コンクリートの基礎を残すのみではあるが、そのスケールの大きさから当時の威容が窺える。三笠市では、地域住民に積極的に参加アーティストと交流を図ってもらおうと、作品の制作段階からプロジェクトの開催期間中を通して、アーティストに対しまちの集会所を宿泊施設として提供した。その間、地域主催の焼き肉大会の実施や、日常的に地域住民や元炭鉱関係者等から、家庭料理、お菓子やカイロ等多くの差し入れがあり、これらを通してアーティストと地域住民の交流が促進された。

また市は、プロジェクト期間中、新たな炭鉱の可能性を創造、発見することを目的に開催された「炭鉱の記憶で地域づくりフォーラム」（主催：空知総合振興局）と「全国鉱山・炭鉱関係者サミット」（主催：NPO法人炭鉱の記憶推進事業団）について共催しており、今後も道やNPO法人等と連携、協力しながら、様々な取り組みを実施していく考えだ。

現在の三笠市の人口は約1万人で、ピーク時の約2割弱になっており、高齢化も進んでいる。三笠市企画経済部企画振興課政策推進主幹の阿部文靖氏は、「三笠市は、炭鉱と鉄道とともに発展を遂げたが、平成元年の北炭幌内炭鉱の閉山以降、今日までの約20年間は、閉山対策と財政の立て直しに追われた。」と語る。行財政改革を進めた結果、ようやく新たに事業を手掛ける財政基盤ができてきたが、過疎が進む市は生き残りをかけ待ったなしの状態。まちづくりを推進するために、炭鉱遺産に関連してユネスコの支援を受けられる日本ジオパークへの登録に向けた取り組みも行っている。阿部氏は「地質からまちの成り立ちの歴史、そこで育まれた文化等を体系的に示すことで、教育や観光面で活用していきたい。プロジェクトの地元開催は、メディア等外からの目が向けられる機会となっており、地域住民にとっても炭鉱に新たな価値を見出すきっかけになっている。」と語った。

（3）炭鉱遺産からまちの誇りを取り戻つつあること

プロジェクトは回数を重ねるごとに集客数が増えている。「アートの展示会場は、地域住民が普段は入れない場所が多い。プロジェクトを利用して訪れた元炭


三笠市企画経済部企画振興課　阿部文靖政策推進主幹（右）と下村圭主任主事


空知総合振興局地域政策部地域政策課　早川公康主査

鉱関係者も多く、当時のことを懐かしむ姿を目にした。外から目が向けられる機会が増えたことで、地域内外における炭鉱の再評価につながり、地域住民にとっては誇りを取り戻すきっかけにつながっている。」と空知総合振興局地域政策部地域政策課主査の早川公康氏は語る。道では、今後も空知地方内の各市町とNPO等団体と連携しながら、炭鉱遺産を活用した取り組みを支援していくこととしている。

今後の課題と展望

事業団の吉岡氏は、各種プロジェクト継続のための資金確保の他、外部の協力者、空知ファンを増やすことが重要だと考えている。「知的好奇心を持っている人は、1回限りの観光で終わらず、取り組みを応援してくれるようになる。単に石炭を掘っているだけの世界ではなく、炭鉱のまちが1つの完成された社会システムであったことを理解してもらいたい。」と語る。民間企業が所有する炭鉱遺産の多くは、取り壊しが予定されているものも多く、イベントでの使用が困難な場合が多い。このため、継続的に炭鉱に関連する情報を発信し、アーティストを始めとする道内外の多くの協力者を獲得し、炭鉱遺産所有者の理解を求めていくことが重要であるという。今後もアーカイブスの充実等伝承方法についても工夫していくことで、炭鉱遺産の教育や観光面でのさらなる活用が期待される。

また、空知地方では、官民を挙げて道内外、海外とのネットワークづくりを始めている。平成20年度に広域的な観光振興策を効果的に進めていくために設置された、空知を含む5つの支庁と観光協会や関連企業等約10団体からなる道央地域観光戦略会議では、石炭・鉄鋼・鉄道・港湾をキーワードに、今日の北海道を築く基礎となった空知（石炭で北海道の開拓を先導）、小樽（港と鉄道で北海道のゲートウェイとして繁栄）、室蘭（空知の石炭から鉄や鋼を作り日本の近代化を下支え）を三都とし、関連付けて紹介していく新たな取り組みを始めている。この動きの中で、事業団の吉岡氏は、「国内の産炭地の他、アーカイブスや地域づくりプランニングに優れたイギリスやドイツ等の海外産炭地との連携も図り、競い合い、励まし合いながら空知の炭鉱情報を発信していきたい」と夢を語った。

平成19年に「我が国の近代化を支えた北海道地域の歩みを物語る近代化遺産群」として、夕張市、岩見沢市、三笠市、美唄市に所在する炭鉱鉄道、変電所や立坑櫓等12件が経済産業省近代化産業遺産に認定された。これらのコンテンツとアートの活用を含めた、重層的・創造的な空知地方の取り組みがこれからも期待される。

自治体名	北海道空知地方
人口	329,864人
面積	5,791Km^2
事業名	炭鉱の記憶アートプロジェクト
事業開始年度	平成16年度
事業主体	NPO法人炭鉱の記憶推進事業団

連絡先

空知総合振興局地域政策部地域政策課

TEL 0126-20-0034（ダイヤルイン）　FAX 0126-25-8144

参考URL http://mc.soratan.com/



神奈川県横浜市

アートによる初黄・日ノ出町地区再生の取組

～まちとアートが共生する安全・安心なまちづくり～

● 神奈川県横浜市の概要 ●

横浜市は神奈川県の県庁所在地で、人口は、約370万人（平成24年10月現在）と、東京都区部に次いで全国第２位の大都市である。市の中心部から東京都心部まで約30キロメートルの位置にあり、日本最大の国際港湾である横浜港を基盤として、首都圏の中核都市としての役割を担っている。安政６（1859）年に開港した横浜港は開港当初から外国商人と活発に交易をし、平成21（2009）年には開港150年を迎えるなど、国際貿易の中心として日本経済の発展を支えてきた。また、港を囲む歴史的建造物や港の風景、近年開発されたみなとみらい21など、個性的で魅力ある都市景観や地域資源を有し、その魅力により多くの市民や観光客を惹きつけ、様々な芸術や文化を育んでいる。

取組のきっかけ

（１）違法特殊飲食店が建ち並ぶまち、初黄・日ノ出町地区

初黄・日ノ出町地区は横浜市中区の初音町・黄金町・日ノ出町一帯を指す。この地区は、戦前は周辺を流れる大岡川の水運を利用した問屋街として栄えたが、戦後は空襲で住居を失った人たちが京急線の高架下に住むようになり、更に横浜市中心部に太平洋総司令部（AFPAC）などの連合国の軍事拠点がおかれると、アメリカ兵相手の飲食店が建ち並び、それに伴い徐々に歓楽街が形成されていった。その中で違法な風俗営業を行う特殊飲食店も高度経済成長期を経て、平成に入るまで京急線の高架下を中心に増えていた。平成７年の阪神淡路大震災後、京浜急行電鉄が老朽化した高架の改修工事の必要から違法特殊飲食店の立ち退きを進めたところ、それらの店舗が押し出される形で周辺の初黄・日ノ出町地区一帯に広がり、京急線の黄金町駅から日ノ出町駅までの約１kmにおよそ250～260軒もの違法特殊飲食店が建ち並ぶ状況となっていった。そのため、近くに小学校があるにもかかわらず、地区のあちこちで違法行為や・ゴミの不法投棄などが行われるなど、環境も悪化の一途を辿った。

（２）「バイバイ作戦」実施

こうした初黄・日ノ出町地区を何とか再生させようと、平成15年、横浜市中区初黄町内会、日ノ出町町内会、横浜市立東小学校PTA等により「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」（以下「協議会」という。）が設立された。協議会は横浜市中区役所に地区の治安改善を要望し続け、平成16年にはそれらの意を受けた中区役所が法務省に治安改善の要望書を提出した。このような行政の要望行動や地域の環境浄化活動の盛り上がりを背景に、平成17年には神奈川県警が「歓楽街総合対策推進本部」を設置し、24時間体制で初黄・日ノ出町地区の違法特殊飲食店を取り締まる「バイバイ作戦」を開始した。その結果、違法特殊飲食店は全て閉鎖されたが、その違法特殊飲食店が抜けた後の空き家となった店舗が元の違法な店舗に戻らないために、どう活用していくかを出発点として初黄・日ノ出町地区の再生への取組が始まることとなった。

取組内容と実施成果

（１）アートを取り入れた地域再生

横浜市では非「成長・拡大」の時代にあって横浜市が都市としての自立と持続的な成長を維持していくためには都市の新しい価値や魅力を高め、発信していくことが必要と考え、平成16年度から、「文化芸術創造都市　クリエイティブシティ・ヨコハマ」を都市ビジョンに掲げ、歴史的建造物や港の風景を始めとした個性的な地域資源を活用し、芸術や文化のもつ創造性を活かしたまちづくりを進めていた。

一方、初黄・日ノ出町地区では、平成18年に中区役所が借り上げた店舗に地域防犯拠点「ステップ・ワン」を開設し、協議会による運営のもと新たなまちづくりへの第一歩をスタートさせた。この「ステップ・ワン」を拠点とすることで、協議会はこれまで以上に地域住民に呼びかけて神奈川県警と協働でパトロール活動をすることができるようになったという。こうし

た地元、警察、行政が一体となって行う安心・安全のまちづくりの取組を背景に、当時、横浜市では文化芸術都市創造事業本部が行っていた上記の文化芸術創造都市構想を初黄・日ノ出町地区に取り入れることで、アーティストが滞在し、まちづくりに参加することにより、まちのにぎわいの創出につながるのではないかと考え、平成18年に「ステップ・ワン」の建物の余剰部分を活用して、アーティストが滞在・制作活動を行う拠点「BankART桜荘」を開設した。

この「BankART桜荘」の開設を機に、横浜市は平成19年度からクリエイティブシティの取組地域を初黄・日ノ出町地区に拡大し、文化・芸術により当該地域の再生を図ることとし、この施策展開の一環として、バイバイ作戦によって閉鎖された元違法特殊飲食店の店舗の借り上げが進められた。

借り上げを促進する作戦として、平成20年度から協議会と横浜市、神奈川県警の3者が連携して、違法特殊飲食店街の店舗の特徴である赤いテント看板を取り外すことでイメージ向上をはかる「日よけ型テント看板撤去キャンペーン」を行った。店舗の所有者にテント看板の取り外しを呼び掛け、了解が取れた店舗については横浜市、神奈川県警、神奈川県テントシート工業組合等の協力のもと、協議会のメンバーが看板撤去を行い、その後借り上げ交渉に同意を得た店舗については、順次改修工事を行った上でアーティストの制作スペース等としての活用を始めた。こうした地域・行政・警察の協働により、まちの美観が少しずつ回復していった。



黄金町まちあるきまっぷ

（2）黄金町バザールの開催

このようにまちの新しいイメージづくりを進めるとともに、地域、大学、アーティスト・クリエーター、企業、行政等が協働してまちづくりを進めていくためのイベントとして平成20年からスタートしたのが「黄金町バザール」である。第1回の黄金町バザールは、神奈川県警による「バイバイ作戦」の後、平成20年に耐震工事が終わった京急線の高架下に京浜急行電鉄株式会社が整備したスタジオをメイン会場に開催された。運営は協議会を中心に、横浜市、横浜市立大学、神奈川県警、京浜急行電鉄株式会社などで構成される黄金町バザール実行委員会が主体となって行った。このイベントではアーティストが新しいまちの一員として、1～2ヶ月の間黄金町に滞在して制作を行うことで、地域の人たちやまちを訪れた人たちとの交流が図られた。また、アーティスト同士が交流を通してそれぞれ互いの仕事について理解を深め、意見交換をする機会となることも目指された。イベント名称については、アートに限らず、衣食住にわたり、幅広い分野で新しい経済活動を導入しながらまちの再生を目指すため、ペルシア語で「商店の並ぶ通り」を意味する“バザール”という名称が用いられた。

第1回の黄金町バザールでは、アーティストは30組が参加したが、黄金町バザールの規模は年々拡大しており、5回目となる平成24年の「黄金町バザール2012」（10月19日～12月16日）では33組のアーティストが参加した。また、アーティスト


日よけ型テント看板除去後の店舗
「写真：笠木靖之」


やがてアーティストの活動の現場へと変わっていく　「写真：笠木靖之」


京急線高架下の“かいだん広場”「写真：笠木靖之」


店を訪れた人とのワークショップ「写真：笠木靖之」


アーティスト活動風景


店を訪れた人とのワークショップ「写真：笠木靖之」


黄金町バザール期間中のまちの様子「写真：笠木靖之」

が仲間とまとまってグループで参加するというケースもあり、アーティストが初黄・日ノ出町地区に新たにアーティストを呼ぶ呼び水にもなっている。アーティストの参加が増えるとともに来訪者数も増加傾向にあり、4回目の「黄金町バザール2011」ではイベント期間中の3ヶ月間におよそ93,000人がまちを訪れ、まちの賑わいに大きく貢献をしている。

(3)NPO法人　黄金町エリアマネジメントセンターの設立

黄金町バザールはまちの再生を視野に入れたアートイベントとして全国から大きな注目を集めた。この成果を踏まえて、「アートによるまちづくり」をテーマとした黄金町バザールの運営だけでなく、空き店舗への新しい入居者の獲得や地域との連携といった、日常的なまちづくりに関わる活動を強化しながら、「安心安全のまちづくり」を推進するため、平成21年には事務局的な組織として新たに「NPO法人　黄金町エリアマネジメントセンター」(以下「センター」という。)が立ち上げられた。

センターは、新しいまちの参加者となるアーティスト、ショップ経営者を始めとして、従来からの地域住民、警察、行政、企業、大学等このまちの再生という共通のテーマに取り組む人たちの橋渡しの役割を担いつつ、初黄・日ノ出町地区の「アートによるまちの再生」という大きな課題に向かって、地域のマネジメントを行っている。

耐震工事が終わった京急線の高架下のスペースについては、横浜市文化観光局が京浜急行電鉄株式会社から借り上げ、元違法特殊飲食店であった空き店舗については横浜市都市整備局が主体となり所有者と交渉して借り上げを始めた。横浜市が借り上げた店舗はセンターに無償で貸し付けを行うことで、センターが一元的に管理し、入居を希望するアーティストや建築家などに貸すことによって違法営業の再発防止と地域の活性化を図っている。入居アーティストは印刷物とホームページで公募し、応募者の中からセンターと地域住民を含む選考委員会が審査して決定するという形を

とった。

「違法特殊飲食店の営業再開阻止という目的だけではなく、この狭く限られた空間からアーティストの創造力というものを発信し、まちを変えていこう、それにふさわしい人を選ぼうという目的があった」と横浜市文化観光局の大堀創造まちづくり担当課長は語る。

今後の課題と展望

(1)課題

もともと違法特殊飲食店は初黄・日ノ出町地区全体で250～260軒あったとみられるが、現在でも借り上げができていない物件が100軒以上あり、これらの店舗の借り上げを図るにも複雑な権利関係が立ちはだかっているという。「油断するとまたすぐに元に戻る恐れがある地域」だと大堀課長は警戒する。

センターの山野事務局長は「一度不穏な場所というイメージがついてしまった場所でもあるので、活動当初はなかなか人が来てくれなかった。そのため一度入居した人でもまちの雰囲気が良くないとしてすぐに去って行ったケースもある。人の流れが一旦消えてしまったことが一番辛かった。」と振り返る。

(2)今後の展望

センターが管理する店舗の入居期間については1年単位の長期契約と2ヶ月～3ヶ月単位の短期契約を行っており、現在は長期で契約をしているアーティストが多いが、山野氏は「今後は短期契約を増やしていきたい。短期契約者が増えれば結果的にこの初黄・日ノ出町地区を利用する延べ人数が増えることにつながる。それによってこの地区の情報を持って帰る人が増え、そしてあちこちに情報発信をして欲しい」と語る。また、まちに来る人の数も徐々に増えてきているが、山野氏は「黄金町バザールの期間中だけでなく、来た人がまちを楽しめる環境整備が必要。それに応えられるだけの施設がまだまだ少ない」と店舗数の充実を目指している。

海外にも積極的に広報を行い、海外のアーティストを誘致する取組も今後行っていく予定である。「アートのまちというイメージを定着させることでもう元の初黄・日ノ出町地区とは違うんだということをアピールしていきたい」と大堀課長は熱く話す。

また、センターは平成24年5月から、アートを通して多様な個性を伸ばすことを目的に「黄金町芸術学校」を開校した。この黄金町芸術学校では、展覧会を行うために必要な企画・制作のノウハウを学ぶ本格的な「キュレーター養成コース」のほか、初心者を対象に実技を学ぶ「水彩画教室」など、アートに関連した多彩な講座を実施している。アートに関心をもつ人を対象にした体験講座を通して、さまざまな地域、年齢、分野の人々の交流の場をつくる狙いもあるという。

アートを活用して、違法特殊飲食店が建ち並んだまちから生まれ変わることを目指す初黄・日ノ出町地区のこれからの取組が注目される。



NPO法人　黄金町エリアマネジメントセンター　山野事務局長（中央）
横浜市文化観光局　大堀創造まちづくり担当課長（左）坂井係員（右）

自治体名	神奈川県横浜市
人口	3,697,006人（平成24年10月1日現在）
面積	437.38Km^2
事業名	地域再生まちづくり事業（初黄・日ノ出町地区）
事業開始年度	平成21年度
事業主体	横浜市、神奈川県、特定非営利活動法人黄金町エリアマネジメントセンター、初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会、横浜市立大学



連絡先

横浜市　文化観光局　創造都市推進部　創造都市推進課
TEL 045-671-2288　FAX 045-663-1928
NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター
TEL 045-261-5467　FAX 045-325-7222
参考URL http://www.koganecho.net/
http://kogane-x.koganecho.net/

新潟県十日町市・津南町

大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ

～現代アートを媒体にした地域の魅力発信～

● 新潟県十日町市と津南町の概要 ●

十日町市と津南町は新潟県南部に位置し長野県に接している。この１市１町からなる地域は越後妻有地域と呼ばれ、人口は合計で約７万人、面積は約760㎢で、中央部には日本一の大河である信濃川が南北に流れ、雄大な河岸段丘や棚田などにより美しい農山村の景観を呈している。また、日本有数の豪雪地帯であり、毎年の平均積雪は２メートルを超える。かつては絹織物や農業を主産業として栄えていたが、過疎化や高齢化の進行による後継者不足などから、産業は厳しい局面にある。

取組のきっかけ

（１）「ニューにいがた里創（りそう）プラン」

十日町市と津南町におけるアートを活用した取組は、平成６年に提唱された新潟県の施策「ニューにいがた里創プラン」に始まる。このプランは、県独自の施策で、県内の市町村が広域で連携して実施する住民主体の地域活性化施策に対して、県が支援するというものであった。

「ニューにいがた里創プラン」に基づき、越後妻有地域が対象地域に指定された。越後妻有地域の当時の市町村の首長と県の担当課長で構成される協議会において、具体的にどのような施策を実施するのか検討を進めていく中で、過疎高齢化が急速に進行する越後妻有地域で地域再生の道筋を築くためには、何か起爆剤となるような画期的な事業を行うべきという結論に達し、現代アートをテーマとした地域づくりを実施することに決定。平成８年に「越後妻有アートネックレス整備構想」を策定した。

（２）「越後妻有アートネックレス整備構想」

越後妻有アートネックレス整備構想には、越後妻有の各地域をネックレスのように「アートでつなぐ」という意味が込められ、具体的に次の４つの事業を柱としてスタートした。

①越後妻有８万人のステキ発見事業（事業期間（以下同じ）：平成10年～平成11年）

地域の自然や文化が元々持っている魅力を再発見するための写真と言葉のコンテスト。

②花の道事業（平成10年～平成15年）

道路や民家の庭先などに花を植えて地域をつなぐ事業。

③ステージ整備事業（平成10年～平成15年）

有名なアーティストや建築家が参画し、地域の交流拠点施設を整備する事業。

④大地の芸術祭（平成12年～）

越後妻有アートネックレス整備構想の成果を３年に１回発表する場として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を実施する事業。

これらのアートを活用した取組をはじめるにあたり、現代アートについて地域住民の理解を得るため、まずは地域住民が参加しやすい事業から始めることとした。それが、①の越後妻有８万人のステキ発見事業と②の花の道事業である。地域住民に足元の豊かさを意識してもらうよう、ステキ発見事業では、普段の何気ない日常生活から地域の良いところを発見してもらうという点、花の道事業では、家の庭先や近所の道などの身近なところに花を植えるという点で、年齢や性別に関係なく、誰もが気軽に参加できる事業内容とした。このように、地域住民が関わりやすいテーマで、少しずつ地域住民を引き込みながら、同時に③のステージ事業で拠点施設の整備を進め、④の大地の芸術祭の実施に繋げていくこととされた。

取組内容と実施成果

（１）大地の芸術祭とは

大地の芸術祭は、越後妻有地域の里山を舞台に３年に１度開催される世界最大規模の国際芸術祭である。「人間は自然に内包される」をコンセプトに、地域の自


北川フラム氏

然や文化、歴史や風土など越後妻有地域に内在する様々な地域資源を、現代アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め、世界に発信している。新潟県出身の国際的に著名なアートディレクターである北川フラム氏を大地の芸術祭実行委員会の総合ディレクターに招き、平成12年にスタート。北川氏の優れたマネジメント能力と国内外のネットワークにより、世界中から多くのアーティストが参加し、大地の芸術祭は3年に1回継続的に開催されている。第5回を迎えた平成24年は7月29日～9月17日の期間に44の国と地域から合わせて310組のアーティストが参加し、来訪者は48.8万人に達した。

(2)地域住民の理解

大地の芸術祭を実施するにあたり、当初は議会や住民から「公費を使ってなぜこのようなことをするのか。」とか、「他所から来た人に地域を好きなようにかきまわされるのではないか。」などの反対があった。ステキ発見事業や花の道事業など、地域住民が広く参画する機会をつくり、地域住民を対象に説明会も数多く実施したが、第1回の開催時には直接参加してもらえる集落は少なかった。しかし、芸術祭を開催していく中で、地域にアーティストを呼んでワークショップなどを実施するにつれ、参加した地域住民が自ら楽しむようになり、また、地域住民とアーティストとの交流も生まれ、現在は100以上の集落が参加するなど、次第に住民の意識が変化していくこととなった。


案内所でのおもてなし

(3)サポーター「こへび隊」の存在

このような地域住民の意識の変化には「こへび隊」の存在も大きく関わっている。「こへび隊」とは、大地の芸術祭をサポートするボランティア集団で、大学生や社会人など幅広い年齢層から組織され、芸術祭の運営、作品のメンテナンス、ツアーガイドなど、さまざまな活動をサポートしている。北川氏の発案で平成11年に結成、当初は首都圏の美術または建築関係の大学生を中心に組織され、名前は「脱皮して大きくなる子へびのように成長する」という意味を込めて名付けられた。「こへび隊」が地域に入り、熱意をもって献身的に活動する姿を見た地域住民は、我々も助けたいという思いから、一緒に手伝い、参加するようになった。やがて、住民にとって「こへび隊」との交流がひとつの楽しみとなり、徐々に大地の芸術祭を受入れ、理解を深めることへと繋がっていった。

(4)地域・世代・ジャンルを超えた協働と交流

大地の芸術祭は単にアーティストが制作した作品を設置するだけの事業ではない。作品は、住民、アーティスト、こへび隊が協働で制作する。大地の芸術祭は、アーティストや作品と同様に、地域住民やサポーター、さらには地域の自然や文化、歴史、風土などの地域資源も主役となる取組である。

地域住民が地域外からのアーティストやサポーターと一緒に作品を制作することで、様々な交流が生まれている。例えば、海外アーティストの出身地域の人々と作品の制作に協力した集落の人々が海を越え互いに行き来し合ったり、作品に関わった大学生が、卒業後も継続して越後妻有地域を訪れたりしている。大地の芸術祭をきっかけに、アーティスト、地域住民、来訪者、サポーターなど、関わる人々の交流の輪はどんどん広がっている。


作品制作の様子

(5)来訪者数の増加

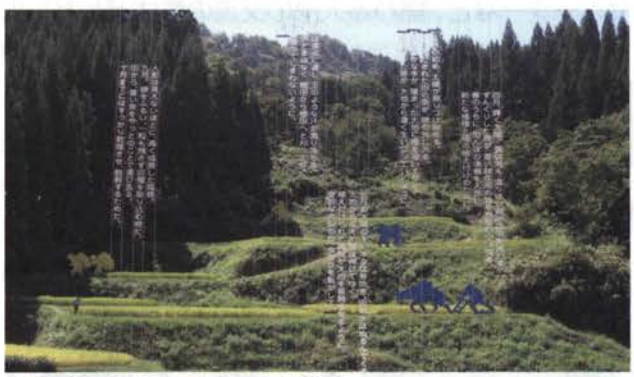
大地の芸術祭は平成24年で第5回を迎え、回を重ねるごとに来訪者は増え続けている。今や「越後妻有地域＝大地の芸術祭」が全国的に定着しつつあり、マスコミ等に取り上げられる機会も格段に増加してきている。また、作品が新たな観光資源となり、開催時期以外にも訪れる観光客が増加しており、地域の賑いにつながっている。

(6) NPOの活動

観光客の増加にはNPO法人の活動も大きく寄与している。平成20年2月、大地の芸術祭をサポートするとともに住民が誇りをもって暮らしていける地域にすることを目的に、北川氏の呼びかけで地域内外の有志などが発起人となり、「特定非営利活動法人越後妻有里山協働機構」が設立された。このNPOは、アート作品の管理運営をはじめ、大地の芸術祭の開催期間以外の時期にも誘客できるよう、作品を活用する様々なプロジェクトを実施している。また、現代アート作品だけでなく、この地域に内在する魅力を多くの人に知ってもらうため、地域と都市の交流活動を実施したり、担い手のいない棚田の里親を募る棚田バンクを実施するなど、アート以外でも地域活性化に向けた取組を展開し、持続可能な地域振興を図っている。また、東日本大震災以降、東北地域ともつながろうと、芸術祭によってつながった様々な分野の専門家や地域住民を講師に迎えて林間学校を実施している。

(7) 地域資源の魅力発信

アート作品は、里山、集落内、住宅地など広範囲に渡って設置され、越後妻有地域の全域に点在している。来訪者は、作品を鑑賞する際に、それを囲む田畑や山々などの美しく豊かな自然に出会うことができる。また、作品の中には、その地域の自然、文化、歴史、生活様式などを背景に創作されているものも多く、作品を通して地域の魅力を感じることができる。今や大地の芸術祭はアート作品を展示する美術展にとどまらず、里山の美しい自然やそこに住む人々の暮らしなど、地域そのものの素晴らしさの発信にも繋がっている。



イリヤ&エミリア・カバコフ「棚田」



田島征三「鉢&田島征三・絵本と木の実の美術館」

(8) 大地の芸術祭のチカラ

平成24年で第5回目の開催を迎えたが、第4回の芸術祭が終わってから第5回を迎えるまでの3年の間に、越後妻有地域は豪雪、地震、豪雨とたび重なる災害に見舞われた。これらの災害により、多くの作品にも被害が及び、第5回の開催は一時危ぶまれた。しかし、行政も地域の人々も大地の芸術祭を中止することは考えなかった。開催して越後妻有地域の元気を発信していこうという地域住民やサポーターの強い思いと努力が結実し、被害を乗り越えて無事に開催されることとなった。大地の芸術祭がいかに地域に根付き、住民の生活に深くかかわっているのかが、このことからも感じられる。

(9) 運営資金の確保

第3回までの10年間は「ニューにいがた里創プラン」に基づき、県から財政的支援を受けながらの実施であったが、支援期間が終了し、財政面での自立が求められることとなった。第4回以降は、民間企業からの協賛・寄付を積極的に求め、第4回から総合プロデューサーを務める㈱ベネッセホールディングス取締役会長の福武總一郎氏の尽力もあり、国内外の企業から多くの協賛を得ることなどで運営資金を確保できた。また、第5回には文化庁から補助金を得ることができたが、引き続き作品のスポンサーを募ったり、大地の芸術祭に使い道を指定できる「ふるさと納税」を受け付けるなど、運営資金を確保するための努力を続けている。



パスカル・マルティン・タイユー「リバース・シティ」

今後の課題と展望

(1) 今後の課題

大地の芸術祭は、回を重ねるごとに来訪者数も増え、地域住民の協力も広がり、地域に定着した事業となっ

ているが、十日町市観光交流課の桶谷係長は幾つかの課題について語ってくれた。安定的な運営資金の財源確保などの経済的な課題が第一に挙げられるが、それ以外に主な課題として次の４つがあるという。

１つ目は、事業内容のマンネリ化である。回を重ねてくるとどうしてもマンネリ化しやすい。常に新たな取組を仕掛けていくことが必要である。

２つ目は、担い手の育成である。今後も事業を継続していくためには、ディレクターやプロデューサーの意思を受け継ぐ後継者の育成が必要である。アーティストと地域をつなぐコーディネーター役の担い手を育てていく必要がある。

３つ目は、地域の若者の参加である。現在、大地の芸術祭に関わる地域住民は、年配の方が中心となっている。もっと、地元の若者が自ら楽しみながら、関わっていける環境を整えていくことが必要である。

４つ目は、実行委員会の意識と地域住民の意識の違いである。実行委員会としては大地の芸術祭は、地域が持つ資源や文化、生活様式など全てが作品であり、「地域まるごと美術館」という思いで取り組んでいるが、地域住民の中にはアート作品だけがお客さんに見ていただくものという意識がまだ残っている。地域住民がもっと自信をもって、自分たちの地域の自然、文化、生活様式を紹介してもらえるよう、意識づけていく必要がある。

（２）今後の展望

アートを活用した地域づくりをする上で大切なことは何だろうか。桶谷係長は次のように語っている。「主人公が重要ではないかと思います。大地の芸術祭の主人公は、作品であり、アーティストであり、集落の棚田や小川などの資源であり、ボランティアも主人公といえる。これらたくさんの主人公が集まれば大きなエネルギーとなる。様々な主人公が同じ事業に関わって、一緒に事業を作っていくことができれば、うまくいくのではと思います。」

「地域の人・もの全てが主役」である大地の芸術祭。今後も地域住民が中心となり、課題を解決することで発展を続け、十日町市と津南町のさらなる魅力向上と発信に貢献していくことを期待したい。



クリスチャン・ボルタンスキー「No Man's Land」



十日町市産業観光部観光交流課　桶谷係長

自治体名　新潟県十日町市・津南町

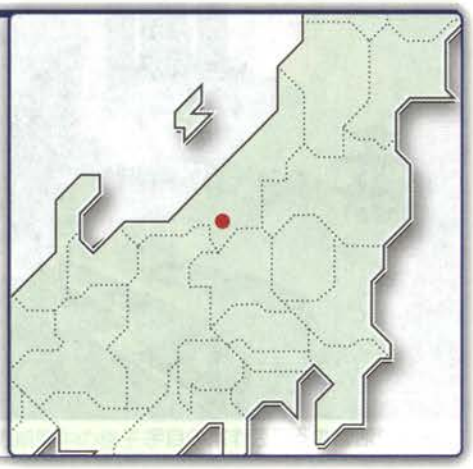
- 人　　口　68,180人
  ［十日町市］57,537人　［津南町］10,643人
- 面　　積　760.2Km^2　［十日町市］589.92Km^2
  ［津 南 町］170.28Km^2
- 事 業 名　大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ
- 事業開始年度　平成12年度
- 事 業 主 体　大地の芸術祭実行委員会

連絡先

十日町市産業観光部観光交流課

TEL 025-757-2637　FAX 025-757-2285

参考URL http://www.echigo-tsumari.jp/



滋賀県高島市

アートの力で風と土の結びめに

～作り手たちの暮らしと笑顔をめぐる風と土の交藝in琵琶湖高島～

● 滋賀県高島市の概要 ●

高島市は、滋賀県の北西部に位置し、東部は琵琶湖、南西部は大津市および京都府、北西部は福井県と接している。平成17年に高島郡の5町1村が合併し、高島市が誕生した。総面積は693km^{2}と県内最大で、総人口も約53千人を擁するが、平成12年以降は減少傾向にある。この地域は古来より京都・奈良の都と北陸を結ぶ交通の要衝となってきた。特に比叡・比良山麓を湖畔に沿って走る西近江路や、塩漬けされた鯖を運搬する街道であったことから鯖街道と呼ばれる若狭街道を主とする陸上交通と大津方面への湖上交通の拠点となり、港町や宿場町として栄えてきたが、近年は農業と製造業が主要産業となっている。気候的には冬季の寒さは厳しく、積雪量の多い日本海側気候となっている。

実施前の状況、取組のきっかけ、経緯

かつては湖上交通の拠点等として栄えた地域であるが、近年は少子化や若者の流出による人口減少に伴い、空き家の増加、耕作放棄地の拡大、森林や竹林の荒廃など、かつてのにぎわいも失われつつある。また、地域活動の担い手の減少により、これまで大切に行われてきた地域固有の文化である行事や風習が簡素化を余儀なくされたり、コミュニティの維持すら困難な地域が発生している。

一方で、高島市は「びわ湖源流の郷」といわれ、豊かな自然に囲まれながらも京阪神への交通の便が良いこともあり、以前から工芸作家がものづくりの拠点を求めて外から移り住む動きが見られた。この点を高島市の強みと捉え、高島市の魅力を発信し、積極的に移住を受け入れる活動を始めたのが市民団体「結びめ」である。

結びめは平成21年に湖西地域の工務店・設計事務所等の建築関係者が中心となって結成した市民団体で、平成22年に名称を現在の「結びめ」とし、平成24年にはNPO法人格を取得した。団体結成以前からメンバーの多くは高島市産の木を使った家の建築などを行っていたが、家だけではなく、家の周りに広がる生活空間も一緒に提供できないかという考えが高島市の進める若者定住施策の基本的な方針とも合致していたことから、行政と連携して移住・交流を進めていくこととなった。

そのために結びめが始めた事業が、平成23年から行っている「風と土の交藝」で、高島市を創作の場として移住してきた人や市外の工芸作家と高島で育ち地域に根付く人がそれぞれの暮らしや作品を通じて交流し、アートの力で地域の魅力を発信することを目指している。



高島市で活動する工芸作家の自宅



高島市で活動する工芸作家の工房の様子

取組内容と実施成果

（1）風と土の交藝とは

高島市にある豊かな自然の中で、移住者と地域の人たちが共生し、お互いに学び合い、支え合えるような暮らしを提供するのが結びめの目標である。高島市だからできる「暮らし」の魅力を発信して移住者を呼び込む、という結びめの活動は、そもそも発信対象の「暮らし」というものが家、生活、文化、農業、ものづくり等の様々な要素で成り立っているため、その活動内容も多岐にわたる。その中でもアートによる地域の魅力発信を目的に、一大イベントとして新たに力を入れているのが、「風と土の交藝」である。

「風と土の交藝」とは、高島市で暮らす工芸作家の自宅や工房を12月～1月のうち3日間開放し、来訪者が「風のパスポート」を購入して工芸作家の暮らしやものづくりの現場をめぐるオープンスタジオ型の催しである。移住してきた工芸作家を、移住・交流を促進する上での重要な人的資源と捉え、市内約40ヶ所に散在する工芸作家の自宅や工房を巡り、作品を生み出す暮らしに触れる機会を創出している。この企画では、来訪者や市外から出展する工芸作家を「風の人」、市内在住の工芸作家、市内に活動拠点を構える工芸作家、地域住民を「土の人」とそれぞれ位置づけ、相互に交流を深めてもらうことを願って「風と土の交藝」というネーミングにしたと結びめの事務局を務める西川唱子さんは話す。

（2）風と土の交藝in琵琶湖高島の内容と成果

平成23年1月に「第1回風と土の交藝in琵琶湖高島」が開催された。高島市に移住してきた工芸作家は、高島市の魅力に惹かれて移住してきた人たちであり、地域の良さを楽しみながら制作活動をしている。そういった工芸作家の暮らし、空間、生き方を併せて伝えていくためには、作品をどこか1ヶ所に集めるのではなく、実際に工芸作家の自宅や工房に行って作品とともにその暮らしぶりを見て、その場所で交流をしてもらうことが第一と考え、オープンスタジオ形式としたとのことである。

来訪者は「風のパスポート」（大人1,000円、3日間有効）を手に市内各地の手仕事現場をまわることができる。出展者の中には市内の空き家を借りた高島市外の工芸作家や学生も含まれ、こうした人たちと地域住民の交流の場も生み出せた。結びめのメンバーは、工芸作家だけでなく、市内の農家などを出展者の輪に加え、農を含めた「暮らし」「移住」のきっかけになればと考えているとのことである。

「第1回風と土の交藝in琵琶湖高島」では市内各地に38ヶ所の出展会場を設け、3日間に延べ約3,400人が参加した。また、開催に際しては、越後妻有アートトリエンナーレの総合ディレクターを務めた北川フラム氏を招いてのシンポジウムも実施した。

「風と土の交藝」開催以前は、個々の工芸作家の作品や活動が地域内でも知られる機会が少なく、工芸作家相互のつながりも乏しかったが、「風と土の交藝」の開催を通して、「風の人」と「土の人」がそれぞれ高島市の暮らしの魅力を体感し、それを相互に発信することで高島市の地域づくりが進み、ひいては移住・交流を促進するきっかけともなったとのことである。

平成23年12月に開催された第2回「風と土の交藝in琵琶湖高島2011」では市内各地に40ヶ所の出展会場を設け、50人以上の工芸作家が出展し、来場者も3日間で延べ約5,000人にのぼるなど、規模・集客ともに第1回を上回る結果になり、地域独自のアートイベントとして定着しつつある。



2012風と土の交藝in琵琶湖高島出展者募集案内


「風と土の交藝」の期間中の様子


「風と土の交藝」の期間中の様子


「風と土の交藝」の期間中の様子

夏のイベントが多い中で毎回12月～1月といった冬の時期に行うのは、「寒い時期だからこそ、炎の周りに様々な人が集い、交流が生まれるように」という願いと、「移住希望者に冬の寒い高島市を見てもらい、ありのままの姿を体感して欲しい」という思いからだと西川さんは語る。

(3)「風と土の交藝」の運営体制

現在、「風と土の交藝」を主催するのは結びめであるが、結びめとともに企画・運営を行うのが出展者や協力者等で構成される「風と土の交藝」プロジェクトチームである。「風と土の交藝」プロジェクトチームが、「風と土の交藝」への出展者の推薦など、イベント企画の中心的な役割を果たし、高島市は表には出ず、実働スタッフ・当日スタッフとしてチラシでの広報や当日巡回といった支援を行っている。

また、「風と土の交藝」を開催するうえでサポートスタッフの力が見逃せない。その活動内容は、出展する作家のサポートを中心に、広報活動や会期中の出展会場での来訪者対応など、ボランティアとして様々な形でこのイベントを支えている。募集チラシや結びめのHPなどで広くサポートスタッフを募集し、平成23年の「風と土の交藝in琵琶湖高島2011」では市内外から30人ほどがサポートスタッフとして参加した。


地域を訪れた人との交流

高島市に移住し、制作活動を始めて30年になる工芸作家の前川俊一さんは「1回目はサポートスタッフが手配できずに、来訪者の対応等に苦労をしたが、2回目のときはサポートスタッフのおかげで、負担が少なく自然な形で来訪者の対応ができた。」と語る。

「風と土の交藝」では、イベント開催中はもとより、終了後も、出展者の工芸作家とサポートスタッフだけでなく、サポートスタッフ同士でもつながりができるといった副次的な効果も生まれ、この活動をきっかけにその後何度も高島市を訪れるようになった人や高島市への移住を希望する人も出てきており、アートを基軸とする交流が広がっている。また、「風と土の交藝」をきっかけに、独自のツアーやイベントが企画されるなど、主催者側の意図を超えるようなネットワークの拡がりをみせている。

(4)高島市における定住促進施策

高島市では前述のように人口流出に伴い、空き家が増える一方、移住を希望する人が空き家の情報を求めるケースが多かったことなどから、「個人の不良資産」である空き家を「地域の優良資源」として移住希望者に提供し移住を進めていこうと、高島市は平成23年4月から空き家の情報を希望者に提供する「空き家紹介システム」の運用を始めた。

高島市では各集落に区長を通じて空き家の調査を依頼し、許可が得られた集落について悉皆調査を行っている。その結果空き家と判明した家屋については所有者と連絡をとり、物件の詳細な調査を行うとともに、移住希望者への貸家や売却の意向などをヒアリングしている。しかし、日常的に使用していない家屋であっても、他人に貸家や売却をしてもよいという人はごく少数とのことである。このため結びめでは、平成24年度から高島市と協力して、地域の人の合意形成を得るための集会をいくつかの集落で開催している。結びめの西川さんは「空き家を利用して移住したいという

方がたくさん居られる。移住者を迎え入れ地域の未来を一緒に考えていくことの大切さを地域の人にわかってもらいたい。」と語った。

また、貸家または売却について了解が得られた空き家については高島市が「空き家紹介システム」に登録の上、定住希望者への紹介を行っている。運用から1年半で3名がこの「空き家紹介システム」を活用して高島市への移住を実現させている。

高島市では「風と土の交藝」の開催期間中は、市外で活動している若手工芸作家の展示会場として空き家を紹介している。若手工芸作家を地元住民との交流の輪に加えることで、地域の「よそ者」に対する理解が進むことを目指したものだが、その若手工芸作家が高島市への移住を決めることもあったという。「空き家は多いが、所有者から活用について了解を得られる空き家は少ない。また、田舎暮らしへの憧れから移住のニーズはあるが、人付き合いや風習の違いなどに馴染めず挫折する人もいる。所有者だけでなく集落としてよそ者を受け入れる雰囲気づくりが必要」と高島市市民活動支援課の安福主任は語る。

今後の課題と展望

(1)今後の課題

広報のためのポスター・チラシの製作費やイベント運営費など「風と土の交藝」開催のための資金調達の方法については試行錯誤が繰り返されている。第1回は県からの補助金と開催趣旨に賛同してくれた企業からの協賛金をもとに運営をしていたが、第2回からは出展者に協力金の負担をお願いするとともに、来訪者にも出展会場の案内地図である「風のパスポート」を販売し、出展者、来訪者双方が目的を持って「風と土の交藝」に関わるようにし、その資金をもとにイベント内容の充実を図った。平成24年12月の第3回も基本的には同じスキームだが、今後は市内企業等と連携することで市内の産業振興につなげることを模索している。

現在は滋賀県や高島市からの補助金や助成金などは受けていない。14年前に高島市に移住し工房を構えた小田切健一郎さんは「普段はバラバラに活動している工芸作家も『風と土の交藝』ではまとまるし、実際に高島に来てくれた人とその後のつきあいができる場合もある。この大切なイベントを継続していくためには行政からの補助金に頼らずに自立した運営を考える必要がある。」と意気込みを語ってくれた。

(2)展望

結びめの西川唱子さんは今後の展開について「人間の生活に関わる農業の大切さを発信するため、農家さんに協力をお願いし、今後は農業での出展者を増やしていきたい。また、滋賀県はアールブリュット(障がい者が作るアート)が盛んな地域であり、高島市内にも取組まれている作業所があるので、協力をお願いし、より一層充実した内容にしていきたい。『風と土の交藝』を通して、結びめが文字通り風の人と土の人を結ぶ存在になれれば」と語る。今後も高島市における地域と人、人と人を結ぶアートを活用した取り組みの更なる発展が期待される。



結びめの西川唱子さん(左)と高島市市民環境部　市民活動支援課の安福主任

自治体名	滋賀県高島市
人口	53,054人
面積	693Km^2
事業名	風と土の交藝in琵琶湖高島
事業開始年度	平成22年度
事業主体	特定非営利活動法人　結びめ

連絡先

市民環境部　市民活動支援課
TEL 0740-25-8526　FAX 0740-25-8156
NPO法人　結びめ
TEL 090-5014-1600　FAX 0740-36-1661
参考URL http://www.musubime.tv/
http://kazetotsuchi.musubime.tv/



京都府京都市

若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり

～京都市のアートと社会をつなぐネットワークの中心に～

● 京都府京都市の概要 ●

京都市は、昭和31年、横浜市、名古屋市、大阪市、神戸市とともに第１号の指定を受けた人口147万人の政令指定都市である。地理的には京都府の南部に位置し、市内を賀茂川（鴨川）、桂川、宇治川などが流れている。京都市には、清水焼や西陣織などの伝統産業から先端産業まで多彩な産業群が集積している。また、平安京以来の1200年を超える悠久の歴史の中、多様な文化芸術が蓄積し、王朝、武家、宗教、町衆文化が結び付き合う中で、日本の文化芸術の中心地として今なお輝いている。

活動のきっかけ

京都市は約40の大学を抱える文教都市だが、芸術系大学も数多く存在し、多くの若手芸術家が自らの才能を育んでいる。一方で、京都で学んだ芸術家が、そのまま京都に根をおろして活動を続けていく環境を見い出せず、活躍の場を他都市に求めていく例もある。

京都市では、このような現状も踏まえ、優れた京都の文化芸術を通じて市民生活やまちづくりの取組を活性化し、京都市を常に新たな魅力に満ちあふれた世界的な文化芸術都市として創生することを目指して、「京都文化芸術都市創生計画」（平成19年３月）を策定した。この計画は、平成18年４月に施行した「京都文化芸術都市創生条例」に基づき、京都ならではの「文化芸術によるまちづくり」を総合的かつ計画的に進めるため、今後10年間に取り組むべき具体的施策をまとめたもので、「京都文化芸術都市創生審議会」で審議を行い、市民や文化団体の意見を踏まえて策定されたものである。この「京都文化芸術都市創生計画」においては、京都が全国をリードして「文化芸術都市づくり」をするための取組として「五つの京都先行プロジェクト」が掲げられており、その第４プロジェクトである「新たな文化芸術を創出する若き人材の育成」の一環として、「若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり」事業が計画された。

【五つの京都先行プロジェクト】

・京都ならではの文化・景観・観光三位一体の取組の推進
・文化芸術による魅力ある地域のまちづくりの推進
・文化芸術に親しみ、その楽しさを知る子どもたちの育成
・新たな文化芸術を創出する若き人材の育成
・文化ボランティアなど市民参加による文化芸術都市づくり

当事業は、平成21年４月から調査を開始し、続いてプランニングに着手した。

更に、京都市は、平成23年９月、この「若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり」事業を主として実施するための組織として、各分野の専門家で構成する「東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス実行委員会」（以下「HAPS（はっぷす）」という。）を設立した。これは、専門家の協力を得て、若手芸術家が京都で活動を続けていくうえで必要となる支援を総合的に実施することにより、京都で育まれた若い才能が市外に流出していく状況を改善していくことを目的としている。

HAPSの芦立さやかディレクターは、「この困難な時代に生きる芸術家たちを支えること。それは、単に『美術』という一つのジャンルを守ることではなく、私たちの社会全体の豊かさを維持し、さらに新しい可能性を開いていくことに繋がります。多くの芸術家がそこに住まい、生活しているまち。あるいは逆に、そこで暮らしている人間が芸術家になりうるまち、芸術家でありうるまち。切実な表現、独創的な作品、かけがえのない営為が多くの人に見られ、共有されているまち。HAPSは、個人の生き方と社会のあり方を組み替え、文化芸術が最大限のポテンシャルを発揮できるま

ちを京都市に作り出すことを、その目標として活動しています。」という。

取組内容と実施成果

（1）運営体制

HAPSは、実行委員長の遠藤水城氏（インディペンデント・キュレーター）をはじめ、京都市、芸術大学、芸術系NPO及び新聞記者など文化芸術に関係する各分野の専門家14名で構成されている。実務はディレクターの芦立さやか氏を中心とした事務局が担っている。また、HAPSは、さらに事業の推進を助力してもらうことを目的に、京都にある芸術大学の学長や教授、アーティストなどによるアドバイザー制度を導入するとともに、事業の成果等について検証する評価委員会を今後設けることとしている。

（2）HAPSの活動内容と実施成果

①相談窓口開設と支援プログラムの実施

HAPSでは、現代美術の分野で、京都市を拠点に更なる活躍を目指す若手芸術家のため、次に述べるような相談窓口の開設や支援プログラムを実施している。現代美術芸術家の制作形態は、昨今ますます多種多様に変化しており、自らの新しい表現に挑んでいく芸術家からの様々な相談に対応する必要が高まっていたからである。

この他にも、HAPSは、ウェブサイトでの情報発信も充実させており、相談受付窓口としての機能のほか、多くの情報をまとめるサイトとしても活用されている。現在のアクセス数は一カ月あたり約6,000件で、一日平均約200件近くのアクセスになっている。

ア　相談窓口の開設

相談窓口では、アーティストに対し、制作活動についての相談、助成金情報の提供、作品集作成のアドバイス、居住の相談などを実施しており、今年４月の窓口開設から約６か月で100件以上の相談を受けているという。専門的なもので現在のスタッフでは対応できない場合は、他の専門家を紹介するなどのサービスも行っている。相談者からは、「なんでも相談できるところは、これまでになかったので貴重だ。」などの声があり好評である。

イ　支援プログラムの実施

支援プログラムとして、京都市を中心に制作活動を行っているアーティストを広く紹介するため、海外の第一線で活躍するキュレーターを毎年京都市に招聘することとしている。昨年行われた海外キュレーターのスタジオビジットでは、「ベネチア・ビエンナーレ2011」のアシスタント・キュレーターを務めたジョバンニ・カルミネ氏を招き、京都市内約25ヵ所のアーティストのスタジオを訪問してもらい、約70名のアーティストを紹介している。この支援プログラムに対しては、ほとんどのアーティストにとって海外のキュレーターと話すことは初めてなので、「いい経験になった。」などの感想が寄せられ好評を得ている。

本年、京都市では、多くのアート関係者が集まる国際的アートフェア「ART KYOTO 2012」（平成24年５月）と京都の若手アーティスト達が企画する大規模なオープンスタジオ（アーティストがスタジオで作品を見せる機会）が、同時期に開催されることになったが、HAPSは、これらの両イベントを連携させ、「ART KYOTO 2012」の会場から各アーティストのスタジオを回るバスツアーを企画、実施した。これにより多くのアート関係者等の若手アーティストのスタジオへの訪問が実現した。これは、スタジオが遠いのでアート関係者に来てもらえるか不安だというアーティストの相談から生まれた企画である。

HAPSでは、これまでにこれ以外でアーティストたちのニーズに応える独自の支援プログラムを約30件実施しているという。



バスツアーの様子



スタジオビジットの様子

②関係団体・地域との連携

ア　大学との連携

HAPSは、京都市立芸術大学、京都造形芸術大学、京都精華大学とお互いに協力し、活動を行っている。例えば、京都造形芸術大学アートプロデュース学科との連携では、同大学の授業の一環としてHAPSの活動を紹介する「ハッピーはっぷす」という小誌を学生が編集している。この小誌はHAPSオフィスのある東山区六原地域の住民に回覧板で見てもらっており、HAPSの活動に対する地域住民の理解を深めることを狙っている。

イ　地域との連携

HAPSオフィスのある東山区の六原学区は、独自に「六原まちづくり委員会」を組織し、空き家対策などに活発に取り組んでいる地域だという。この委員会には地域住民だけでなく、不動産業者、建築士、京都市職員などが参加しており、官民一体となって地域の問題の解決に取り組んでいる。HAPSもこの委員会に参加し、六原学区の行事にも積極的に参加するなど、地域住民との交流を深めている。この中で、空き家情報があればアーティストへの紹介をしている。



小誌「ハッピーはっぷす」


六原フェスタの様子

③地域の空き家対策と活性化

アーティストは、作品制作のために、通常の人の住まいより広いスペースを必要としている。一方で、京都市では、住民の高齢化等にともない空き家となってしまう物件が増加している。

HAPSでは、こうした双方の情報やニーズを寄せてもらい、空き物件をアーティストの住居やスタジオとして紹介していくことで空き家等の問題解消にも貢献する公益的活動も行うこととした。

そのためHAPSでは、空き家率が約20%とされ問題が深刻な東山地区に拠点を構え、地域との連携を図りながら居住物件の掘り起しなどを行うとともに、今後は京都市全域の空き家や遊休施設の活用を考えたコーディネート事業も行っていく予定である。また、空き物件の利活用として平成24年11月から市内の閉校した小学校の教室だった6部屋をスタジオとしてアーティストに提供することが決まっており、閉校後も地域住民の活動の場となっている小学校で、アーティストと地域住民の新たな交流が始まることが期待されている。

現在まで空き家物件とアーティスト5件のマッチングを行っているが、いずれもアーティストに好評を得ているとのことであった。

HAPSが取り組んでいるこの事業は、京都市の重要施策の一つである「文化芸術と社会との出会いの促進」にも位置づけられており、アーティストが、まちなかで制作活動することは、アーティストにとっても刺激的なことであるとともに、その活動に地域が交わることで、新しいまちの魅力に繋がっていく効果があると考えられている。京都市は、このように若いアーティストが京都市に住むことで高齢化を防ぎ、また、空き家を活用することで、まちの安心・安全にもつながるものと期待している。

HAPSでは、京都市が別に実施している「地域連携


スタジオとして利用される教室

型空き家流通促進事業」と本事業が連携し、より一層アーティストを迎えるまちづくりの機運を高めるとともに、若手アーティストに適した造作、価格の空き家情報を若手芸術家に提供する努力をしなければならないとしている。

今後の展望

HAPSでは、六原学区の空き家をオフィスとして利用することが決まっているが、これを空き家活用のモデルケースとなるよう現在、専門家監修のもと、アーティストなどを中心としたボランティアの協力を得ながら、空き家の改修に取りかかっている。芦立氏は、「今後、この空き家を利用したオフィスから情報を発信していくことで、アーティストが空き家を活用することがどのように地域の活性化につながるのかを更に地域にアピールしたい。」と語っている。地域住民の信頼を得ることができれば、空き家を貸してくれる所有者も増え、空き家とアーティストのマッチング件数も増えていくと見込まれており、今後もより一層努力してこの活動を続けていきたいとしている。



HAPS 事務所予定地

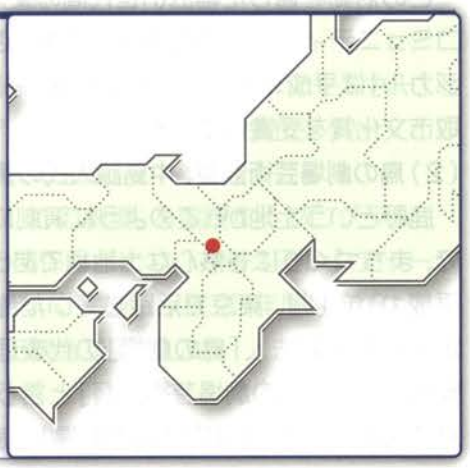
また、マッチングで京都に住むことになったアーティストの制作・発表の際には丁寧にサポートし、京都に根づいて活動を行うアーティストが世界にはばたくなど、次のステップアップに繋がるような支援や、長く居住し活動できる環境づくりを支援していきたいとの抱負を語ってくれた。

京都市は、日本の文化芸術の中心地としての魅力が多くある。この魅力をより輝かせるためにも、今後も地域や行政と一体となり、より多くの若手アーティストを迎え、地域の活性化につながるHAPSの活動に期待したい。


HAPS 移転先の改装の様子


HAPS 事務局のみなさんと京都市の照沼氏（右）

自治体名	京都府京都市
人口	1,470,587人
面積	827.9Km^2
事業名	若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくり
事業開始年度	平成22年度
事業主体	東山アーティスツ・プレイスメント・サービス実行委員会（HAPS）



連絡先

京都市総合企画局政策企画室政策調査担当

TEL 075-222-3035　FAX 075-212-2902

参考URL http://haps-kyoto.com/

鳥取県鳥取市

鳥の劇場

～廃校を劇場として再生。劇場の力で鹿野の魅力を全国に発信～

● 鳥取県鳥取市の概要 ●

鳥取市は、中国山地から日本海へ北流する千代川流域に開けた鳥取平野の東部に位置し、南北2.4km、東西16kmに広がる日本最大の観光砂丘、鳥取砂丘を擁する県都である。平成16年に鹿野町を含む鳥取県東部の6町2村と合併、翌年には、特例市に移行し、山陰地方の政治、経済、文化の中核的な役割を担っている。市では、市民が文化芸術に親しみながら地域の連帯感を深め、活力あるまちづくりを行うことを目指し、平成21年4月に「鳥取市文化芸術振興条例」を施行、市民の自主的な文化芸術活動の促進に力を注いでいる。

取組のきっかけ

(1)鹿野ふるさとミュージカルの活動

城下町である鹿野町(現鳥取市)は、古くから地元の昔話を演劇で伝える取り組みが学校教育に取り入れられていた。このような地域に根差した演劇への関心の高さを背景に、昭和62年にスタートした「鹿野ふるさとミュージカル」(実施主体：鹿野町民音楽祭実行委員会)は、地域の伝承や伝統をモチーフに、脚本からキャスティング、公演までを地域住民が主体となって行う市民参加型の演劇祭で、平成24年度で26回目を迎える。当地にゆかりのあった元宝塚歌劇団作曲家の中野潤二氏を中心に始まったこのミュージカルは、市民の一体感の醸成や手作りによる新たな地域文化の創造に寄与することを目的に実施されており、参加者は年に1度、鹿野町中央公民館で行われる1日2回の公演のために半年間にわたって演劇の練習を重ねている。

この活動を通した幅広い世代間の交流、良好な市民コミュニティづくりの功績から、「鹿野ふるさとミュージカル」は平成9年に自治大臣表彰、平成16年には鳥取市文化賞を受賞している。

(2)鳥の劇場芸術監督、中島諒人氏の挑戦

鹿野という土地が、このように演劇に対して積極的で、まちづくりにも熱心な土地柄であったことから、平成18年1月、東京で活躍していた鳥取市出身の特定非営利活動法人「鳥の劇場」の代表理事であり芸術監督(以下、「鳥の劇場芸術監督」と言う。)でもある中島諒人氏が、プロの劇団「鳥の劇場」を鹿野で結成、行政の協力を得て廃校となった旧鹿野幼稚園・小学校校舎をリノベーションし演劇活動を始めた。



特定非営利活動法人鳥の劇場代表理事・芸術監督
中島諒人氏



鳥の劇場外観(写真：鳥の劇場提供)

「演劇は、理想に向かって作られるもの。地域の再生に芸術劇場の果たす役割をここ鹿野で実践し、劇場の社会的な価値を示したい。」と中島氏は語る。演劇を観たり演じたりする事を通して、目の前の問題にどう向き合いどう行動を起こすかを考えるきっかけにし

てもらいたいと考えている。「これまでの学校教育は知識のストックだったが、これからは体験の質が求められている。地域活性化の本質は、自分たちのことは自分たちで決めるというリスクを背負った覚悟だと思う。」と熱く語った。

中島氏は、地域社会における劇場，演劇の役割を模索する果敢かつ戦略的な取り組みが評価され、平成20年度第33回鳥取市文化賞、平成21年度芸術選奨文部科学大臣新人賞（芸術振興部門）を受賞している。

（3）NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会の存在

鳥の劇場芸術監督である中島氏は、「『まち協』の存在がなければ今の鳥の劇場は無かった。」と語る。「まち協」とは、「NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会」（以下、「まちづくり協議会」と言う。）のことで、「鳥の劇場」の広報や招へいされる劇団員に空き家を宿泊施設として斡旋する等、「鳥の劇場」の活動を積極的に支援している団体である。

「まちづくり協議会」の成り立ちは平成13年に遡る。鹿野町では、平成６年度より町屋や白壁の家並み等の歴史的景観の保全や、鹿野に400年以上続く伝統的な祭り「鹿野祭り」の似合う町並みの復元を目指し、道路や石行燈等の環境整備を始めていた。そのような中、平成12年度に鳥取県が実施した「鳥取県町並み整備コンテスト」で、鹿野の住民グループが、空き家の活用を軸とした「いんしゅう鹿野童里夢（ドリーム）計画」を提案、見事最優秀賞を受賞し、この計画の実現に向け平成13年に鹿野住民から成る「まちづくり協議会」が設立された。

「まちづくり協議会」は、設立以来空き家を活用した取り組みを実施、ギャラリーやお食事処を整備することで、現在では年間約２万人の観光客が訪れる交流の場を創出しており、これらの取り組みが評価され、平成22年度に国土交通省の「手づくり郷土賞（大賞部門）」と財団法人あしたの日本を創る協会の「あしたのまち・くらしづくり活動賞　内閣官房長官賞」という二つの大きな賞を受賞している。


鳥の劇場運営委員会　長尾裕昭会長

鳥の劇場運営委員会（以下、「運営委員会」と言う。）会長であり、まちづくり協議会の前理事長である長尾裕昭氏は、「鹿野は、人口約４千人、高齢化率も30％を超えているが、成功体験を積み重ねることで新しいものを積極的に取り入れる雰囲気が醸成されていった。全国的な知名度も上がり、鹿野に行けば何かおもしろいことをやっている、と思ってもらえるようになっていった。」と、これまでを振り返って語った。

取組内容と実施成果

（1）鳥の劇場の取り組み

鳥の劇場の団員は17名で、うち鳥取県出身者は５名となっている。年間の予算規模は約６千万円。収入はチケット料、ワークショップ等の参加料、上演等の事業委託費、各種助成金・補助金、そしてサポーターの寄付から成り、このうち助成金・補助金が約３割を占めている。この収入に支えられ年間を通じて主に以下の活動を行っている。

①鳥の劇場による演劇作品の制作と上演

年間を通して５作品を各５～10回程度公演。三島由紀夫作品やオリジナル作品を公演し、演劇による非現実、非日常を楽しむ機会を提供している。

②ワークショップなどの参加型・体験型のプログラム

「小鳥の学校」と題し、小学校高学年～中学生を対象に芸術等各分野で活躍する講師を招き、演劇、デザイン、アニメーションや詩等、平成24年度は13の講座を実施。また、学習発表会の時期は台本作りの段階から定期的に学校を訪問するなどし、演劇の創作体験を通して子供たちに表現することの楽しさを伝えている。

③外部の劇団やアーティストの招へい

年に１回、全国各地のダンサーが集結し、創作したダンス作品を上演。

④新たな企画やプログラムの実施

平成24年度は「福祉をかえるアート化セミナー」と題し、福祉のアート化、アートの社会化をテーマとしたセミナーを招へいした。

⑤「考える場としての劇場」を実践するプログラム

芸術と社会の関係などについて考えるレクチャーや映画の上映を通年で実施。平成23年度は「六ケ所村ラプソディー」上映会を実施した。

⑥鳥の演劇祭

平成20年度より旧鹿野幼稚園・小学校で始まった


鳥の演劇祭野外劇場（写真：鳥の劇場提供）


鳥の劇場「赤いろうそくと人魚」（写真：鳥の劇場提供）

鳥の劇場を核とする演劇祭。平成24年度は9月14日（金）～30日（日）までの期間、旧鹿野町議場や鳥の劇場内グラウンドに設置した特設野外劇場を含む5会場で、国内から8作品、海外からも、韓国、フィンランド、フランスから7作品を上演した。現代劇、子ども向け作品、ダンス等大人から子供まで楽しめる多岐にわたるプログラムの他、プロの演出家の指導の下、地元高校演劇部や地域住民の演劇やダンスも披露され、観客者数はのべ約3,600人に上った。

この他、演劇際に併せて鹿野の魅力を伝えるまち歩き「鹿野タイムスリップツアー」、トークイベント等のワークショップも開催され、期間中に合わせて約4,300人が鹿野のまちを訪れた。

⑦県外公演

平成24年度は、日本緩和医療学会学術大会（神戸市）、大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2012（十日町市・津南町市）及び犬島海の劇場（岡山市）に招待され、遠征し公演を実施した。

（2）地域と一体となった取り組みの展開

平成24年度第5回鳥の演劇祭から、演劇祭の期間中の週末にだけ開かれる店がオープンした。その名も「週末だけのまちのみせ」。「まちづくり協議会」が主体となり実行委員会を設立し運営した。週末に訪れた人々は、まちの5か所にある劇場で演劇を鑑賞するとともに、まち中にある週末だけのまちの店を訪れ、鹿野の景観を楽しみながらまちを回遊した。週末だけのまちの店は12店舗あり、主に空き家を利用している。「まちづくり協議会」がホームページ等を活用し広く一般公募を行い、喫茶店、雑貨店やマッサージ店等、幅広い分野のテナントを集めた。「鹿野のまちに行列ができたのは初めてで、まちの人も驚いていた。」と、運営委員会会長の長尾氏は語った。

また、「鳥の劇場」が拠点を鹿野に置いたことで、「鹿野ふるさとミュージカル」は、演技面や小道具等でプロのスタッフに相談に乗ってもらう機会が増え、演劇に関する総合的な質の向上につながっているという。一方、「鹿野ふるさとミュージカル」のスタッフも、鳥の劇場に訪れる人々のために、最寄駅から劇場までの送迎を手伝う等鳥の劇場の活動を支援している。このように、鹿野にいる人たちは、それぞれの立場でそれぞれができることを行い、お互いに協力し合いながら鹿野のまちを盛り上げている。



「週末だけのまちのみせ」案内パンフレット

（3）行政施策の中の地域活性化策

こうした鹿野の自主的で創造的な活動を後押しする形で、行政は文化政策の支援に力を入れている。市では、平成17年に文化芸術振興に関する「基本方針」を定め、平成21年4月には鳥取市文化芸術振興条例を施行、また、平成23年度から今後10年間の市勢振興の方針をまとめた第9次鳥取市総合計画の中でも文化芸術の振興を明記しており、鳥の演劇祭の事業費の一部負担や鳥の劇場の拠点である旧鹿野幼稚園・小学校を無償で貸与する等の資金面の支援も続けている。

また、県では、鳥の演劇祭の支援の他、平成20年度より地域で活動するNPO等との協働でアーティストが活動しやすい環境づくり「アーティストリゾート」を推進しており、全県的に広めていく取り組みとして、平成24年度は境港市、倉吉市明倫地区、鳥取市鹿野町、

智頭町の４地域で、アーティストと鳥取の人々が一緒になってアート活動に関わりながら未来（これからのことの意味で、コノサキと呼ぶ）を探そうという「暮らしとアートとコノサキ計画」事業を行った。

鳥取県文化観光局文化政策課長の松岡隆広氏は、「役所でやれることには限界がある。NPO等の地域を良くしたいという団体に胸襟を開いて、オープンマインドで接するよう心がけている。」と話す。行政が支援できることは積極的に行っていきたいという考えからだ。県では鳥の演劇祭に資金面で一部支援をしているが、具体的な取り組みは鳥の劇場芸術監督である中島氏にお願いしているという。松岡氏は、「行政は事業評価を行いながら、活動を見守る事が大事。」とも語った。

このように行政では、滞在するアーティストの創作活動が、地域の人々に刺激を与え、地域の人々の創造性を一層発揮させることで、活力と魅力のあるまちづくりにつながることを期待している。

今後の課題と展望

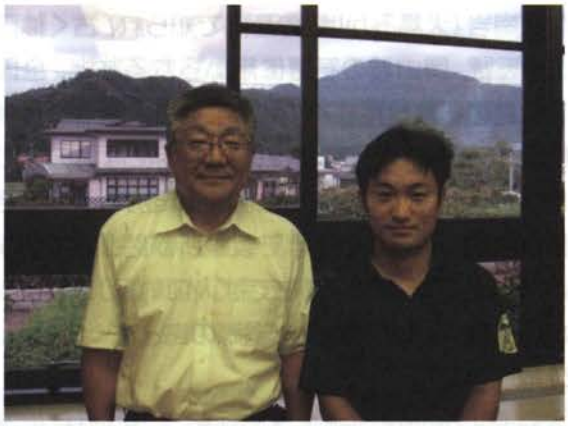
鳥取市企画推進部次長兼文化芸術推進課長の西村朋之氏は、「鹿野の住民は、鹿野への愛着が強く、『鳥の劇場』のスタッフは、鹿野でやることに意味がある、という強い気持ちを持っている。」と話す。このため、市ではこれからも「鳥の劇場」の鹿野での活動を支援する方策を検討していく考えだ。

また、鳥の劇場芸術監督の中島氏は、「今後も、地域内外の多くの人に鹿野に足を運んでもらいたい。そのためには、SNSの活用等情報の発信に工夫が必要。」と話す。中島氏は「週末だけのまちのみせ」のような新たな取り組みを今後も展開し、演劇に興味が無い人にも気軽に鹿野を訪れてもらい、自然に演劇に関心を持ってもらえるようなきっかけを多く作っていきたいと考えている。

地域住民、まちづくり協議会のようなNPO、また行政も含めた様々な立場の人々の、鹿野を盛り上げたい、という気持ちから生まれた鳥の劇場や鹿野ふるさとミュージカル等の取り組みに、今後も期待したい。



「鳥の演劇祭」と「暮らしとアートとコノサキ計画」をPRする鳥取県文化観光局文化政策課　松岡隆広課長



鳥取市企画推進部次長兼文化芸術推進課　西村朋之課長（左）と企画調整課　中村貴幸主事

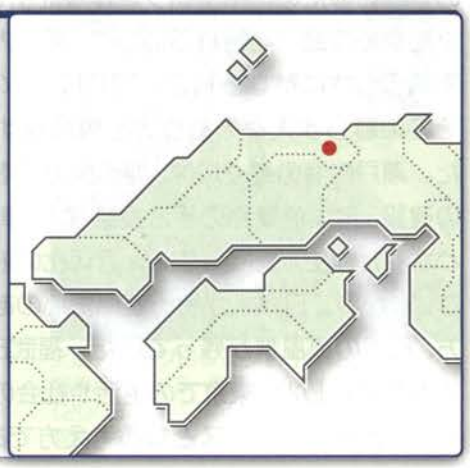
自治体名	鳥取県鳥取市
人口	195,039人（平成24年3月31日現在）
面積	765.66Km^2
事業名	鳥の劇場
事業開始年度	平成18年度
事業主体	特定非営利活動法人鳥の劇場

連絡先

鳥取市企画推進部文化芸術推進課

TEL 0857-20-3229　FAX 0857-20-1594

参考URL http://www.birdtheatre.org/



岡山県岡山市

犬島のアートプロジェクト

～遺産・アート・建築・環境による新たな地域創造を目指す～

● 岡山県岡山市の概要 ●

岡山市は、旭川と吉井川が流れる岡山平野の中央に位置し、南部は児島湾に面した肥沃な平野、北部は吉備高原の山並みが広がっている。水と緑あふれる豊かな自然環境に恵まれ、温暖で晴れの多い気候や自然災害が少ないことから、美しさと暮らしやすさを兼ね備えている。また、近畿と九州を結ぶ東西軸と、山陰と四国を結ぶ南北軸の結節点に位置し、鉄道・道路・空路などの交通網が集中する中枢拠点機能を担うなど、地理的な優位性からも発展を続け、平成21年4月に全国で18番目の政令指定都市となった。

取組のきっかけ

(1)犬島の概要

犬島は、岡山市の南東部に位置し、瀬戸内海に浮かぶ面積が0.54km^{2}の岡山市唯一の有人島である。良質な花崗岩(犬島みかげ)の産出で知られ、古くは江戸城、大阪城、岡山城の石垣に用いられるなど、全国各地で犬島の石が珍重されている。また、明治時代後期には、犬島製錬所が操業され、最盛期には島の人口が約5,000人にも及んだといわれているが、銅の価格の大暴落によりわずか10年で製錬所が閉鎖され、採石業の衰退も相まって、現在では人口約50人、高齢化率が85%を超える典型的な過疎の島となっている。

(2)取組の経緯

犬島でアートプロジェクトが起ち上げられた契機は、株式会社ベネッセホールディングス取締役会長、福武財団理事長の福武總一郎氏の構想に遡る。

昭和60年代、福武氏は、父親が進めていた直島での子どものためのキャンプ場作りを引き継ぎ、何度も直島や他の島々を訪れるにつれ、瀬戸内海の美しさや素晴らしさに魅せられると同時に、島の歴史や文化、そこに暮らす人々のあり方を再認識するようになった。瀬戸内海の島々には、亜硫酸ガスを出した製錬所の建設、産業廃棄物の不法投棄など、負の遺産を背負わされた歴史がある一方で、近代化の波に洗われていない、かつて日本人が持っていた心のあり方や暮らし方、日本の原風景が残っていた。福武氏は、瀬戸内の人々の暮らしと、東京での生活や社会のあり方とを比較し、近代化のベースとなる考え方である「在るものを壊し、新しいものを作り続け、肥大化していく文明」のあり方、つまり「破壊と創造を繰り返す文明」から「在るものを活かし、無いものを創っていく」という「持続し成長していく文明」に転換していかなければならないと考えた。

そこで、近代化に染まっていない日本の原風景が残っている瀬戸内海の島々に、現代社会を批判するメッセージ性を持った魅力的な現代アートを置けば、訪れる都会の人が現代文明を問い直すとともに、地域も元気になるのではないかという思いに至り、アート活動を実践に移していく。

アート活動はまず直島を舞台に始まった。平成4年、直島で世界的な建築家の安藤忠雄氏が設計した美術館とホテルが融合した施設「ベネッセハウス」がオープンしたのを皮切りに、アーティストを招いて「家プロジェクト」などアート作品を次々と展開、平成16年には全く新しい概念の地中美術館を開館する。そして、地中美術館の開館を機に、公益財団法人 直島福武美術館財団(現・福武財団)を設立し、株式会社ベネッセホールディングスとともに、直島、豊島、犬島を舞台に自然、アート、建築による地域振興を進める「ベネッセアートサイト直島」というアート活動を展開していくこととなる。

犬島でのアートプロジェクトはこのアート活動の一環として、位置付けられる。

取組内容と実施成果

(1)取組内容

①犬島アートプロジェクト「精錬所」

犬島でのアートプロジェクトとして最初の取組は、平成20年4月にオープンした犬島アートプロジェクト「精錬所」である。これは、犬島製錬所の遺構を保存・再生した美術館である。

犬島製錬所は、煙害対策や原料輸送の利便性から、犬島に殖産興業期の明治42年に建設されたものの、銅価格の大暴落によって、わずか10年で操業を終えた。犬島には、銅の製錬過程で発生する鉱滓からなるカラミ煉瓦造りの工場跡や煙突など、かつての大規模な製錬所を彷彿とさせる多くの遺構が往時の良好な形で残されており、平成19年に経済産業省から「近代化産業遺産群」の認定を受けている。

「在るものを活かし、無いものを創る」というコンセプトのもと、「精錬所」は、三分一博志氏の建築とアーティストの柳幸典氏の作品で構成されている。循環型社会をテーマに、建物はカラミ煉瓦や煙突、自然エネルギーである太陽、地熱を利用し、夏は空気を冷却し、冬は温めるという構造で館内の温度を一定に保ちながら、周囲の環境にできるだけ負荷を与えない工夫がなされている。また、汚水を直接海に流すのではなく、植物の力を借りた高度な水質浄化システムを岡山大学環境理工学部の協力を得て導入している。さらに、土質調査を行い、犬島の環境に合わせた耐塩性の高い植物や、悪条件な生育環境でも育つ植物を植え、時間をかけて環境をつくりあげている。



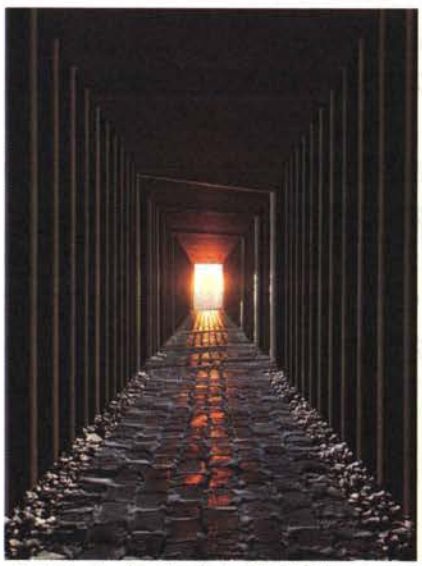
犬島アートプロジェクト「精錬所」　写真：阿野太一

②犬島「家プロジェクト」

つづいて、平成23年から犬島「家プロジェクト」が実施されている。これはアートディレクターの長谷川祐子氏及び建築家の妹島和世氏により、島内の空き家・空き地を活用して展開されている。第1段階として、まず3軒のギャラリーと休憩スペースとして利用できる東屋がつくられた。犬島「家プロジェクト」は、建築物や作品を単体で鑑賞するのではなく、集落の美しい風景やそこに住む人々の生活と一体的に感じられるような、これまでにない新しい風景をつくっていこうという考えのもとに建築・制作されている。平成25年春には、第2段階として新たに2軒を展開し、それに合わせてギャラリー内の作品の展示替えを行い、テーマを変えた新たな作品を設置する予定となっている。

③演劇・パフォーマンスの開催

犬島では施設を整備するだけではなく、製錬所の廃墟や石切り場の跡地を活用して、野外劇や野外でのパフォーマンスも行われている。これは、平成22年に行われた瀬戸内国際芸術祭のイベントの一つとして開催したのがはじまりで、初回は劇団の「維新派」を招き、「精練所」敷地内の空きスペースに、丸太を約4千本使った大がかりな舞台を設置して行った。7月20



犬島アートプロジェクト「精錬所」
柳幸典「ヒーロー乾電池 / イカロス・セル」
(2008)
写真：阿野太一



犬島アートプロジェクト「精錬所」
柳幸典「ヒーロー乾電池 / ソーラー・ロック」
(2008)
写真：阿野太一



犬島アートプロジェクト「精錬所」
柳幸典「ヒーロー乾電池 / イカロス・タワー」
(2008)
写真：阿野太一

日～８月１日の期間に約4,500人の来客があり、これを機に、毎年、劇団等を招いて、演劇・パフォーマンスを実施している。

④瀬戸内国際芸術祭への参加

平成22年、瀬戸内海の島々を舞台に開催する現代アートの祭典として、瀬戸内国際芸術祭が開催され、犬島も会場の１つとして参加した。３年に１度の開催で、次回は平成25年に、春、夏、秋の３シーズンの期間に分けて開催される予定となっている。犬島でも次回の芸術祭に向けて、前記の犬島「家プロジェクト」の拡大をはじめ、アート活動のさらなる充実に向けての準備が進められている。



犬島「家プロジェクト」F邸
柳幸典「山の神と電飾ヒノマルと両翼の鏡の坪庭」(2010)
写真：泉山朗土
提供：YANAGI STUDIO

(2)行政との関わり－岡山市

岡山県離島振興計画の中で、犬島は国際的な文化創造・交流の島として、国内外のアーティストの招聘や市民主体の文化イベントの促進、他地域との交流の場の持続的確保、本土側及び他地域の島々との連携強化など、新たな交流の輪の拡大、交流人口の増加を図ることと定められている。この計画に基づき、岡山市は、犬島のアートプロジェクトを展開する上で必要となる建築許可などの行政的な手続きを行っており、また、犬島への来訪客を受け入れるため、本土側で公衆便所の整備を予定するなど、側面的に支援している。



演劇の様子（瀬戸内国際芸術祭 2010）　写真：中村脩



犬島「家プロジェクト」I邸
柳幸典「眼のある花畑」(2010)
写真：泉山朗土
提供：YANAGI STUDIO

(3)実施成果

①来訪者数の着実な増加

平成20年に犬島アートプロジェクト「精錬所」が開館し、来館者数は毎年約2.6万～2.7万人に及んでいる。また、瀬戸内国際芸術祭が開催された平成22年には、約６万人が訪れ、犬島の賑いに繋がっている。

②地域住民の協力

アートプロジェクトの実施には、地元の人たちの協力なしには語れない。犬島でアートプロジェクトを実施することが決まった時から、福武財団のスタッフは住民を対象に説明会を行い、自らが地域の行事に参加するなど、地域住民と打ち解け、活動を理解してもらえるように努めた。

アーティストや建築家も、犬島ではないと存在・体験できない空間をつくるため、作品や建築、舞台をつくる前には地域住民と話し合い、地域の歴史や生活様式など様々な事を住民から教えてもらった上で制作するようにしているという。

また、「精錬所」のスタッフのうち半数以上は島に住むお年寄りたちで、植物の世話や、カフェのメニューを作るなど、美術館の運営に直接携わっている。島の住民たちは、島にたくさん人が訪れるようになったことで、美術館スタッフと一緒に島内をきれいにするようにしている。さらに、犬島への連絡船の港がある宝伝地域では、老人会が駐車場の管理を行うなど、犬島への誘客に協力している。このように、犬島でのアートプロジェクトは、地域住民と相談をしながら、地元住民と一緒に活動することで成り立っている。

③地域住民の変化

一方で、地域住民もアートプロジェクトに携わることで、どんどん元気になっているという。普段家にいることが多かった地域住民にとって、アートプロジェ

クトに関わる仕事をすることが今では生きがいややりがいにつながっている。また、美術館の若いスタッフや島を訪れる若者と接することで、新たな交流が生まれている。そして、島を訪れる人たちとのコミュニケーションの中で、「素晴らしい場所ですね。」などと地域を褒めてもらえることで、地域住民は今まで気づかなかった地域の良さを再確認するきっかけになるとともに、自分達がここを守り続けてきてよかったという自信にもつながっている。「『生きがい』、『やりがい』、『コミュニケーション』というキーワードはとても重要だと思います。人はやるべきことがあること、孤独にならないことが必要で、それを地域住民と一緒に創出していければと思う。」と公益財団法人 福武財団の内田真一氏は語る。

犬島では現代アートを媒介にして、都会と田舎、お年寄りと若者、住民と来訪者が互いに交流し、お互いの良さを発見し、認め合うことが実現されている。福武氏は、そのことが都市に住む人々にとって良い影響を与えるとともに、過疎地域が蘇り、地域の持つ多様で豊かな文化を活かされる「バランスのとれた価値観の社会」ができることを期待している。(「『瀬戸内海と私』なぜ、私は直島に現代アートを持ち込んだのか」より)

今後の課題と展望

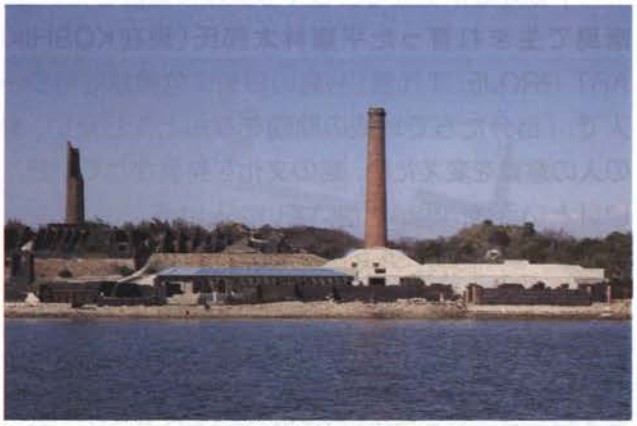
(1)今後の課題

アートプロジェクトにより犬島への来訪者が増加し、島の賑いにつながっているものの、犬島の住人はほとんどが高齢者であることから、今後どのように犬島の地域、文化、コミュニティを存続させていくのかは、引き続き大きな課題となっている。福武財団は現在ある美術施設を活かしながらも、コミュニティを継続させていく良い方法はないか、新たな試みを模索しているという。

(2)今後の展望

「我々だけがやっているプロジェクトになってはいけない。地域の人と一緒にどうやっていけるかということが大切である。」と内田氏は語る。そして、「アートによる地域づくりは、どのようにすればその場所でないと存在・体験できないものを創り、世界中の人たちがそれを見に行きたいと思えるようなものができるか、そして将来に残るようなものができるかが大切である。それが継続的に人が訪れることにつながっていく。瀬戸内海の場合は美しい自然があり、歴史があり、加えて現代的で文化的なものがたくさんある。それらがコラボレーションされていることが強みになっていると思う。」

島の美しい自然や歴史、文化の中に現代アートを介在させ、地域住民と一緒に地域を元気にしていく犬島のアートプロジェクト。この事業が今後も継続的に展開され、さらなる地域振興に貢献することを期待したい。



犬島アートプロジェクト「精錬所」 写真：阿野太一

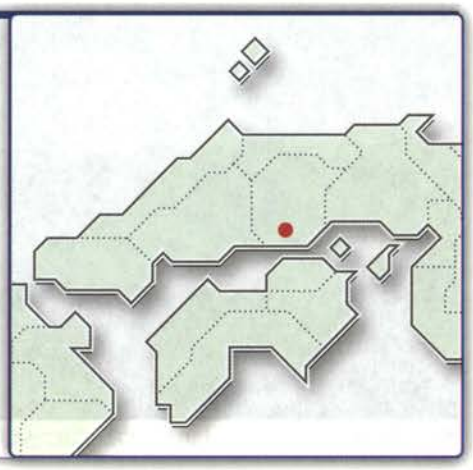
自治体名	岡山県岡山市
人口	701,629人
面積	789.92Km^2
事業名	犬島におけるアートプロジェクト
事業開始年度	平成20年度
事業主体	公益財団法人　福武財団

連絡先

岡山市政策局事業政策課

TEL 086-803-1042　FAX 086-803-1846

参考URL http://www.benesse-artsite.jp/inujima/



鹿児島県薩摩川内市
「甑島で、つくる。」KOSHIKI ART EXHIBITION（甑アートエキシビジョン）

● 鹿児島県薩摩川内市の概要 ●

薩摩川内市は、人口約10万人を擁する鹿児島県第４の都市で、薩摩半島の北西部に位置し、南は県都鹿児島市といちき串木野市、北は阿久根市に隣接する本土区域と、上甑島、中甑島、下甑島で構成される甑島区域で構成されている。東シナ海に面した変化に富む白砂青松の海岸線、市街部を悠々と流れる一級河川「川内川」、藺牟田池をはじめとするみどり豊かな山々や湖、地形の変化の美しい甑島、市内各地の温泉など、多種多様な自然環境を有している。薩摩川内市のこれらの多彩で美しい自然環境は、川内川流域県立自然公園、藺牟田池県立自然公園、甑島県立自然公園に指定され、人々に親しまれている。

取組のきっかけ

鹿児島本土から定期航路約40km、東シナ海に浮かぶ小さな島々である甑島（こしきじま）は、漁業と観光が主要産業の人口約６千人の離島で、少子高齢化、過疎化や地域経済低迷など様々な課題に直面している。甑島で生まれ育った平嶺林太郎氏（現在KOSHIKI ART PROJECT代表）も島の将来に危機感を持つ一人で、「自分たちで地域の問題をなんとかしたい、島の人の意識を変えたい、島の文化を発展させていきたい。」という強い思いを抱いていたという。

平成15年当時、東京造形大学の学生だった平嶺氏は、新潟県で開催された第２回「越後妻有アートトリエンナーレ～大地の芸術祭」を訪れ、大きな刺激を受けた。大地の芸術祭において、空き家や廃校になった校舎でのアートの展示など私達が忘れ去ろうとしているものの大切さを訴える多くの作品を見て回るうち、同様に過疎に悩む甑島におけるアート展の持つ可能性を感じたという。また、その頃は、一般の美大生が作品を発表したければ、ギャラリーを借りて展示する以外方法がないなど、発表の場が限られており、発表の場の提供は彼らのためにもなると考えたという。


甑島の風景

この越後妻有での体験がきっかけとなり、平嶺代表は、「自分も美大に通っているのだからアートでなにかできるのではないか、ビッグなアーティストは呼べないけれど、ぼくたちの世代のやり方でなにかできるのではないか」と考え、東京造形大学の先輩などにいろいろアドバイスをもらったりしながらプロジェクトの構想を固めていった。そして、甑島にいる家族の協力を得て平成16年に活動を開始した。

甑島独自の文化や営みが失われつつある中、島の地域資源に新たな価値を見出そうと平嶺代表が声をかけて甑島に招いた若手アーティストと島びとたちが、島を活性化しようとする思いから「甑島」をテーマに協働し、KOSHIKI ART EXHIBITIONに向けての活動が始まったのである。そして、現在ではKOSHIKI ART PROJECT事務局（以下「プロジェクト事務局」という。）と地域住民が島の抱える諸問題と向き合い、文化・芸術等の掘り起こしや創出を目的として活動している。

取組内容と実施成果

（１）取組内容

プロジェクト事務局のメンバーは８名だが、平嶺代表と島に住む２人が中心となって活動している。

活動の中心は年に一度実施しているKOSHIKI ART EXHIBITIONという現代美術展の運営である。この

KOSHIKI ART EXHIBITIONは、全国各地から甑島列島に招いた美大生や若手アーティストが夏の一ヶ月の間滞在して制作を行うというもので、共同生活しながら空き家、空き倉庫、廃校となった学校などを舞台にそれぞれが感じた「甑島」をテーマに現代アートを制作し、島全体を展示会場として展覧会を行うプロジェクトである。

展覧会開催にあたり、まずは、参加アーティストの人選を行うが、これに関しては、募集告知などはしないという。これは、参加アーティストは、誰でもいいということではなく、プロジェクトの考え方に賛同してもらえる参加者を人選したいという思いがあったからだという。そういう考えのもと、平嶺代表は、個人的に付き合いのあるアーティストを直接誘い参加してもらったり、知り合いの推薦を受けて面談して決めるなどの方法をとっている。

その際には一人ひとりに展覧会の方向性や思いを伝え、理解してもらった上で、アーティストとして参加してもらうようにしている。

アーティストが居住・制作する拠点となる場所については、甑島にある空き家などを利用しており、場所の確保や調整は、事務局で全て行っている。展覧会へのアーティストの参加人数は概ね15名だが、居住する場所の確保には、毎年苦労しているとのことである。

また、薩摩川内市当局も、可能なかぎりアーティストが制作活動をしやすい環境が確保されるよう、現在使用されていない公共施設のアーティストへの提供を行ったり、イベントの告知などのPR活動等の支援を行っており、このプロジェクトを地域活性化の原動力にして行こうと努力している。

(2)実施状況

KOSHIKI ART EXHIBITIONは、平成16年度から毎年8月に開催されており、平成24年度で9回目の開催となった。平成24年度は15人のアーティストが参加し、8月18日から8月26日まで開催された展覧会には、夏休みの体育館をまるごと展示会場に利用するアーティスト、島の古老に聞いた河童の話から作品を展開させるアーティスト、島に流れ着いた漂流物を材料にするアーティストなどが参加しており、その作品は、様々な甑島の魅力が織り込まれたものとなっている。

参加アーティストは、島内の空き家で共同生活を行い、作品制作に携わるとともに、島の子ども達とのワークショップへの参加や、海岸清掃、人手不足農家での手伝い、福祉施設訪問などの多岐に渡るボランティア活動も行っている。この間、プロジェクト事務局では、音楽活動や甑島の歴史や人間を知るための塾などの活動も行っており、地域住民と来島したアーティスト達との文化的な交流を図り、島民が、島の現状と向き合うことで徐々に魅力的な島づくりがなされてきている。また、町並み再生事業なども同時に実施しているとのことであった。

薩摩川内市商工観光部観光・シティセールス課によるとKOSHIKI ART EXHIBITION開催時には、観光客数も2倍近く増えているとのことであった。展覧会において、作品は甑島の各所に点在しているものも多く、徒歩では全てを見ることが難しいこともあり、プロジェクト事務局では、最近では周遊バスを低価格で運行するサービスやレンタルバイクなどのサービスも始めており、日帰り客にも楽しめる工夫がされている。

プロジェクトを始めてから主要なイベントである展覧会は、毎年行っていたが、平成18年は開催しなかった。これは、展覧会の意味をもう一度見直したいと平嶺代表が考えた結果であったが、開催しないことで、周囲の住民たちからの反響は大きかった。「楽しみにしていた」、「どうしてしないのか」などの意見が多く寄せられ、逆にこれまでのプロジェクト事務局の活動



参加アーティストの方々



大久保具視作品「ひとつに、なれない。」


間瀬朋成「Tree of Life」


制作の様子

に自信を持てたことが、今日まで継続できたことにつながっているという。

平嶺代表は、「現在までのところ、このプロジェクトは若者の定住化には直接結びついていないが、今後、甑島での作品制作活動が継続されて有名になれば、甑島がアーティストの活動拠点となることも期待できるのではないか」という。プロジェクト事務局は、「この島で『つくる・いきる』という活動が、相互の創造的関係を生み出し、地域の大きな可能性を見出している。」という考えのもと活動を続けている。

(3)活動の成果

「『甑島で、つくる。』KOSHIKI ART EXHIBITION」は、平成21年「自治体総合フェア2009」(主催：一般社団法人日本経営協会)の「第1回活力協働まちづくり推進団体表彰」において、これまでの活動が評価されグランプリを受賞した。これは、全国の自治体46団体から73件にのぼる応募があった中でのグランプリ受賞であった。審査にあたっては、協働力、地域資源や人的資源の活用、地域への貢献度、さらにプロジェクト等を継続させる仕組みづくりに努力の跡がみられる点などについて特に評価されたという。

プロジェクト事務局が活動を開始した当初は、現代アートに関心が薄いこともあり、遠巻きに見ていた島の住民も、真剣に作品制作に取り組んでいるアーティストたちと回を重ねるごとに交流を深め、刺激を受けているという。行政もプロジェクト事務局の活動に協力し、積極的に使用施設のアイデアを出すなど協力をするまでに至っている。

プロジェクト事務局の「現代アートで島を元気にしたい」として続けられてきた活動は、現代アートになじみの薄かった島の人たちを巻き込み、徐々に知名度もアップし、地域の夏のイベントとしても今や定着し、地域住民はもとより島外からの交流人口の増加も図られており、地域振興にも貢献していると言える。この


展示作品鑑賞の様子

プロジェクトを通じて子供から大人まで積極的に協働する機会が増えているが、中でも高齢者にとっては若いアーティストと話す機会が増え、幅広い層の交流が図られるようになった。

参加アーティストが集落の空き家などを活用して制作を行うことで、島民は、自然に材料などの搬入を手伝ったり、野菜や魚の差し入れをするなど交流が生まれており、また、来場者は、島で失われつつあるものの大切さや島民の暮らしに息づいている文化的な営みを現代アートという視点から改めて体感している。さらには、参加している美術学生や若手アーティストたちの情報発信力で、「甑島に行けば楽しいことができる。」など全国の若年層へのPR効果が高まっている。

今後の課題と展望

(1)課題

毎年開催される展覧会には、全国各地から甑島にアーティストが訪れ制作活動を行うが、アーティストの活動拠点となる住居の手配が困難になってきているという。アーティストの住居は、空き家などを利用しているが、アーティストが生活できる最低限の条件を満たす空き家の確保が放置の長期化で年々難しくなっていることがその理由である。また、空き家にアーティストを迎え入れるまでに掃除をするなどの準備や、生

活を始めるまでの身の回りの世話などは、ほとんどプロジェクト事務局がボランティアで行っているため、プロジェクト事務局の負担が年々大きくなっているという。また、アーティストの住居の賃料などの経費は、現在、市からの補助金（平成24年度1,800千円）と展覧会イベントへの入場料収入などで賄われているが、市からの補助金が無くなれば、資金面の問題により、イベントを継続していくことは難しくなる。

（2）課題の対策と今後の展望

①課題の対策

平嶺代表は、今後もプロジェクト事務局の活動を継続したいとしており、様々な課題を解決するために、例えば、イベントの規模を縮小し、通年でアーティストの作品をギャラリーに展示するなどの企画も考えている。同規模の展覧会を開催する場合でも、全てのアーティストが甑島に長期間滞在して制作するのではなく、少人数の滞在に限定し、プロジェクト事務局の負担を軽減するということも考えている。

また、例年８月に展覧会を開催していたが、時期を変更しての開催も試したいとのことであった。大きな課題であるアーティストの住居の問題の解決策も考えており、「現在廃校となっている校舎を利用し、アーティストをイベント時だけでなく、通年で利用できるような環境を提供できれば」と語っている。

薩摩川内市も行政として、現在利用されていない施設をアーティストの住居や制作活動の場として、状況に応じて提供することも考えているとのことであった。通年で利用できる居住施設が整備されれば、プロジェクト事務局の負担が軽減されるばかりでなく、甑島に来て制作活動を希望するアーティストにとっても、時期を選ばず活動できる環境を得ることができる。

②今後の展望

今後の展望については、平嶺代表は「プロジェクト事務局の活動は、転換期を迎えており、今後については、課題も多いが、NPO法人化なども視野に入れながら活動していく必要がある。」と語った。

薩摩川内市商工観光部観光・シティセールス課の古川英利課長は、「来島の少ない若年層を甑島へ来てもらうような動機付け、地域のブランド化などを視野に入れた仕掛けづくりを企画していきたい、また、高齢化率が年々高まる現状を踏まえて、高齢者の生きがいづくりの一助になるような展開も模索したい。」と今後の市の活動について語ってくれた。

甑島は、自然豊かであり、訪れた人々を楽しませてくれる美しい景色が魅力である。今後も直面する課題を行政や住民と協働で解決し、アートイベントが継続できるよう平嶺代表とプロジェクト事務局、市の活動に期待したい。



KOSHIKI ART PROJECT
平嶺林太郎代表



薩摩川内市商工観光部
観光・シティセールス課　古川課長

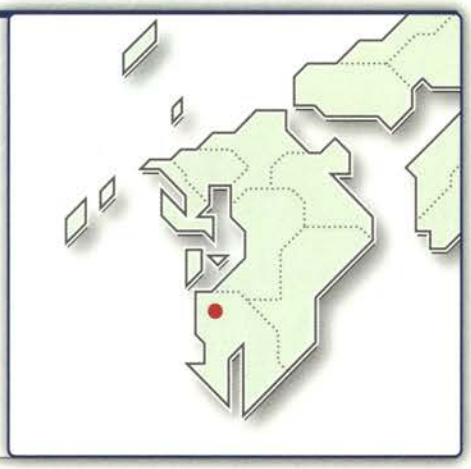
自治体名	鹿児島県薩摩川内市
人口	99,663人
面積	683.5Km^2
事業名	「甑島で、つくる。」 KOSIKI ART EXHIBITION（甑アートエキシビジョン）
事業開始年度	平成16年度
事業主体	KOSHIKIART PROJECT（甑アートプロジェクト）

連絡先

薩摩川内市商工観光部観光・シティセールス課

TEL 0996-23-5111　FAX 0996-25-1704

参考URL http://www.noma.or.jp/lgf/2009/award/result.html
http://koshikiart.chesuto.jp/



本編
45事例

北海道　占冠村

シムカプ　アートキャンプ　2011
～村をアートの聖地にしよう！～

市区町村の概要

北海道のほぼ中心部に位置する占冠村。総面積571.31平方キロメートル（東京23区とほぼ同じ大きさ）という広大な土地に、約1,200人が住む。その土地の94%が山林という大きくて小さな村である。

芸術を地域資源に

本村は、人口約1,200名の小規模市町村であり、地元に文化ホールなどの施設もないため、地域住民が生の芸術に触れる機会が非常に少ない現状にある。また、地場産業は村内リゾートを中心とした観光産業がメインであり、他市町村からの入り込み客数の増減が地域活性化の成否に直結するという特性を持っている。

第1次産業の衰退や、自治体財政の先行きの不透明感が広がる中、地域振興政策を進めていくためには、単なる公共事業の増加や産業振興・特産品開発といった従来型・中央依存型の視点による施策展開のみでは不十分であり、もはやこれらの施策自体が限界に達しつつあるとも言えるかもしれない。

このような現状分析を背景として、従来の殻を破る新たな地域振興の切り口が必要であると考えるようになっていた。戦後から高度経済成長を経てバブル期に至るまで、日本社会が追い求めてきたキャッチアップの時代が終了し、少子化・低成長を背景とする成熟社会に向かう中で、今後は物質的豊かさの追求から、各個人の心の豊かさの追求へと社会ニーズがシフトしていくことが十分に予想される。そのような観点から、今回、芸術文化を新たな地域振興の資源として活用する本事業を企画したものである。

文化を地域の魅力に

（1）主な取り組み内容

①壁面作品

ニューヨーク在住の現代美術家・大岩オスカール氏がデザインした壁面作品（24m×3.3m）を、道の駅の駐車場横に展示。村の自然をモチーフにしたデザインには、キタキツネ、エゾシカ、ヒグマが描かれた。

②オープンスタジオ

よしだぎょうこ氏が2011年BTAP北京に出展する作品の制作現場を公開。会場となった双民館（旧占冠村双珠別小学校）では、よしだ氏を囲んで地域住民との交流会も開催された。

③雲海パフォーマンス

ガラス（または透明アクリル）に水で濡らした和紙を貼付け、指先で和紙を破りながら絵を創作していく、よしだぎょうこ氏の和紙を使ったパフォーマンス。今回は、雲海をテーマに道の駅や星野リゾート・トマムの雲海テラスで開催した。雲海テラスでは、早朝5時、標高約1,000mに設置されたテラスから眼下に広がる雲海を背景に実施。2.1m×1.8mの大型アクリル板に、壮大な雲海が創り上げられた。

④グループ展

若手アーティストやインターンの作品を展示した「はたちの体温　GREENS, BE AMBITIOUS!」を開催。会場の占冠地域交流館（旧占冠村占冠小学校）には14作品が展示された。近隣住民も多く来場し、地域住民がトップアーティストの作品に触れる絶好の機会となった。

⑤ワークショップ


壁画作品


雲海パフォーマンスの様子


トマム雲海テラスから朝日を望む

インターンによるワークショップを道の駅で開催。道の駅の来場者や村民が作品づくりやモデルとして参加した。

（2）実施成果

＜交流人口の増加＞

「芸術文化」という新たな来村目的を設けることができ、道内においても片道６時間をかけて函館市から壁画やグループ展を見学に訪れるなど、見学のための集客に成功した。また、自然豊かな村での創作活動を経験したアーティストやインターンからも、「再び訪れたい」等の声があり、今後の地域における芸術活動の推進が期待される。

＜地域活性化＞

ハイクォリティな芸術に触れる機会の少ない村で、トップアーティストの作品を見たり、アーティストと交流したりしたことで、住民に新しい文化との出会いを提供できた。特にワークショップへの参加やグループ展の見学などは、住民の感性や創造力を刺激する良いきっかけとなった。

＜教育・育成＞

インターンがアーティストの創作活動に参加する機会を設けたことで、インターン自身の貴重な経験を積む場となった。芸術的な側面だけでなく、作家として仕事をするプロセスや社会との係わり方を学ぶ機会を提供できたと考える。

課題と今後の展望

初めての取り組みということもあり、アーティストとの連絡調整や、地域住民等に事業の内容や趣旨を理解してもらうのに苦心した。この取り組みは、単に芸術を地域振興のきっかけとしてのみ捉えるのではなく、次世代の芸術を担う若手を育成するプログラムでもあるという点に大きな意義がある。熱意を持って今後も粘り強く事業を継続していく中で、地域における芸術活動と本事業実施の趣旨についての理解を深めていくとともに、地元における事業実施のノウハウを蓄積していきたいと考えている。

地方を取り巻く厳しい財政状況のもとでは、最小限の費用で最大限の効果を生む取り組みが前提となる。今後も事業の継続を確保し、夢は大きく、占冠村が北海道の芸術創作活動の聖地となることをめざして努力していきたい。


グループ展の様子


ワークショップの様子


ワークショップの作品と笑顔



道の駅でのワークショップ

自治体名　北海道占冠村

- 人　　口　1,142人
- 面　　積　571.31km^2
- 事 業 名　Shimukap Art Camp 2011（シムカプ アートキャンプ 2011）
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　NPO法人　占冠・村づくり観光協会

連絡先

北海道占冠村企画商工課商工観光担当
TEL 0167-56-2124　FAX 0167-56-2184



青森県　十和田市

Arts Towada
～十和田でアートの新しい体験～

市区町村の概要

秀峰八甲田の裾野に拓けた十和田市は、神秘の湖「十和田湖」、千変万化の美しい流れを織りなす「奥入瀬渓流」、近代都市計画のルーツといわれ整然と区画された街並みなど、豊かな自然と近代的な都市機能が調和した美しいまちである。

アートという新しい要素

十和田市は、碁盤目状に整然と区画されたまち並みが特徴であり、なかでも、日本の道百選である官庁街通りは美しい景観と環境を誇るシンボルロードとして、市民に親しまれている。近年の省庁再編による国の事務所の統廃合や合同庁舎新設に伴う出先機関の転居などにより、空地化が進み、これまでの美しい景観が失われつつあった。

また、官庁街通りに接する商店街等の中心市街地はモータリゼーションの定着や郊外型店舗の進出を背景に空洞化が進行していた。中心市街地の活性化は市の抱える課題の一つでもあり、官庁街通りの景観を維持する空地利用は、同時に中心市街地へも効果が波及し、地域の活性化につながる計画である必要があった。

地域の活性化のためには新しい要素を取り入れなければならない。しかも、これまでの地域の資源や価値と相反することなく、有機的に結びつき相乗効果を引き出す新しい要素が望ましい。地域再生については様々な事例があるが、このうち「アート」は十和田市が必要とする新しい要素として十分な可能性を持っていた。

官庁街通りは、近代都市計画のルーツであるとともに豊かな自然を併せ持つ十和田市の象徴ともいえる。その「都市」と「自然」に社会や人々の生活を豊かにするために欠かせない「アート」という新しい要素を取り入れ、これらが融合した十和田市独自の構想として、話題性の高い魅力的な空間の創出を目指し、未来に向けた新しいまちづくりの一環として、屋外空間を舞台に、通り全体を一つの美術館に見立て、多様な現代アートの作品を展開していく「Arts Towada」計画が生まれた。

Arts Towada

十和田市を個性あふれる「アートの街」として国内外の多くの人々に印象付け、アートを活用した賑わいあるまちづくりを目指し始まったこのプロジェクトは、平成17年度に整備着手し、平成20年度に計画の中核である現代美術館が開館。平成22年度にArts Towadaとしてグランドオープンし、官庁街通りに、国内外のアーティストが手掛けた新たなアートゾーンが誕生した。この事業は、官庁街通り全体の空間を美術館と見立て、現代美術館、アート作品、アートプログラムの3つの要素から構成されている。

3つの要素の主役となるアート作品は、十和田市のために新たに制作された作品であり、この場所に来なければ見ることができない。建築は、作品にとって良い空間づくりを優先し、建物そのものも作品として成立するよう意識され、作品と建築が一体となって魅力的な場をつくりだせるよう設計された。美術館の展示室は積極的に窓を設け、外から展示室内部の作品や人々の活動が見え、展示室内からも外の風景が見える造りにすることで、まちと自然との一体感を強く意識し、「都市」「芸術文化」「自然」の融合をイメージした構造といえる。

また、企画展示の際は美術館のほか、商店街などまちなかを積極的に活用する方針のもと、様々なアートプログラムが展開されている。隣接する商店街に作品を展示することで美術館から人が流れ、市外県外から訪れた人々と商店街の人々がアートを通した交流を生



西沢立衛氏の設計による十和田市現代美術館



Yayoi Kusama　草間彌生
Love Forever, Singing in Towada
愛はとこしえ十和田でうたう
© Yayoi Kusama



Ana Laura Aláez　アナ・ラウラ・アラエズ
Bridge of Light
光の橋
© Mami Iwasaki



Noboru Tsubaki　椿昇
aTTA
アッタ
© Mami Iwasaki



Ron Mueck　ロン・ミュエク
Standing Woman
スタンディング・ウーマン
© Mami Iwasaki
Courtesy Anthony d' Offay, London



Jeonghwa Choi　チェ・ジョンファ
Flower Horse
フラワー・ホース
© Mami Iwasaki

み出し、また、空き店舗等の既存資源を活用するという新たな可能性を見出した。

さらに、現代アートによるまちの活性化施策に対する市民の理解を深め、気軽に足を運んでもらえるよう、ワークショップやコンサート等を開催し、市民無料デーも設けられている。

特色ある取組みとして、多くのメディアに取り上げられたことによる市のPR効果は計り知れないほど大きい。当初計画の美術館入館者は年間4万5千人と想定されていたが、平成20年度の開館以来、毎年14万人～18万人が訪れており、平成24年6月には来館者が累計で70万人を突破した。また、平成24年度から指定管理者制度を導入し、青森県立美術館をはじめとする近隣美術館との連携企画などにより、アートによる元気なまちづくりを今後も広域的に波及させていきたいと考えている。

観光資源との連携

常設作品は恒久的なものであることから、質の高い企画展を継続して開催することで、リピーターを含めた来訪者の拡大を図っていく必要がある。

新たな取組みとして、展示室をキューブにみたて、地域へ展開していく『Arts Cubeプロジェクト』がある。この取組みの第一弾として、奥入瀬渓流の入口にある十和田湖温泉郷のホテル内に「アートのための家（＝Cube）」を設置し、アート作品を展示している。十和田市現代美術館の大きな特徴でもある「分散配置された展示室」が美術館の外へ増殖していくかのように見えるこの取組みを通して、十和田市をアートの街として印象づけるとともに地域の魅力発信の強化を期待している。

以上のような取組みを通して、奥入瀬渓流や十和田湖等の観光資源との連携をさらに深め、魅力ある十和田市を発信することで、これまで以上の賑わいを創出し、地域経済の活性化につなげていきたい。

自治体名　青森県十和田市

- 人　口　65,075人（平成24年3月31日現在）
- 面　積　725.67km²
- 事業名　Arts Towada
- 事業開始年度　平成17年度
- 事業主体　十和田市（平成24年度より指定管理者制度導入）



連絡先

青森県十和田市企画財政部企画調整課
TEL 0176-51-6710（直通）　FAX 0176-24-9616
参考URL http://www.city.towada.lg.jp

岩手県　岩手町

彫刻のあるまち・岩手町

市区町村の概要

岩手町は、人口15,210人（平成23年度末）、面積360.55km²（うち76％が山林・原野）で北緯40度線上に位置し、農業を基幹産業とする町である。平成14年に東北新幹線盛岡－八戸間が開通し、本町のいわて沼宮内駅と東京が3時間弱で結ばれるようになった。町の最大の特徴が農業で、冷涼な気候を生かし、キャベツをはじめとする県内一の野菜総合産地となっている。また、耕種農家と畜産農家がバランスよく連携し、堆肥を利用するなど環境保全型農業が進んでいる。スポーツでは、ホッケーが40年以上の歴史を有し、少年団、中学、高校、社会人などがそれぞれ幾度となく全国優勝を果たし、北京、ロンドンと続けてオリンピック選手を輩出している。

国際石彫シンポジウム

岩手町では、町出身者で画家の故・斎藤忠誠氏の提唱で昭和48年から平成15年まで毎年（斎藤氏が亡くなった昭和60年を除き）「岩手町国際石彫シンポジウム」を開催してきた。町内産の黒御影石を材料に、毎年国内外の招待作家3～4人が1カ月余り町内で作品を制作。参加した作家の延べ人数は国内63人、海外52人にのぼる。シンポジウム期間中は、参加作家と小中学校などとの交流や彫刻教室などが開催され、子どもたちが芸術に触れ合い、親しむ環境の醸成に努めた。30回を数えるシンポジウムで制作された作品約130点はすべて町に寄贈され、役場に隣接する「岩手町彫刻公園」や野外彫刻美術館「石神の丘美術館」に展示されているほか、学校などの公共施設などにも設置され、町内全域に点在する。国際的に活躍する作家たちのダイナミックな創作風景と個性豊かな石彫作品は、多くの人たちの共感を呼び、高い文化の町づくりを全国にアピールすることができた。こうした長年の取り組みにより、本町は「彫刻のまち」を標榜するようになり、この資源を活かした町づくりの集大成として町営の野外彫刻美術館構想が持ち上がり、それを具現化したのが「石神の丘美術館」である。

石神の丘美術館

それまで培ってきた彫刻による町づくりを背景に、箱根の彫刻の森美術館の協力を仰ぎがら、平成5年に野外彫刻美術館「石神の丘美術館」が開館。同年開催された「国民文化祭いわて93」では、初の石彫展の会場にもなった。開館当時に展示された作品のほとんどは、彫刻の森美術館から借り上げたものであったが、平成14年の道の駅開業と同時に進められた大規模リニューアルをきっかけに国際石彫刻シンポジウムの作品に置き換えるなど、自前の作品を展示するようになってきた。同時に、東北新幹線いわて沼宮内駅の開業に合わせ、駅から石神の丘美術館に通じる約800メートル間に数々の石彫作品「いわての動物たち」を配した「アートロード」も完成し、訪れる人の目を楽し


国際石彫シンポジウムでの制作風景


岩手町彫刻公園。国際石彫シンポジウムで制作された作品の多くはここに設置されている


石神の丘美術館ギャラリー。企画展やミニコンサートなどが開催される

ませている。

石神の丘美術館は、四季折々の自然の中、芸術鑑賞しながら気軽にピクニックが楽しめる屋外展示場のほか、絵画などの企画展を楽しめる展示室、ピアノを配したホール、眺望の良いテラスなどがあるギャラリーを有し、年数回の企画展を開催している。企画展は、岩手県にゆかりのある作家の作品展を中心に、「発掘された岩手町の遺跡展」や、地元の沼宮内高校による「美術部・写真部・書道部合同展」、町内「小中学校・高校絵画コンクール作品展」など、町に密着した展覧会を開催するほか、ホールでのミニコンサートや講演会なども開催し、町民に親しまれる美術館として定着している。また、工房棟では陶芸窯、版画プレス機を完備し、作ることを楽しみ学ぶ創作体験教室やさまざまな講座が開かれている。さらに、石神の丘美術館は、道の駅石神の丘に隣接しているため、有名な観光地を持たない本町にとって、随一の交流人口創出の場となっている。道の駅を訪れたドライバーや家族連れなども、時間に余裕のある人は美術館に足を運ぶ人も多く、道路休憩施設や産直施設、レストランなどを備えた道の駅と美術館のコラボレーションは全国的にも珍しい形態となっている。

課題と今後の展望

石神の丘美術館は、町外からの多くの来館者を期待すると同時に、町民が気軽に芸術に触れ合い楽しめる場の創出を目指したものであるが、町民の来館者は固定化されている傾向があり、幅広く浸透しているとは言えない面もある。このため美術館では、入館フリーパスなどの特典が付く友の会の設立や、特別企画展での町民無料ご招待などの町民限定の特典を多く企画している。今後もさらに新たな仕掛けを考える必要がある。

また、約16ヘクタールの広大な屋外展示場を有しているため、その維持管理費用が多額となっているほか、道の駅と石神の丘美術館の年間の利用者数・入館者数がぞれぞれ約40万人前後と約２万人前後で固定化しているため、今後、さらなる集客に向けた取り組みが課題となっている。


石神の丘美術館ラベンダー園。６月下旬から７月上旬にかけてはラベンダーが見ごろを迎える


ギャラリーではミニコンサートなども行われ、多くの町民が耳を傾ける


道の駅「石神の丘」。美術館と一体となった道の駅は、全国的にも珍しい


アートロード。いわて沼宮内駅から石神の丘美術館までの約 800m に動物の彫刻が配されている

自治体名　岩手県岩手町

- 人　　口　15,210人（平成24年3月31日現在）
- 面　　積　360.55km^2
- 事 業 名　彫刻のあるまち・岩手町
- 事業開始年度　昭和48年度
- 事 業 主 体　岩手町



連絡先

岩手県岩手町企画商工課
TEL 0195-62-2111　FAX 0195-62-2073
参考URL http://museum.ishigami-iwate.jp

秋田県　三種町

サンドクラフトinみたね
～環境とアートが融和するまち～

市区町村の概要

三種町は、秋田県北西部に位置し、気候は、四季の移り変わりが明瞭で、対馬暖流の影響により年間の平均気温は10℃前後と温暖ですが、冬は低温で日本海側特有の北西に強い季節風が吹きます。降雪日数は40～50日で、積雪は平野部で10～50cm、山間部では100cm以上になります。「豊かな自然と大地の恵み、心ふれあう協働のまち」を掲げ、豊かな自然と大地に恵まれた三つの地域が集い、交流し、新しい文化・産業を創造するとともに、住民と行政の協働で夢と活力あるまちを目指します。

名刺交換がイベント開催のきっかけ

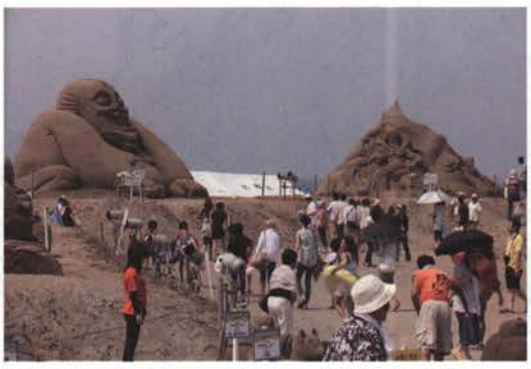
平成８年、当町において開催された日本砂像学会の際に、当時の町長と鹿児島県南さつま市（旧加世田市）の方で交わされた名刺交換がきっかけとなります。名刺に記載されていた写真が砂像で、当町釜谷浜海水浴場の砂も調査してもらったところ、砂像制作可能であることがわかりました。その年の冬にプロジェクトチームを南さつま市へ派遣し、砂像制作・イベント運営に係るノウハウ等を共有して、平成９年の初開催に至っております。当時から、日本海に面した三種町（当時八竜町）の、その恵まれた自然を最大限に活かし、楽しく元気のある町づくりを図るとともに、次世代が夢と郷土愛の持てるイベント開催することを目的としております。

これまで海水浴場のみであった観光客数が、イベントの開催により飛躍的に増加しました。

環境とアートを融合したまちづくり ～地域を巻き込んだイベントを目指して～

サンドクラフトinみたねは、環境省認定「日本の快水浴場100選」の釜谷浜海水浴場で開催される国内有数の砂像イベントです。「環境とアートによるまちづくり」をグランドテーマとし、子どもに夢を与え郷土愛を育てることを目的に、「地域から愛されるる力強いイベント」として開催しております。例年７月中旬から砂像制作が開始され、８月末まで展示しております。７月最終週の土日には、各種ステージイベントやグルメイベント、砂像のコンテストなどが催され、２日間で４万～５万人の観光客で賑わいます。メーン砂像はプロの彫刻家が制作し、高さが4.3mにもなります。その迫力と芸術性は会場に訪れる観光客を大いに魅了します。記念の15回目を迎えた平成23年度からは海外のプロ彫刻家も招聘し、メーン砂像・中型砂像・小型砂像合計約40基の砂像制作展示や、芸能、スポーツ、食などを組み合わせた内容で開催しております。また、高校生チーム対抗による「砂像甲子園」や町内直売所等に制作する「出前砂像」、東京ふるさと会を通じて都市と農村の交流図る「ふるさと体験モニターツアー」なども実施しております。これらは、交流人口の拡大や体験型観光の振興を主眼とし、後継者育成という副次的効果も視野に入れ実施しております。

このイベントは、大自然の中で開催されることによる自然のセラピー効果や、環境意識の向上につながっていると考えます。恵まれた環境をいかし、環境の大切さをアピールしながら、地域を巻き込んだイベントになりつつあります。イベント開催前には、関係機関や地元建設業協会、地元福祉施設等によるによるクリーンアップが複


イベント風景


スタッフによる会場クリーンアップ

数回実施されるようになりました、また、民間企業により建設された17基の風力発電も環境意識の向上を後押しし、イベント期間内には学習会、見学会が催されたりするようになりました。景観も圧巻です。近年は、イベント開催のための「環境整備」というスタイルから、「里海」を守るという「環境保全」に意識が少しづつ傾きかけているように感じられます。また、砂像制作を通じて、地元企業や個人、団体等住民が参加できるイベントになりました。さらに、砂像甲子園やふるさと体験ツアーを開催することでグリーンツーリズム推進協議会や東京ふるさと会等他団体との連携も図られていることから、地域全体で賑わうイベントに成熟してきております。

持続可能なイベントにするための財源確保と後継者育成

予算の確保とスタッフのモチベーションが今後の課題であると考えます。

16回開催しておりますが、実行委員会結成以来のスタッフが多く、固定化されている現状です。今後は新しいスタッフ補充を心掛け、これまでの経験やノウハウを共有してもらうことで後継者育成図り、実行委員会全体のモチベーションを保っていくことが望ましいと思います。若者層へ砂像制作やイベント運営の機会の提供をするなどしております。

また、持続可能なイベントにするための財源確保は最重要課題です。事業開始当初からみると一般財源は大幅に減っていますが、企業からの協賛金や実行委員会独自の事業収入等の工夫により継続しています。今年度からは、協賛の媒体資料も作成し、より協賛いただきやすい環境を作りました。現状協賛企業の維持とインビテーションを活用した幅広いスポンサー獲得が必要。


後継者育成施策のひとつてしてプロの作家による公開砂像づくりを実施


後継者育成施策のひとつとして、プロの作家による公開砂像づくりを実施


高校生による砂像甲子園


デンマークのプロ作家パトリック氏の作品「LAUGHING_STRANGER」


プロ作家保坂俊彦氏によるメーン砂像「風神雷神」


夜は砂像のライトアップを行います

自治体名　秋田県三種町

- 人　　口　19,105人
- 面　　積　248.09km²
- 事 業 名　サンドクラフトinみたね
- 事業開始年度　平成9年度
- 事 業 主 体　サンドクラフト実行委員会（会員約80名）

連絡先

秋田県山本郡三種町商工観光交流課

TEL 0185-85-4830　FAX 0185-85-2178

参考URL http://sand-mitane.com



山形県　小国町

旧小玉川小中学校利活用事業
～空き校舎を活用！地域と連携し若手芸術家の拠点に～

市区町村の概要

小国町は、人口8,743人、面積737.55km^2、町土の94%は山林である。森林セラピー、木質バイオマスエネルギー導入など地域資源を活用したまちづくりに取り組んでいる。典型的な日本海側気候であり、全国屈指の豪雪地帯である。

地域の文化を残したい

山形県小国町は町土の94%がブナやナラといった広葉樹を中心とした森林であり、森と人とが長い時間をかけて育んできた独特の生活文化や生活技術が残る。

本町南部に位置する小玉川地域はマタギたちにより、クマやウサギを狩る技術・文化が受け継がれている土地である。しかし、人口減少や高齢化、担い手不足により、マタギの技術・文化はもちろん、先人たちが長い時間をかけて築いてきた地域の知恵・技の継承に大きな課題を有していた。加えて平成20年3月には、小玉川小中学校が児童生徒数の減少により閉校となった。地域活動の拠点であった学校の閉校は地域にとって大きな問題となることから、校舎の活用方策について地域住民と検討を重ねた結果、地域の自然、風土及び文化を大切にしながら、学習や交流等の活動の拠点施設として利活用していきたいという住民の強い思いが明らかになった。

そこで、本町のマタギ文化など、地域の風土や文化等の研究を通じて結びつきのある東北芸術工科大学と連携し、アーティストを志望する若者を地域文化継承のためのコーディネーターとして位置付け、自らの芸術活動のアトリエとして、また地域資源を活用した交流・体験の場所として空き校舎を活用することにより地域の活性化を目指すこととなった。

「こぐま」たちの奮闘

東北芸術工科大学の3名の卒業生が「studioこぐま」を結成し、空き校舎で生活しながら地域と密着した活動を行っている。「studio」は工房を、「こぐま」は自分たちを成熟していないクマに例え、若手アーティストであることを意味している。

【アーティスト活動】

校舎で毎月1～2回行われているデッサン・水彩画教室では、studioこぐまのメンバーが参加者に丁寧にアドバイスし、楽しく描くことの重要性を伝えており、参加者の多くがリピーターとなっている。参加者の中には、町外から転入したばかりで知り合いが少ない人なども参加しており、住民同士の交流の場にもなっている。また、子どものための絵画教室や昆虫観察、工作指導なども企画し、幅広い世代で交流が図られるような工夫も見られる。

さらに、大学生や知人のアーティストと連携した展覧会・ワークショップの開催など、アーティストとの交流活動も盛んに行われている。

【地域住民や地域資源との連携】

小玉川地域はクマやウサギを狩るマタギの文化や古くから伝わる春の「熊まつり」、秋の収穫祭「かっきり祭り」など多くの祭りや地域行事が伝えられ、保存されている。studioこぐまのメンバーは、こうした伝



デッサン教室



熊まつり


雪の彫刻づくり


雪の巨大迷路


空き校舎（旧小玉川小中学校）



こぐま通信

統行事に地域住民とともに参加することはもちろん、校舎では祭りと連携した展覧会などを開催するなど、地域住民が芸術に触れる機会を数多く提供している。また、４ｍを越える雪を地域資源と捉え、地域の若者と協力しながら雪の彫刻づくりや雪の迷路などを製作し、新たな視点での地域資源の利活用を図りながら、多くの人々の交流拡大に努めている。

【情報発信】

毎月１回の「こぐま通信」やfacebookにより、地域住民はもちろん、広く町内外へ自分たちの活動を発信している。このチラシやfacebookを見て興味を抱いた者がstudioこぐまを訪れ、地域住民とも交流の輪が広がっている。

【成果】

こうした「よそ者」のstudioこぐまの活動は、伝えられた生活技術・生活文化の素晴らしさを改めて認識させるとともに、地元の若者への継承にも大きく貢献している。さらには、アートという切り口で若者目線の情報発信を行ったことにより、町外の若者が多く訪れるなど様々な交流が生まれている。

今後も「地域の宝もの」

地域では校舎を「地域の宝もの」として大切に使用してきた。閉校したことにより校舎が痛むのではないかという住民の不安を解消し、長期的な視点で事業が展開できるよう、校舎の維持管理を含めた活動内容については何度も協議を重ねている。

若者のアートという新たな視点での交流活動の拡大や継続は、地域に残る技術・文化の担い手確保や経済的な自立につながる第一歩である。今後は、地域住民との接点を、単発的なものから継続的なものへ広げ、深めることで、地域課題を解決する「きっかけ」の一つとなって欲しい。また、こうした事業を町全体で共有することで新たな地域づくりの手法が見えてくると考えている。

多くの人々の交流、芸術活動の拠点として、校舎がこれからも「地域の宝もの」であり続けることを期待している。

自治体名　山形県小国町

- 人　　口　8,743人
- 面　　積　737.55km^2
- 事　業　名　旧小玉川小中学校利活用事業
- 事業開始年度　平成22年度
- 事 業 主 体　小国町

連絡先

山形県小国町教育委員会

TEL 0238-62-2141　FAX 0238-62-2143

参考URL http://www.town.oguni.yamagata.jp/



福島県　会津坂下町

里山のアトリエ坂本分校AtelierNoko彫刻村
～アートの力で地域をつなぎ、活力あるまちづくり～

市区町村の概要

会津盆地の西部に位置し、会津坂下米、みしらず柿、むきくるみ、さくら刺身、立川ごんぼ等が特産品にある。また、初市・奇祭大俵引きから始まり、お田植まつり、夏まつり、秋まつりと年間を通して大きなおまつりがある。毎年秋にはそばまつりも開催している。

アートによる廃校活用

里山のアトリエ坂本分校Atelier Noko彫刻村は、2007年4月廃校一年目の会津坂下町八幡小学校坂本分校とその地域を彫刻を中心としたアート空間と位置づけ、芸術アトリエとして再開校した。

里山のアトリエ坂本分校Atelier Noko彫刻村のある地域は国道49号線沿いで近くには磐越道坂下インターがあり、目の前にはJR只見線が走り、奥会津方面、新潟方面、喜多方方面、会津若松・郡山方面への交通の要衝となっている。また、地域は田園、只見川、大小の山に囲まれた立体的な土地であることから、地域全体をアート空間と位置づけ、アートを通して地域の活性化が図れるようにという願いから活動がスタートした。

地元出身の彫刻家2名を代表、副代表とし、陶芸家、ピアニストなどのアーティストを中心とし、様々な講座の開催や森林環境交付金事業、グリーンツーリズム活動協力などを展開した。

新潟県阿賀町のコスモ夢舞台として現代アートで地域おこしをしている（彫刻家佐藤賢太郎氏主宰）活動を先進事例として研修した経験を大切にしたい。



里山のアトリエ坂本分校

地域をつなぐアートの力

2008年里山のアトリエ坂本分校Atelier Noko彫刻村開校一周年を記念した春秋フェスタを開催しステージ発表、アート展示、講習会などの事業を展開した。

春フェスタのステージ発表では「セロ弾きのゴーシュ」の朗読、童話の語り聞かせ、ピアノとチェロ演奏、映像を加え大好評を得た。アート展示では安岡孝司氏（横浜市在住）の作品展に続いて佐瀬幸広氏（会津若松在住）の作品展を開催し、地域の方々にアート活動についてのご理解をいただく機会となった。

また、会津若松市出身の北海道教育大学教授相田幸男氏を講師に「里山の春」人物写生会を開催し、和やかな雰囲気の中で熱心な取組みの様子に分校で研修するすばらしさを感じた。

秋のフェスタは「会津只見線の車窓から見るアートの世界」と地域一体で展開した「分校カフェ分校市場」会津坂下町の音楽集団ビートマックによる演奏会を開催した。

2009年から福島県森林環境税交付金事業として、各種アート講座の開催（ツリーイング、丸太のイス作り、小枝えんぴつ作り軽石彫刻、陶芸など）や里山のアトリエ坂本分校前の里山保全作業、花の森再生事業を継続している。なかでも朗読集団「森の仲間たち」によるステージ発表は会津若松市での移動公演を2年連続で開催するなど好評を得ている。

2010年には会津大学の学生や職員によるボランティアで里山のアトリエ坂本分校施設内外の整備や森林整備活動に取り組んだ。また聖学院大学の学生による夏の合宿ゼミナール受け入れなど、若い学生たちとの交流や学習体験活動が展開され、会津坂下町地域の紹介と農業、商業への関心を高めるのに大きな役割を果たしたと自負している。

2011年の東日本大震災ではいち早く被災支援活動を担い、支援物資の保管配送基地としての役割や支援を呼びかけるアートキャラバンに取り組み、聖学院大学ゼミナールプログラムとして支援活動の紹介や被災


デッサン会の様子


サイエンスカフェ「磁石の不思議」


陶芸体験する大学生


分校の森を散策する子どもたち

地の生々しい活動報告などの講座を持つこともできた。

地元会津大学とのつながりから、教授陣の協力で「サイエンスカフェ」を開催し、最先端科学のお話や実験などを楽しく学ぶ場所として地域の子どもたちや避難された方々の参加で好評を得て2012年も継続している。

2012年は「ふくしまっ子体験活動応援事業」の取組みで150人を超える幼稚園、小、中学校の子どもたちへの多様なプログラム提供した。

アートな里づくりを目指して

2008年当初純粋にアートによる地域活動という目標がそのまま形に表れたことで、里山のアトリエ坂本分校の独自の活動スタイルがマスコミ各誌、テレビ、ラジオ局を通して広くPRすることができた。

森林環境活動の中で、里山のアトリエ坂本分校の継続的な里山保全活動に、地域住民が協力を惜しまない状況となっている。

このような成果を踏まえ、今となっては貴重な木造校舎に美術館機能を持たせ、里山の小道に彫刻アート設置や彫刻のある里、散策できる集落として地域づくりの原動力となるよう活動を展開していきたいと思っている。

また、地元会津大学を中心として若い学生たちへの活動参加をさらに発展させ、世代交代が進んでいる中、この古きよき時代の里山のアトリエ坂本分校の存続に意義を見出し、活動に参加支援を得られるように呼びかけていきたいと思っている。

自治体名　福島県会津坂下町

- 人　　口　16,982人
- 面　　積　91.65km^2
- 事 業 名　里山のアトリエ坂本分校Atelier Noko彫刻村
- 事業開始年度　平成19年度
- 事 業 主 体　里山のアトリエ坂本分校Atelier Noko彫刻村



連絡先

福島県会津坂下町産業部商工観光班

TEL 0242-83-5711　FAX 0242-83-5713

参考URL http://noko-wakasugi.asabio.jp/blog/

新潟県　新潟市

開港都市にいがた水と土の芸術祭2012

市区町村の概要

新潟市は、都市機能が集積した地域を農業地域が取り囲む形で、高次都市機能と豊かな自然環境や広大な農地が調和した、人口約80万４千人の都市である。平成に入り近隣14市町村との合併を経て、平成19年に政令指定都市に移行。８つの行政区がそれぞれの個性を活かしたまちづくりに取り組んでいる。

新市の一体感醸成

開港５港のひとつである本市は、古くからみなとまちの文化が育まれてきたが、広域合併を経て政令指定都市となったことで、広大な市域にさまざまな地域の個性が生まれた。また各地域には、旧跡・名所や地域ごとに特色のある伝統芸能・文化など、多くの「地域の宝物」が存在していたが、合併後間もない時期においては、まだ市民にはそれほど認識されていない状況であった。

一方で、こうした多様性を持つ新たな市域には、信濃川と阿賀野川という２つの大河がもたらす「水と土」により育まれてきたという大きな共通点があった。市域の約４分の１が海抜ゼロメートル以下という土地で生活するために先人達が生み出した知恵と、大河が運んできた多様な土から生まれたのが、現在の美しい田園風景と豊かな農産物、神楽や祭りなどの伝統芸能である。アートを道標として、市民が新・新潟市について楽しみながらよりよく知ることで一体感を醸成し、本市のアイデンティティづくり、誇りづくりを行おうと、平成21年７月に第１回芸術祭を開催することとなった。また当時は、中越沖地震による風評被害などもみられたことから、これを払拭し元気な新潟市をアピールする必要もあった。

市民と共に文化を発信

平成24年７月14日に開幕した第２回芸術祭は、他都市で開催される芸術祭と比較して「市民主体・地域主導の芸術祭」である点が特徴である。地元新潟の在住者がプロデューサー・ディレクターを務め、前回以上に市民主体のプロジェクトを拡充するなど、より一層その特色を強めている。

また今回は、「アートプロジェクト」「市民プロジェクト」「シンポジウム」の３つの柱で構成されている。

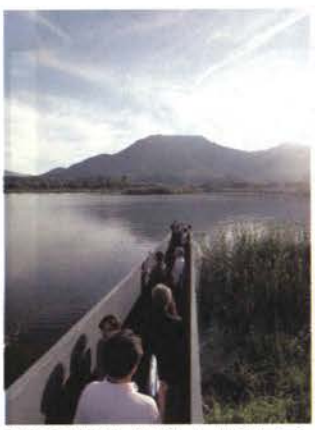
（１）アートプロジェクト

市内の信濃川下流域を中心としたエリアで、国内外の59アーティストがアート作品を展示する。制作から展示までの過程では、制作・展示のみならずワークショップや交流会への参加など、市民や地域に様々な形で関わってもらっている。また来場者には、アート鑑賞を通じて「新潟の豊かな暮らし文化」を感じてもらっている。

（２）市民プロジェクト

市民・地域が主体で行う、水と土に育まれた「新潟市の暮らし文化」の魅力を引き出し発信するプロジェクトを各地で多数展開する。コンサート、演劇、ツアー、ワークショップなど、内容は多岐にわたっている。

（３）シンポジウム



潟湖の地形を利用した作品展示



旧漁業施設を活用したメイン展示場（内観）



旧漁業施設を活用したメイン展示場

東日本大震災を踏まえ、「自然との共生」をテーマとした連続シンポジウムを計５回開催する。

これまでの成果としては、まず、ボランティア・地域住民が作品制作やガイド、イベント企画実施など、さまざまな面で活躍し、市民主体の文化創造が前進したことが挙げられる。特に、アート鑑賞ツアーバスでは、市民ボランティアがガイドを務め好評を博している。このように新潟に住む人々とアーティストとが協働することで「新潟の豊かな暮らし文化」を磨き、市外・県外へ向けて発信できたという成果があった。

また、作品制作や関連事業等を通じて、地域住民とアーティストや来訪者との交流が市全域で盛んに行われており、交流人口の増加と地域活性化につながるという成果が見られた。

そして、市民が芸術祭に参加することで、本市の魅力を再発見・再確認し、地域に対する愛着や誇りを改めて持つことができたことも大きな成果である。



旧市町村各地での作品展示

特に拡充した市民プロジェクトへの応募が多数寄せられていることから、市民主体・地域主導の芸術祭に育っていると考えている。

より市民と一体となった取組を

多くの市民参加で「地域の宝物」に光があたり、各地域の魅力が再確認された。「水と土との関わりに新・新潟市共通のアイデンティティを求める」「アートの力で新潟の素晴らしい水と土の文化を発信する」という目的が着実に達成され、市民主体・地域主導の取組みの更なる深化と継続が、今後も望まれる。

第１回の閉幕時に、２回目を開催するならトリエンナーレ方式（３年に１回）で、という声はあったが開催決定に至らず、芸術祭実行委員会は解散し、次年度は「水と土の宝物の魅力」を市民と共に磨く取組みを行った。第２回開催が決定した時点で実行委員会を再度立ち上げ今に至るが、芸術祭自体の知名度や発信力、集客力の維持・確保という観点からは、水と土の芸術祭という枠組みを何らかの形で未来につなげ（第３回は現時点で未定）開催年以外にも、アートを通じた水と土の文化の発信を継続していけるか、今後の課題と言える。



市民主体で行った作品完成祝賀イベント



昔の米倉庫内での作品展示

自治体名　新潟県新潟市

- 人　　口　803,523人
- 面　　積　726.1km²
- 事 業 名　開港都市にいがた水と土の芸術祭2012
- 事業開始年度　平成21年度
- 事 業 主 体　水と土の芸術祭実行委員会



連絡先

新潟県新潟市文化観光・スポーツ部　水と土の芸術祭推進課

TEL 025-226-2620　FAX 025-228-7370

参考URL http://www.mizu-tsuchi.jp/

茨城県　取手市

取手アートプロジェクト
～「イベント」から「日常」への試み－住民の個性を引き出す芸術～

市区町村の概要

取手市は、茨城県の南部に位置し、都心へ約40kmという位置にあり、利根川と小貝川が流れる水と緑に恵まれた地域である。

昭和40年頃から宅地開発が進み、首都圏のベッドタウンとして都市化が進んだ。国道6号とJR常磐線が南北に通るなど、交通の要所となっている。

三者共同：芸大・市民・行政

取手アートプロジェクト（TAP）の始まりは、東京芸術大学取手校地の設置と先端芸術表現科の開設にある。平成11年に発足した同科に向け当市がパブリックアート（公共エリアへの芸術作品の設置）を依頼した回答としてアートプロジェクトの実施を大学側が逆提案した。そこに当時まちづくりの活動や勉強会を重ねていた市民有志が運営主体として加わり、TAPが生まれることになる。活動は東京芸術大学、取手市、市民代表等により構成される実行委員会形式により運営されてきており、事業の実働部として実施本部と呼ばれる市民が関るプラットフォームが設けられ、活動が受け継がれてきた。平成11年から平成21年までは、現代美術の公募展と地元作家の活動紹介を行うオープンスタジオが隔年で開催（初年度のみ同時開催）。「郊外住宅」「川」「はらっぱ」など、年度毎に取手市内の地域資源や伝統、遊休施設を活用するようなテーマが設定された。

芸術活動で地域を耕す

TAPが発足以降平成21年度まで実施してきた「公募展」と「オープンスタジオ」は、前者は全国の若手アーティストの登竜門として機能し、後者は平成21年時点で51組の参加を得るまでに至った。その過程では専門的知識とスキル注入を行う芸大、補助金による支援をはじめ公的手続きや場所の交渉等を担い支援する行政、企画運営の中枢を担う市民という三者の協力関係が、互いの制約や干渉も生みながらも事業の価値を生み出していくことを共通認識として役割分担し、それぞれの機能を果たしてきた。

平成22年、任意団体での活動を土台として同事業実施本部の市民有志がNPO法人を立ち上げたことも活動を担う市民の成長を明示する。まちづくりの手法としてアートプロジェクトの取組が全国的に増える中、TAPは会期を限定したフェスティバル形式の事業形態から、地域の日常に寄り添う通年型へとシフトし、複数年度をかけてヴィジョンを実現していくという姿勢のもとで、「アートのある団地」と「半農半芸」という2つの事業軸を立ち上げる。いずれのテーマも郊外都市であるからこそ市内に存在するリソースに着目したものであるといえる。

「アートのある団地」の取組では、市内にあるUR管理団地・取手井野団地でアーティストと住民協働型のプロジェクトが進行している。同団地内には事業拠点と兼ね、アートと福祉の融合した形での事例がスタートしている。同団地内ショッピングセンターの空き店舗を活用した拠点「いこいーの＋Tappino（たっぴーの）」は、同団地自治会、民生委員、社会福祉協議会等の福祉分野の活動主体及び市民ボランティアと連携して、高齢者を見守るお休み処として機能しながら、子どもから大人まで多世代が集えるアートのあるコミュニティカフェとして開かれている。パートナーとなるアーティストたちは定期的に同拠点に通い、住民が参


公募展1


公募展2


地元作家の活動紹介を行うオープンスタジオ


アートのある団地スタート

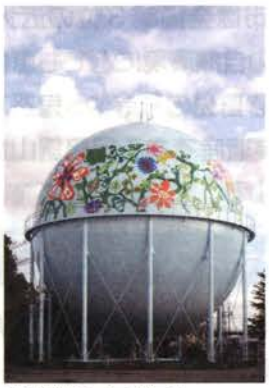


いこいーの


半農半芸プログラム1


半農半芸プログラム2


こどもプログラム


環境整備プログラム

加することで成立するリレーショナル・アート作品を展開している。そのアーティストの活動に巻き込まれることで、住民が自らの個性や創造力を発揮する仕組みが徐々に動き始めている。

一方の「半農半芸」では、土に携わる営みと芸術家の活動とを相添わせることで、郊外都市だからこそ可能なライフスタイルを考えるプラットフォームを生み出そうとしている。東日本大震災後、放射線への対応が課題になっている取手において、どのように土と対峙し、関わり生活していくかを共に考えるためのきっかけを提示している。

また、開始初年度から続く『いちねんせいのさくひんてん（全小学一年生の作品を一堂に展示）』、市内教育機関へのアーティスト派遣などを展開する「こどもプログラム」や、施設等へのデザイン展開により居住環境に芸術を取り入れる「環境整備事業」、アジア圏のアートプロジェクトとの交流を行う「国際交流事業」、取手市内及び近隣のアーティストを支援する「中間支援事業」など、様々な切り口を持って地域への芸術活動の定着を図っている。

郊外都市からの社会提案

平成24年で14年目を迎えるTAP事業は、その実施を通じて街の場としての資源や人材を掘り起こす役割を担ってきた。ただ対外的にその取組が評価を受ける一方で、市民への周知、参加する絶対数は拡大しているとは言い難い側面もある。しかし現在、複数年度をかけて取り組もうとしているプログラムでは、団地内の事例にもあるようにその活動が市民の参加の広がりや取手で暮らすことの魅力へとつながりつつある効果も認められる。複数年度にわたる事業の成果が、どのような社会提案として成立するのか、また市民による同事業への支援につながるのか。地域で活動するアーティストと市民の支援をつなぐ縁の下の力持ちとして、また郊外都市から発信する新たな文化を牽引する活動体となるべく、TAPは事業を継続していく。

自治体名　茨城県取手市

- 人　　口　109,411人
- 面　　積　69.96km^2
- 事 業 名　取手アートプロジェクト
- 事業開始年度　平成11年度
- 事 業 主 体　特定非営利法人　取手アートプロジェクトオフィス

連絡先

茨城県取手市政策推進部文化芸術課

TEL 0297-74-2141　FAX 0297-73-5995

参考URL http://www.toride-ap.gr.jp/



栃木県　日光市

WATARASE Art Project2012 "PARADE"
～ARTと自然、土地と歴史がつくる"降りやまない"祝祭～

市区町村の概要

日光市は全国第３位の広大な面積を持ち、人口約９万人の自然環境にとても恵まれた市である。世界遺産である日光の社寺や、鬼怒川、湯西川等多くの温泉地、産業遺産である足尾銅山など、多くの歴史文化を持っている。

アーティストが主導

足尾銅山の社会的背景や足尾地域の現在の状況（極端な人口減少による空き家の急増など）は、アーティストにとっての格好の「素材」であった。2006年に、他地域で活動を行なっていた、当時 学生であったアーティストたちが頻繁に足尾地域へ来るようになり、彼らが自主的に企画・運営する形で「WATARASE Art Project」の取り組みが始まった。当初は空き家や野外を活用した現代アート展覧会を中心とする活動であったが、継続する過程で、アート作品の中で、またアーティストの興味などが地域の諸問題へのアプローチへと変化していった。そうした中で地域住民との交流もめざましく発展し、地域からの支援も厚い。特に活動においてキーパーソンとなっているのは、意外にも地域の「高齢者」であり、孫が里帰りしてくるような感覚で、アーティストたちを迎え入れている。これらを背景に、現在は 現代アート展覧会だけでない文化事業、また青少年の育成事業や高齢者の生活支援、地域の祭りなどを、行政・民間・文化芸術（アーティスト）による協働で実施するなど、既存の文化・芸術やアートによりる観光振興という区分けには収まらない、多様な取り組みが展開されている。

地域に若年層が滞在

＜アーティスト・イン・レジデンス＞

取り組みの中心となっているものは、現代アート展覧会の実施であるが、これを実行していくにあたって、数ヶ月に渡り、足尾地域にアーティスト（美術・造形作家、建築家）が、企画実行と作品制作のために滞在している。こうした滞在の中で、地域における「日常的な生活」のレベルから住民との交流が生まれ、小中学校など教育機関や商工業者と相互での連携が促進されている。

＜地域特性の活用と成果＞

中心となる展覧会事業について、足尾銅山の旧鉱夫住宅などの（準）産業遺産や商店街空き店舗、また地域の各所の空き家、廃校などを展覧会会場としている。特に旧鉱夫住宅は、足尾銅山の生活史的側面からは非常に貴重であるが、施設の老朽化や住民の高齢化などで「動態保存」が難しいため、「動態」の維持として一定の成果が見られている。また、商店街などの空き店舗の活用では、展覧会の実施以前から中規模な改装がアーティストと地域住民との協働で行なわれ、展覧会開催期間中のみではなく、ほぼ通年で文化・芸術活動の拠点となっているほか、空き家などの整備により、一部のアーティストが移住を始めるなどの、地域における「若年層」の増加を促進する効果も見られている。



空き家を活動拠点に　シンブンシャ・プロジェクト（日光市足尾町松原）



空き店舗をギャラリー空間に活用（日光市足尾町松原）

＜地域の変化＞

足尾地域のみに限定したとき、足尾銅山による人口の急増と激減、農耕面積が極めて少ないなど、山間集落でありながら、通常の山間集落の特性と著しく異なる点が多い。また社会的背景による民間での軋轢も未だ根強く、観光による地域振興や農林業などの産業振興が難しい部分がある。しかし、文化・芸術の活用によって、地域には、既存の「足尾らしさ」に捉われない自由な価値観も生まれてきており、かつての足尾を再評価する動きへと繋がってきている。特に、事業主体となる若手アーティストに年齢の近い、10代や20代などの地域の若年層の意識が表出し始めた点も、今後の地域振興における大きな礎となっている。



子どもたちと協働で行なう「シンブンシャ・プロジェクト」



足尾銅山の労働組合跡を活用（作品：土屋美智子　日光市足尾町松原）

運営組織と継続

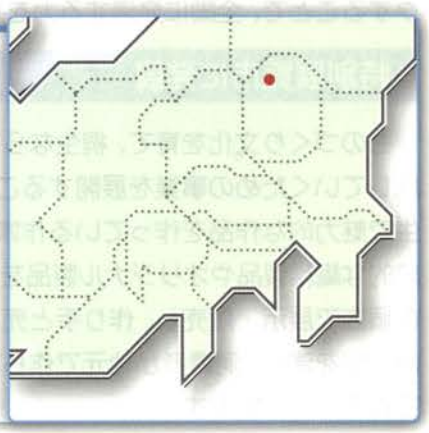
現在の課題として、事業実施主体に早急な組織化が必要となっている。アーティスト主導、という個性的な運営方法は魅力的ではあるが、年度ごとに一部のアーティストをのぞき運営主体の構成員が入れ替わる組織構造は、安定した活動の継続につながりにくい。現在、民間の商工業者や行政との、事業実施における連携が促進されている中で、これらが事業主体への参画や主体的な関与を行なうことで、運営組織の強化が行なわれるだろう。また、アーティスト「でなければできない」方法へと特化する企画内容は、地域において事業の方法論を定着させにくいとも思われる。地域の内で、事業の継続を担っていく人材の育成が重要である。課題の克服を行なうことで、足尾地域だけでなく日光市全域、また近隣市町村との連携へと発展し、都市に依存しない広域的な文化圏の形成を期待することもできる。



WATARASE Art Project チラシ

自治体名　栃木県日光市

- 人　　口　89,893人
- 面　　積　1,449.87km²
- 事 業 名　WATARASE Art Project 2012 "PARADE"
- 事業開始年度　平成18年度
- 事 業 主 体　WATARASE Art Project（民間）



連絡先

栃木県日光市企画部地域振興課

TEL 0288-21-5147　FAX 0288-21-5109

参考URL http://www.watarase-art-project.com/

群馬県　桐生市

一店一作家（一工場）運動プロジェクト
～ものづくり作家と商業の融合～

市区町村の概要

桐生市は群馬県の東端に位置し、日光へと連なる山々や渡良瀬川、桐生川という清流に囲まれた、山紫水明のまちである。伝統産業である織物の歴史は古く、奈良時代の文献に登場するほどで、今でも織物を生業としている人も多い、文字通り「糸偏」のまちである。

作家と商業の融合

桐生市は織物の街として知られ、多品種少量を得意とする絹織物産地であり、日本の近代化に大きく貢献した地域である。全国の繊維産地がその形態を喪失しているのに対し、桐生は今でもなお、織物生産の各工程の職人たちが残る全国でも珍しい産地であり、織物産地の発展過程で多くの職人や技術者が輩出された。桐生のものづくりの風土は産業界だけでなく、生活文化の面にも及んでいる。桐生に内在するものづくり作家とその作品は多彩であり、日本一長いと言われる桐生の中心商店街もまた、地域資源である。しかし、人口は漸減傾向にあり、内発型の地域振興が求められており、桐生の地域資源を活用した地域活性化は大きな課題であった。作家たちは独自の創作活動を行い、街と係わり合いを持たないことが多いが、このプロジェクトは作家と商店街の店舗を結びつける従来にないまちづくりの手法である。ファッションタウン構想はまちづくりとものづくりを一緒に進めていく地域活性化戦略であり、重要なポイントとして「地域で作ったものを地域で売る」ことにある。桐生のものづくり作家は多様な陣容を誇り、商店街と融合し、店をネットワークすることで、全国に発信する力を持つと考える。

特別展覧市に発展

ものづくり文化を育て、桐生ならではの商店街を形成していくための事業を展開することを目的とし、桐生で魅力的な作品を作っている作家や工房、工場の伝統的な繊維製品やオリジナル製品を中心商店街店舗の各個店で展示・販売し、作り手と売り手が共同して店舗空間を演出、消費者が地元で作られるものを直接見て買える場を創出する。

平成13年春にスタート。日頃の展示販売に加え、毎年春と秋の年2回、有鄰館煉瓦蔵で「特別展覧市」を開催している。平成22年度には、「地域資源∞全国展開プロジェクト」に採択され、新商品開発をはじめとした各種事業に取り組んだ。特別展覧市は、春の有鄰館まつり・秋の桐生ファッションウィークの参加行事として、桐生を代表するイベントに成長している。市外はもとより県外からも多くの来桐者があり、桐生のPRに一役買っている。

組織においても、登録作家は年々増え、作家の会・店舗の会が立ち上がり、それぞれが自発的に事業を提案している。最近では、春秋の特別展覧市に加えて、夏と冬には商店が中心となって「まちなか展覧市」をスタートさせた。現在、47の店舗がこの運動に参加し、80人以上のものづくり作家たちが登録し、それぞれの店舗で展示・販売している。その作品は多種多様で、繊維製品・ファッション製品の他、工芸的な染織製品、藍染め製品、シルク製品、古布を利用したアク



特別展覧市会場の有鄰館レンガ蔵


特別展覧市の様子

セサリー、ちりめん細工など多彩な品々は、繊維産地が育んできた桐生の人材の豊富さを示してくれる。山間地にアトリエを構える木工作家や陶芸家の作品なども置かれ、この運動に厚みを加えている。

魅力あるマッチングを

この運動は、ものづくり作家と商店を融合させるという新たな視点の地域活性化であるが、「特別展覧市」は作家と店のマッチングの妙味という以上に多彩な作家たちのボリュームとスケールメリットが優位に立ったため成功をおさめているという側面があり、本来の店と作家のマッチングにより、桐生に人を集め、街を回遊させるという目的からは少しずれる結果となっている。

イベントではなく、「一店一作家（一工場）運動」を恒常的な地域活性化運動とするためには、魅力あるマッチングを進め、さらには店と作家との協働による“ものづくり”に発展させるようなプロジェクトにしていくことが課題である。

また、活動も10年以上が経過し、マンネリ化してしまっている部分も多い。今後は作家と商店の組み合わせを変えることで新鮮さを取り戻したい。また、定期的に開催している「特別展覧市」についても、参加作家が固定される傾向にあり、新しい作家の掘り起こしも進めたい。定期的にお互いがコミニケーションをとれるような場を提供するなど良い関係を築くための工夫も必要となる。


桐生ファッションウィーク期間中の特別展覧市


特別展覧市の出店作品



まちなか店舗での展示販売コーナー



店舗での展示販売コーナー

自治体名　群馬県桐生市

- 人　　口　122,793人（平成24年3月31日現在）
- 面　　積　274.57km²
- 事 業 名　一店一作家（一工場）運動プロジェクト
- 事業開始年度　平成13年度
- 事 業 主 体　ファッションタウン桐生推進協議会産業活性化委員会（桐生商工会議所内）



連絡先

群馬県桐生市産業経済部産業政策課

TEL 0277-46-1111（内線564）　FAX 0277-40-1283

参考URL http://www.kiryucci.or.jp/1ten1sakka/

埼玉県　川口市

川口の匠

市区町村の概要

川口市は荒川を隔てて東京都に接しており、江戸時代から鋳物や植木などの産業が発展、近年は住宅都市化が進んでいる。平成23年に鳩ヶ谷市と合併し、人口約58万人都市となった。東京と隣接しているという利便性を活かしながら、伝統ある「ものづくりのまち」として、活力あるまちづくり・人づくりを目指す。

ものづくりのまちとして

川口市立アートギャラリーは、「アトリア」という愛称で親しまれる、「ものづくりのまち」の新しい表現の場として開館して7年目（平成24年度現在）、収蔵品をもたない小さな美術施設である。川口市の中でも交通の便が良く人の集まる並木元町地区に位置する当館は、子どもたちを中心に市民をはじめとした多くの人々にとってのオープンスペースとして機能してきた。そのコミュニティの中心にアートが位置し、市のアートシーンの発信だけでなく、多様な表現を共有できる場として活動を行ってきた。

しかし、川口も、近年は東京への通勤者が多いベッドタウンというイメージが強く、「ものづくりのまち」として産業が街の発展の中心にあるということは注目されがたい。現在でも江戸時代から続くこの街のものづくりを支える優れた職人「匠」が存在することを鑑み、様々な分野で特筆すべき仕事をしている職人たちの調査・研究を開始。武骨で親しみづらいと思われがちな職人仕事をアート的観点からとらえ直し発信していくことで、その魅力を改めて伝えていく手がかりとし、新しい「ものづくりのまち」としての川口を発見することを目的としている。

職人が「活きる」まち

平成23年度、開館5周年記念事業として開始された「川口の匠」一連の事業は秋に行われる企画展を主軸に展開している。匠がつくりあげる美しく洗練された「もの」だけでなく、その仕事を支える道具もあわせて展示。また調査の中で聞かれた匠たちの言葉、仕事場の写真を通して示される人生観に触れられるように考えている。様々な側面から魅力的な人が暮らすまちとして、そして新しいものづくりに挑戦しつづけるまちとして、川口の魅力を再発見するきっかけをつくる。



『川口の匠』川口の匠12人を紹介する本

平成23年度に発行された書籍では、写真とインタビューをまとめ、市内だけでなく全国規模で情報発信を行い、大変好評を得て版を重ねている。また、匠を講師としたワークショップやギャラリートークを行ったほか、連動した企画「アーティスト・イン・スクール」では市内の中学生が匠を取材し、その精神に触れながら自らも制作活動をすることで地域に対する理解を深める企画も実施した。地域で育つ子どもの想像力を育てる教育に寄与するきっかけともなっている。


アーティスト・イン・スクール授業風景（平成23年度）



平成24年度〈川口の匠〉チラシ



飯村靖史氏制作《山桜》平成24年度出品

平成24年度以降は年度ごとにテーマを設定し、それをキーワードに匠を発掘する調査を継続する。平成24年度は「美しきフォルム」をテーマとし、ものの線や形にこだわって制作をする職人を厳選。一見すると共通項のない分野で仕事をする職人たちであっても、その制作に対する姿勢・考え方にはつながっている部分がある。その技術やものづくりの情熱がより伝わる映像資料や制作工程の途中にあるものもあわせて展示を行うことで、その完成形の美しさをよりわかりやすく伝えていく。



飯村靖史（盆栽師）平成24年度出品

魅力あるまちづくり

展覧会は継続的に実施し、地域のものづくりの多様性や多くの匠の魅力を伝えるために継続調査・研究を行う。

地域の中で愛される施設として、その地域の資源を見出すのがひとつの課題であり、求められる役割でもあると考えられる。また、アートシーンを発信する場として、それを他の地域にも発信していくことが、川口の魅力を理解してもらい、また高めていくことにつながるのではないだろうか。

自治体名　埼玉県川口市

- 人　　口　579,308人
- 面　　積　61.97km^2
- 事 業 名　川口の匠
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　川口市

連絡先

川口市教育局生涯学習部文化推進室

TEL 048-258-1116　FAX 048-251-9545

参考URL http://www.atlia.jp/（アトリアホームページ）



千葉県　千葉市

パラソルギャラリー
～ようこそ　千葉のアトリエロードへ！～

市区町村の概要

東京から東に約40km、千葉県のほぼ中央部に位置する、人口約96万人の本市は、温暖な気候に恵まれ、豊かな緑、日本一長い人工海浜、幕張メッセ、千葉ロッテマリーンズ、ジェフユナイテッド千葉など、多彩な魅力に溢れたまちである。

魅力的な都市景観とは

千葉市では、市民・行政・大学が連携し、都市景観に対する市民意識を高め、景観形成への市民参加を促進することを目的とし、平成12年度に市民団体、地元経済団体の代表、千葉市、千葉大学が参加した「都市景観市民フェスタ実行委員会」を組織し、企画段階から市民が参加した手づくりの景観イベント「都市景観市民フェスタ」を平成22年度まで開催してきた。「パラソルギャラリー」は、その一環として開催されてきたイベントである。

「都市景観市民フェスタは」、開催から10年以上が経過し、諸般の事情により休止することとなったが、「パラソルギャラリー」は、市民から継続の要望が強かったため、平成23年度より市民が運営主体の「パラソルギャラリー実行委員会」を立ち上げ、引き続き開催することとなった。

「都市景観市民フェスタ」の目的にある都市景観とは、目に映る街の姿であり、その背後には、それを培ってきた地域の歴史があり、人々の生活がある。地域の文化が目に見える形をとって現れているのが景観であり、よりよい都市景観をつくるには、街の表層を美しくするだけでなく、街という舞台とそこで繰り広げられる人々の営みを魅力的なものとすることが必要である。「パラソルギャラリー」は、その一つの形として取り組まれてきたイベントである。

駅前大通りに彩りと賑わいを

本イベントの目的は、千葉駅前大通りに彩りと賑わいを創出すること、さらには、パラソルギャラリーへの出展・来場を通して、市民の景観形成への意識を促進し、景観、市民の触れ合い、憩いの場づくり、表現の場づくりをすることである。

イベントでは、駅前大通りの歩道上に白いパラソルを設置し、パラソルの下の空間を「アートスペース」として出展者自作の絵画・手工芸・陶芸等の展示や音楽の演奏等のパフォーマンス空間として活用され、市民アーティストによる小さな屋外ギャラリーである「パラソルギャラリー」が展開される。

イベントの企画・運営は、市民、大学等の地域住民で構成される実行委員会により行われ、月１回程度のペースで、「パラソル会議」を開催し、ワークショップ形式により、コンセプト、配置計画、出展ルール等を定め、毎年10月の第一週の土日に開催している。平成23年度の出展者は２日間で80組を超え、中心市街地の年中行事として定着している。

イベント当日は、パラソルギャラリーと同時に、来場者も参加できるフォトメッセージ、オープンカフェを実施するとともに、音楽イベントとの共同開催を行っている。平成24年度は、中心市街地のまちづくり協議会が主催する、中心市街地の店舗等が中心となった古書、雑貨、アンティーク小物、家具等の展示・販売や県産の有機野菜等の販売を行う、オープンbookカフェ＆マーケット「千夜市夜」が共同開催された。

イベント開催により、白いパラソルとアートのギャラリーが、普段は人通りがまばらで表情の少ない駅前大通りに彩りを加えると共に、新たな人の流れ・交流の場が生まれ、統一感がありながらも、表情豊かな景観の形成に寄与している。さらに、平成24年度は、17時以降にパラソルに合わせて白い和紙等を使った出展者・来場者の手作りの行灯によ



パラソルギャラリー2011 報告書

りライトアップを行う「夜パラソル」を３年ぶりに開催し、昼間とは違った幻想的な雰囲気を演出することで、夜だからこそできる「明かり」による景観が創出された。

今後も駅前大通りでは、広い歩道空間を生かした、市民主体のさまざまなイベント等が開催され、さらには駅前大通りに繋がる中央公園で開催される冬の千葉都心イルミネーション等の他のイベント等と相まって、通年で賑わいに溢れ、魅力ある都市景観が形成される、千葉県・千葉市の顔となる駅前大通りとなることが期待される。

市民主体のイベントへ

本イベントは、開始当初より、千葉市が参加する実行委員会が運営してきたが、平成23年度から運営主体が市民へと移行したことで、市民による市民のためのイベント開催が実現した。

しかし、これにより、現在、運営経費の大部分を近隣企業、商店街組合等の協賛者からの寄付金に頼っており、さらに市の財政状況が厳しい中、恒常的な補助金等の交付が期待できない状況である。今後、安定的な運営経費を捻出する手段の検討が必要である。

また、運営主体が移行して間もないため、企画・運営や行政手続きなど千葉大学及び一部千葉市が協力している部分もあり、こうした役割を市民スタッフが担い、名実ともに市民主体の運営がなされることが望まれるとともに、今後も運営主体の一員となる、新たな市民団体等の参画が期待される。


パラソルギャラリー


オープンカフェ

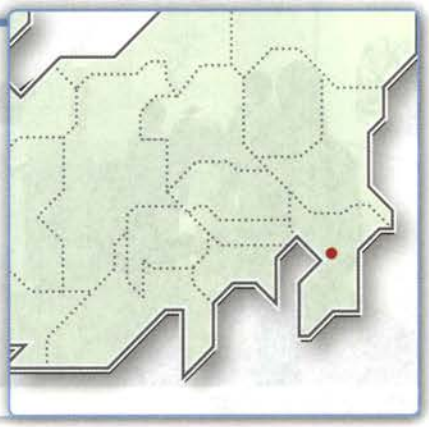

市民と大学のワークショップ「パラソル会議」


夜パラソル

自治体名　千葉県千葉市

- 人　　口　961,813人
- 面　　積　272.08km²
- 事 業 名　パラソルギャラリー
- 事業開始年度　平成12年度
- 事 業 主 体　パラソルギャラリー実行委員会

連絡先
千葉市都市局都市部まちづくり推進課
TEL 043-245-5309　FAX 043-245-5580
参考URL パラソルギャラリー2012ブログ　http://parasolgallery.blog31.fc2.com/
パラソルギャラリー2012HP（千葉市）
http://www.city.chiba.jp/toshi/toshi/machidukuri/parasolgallery2012_houkoku.html



東京都　あきる野市

アートスタジオ五日市　アーティスト イン レジデンス事業
～滞在型版画工房を活用した地域文化の創造と国際交流～

市区町村の概要

あきる野市は、都心から40～50km圏に位置し、比較的緩やかな丘陵に囲まれる平坦部と、奥多摩の山々に連なる山間部から形成され、面積は73.34平方メートル、人口は約8万2千人である。

レジデンス事業の開始

平成5年度に多摩地区の東京都移管100周年を記念して行われたTAMAらいふ21にて、「国際芸術・文化ゾーン多摩の創造」事業の取組みのひとつとして、多摩地域の新しい芸術・文化のあり方を提案する「アーティスト　イン　レジデンス事業」を実施した。

4市町で織物・彫刻・版画・陶芸と異なった芸術分野の「アーティスト　イン　レジデンス事業」を実施し、当市は版画芸術の会場となった。

国境を越えたアーティストの相互交流及び活動を通じて市民が気軽に芸術に親しみ、芸術への関心を高めるとともに地域の人々と諸外国のアーティストとの文化交流と相互理解を深めることにより、国際色豊かな地域の芸術・文化を形成していくことを目的として、旧戸倉村役場を改修したアートスタジオ五日市で事業を開始した。

地域から生まれる芸術

国内外で活躍中の版画制作に従事する若手芸術家を招聘し、国籍を越えて芸術家が共に創作活動に従事する機会を提供し、若手芸術家の発掘・育成を図り、作



スタジオでのアーティスト同士の交流風景



オープンスタジオでの市民との交流風景



児童の版画展見学風景



地域住民の版画展見学風景


戸倉小学校での版画指導風景


戸倉小学校での交流風景

品の発表や芸術家と地域住民等との交流を行っている。

日本人２人、外国人１人の合計３人の招聘アーティストは、アートスタジオ五日市にて３か月にわたり版画の創作活動を行い、版画制作作業の一般公開やスタジオでの制作作品の展示会を開催。また隣接する戸倉小学校では野鳥をモチーフにした版画教室での指導や国際理解教室などにも参加している。

市民が招聘アーティストの制作現場やその作品を見たり、小学生がアーティストから直接指導を受けるなど、市民が芸術に触れることができる場の提供を行い、また外国人アーティストと地域住民との異文化交流の機会も提供できている。

本事業は、若手芸術家の発掘･育成を図るとともに、芸術や異文化についてのアーティストと市民の相互理解を深め、友好親善を図ることができる国内でも非常に希少な事業であり、平成24年度で20回目の節目を迎えるこの事業は、平成23年度までに招聘したアーティストは58人を数え、うち外国人は21人15か国となり、寄贈された作品も166点にのぼる。

芸術に触れる場の充実

アートスタジオ五日市がある戸倉地区は、奥多摩の山々に連なる山間部により形成されている。こうした豊かな自然を生かし、この地域ならではのすばらしい芸術が生まれる場を引続き提供するとともに、寄贈作品の活用など、より多くの市民に芸術文化と触れ合える機会が充実できるよう、平成24年度で20回目の節目を迎え今後さらなる展開が求められている。

自治体名　東京都あきる野市

- 人　　口　82,008人
- 面　　積　73.34km^2
- 事　業　名　アートスタジオ五日市　アーティスト　イン　レジデンス事業
- 事業開始年度　平成５年度
- 事 業 主 体　あきる野市

連絡先

東京都あきる野市教育委員会生涯学習推進課

TEL 042-558-1111 (3012)　FAX 042-558-1560

参考URL http://www.city.akiruno.tokyo.jp/contents_detail.php?co=kak&frmId=3369



神奈川県　相模原市

アートラボはしもと
～“美大生のまち”の活動拠点～

市区町村の概要

神奈川県北部に位置する、市域328.83平方キロメートル、人口約72万人の政令指定都市である。「さがみはら文化振興プラン」を制定し、市民文化都市として「フォトシティさがみはら」など様々な文化事業を実施している。

民間建物の再利用

相模原市は、女子美術大学、桜美林大学、多摩美術大学、東京造形大学など、複数の美術・芸術系大学に囲まれる恵まれた環境にある。特に多摩美術大学・東京造形大学に近い橋本地区は“美大生のまち”と呼ばれるほど多くの美大生が集うまちである。現在、相模原市では美術館基本構想を進めているが、その中でこの恵まれた環境を活かした「まちづくり」を行う美術館が検討されている。平成23年度、この橋本に民間企業２社より美術館予定地並びにその上に建つマンション販売センターが寄附された。そこで、美術館整備までの間、この建物を「アートラボはしもと」として整備し、市民ギャラリーでつづけてきた若手育成事業などを中心に、アートによるまちづくりの拠点とすることとした。実施にあたっては、前出の四大学と事業に関する基本協定を結び、大学と連携しつつ新しい美術活動の試みを実施している。

連携によるアート活動

アートラボはしもとは、シアターやスタジオ・アトリウム・モデルルームなど、ギャラリーや美術館では見られないようなスペースを有するマンション販売センターの建物を活用しているため、その空間を利用した特徴的な展示活動を行っている。（外観：画像１）

例えば、平成24年５月から６月にかけてに実施したアートラボはしもとのオープニングイベント「はじめましてアートラボ」では、プログラムのひとつとして「おハながらート・プロジェクト」を行った。これは、アトリウムの巨大なガラス面を利用して、ライトアップにより夜空を彩る６×12ｍのステンシル版画を制作したものである（画像２）。この版画は、作家を中心にボランティアの美大生数10人が制作し、これに100人を超える市民参加者が協力して数日がかりで制作したものである。シアターでは350人の小学生と延べ70～80人の若手作家･美大生とでつくりあげた「思い出アニメーション」を連日上映した。また、生花店の店主によるNPOがフラワーアートの展示やメンバーの音大生による演奏などでこのオープニングを盛り上げた。この「はじめましてアートラボ」は、地元ロータリークラブの協力のもと事業を行った。

さらに同年７月に、東京造形大学付属美術館が主体となって実施した「人がいっぱい」（画像３）、９月にアートラボはしもとと多摩美術大学、女子美術大学などの連携による「風―景―観」などの美術展（画像４）を次々と開催し、それぞれ子どもたちや大人が主体となるワークショップなどを実施している。10～11月には、JAXAや高校との連携も含めた企画展「ギャラクシーラブ―科学もアートも宇宙がスキ―」を実施した。

また、８月には地域の祭り「橋本七夕祭り」でアート竹飾りをつくるワークショップと展示を学生と実施



画像１　アートラボはしもと　外観



画像２　おハながらート　展示風景


画像3　人がいっぱい　展示風景

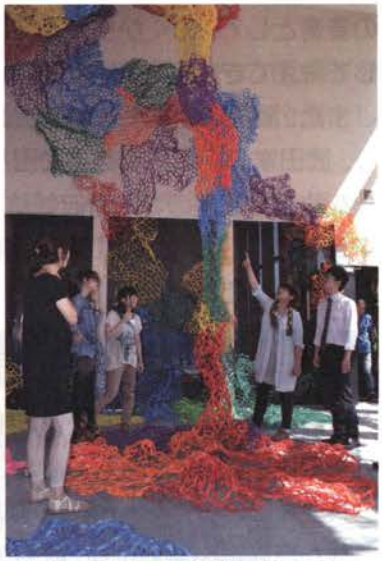

画像4　風一景一観　展示風景

し、11月に開催した「さがみはらフェスタ」ではブースを設けてワークショップを行い、地域との連携にも力を注いでいる。

このようにアートラボはしもとを中心に、協定を締結している四大学（作家・研究者）・美大生・地元作家・市民（NPOやロータリークラブ・個人）・企業・研究施設などが企画・準備の段階から連携して事業を行っている。また、これらの事業は制作や練習・展示作業など、事業が作られていく生の現場も市民に公開し、ともにつくりあげるアートの空間の共有を目指している。

将来の美術館に向けて

アートラボはしもとを象徴する事業が「エキシビション・プログラム（学生企画展）」である。これはアートプロデュースを学びたい学生たちが、1年以上をかけて自分たちで企画し、作家選出・広報活動などを行う、美術展やイベントを実現する人材育成のための長期型ワークショップである。今年度はその6期生による「ぞっこんの法則」が開催された（画像5、6）。ここで育った人材やつながりがさらに発展・熟成し、相模原市におけるアートによるまちづくり活動の中心になっていくことを目指している。また、そのためにはアートラボはしもと自体を、人々が自然に集まり、自発的な市民協働が展開される場としていかなければならない。アートラボはしもとの試みは、美術館整備までの暫定的なものであるが、ここにおいて蓄積された知識や経験をいかに美術館に反映させるか、さらに本市の文化行政全体に活かしていくか。これらは行政全体の課題として残される。


画像5　ぞっこんの法則　展示風景


画像6　ぞっこんの法則　イベント風景

自治体名　神奈川県相模原市

- 人　　口　718,695人
- 面　　積　328.83km²
- 事 業 名　アートラボはしもと運営事業
- 事業開始年度　平成24年度
- 事 業 主 体　相模原市

連絡先

企画市民局市民部文化振興課アートラボはしもと

TEL 042-703-4654　FAX 042-703-4659

参考URL http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/bunka/23264/index.html



山梨県　韮崎市

のれんのある街づくり推進事業
～のれんの向こうに新しい出会いが待っている～

市区町村の概要

山梨県の北西部に位置する韮崎市は、人口は平成24年4月現在で31,679人、面積が143.73km^{2}の市であり、甲州街道・駿信往還・佐久往還が交わる交通の要衝として、古くから人と文化が行き交う宿場町として栄えてきた歴史を有する。

また、戦国の世に名を馳せた武田家の発祥の地であり、武田家の祈願所である武田八幡宮や勝頼公が自ら火を放った悲運の城・新府城跡など、武田家ゆかりの史跡が市内のいたるところに点在する“甲斐武田家”のふるさとである。

「まちなか」に賑わいを再び

韮崎市は他の地方都市と同様に、大規模小売店の郊外への出店、少子化・高齢化などの社会的要因、ライフスタイルの多様化への対応の遅れ等を原因とするまちなか商店街の空洞化が、昨今の大きな課題となっていることから、まちなかに人を呼び込むことで、元気で活気あふれる街づくりを推進している。

こういったなか、古くは甲州街道の宿場町（韮崎宿）として栄えたまちなかの特色を活かした取り組みとして、屋号や各個店のイメージをデザインした個性あふれる「のれん」を店の軒先に掲出することで、上質で新しい魅力の創造と賑わいのあるまちなかを創出する「のれんのある街づく事業」に取り組んだ。

ノスタルジーとモダンの融合

まず、のれんを製作するにあたって最も重要視したことは、店主自らがデザインを行うという事だった。

当初は統一したデザインののれんを軒先に掲出することでまちなかに一体感をだすことができるのではとの意見も多かった。

しかしながら、のれんは店の顔であり、店主や家族の想いと心意気を表現すべきものであることから、自らがのれんのデザインに関わることで、のれんに対して誇りを持つようになると同時に、お客や観光客との間で、のれんを通した会話が進み、自然と活気があふれるまちとなると考えたからである。

現在では、まちなか商店街の160店舗の軒先に店主の心意気が表現されているのれんが掲げられるに至ったが、現代風のデザインや色にアレンジされた個性あふれるのれんが掲出されたことで、現代の街並みや家並みにの中に、甲州街道の宿場町として栄えた古き良き街並みのノスタルジーさを演出することができたといえる。

店の軒先に掲げられるのれんは一枚かもしれないが、これがまちなか全体に掲げられたことで、まちなかに一体感が生まれ、あたかもミュージアムのような装いを感じることができる。

実際に地元の方々や観光客からも、空き店舗が目立っていた街並みに、華やかさや賑わいがうまれ、ま





のれんの設置エリアのまち歩きマップ

ちなかを歩くのが楽しくなったとの声も多く寄せられたほか、のれんを軒先に掲げた商店主からも、これまでは卸売りのイメージが強かったようだが、のれんを出したことで一般のお客が来店してくれるようになったとの声も多く聞かれた。

また、のれんの街並みを紹介するパンフレットと商店を紹介するガイドブックの製作も同時に行ったため、まちなかを散策する観光客の待ち歩きツールとして有効活用されている。

なお、事業に取り組むにあたっては、地元商店会の代表者や商工会、個店経営者からなる推進会議やワークショップを組織し、協働による作業を推進した。

こうすることで、行政の一方的な押し付けではなく、個店や商店会などの自主性を出すことができた。



肥料及び種や苗を扱うお店がイメージされたデザインののれん



個店の業種をイメージしたデザインの店頭幕

課題と今後の展望

本事業は、単なるのれんの掲出事業ではなく、個店やまちを元気にすることが最終的な目標であることから、今後、こののれんをひとつのツールとして、さらなる官民協働のもと、商店会や個店の創意工夫によるものづくりやソフト事業の構築を進めていく必要がある。

確かに、のれんを掲出した効果により、まちなかに観光客等が多く見られるようになったが、この方々をいかに店の中に誘引し、商店を活性化させ、街に賑わいを取り戻すかが課題である。

このため、平成24年度からは、のれんの街並みを散策しながら店にも来店してもらえるような企画としてスタンプラリーを実施ししている。

今後も官民協働のワークショップ等で検討を重ね、のれんのある街づくりを盛り上げていくことが重要である。


個店のトレードマークをデザインに取り入れた店頭幕

自治体名　山梨県韮崎市

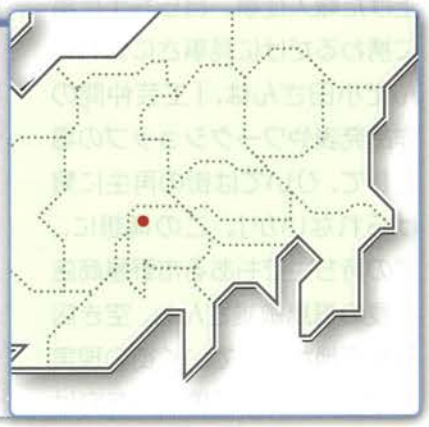
- 人　　口　31,679人
- 面　　積　143.73km^2
- 事 業 名　のれんのある街づくり推進事業
- 事業開始年度　平成22年度
- 事 業 主 体　韮崎市・韮崎市商工会

連絡先

山梨県韮崎市商工観光課

TEL 0551-22-1111　FAX 0551-23-1215

参考URL http://www.nirasaki-kankou.jp/



長野県　大町市

麻倉プロジェクト

～信州大町市　「麻倉」工芸・芸術の交流拠点に～

市区町村の概要

大町市は、平成18年1月1日に旧美麻村・旧八坂村が合併し、「新大町市」がスタートしました。平成24年4月1日の人口は、30,184人であり、長野県の北西部、松本平の北に位置します。大町市は「北アルプス一番街」といわれるように、その西部一帯に峻険な北アルプスを連ねています。市街地の標高は700メートル余りで、典型的な内陸性の気候で寒暖差が大きく乾燥した空気が特徴です。北アルプスの山々を映す仁科三湖や黒部ダムなどがあり、豊かな水資源、温泉にも恵まれており、四季を通じて山岳観光都市としての地勢を備えています。

「蔵」の再利用

大町市の中心市街地には町屋形式の建築物、造り酒屋、土蔵などの歴史的建築物が残されており、中心市街地活性化基本計画において、町屋を活用した「まちなかギャラリー設置事業」や「地域文化を活かした街なか再生事業」が計画されています。一方、明治の始めに建築され、築150年を超える総2階建て幅23メートルの蔵が長らく使われないまま、日常の風景に埋もれ、当時、麻の保管庫として利用されていた通称「麻倉」がありました。たまたま4年前、工芸・芸術の交流拠点づくりを模索していた小田時男さん(代表)が麻倉を見学した。手の込んだ土台の石積みに太い材木を組み上げた職人仕事。自らも手仕事に携わるだけに見事さに惚れ込んだ小田さんは、「工芸仲間の作品発表やワークショップの場として、ひいては街の再生に繋げられないか」。この構想に、蔵の持ち主でもある市野屋商店社長の福島敏雄さんも、空き店舗や更地が増えていく街の現実の中で、足元の価値に目を向け始めた。のちに、小田さんを代表とする工芸家らのグループが中心となり、平成21年秋「麻倉プロジェクト推進の会」を設立。一年半後、平成23年春から、市の支援とメンバーも資金を持ち寄り、約1,100万円を賭けて蔵を改修・復元し、クラフト情報発信のための施設整備が行われてまいりました。

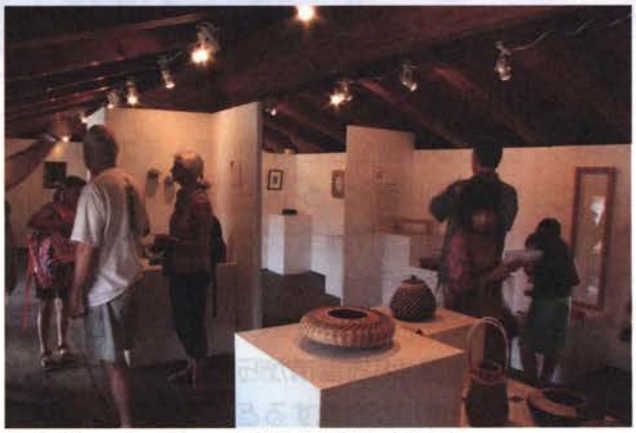
まちの記憶伝承と創造

「麻倉」はJR信濃大町駅から中心市街地を北へ歩いて約10分の場所にあります。「大町がどんな処か話すとき、(記憶を形にとどめる)建物が残っているのと、記録だけなのとでは伝わり方が違う」と持ち主である福島さんは復元された蔵を見て実感する。建築を学ぶ大学生や高校生も麻倉に訪れ始め、通り掛かりの住民が足を止め、麻倉を見上げることもしばしば。「一番心強いのは、多くの人々の意識が動き始めたこと」。蔵を介して街の記憶に触れ、共に新しい街の在り方を考えていく場としても代表の小田さんは麻倉に手応えを感じている。昔ながらの町並みが残されている中心市街地に、アート&クラフト拠点としての麻倉をはじめ、空き店舗や酒蔵をアーティストに開放し、美術・工芸品の展示を行い、訪れる人が街歩きをしなが



「麻倉」外観


アメリカ、メンドシーノ国際交流（１階会場内）


アメリカ、メンドシーノ国際交流（２階会場内）


カッティングボード作り


トールペイントワークショップ

ら、同時に街の魅力や工芸に触れられる空間を提供している。地域の市民からは、麻倉で開催されるワークショップやクラフト体験は好評であり、地域の素材や工芸の魅力を見出し、人々を繋げることで地域コミュニティーの場としても重要な役割を担っています。また、「麻倉プロジェクト」は商店街、まちづくり団体、NPO団体などとのコミュニケーションが図られ、協働によるまちづくりの推進にも貢献されています。更に、アメリカ　カリフォルニア州メンドシーノの工芸家たちとの国際交流も活発に行われており、「信州大町市　麻倉」をアート、クラフト情報発信の拠点としても期待します。

芸術の拠点「麻倉」

歴史的建造物である「麻倉」の復元、改修により“まちの記憶”を伝える「生き証人」として、長く後世に受けつげられるよう健全な管理運営体制を構築し、持続可能な組織づくりに努められ、「麻倉」を活用したアート・クラフト情報の発信，コミュニティー機能の充実を図り、商店街やまちづくりグループ、商工会議所等と連携し、美術・工芸による街の活性化を推進するとともに、市街地には３つの酒蔵もあり、「麻倉」を結んだ市街地の回遊性向上におきましても期待します。

自治体名　長野県大町市

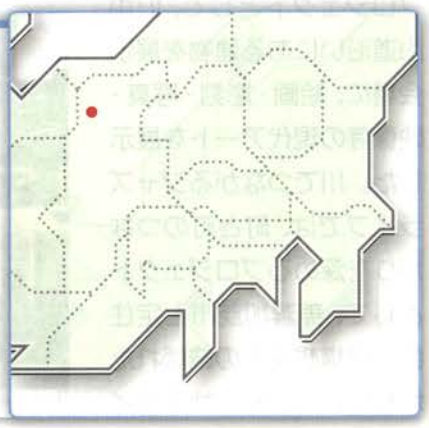
- 人　　口　30,184人
- 面　　積　564.99km²
- 事　業　名　麻倉プロジェクト
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　麻倉プロジェクト有限責任事業組合

連絡先

長野県大町市産業観光部商工労政課

TEL 02612-22-0420（代表）　FAX 0261-23-4660

参考URL http://asagura.com/indexht:ml



岐阜県　美濃加茂市

きそがわ日和
～木曽川×中山道　癒しの美術展～

市区町村の概要

岐阜県の中南部、名古屋市から約30キロメートル圏の木曽川と飛騨川が合流するところにあり、飛騨木曽川国定公園「日本ライン下り」の景勝地としても知られ、古くは中山道太田宿として栄えてきた。現在は交通の要衝として中濃地域の中核となる都市を形成している。面積は74.81平方km、人口は5万5千人余りであり、その内約1割が外国人である。

アートで町に賑わいを

都市部への若年層の人口流出や少子高齢化による地域活力の低下が社会問題となっている現在、アートを通じて、地域の文化・自然・歴史の魅力を伝えると共に、町に賑わいを取り戻し、個性豊かな、活気ある地域が再生されることを目指している。

町の魅力、再発見

「きそがわ日和」とは、美濃加茂市の地域資源である木曽川河畔や旧中山道太田宿界隈で、アート、建築、工芸、音楽、食文化を楽しみながら、美しい自然や静かな古い町並と共にゆっくりと時間を過ごすアートプロジェクトである。アートを通じて地域の文化・自然・歴史の魅力を伝え、日常的に人々が集まる空間を創っていくことを目指している。

きそがわ日和2011川の家・町の家プロジェクト（会期：2011年9月18日～2011年9月25日）の町の家プロジェクトでは、静かな町並みの中で、アートという小さな変化をきっかけに、町の魅力を再発見するプロジェクトとして、旧中山道沿いにある建物を展示会場に、絵画・彫刻・写真・映像等の現代アートを展示した。川でつながるジャズライブでは、町と町のつながりを深めるプロジェクトとして、美濃加茂市と定住自立圏構想協定の結ばれた坂祝町、川辺町にサテライト会場を設置し、ジャズライブを行った。川の家プロジェクトでは、美濃加茂市の素晴らしい風景を望める木曽川河川敷を、人々が集い、交流する新しい場としていくプロジェクトとして、河川敷に30棟の家を建て、食事や音楽を楽しめる憩いの場を創出した。8日間の開催期間中に、市内だけでなく、市外、県外からも人が訪れ、入場者数2530名、サポーター73名、ボランティア約100名もの参加があり、大盛況となった。


川の家プロジェクト

各イベントは、美濃加茂市や岐阜県にゆかりのあるアーティストをはじめ、地域の企業や住民、また地元自治体の協力を得て実施している。イベント開催期間中には中日新聞、岐阜新聞に6回記事が掲載されるなど、市民の認知度が少しずつ増えてきた。また、岐阜県主催により2011年10月15日に開催された「第5回ひだ・みのじまんミーティング」において、中山道と太田宿のブラッシュアップに貢献しているものとして、「宿場町の従来のイメージと資産に頼ることなく、新たな魅力作りに果敢に取り組んでいる。」「若者の意見を取り入れ、新旧の情報、スタイルを良い形でリミックスしている姿は、まさに現代の中山道の在り方としての模範である。」との評価を得て、行政への認知度も高まっている。2012年度の開催では、美濃加茂市が誇る中山道太田宿を中心に、これまで年に1回の開催であったイベントを年3回開催し、季節を通じた美濃加茂


川でつながるジャズライヴ
出演　トム兼松
　　PROJECT "SAKURA"
会場　深萱農村舞台
　　（加茂郡坂祝町十二社神社）

の魅力を知らせると共に、より多くの来場者を得るような魅力的な企画を計画、実行している。また、きそがわ日和2011で連携した地元団体とのつながりを活かした新企画や、市民へのボランティア参加の呼び掛けなど、地域における協力体制づくりを意識している。

文化受発信地の創出

現代アートは地方ではまだまだ興味のある人が少ない。一般の来場者や事業収入、協賛を増やすことが今後の課題である。

それを解決するために、「さまざまな人が楽しめるようバラエティ豊かな内容を企画すること」や、「イベント開催時期を増やすこと」、「地域の商店や団体と連携した広報活動を進め、企業や住民へのPRを拡大すること」、「他地域の団体とのコラボレーション活動を行い、協力者を増やしていくこと」、「スタートアップの資金調達として行政や民間の助成金を活用すること」に取り組んでいる。

そして、3年後には、助成金や補助金に頼らず、事業収入（協賛金や入場料収入など）が安定することで、恒常的に継続できる体制をつくり、イベント開催時には、地域住民だけでなく圏域外の市民にも幅広く認知されるようにしていきたい。

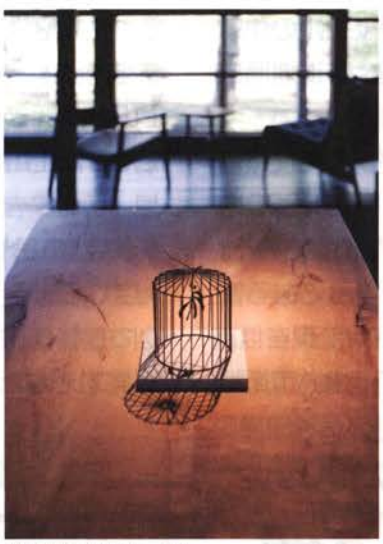
さらに5年後には、地域の文化受発信地や賑わいの中心地となって、様々な人々が集い、交流することで、地域全体が活気あふれる町になることを目指している。



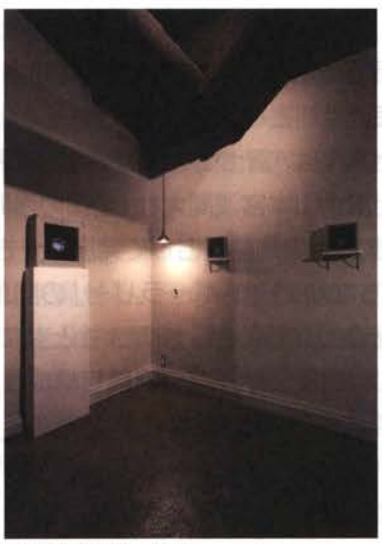
町の家プロジェクト
作　者　浅田泰子
作品名　私的昭和村
会　場　御代桜醸造株式会社



町の家プロジェクト
作者　阿曽藍人
作品　土の玉
会場　祐泉寺



町の家プロジェクト
作者　笹谷晃生
作品　棲息域 5507
会場　HÜTTE FURNITURE



町の家プロジェクト
作者　土井克浩
作品　Dimension2.5-No.1 ～ 3
会場　コクウ珈琲

自治体名　岐阜県美濃加茂市

- 人　　口　55,505人
- 面　　積　74.81km²
- 事 業 名　きそがわ日和
- 事業開始年度　平成22年度
- 事 業 主 体　きそがわ日和実行委員会

連絡先

岐阜県美濃加茂市市民協働部　定住自立圏推進室

TEL 0574-25-2111　FAX 0574-25-3917

参考URL http://kisogawa-biyori.com/2012/



静岡県　富士宮市

まちなかアートギャラリー

～まちなかで本格的なアートを体感！文化の香り高い商店街～

市区町村の概要

富士宮やきそばで全国的に有名となった富士宮市は、富士山の西南麓に位置し、気候は温暖で富士山の雪解け水を源とする豊富な湧き水や、緑あふれる朝霧高原、日本三大急流の１つ富士川や清流稲子川など豊かな自然に恵まれている。また、白糸の滝や田貫湖など観光資源も多く、広大な朝霧高原での酪農、湧き水を利用したにじますの養殖、豊かな大地が育むたけのこや梅などの生産が盛んである。

商店街が芸術空間に！

「まちなかアートギャラリー」は、商店街の各店舗がギャラリーとなり、市内外の絵画・書道・陶芸・写真・木彫・染色・ガラスなど、さまざまなジャンルの作家の作品を展示するもので、開催期間中は、市街地商店街が芸術空間となる。

富士宮市は、富士山を御神体として平安初期に造営された富士山本宮浅間大社（全国の浅間神社1,300余社の総本宮）の門前町として発展してきたまちである。

「まちなかアートギャラリー」の開催場所である富士宮商店街（連盟）は、浅間大社と共に栄え、現在は、６つの商店街、約230の店舗で構成され、中心市街地の東西約1.5kmにわたり展開している。

富士山を仰ぐ門前町、富士宮市の中心市街地は、古来から人々が集い文化の薫り高い商店街として発展してきた。「まちなかアートギャラリー」は、こうした発展の中で生まれたもので、地域の芸術文化活動の促進、地域の潜在資源の掘り起こしなどを中心に、富士山と芸術文化を活用したまちづくりを行い、中心市街地の活性化、また、国内外からの誘客を図る目的で始まった。

平成24年度で10回目の開催を数えた「まちなかアートギャラリー」は、今では、富士宮商店街連盟に加盟する、富士宮神田通り商店街、富士宮本町商店街、富士宮宮町商店街、富士宮西町商店街、富士宮駅前通り商店街、富士宮中央商店会の６つの商店街（会）で実施しているが、平成15年度の第１回から平成16年度の第２回までは、富士宮神田通り商店街が単独で行っていた。

芸術文化都市富士宮市

「まちなかアートギャラリー」は、身近に本物の芸術作品を鑑賞することで、市民の文化意識の向上を図ることが期待でき、プロの芸術作家の作品を知ってもらう機会を提供することで、芸術文化支援活動の一助にもなっている。店舗に作家の作品を展示し、作家とその作品を紹介することで、来訪者と作家のふれあいの場を創出すると同時に、例年７月１日に行われる「富士山お山開き」に合わせて開催することで、世界に名だたる富士山のふもと富士宮市は「芸術の都」であるというイメージを国内外に発信している。

また、市民や観光客に作品が展示されている店舗に入店してもらうことで、各商店を知ってもらうきっかけにもなり、さらに、作家と店主との交流により、店側はプレゼンテーションなどを学び店舗経営のレベル



会場案内


巨大な書の制作を来訪者が見守る
（本町通り商店街）


商店街の様子と案内看板
（神田通り商店街）


商店街の店先で似顔絵を書いてもらいました
（宮町商店街　文具の蔵　Rihei）


浅間大社に巨大バッタが出現（平成 15 年）


高校生（静岡県立富士宮東高等学校芸術コース）の作品を小学生が鑑賞


富士山本宮浅間大社

アップを図ることが期待できる。

「まちなかアートギャラリー」の事業運営は、まちなかアートギャラリー実行委員会が中心となって行っている。事業経費は225万円（平成24年度予算）で、その内、90万円を富士宮市から、30万円を富士宮信用金庫のみやしん地域振興基金から助成を受けている。

開催回数を重ねるごとに出展作家が増え、また、作品を鑑賞する市民や観光客の数も増えてきている。気軽に本格的な芸術作品に触れることができ、商店街の新たな顧客獲得のイベントとして、また、地域の芸術文化の掘り起こし、芸術文化都市富士宮市の基盤作りとして、「まちなかアートギャラリー」はますます発展していく。

平成24年度は記念すべき10回目の開催でした！

開　　催：平成24年6月28日(木)から7月3日(火)まで
参加作家：59名・富士宮市内2つの高等学校
参加店舗：60店舗

富士山と共に飛躍

開催にあたって、まちなかアートギャラリー実行委員会が中心となり、作家と商店主との連絡調整、広報用ポスターやちらしの作成や配布などを行っている。

一方、開催回数を重ね、新たな作家の掘り起こしや、出展する作家と商店主の考え方のマッチングに苦心している。

「まちなかアートギャラリー」開催期間中、商店街は来訪者でにぎわいを見せる。そのにぎわいを、日常の商店街の活性化にどう結びつけるか。また、富士山の世界文化遺産登録に向けた取り組みが進む中で、6つの構成資産を擁する富士宮市は、国内外から多くの観光客が見込まれている。このイベントを観光客へのおもてなしの手段として、いかに誘客に結び付けていくか。さらに、芸術文化都市富士宮市のPRと商店街の活性化にどうつなげていくかが課題となっている。

自治体名　静岡県富士宮市

- 人　　口　135,679人
- 面　　積　388.99km^2
- 事 業 名　まちなかアートギャラリー
- 事業開始年度　平成15年度
- 事 業 主 体　まちなかアートギャラリー実行委員会

連絡先

静岡県富士宮市商工振興課
TEL 0544-22-1295　FAX 0544-22-1385
参考URL http://miyashouren.com/event/10.html



愛知県　設楽町

奥三河アートフェスティバル
～風薫る奥三河の田園でアートな出会いと体験を！～

市区町村の概要

設楽町は愛知県北東部に位置し、総面積は約274km^{2}で、面積の約９割を山林が占める。豊川、矢作川、天竜川といった河川の水源地であり、町の西部一帯には愛知県内最大級の規模を誇る「段戸裏谷原生林　きららの森」が広がる。主な特産品は、地酒、トマト等々、豊かな自然の恵みから生まれた品々である。また、国指定重要無形民俗文化財である田峯田楽をはじめとした数多くの郷土芸能を有している。

この地域を好きになる

「奥三河アートフェスティバル」のメイン会場である設楽町名倉（なぐら）地区は、山あいに平坦地が広がる、愛知県山間部有数の農業地帯である。しかし、日本の中山間地域に多く見られる典型的な過疎地として、近年は高齢化、若者の流出、主産業であった農林業の衰退に悩まされている。一方、田園風景が広がる風光明媚な場所であることから、その風景、風土に心魅かれ、かねてより芸術を志す者の移住が見られた。彼らは自らの意志で当地を選んだこともあってか、人一倍、地域に対する愛情が深く、また自らの活動で何か地域に貢献したいという気持ちが強かったことから、彼らと地域住民の有志が集い、「名倉高原（後の奥三河）アートフェスティバル」がスタートした。彼らは、アートフェスティバルが単なる創作活動の発表の場に留まらないよう、自らの工房だけでなく、残念ながら廃校となってしまった、地域のシンボルである中学校木造校舎を会場として利用するなど、地域のありのままの姿を、アートフェスティバルに訪れた町内外の多くの方々に見て、知って、体験してもらい、一人でも多く、地域のファンを作り出すことを目指した。

手作り感覚のイベント

平成12年に「名倉高原アートフェスティバル」をスタートさせた当初は、イベントを立ち上げた有志が所有する工房と廃校となった中学校木造校舎を会場として、主に作品の展示を行っていた。その後、有志の新規加入、脱退など紆余曲折を経て、回を重ねるごとに知名度が増し、出展者や参加アーティストも増え、廃校舎や工房に限らず、町内企業、事業所と連携して様々な会場で作品を鑑賞、体験できるようになった。、そこで迎えた第10回目、平成22年を契機に、それまでの「名倉高原アートフェスティバル」から「奥三河アートフェスティバル」へと名称を改めた。現在では、様々な出展者によるアート作品（陶器、木工、絵画、彫刻、アクセサリー、ガラス工芸品、写真、キルト等々）を展示する他、木工や陶芸などの体験教室、太鼓などの音楽演奏や演劇、文化講演、さらには地域に残る自然風景もアートと捉えた体験イベントなど、その内容は当初より多岐で、より創造的となっている。例えば、８～９月にアートフェスティバル関連イベントとして行われる「かかしコンテスト」は、都市部のアートイベントでは考えられない、農山村地域だからこそ考えることのできる素朴ではあるが独創的な試みの代表的なものと言える。また加えて、町内事業所との連携においては、地域の福祉施設にアートフェスティバル期間中、こいのぼりを300本近くあげるなど、日本のなつかしい風景もアートの一つとして取り上げている。この他、出展作品にも地域性が出て来ており、ハチが巣作りをするための家や間伐材で製作したランプシェー


たなびくこいのぼり


かかしコンテスト


絵手紙の体験


展示の様子


世代を超えたふれあい



看板も手作り

ドなど、田舎の生活を感じさせる物も多く出展されている。出展者もスタート時と比べ、多種多様となり、地域内や町内はもちろん県内外の、芸術文化活動を生業とする、いわゆるプロとされる者から地元の高齢者、児童、主婦といったアマチュアまで誰もが参加し、手作り感溢れるイベントを象徴している。アートフェスティバルのメイン会場である地域は、農業地帯であることから夏には「食」をテーマとした大きなイベントが開催されており、これまでの地域イメージは主に『農』であった。しかし、アートフェスティバルの開催により、最近は少しずつではあるが、『アート』という地域の新たなイメージとポテンシャルが創出されつつある。

若者世代の参加を！

農山村を舞台としたアートイベントは全国的にも稀な試みであり、地域、世代、プロアマを問わない出展はイベントの手作り感を醸し出している。こうした手作り感がアートとは無縁であった地域に新しい風を吹き込み、地域の新たなるイメージやポテンシャルの創出に役立った一方で、出品対象の幅広さによる価値観の相違が運営上の意思の疎通に支障を来たす面も若干見られる。こうした課題については実行委員だけで悩まず、他のイベント事例を参考にし、行政やNPO団体等との協働を通じて、創意工夫しながら克服していく必要がある。また、回を重ねてファンが増え、会場の規模や出品者も多種多様化していることから費用の捻出やスタッフの確保が大きな課題となっている。特にスタッフは高齢化が進んでおり、今後より一層の若者世代の参加を進めることが急務である。

自治体名　愛知県設楽町

- 人　口　5,791人
- 面　積　273.96km²
- 事業名　奥三河アートフェスティバル
- 事業開始年度　平成12年度
- 事業主体　奥三河アートフェスティバル実行委員会



連絡先

愛知県設楽町企画課
TEL 0536-62-0511　FAX 0536-62-1675
参考URL http://npo-nagura.org/ngr/

三重県　亀山市

アート亀山
～アートならできる。人と街を笑顔と元気にすることが～

市区町村の概要

亀山市は三重県北勢地域に属し、鈴鹿山系の豊かな自然に恵まれ、日本武尊・白鳥伝説や国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された関宿など、東海道の宿場町の面影が今なお偲ぶ歴史情緒溢れる人口5万人の都市である。

アートの似合う白い街

空洞化が進む亀山市内の商店街にかつての賑わいを取り戻すため、市内の美術作家が提案、商店主たちに呼び掛け、「アートによる街づくりを考える会」を発足した。「現代アート」を「まち」に持ち込むことで、人と作品、そして人と人との出会いや感動を共有することで、商店街の新たな魅力を引き出すことができると考えたからである。

アートに注目したのは、協力を惜しまないアーティストが多く存在していたためである。また、「丘の上の白い街」と呼ばれた東町商店街には、白いタイルを貼ったキューヴ型の建造物が並んでおり、アートの色彩やオブジェが映えるのではないかと考えた。さらに、アートは人間の感性に直接働きかける営みであるので、年齢を問わず楽しむことができる。

若いアーティストを全国から公募することにより、地元のアーティストたちとの交流を図り、商店街を活用することで経済的な効果も期待できる。若手のアーティストたちが、インパクトのある展示場所や、アートの実験場を求めていることも、アート亀山の盛り上がりを期待させた。

現代アートという、やや社会からは難解だと思われる非日常の世界を、商店街という日常の世界に持ち込む面白さが魅力である。

街を元気にするアート

・アートを通して、人と街に活気ある繋がりを生み出すこと。
・三重県内唯一のコンペティション方式による現代アート展としての基盤を確立し、美術文化の振興を図ること。
・人々を参集させることにより、経済的な向上を図ること。

上記3点を目標として、平成20年よりアートイベントを開催している。「アート亀山」の特徴は、地域の美術作家たちが、市民や行政と協力して企画、運営していること、三重県立美術館館長の強力なサポートがあることである。活動を始めた2年間は、アートを身近に感じてもらうため、イベント名は「亀山商店街inアート」であったが、コンペティション方式を取り入れたのを機に、名称を「アート亀山2010」に改めた。

平成20年、平成21年は、亀山市の作家が中心となり、県内の作家に呼び掛け、店舗・空き店舗・広場や路地などで、平面や立体などの様々な作品を展示し、商店街内にある寺院の庭では、夕刻より映像作品上映会を開催した。学校教育とも連携し、事前に作家が授



特産品のローソクを使い、寺院で行ったファッションショー



商店主の協力で開催した特売市と展示作品


アート亀山2011 空き店舗展示作品


子どもを対象とした歩行者天国でのワークショップ


アート亀山2011 衣料品店展示作品


アート亀山2011 公園展示作品

業に赴いた際に、子ども達が制作した作品も展示した。

また、イベント期間中、商店街を歩行者天国にして、路上でネイルアートやライブペインティング等のパフォーマンスを行った。同時に、商店主の協力のもと、商店街での特売や美味しい物市なども開催したことで、商店街は大いに賑わった。

平成22年より、若手アーティスト対象のコンペティション方式を取り入れた。監修者として三重県立美術館館長の協力を得て作品審査をし、参加作家を選出している。参加作家を対象とした下見を含む説明会開催時には多くの若者が訪れ、商店街を賑わせている。

初めてコンペティションを行った平成22年は、全国から立体、パフォーマンス、建築、映像、音楽、ファッションなど、現代を代表するアートが寄せられ、61組のアーティストが参加した。県内からの来場者も多く、マスコミ等で連日報道された。

平成23年も同様に作家を公募した他、「アーティスト　イン　レジデンス」を開催した。レジデンスでは、若手作家9名が亀山に1週間滞在し、制作活動を通して市民との交流を図った。平成23年の「アート亀山2011」にはレジデンス作家と地元作家を含めた62組が参加した。

地域住民も、作品が展示された商店街を歩くことで、新たな魅力を見つける機会となった他、人々の交流が促進され、商店街が活気にあふれた。展示作品は回を追うごとに質が高くなっており、年々来場者数も増加している。また、全国から参集する作家が亀山市に滞在することによる経済効果もみられ、更に、アート亀山を機に三重へ移り住む作家もあらわれた。

アートで繋がる人と街

実行委員会が資金を調達する方法を知恵と工夫で補い、探っていく必要がある。また、行政と実行委員会とが亀山市の文化について、より話し合いを密にし、アートを代表とする文化の力で、地域や人々の生活を豊かにし、次世代の感性を伸ばしていくような取り組みをしたい。

アート亀山をきっかけに亀山市内や、三重県内の若手の人材が集まってきているので、更にこの輪を広げ、最終的には、世界に通用するユニークな現代美術展として発展させることが最終目標である。その為にも、実行委員会は、商店街だけでなく亀山市内の里山や街道を使った広範囲な活動展開を視野に入れている。

自治体名　三重県亀山市

- 人口　50,001人
- 面積　190.91km²
- 事業名　アート亀山
- 事業開始年度　平成20年度
- 事業主体　アートによる街づくりを考える会（市民活動団体）

連絡先

三重県亀山市文化部文化スポーツ室

TEL 0595-84-5079　FAX 0595-82-9955

参考URL http://artkameyama.jimdo.com/



富山県　南砺市（なんとし）

寺のまちアートinいなみ
～信仰と木彫りの里を彩る芸術作品でまちおこし～

市区町村の概要

８町村の合併により平成16年11月１日に誕生した南砺市（なんとし）は、富山県の南西端に位置しており、面積は668.86km^{2}と琵琶湖とほぼ同じ大きさであり、面積の約８割が国立公園や県立公園を含む森林となっている。

山間部には、世界遺産に登録された五箇山合掌造り集落を有し、平野部には、全国でも珍しい散居村の景観を残しており、日本の原風景が広がる都市である。

歴史と新たなまちづくり

井波地区は南砺市の平野部の東に位置し、建立後600年以上の歴史を誇る名刹真宗大谷派井波別院「瑞泉寺」とその「瑞泉寺」の焼失からの再建に端を発した200年の伝統ある木彫刻「井波彫刻」を中心に、「信仰と木彫りの里」としてまちづくりを進めてきた。

しかし、景気の低迷、人口や観光客の減少、高齢化の進行、中心市街地からの買い物客流出などにより、地区内の活力が失われつつあり、また、住宅事情が変わってきたことや全国的に祭りの継承が困難になっていることなどにより、欄間や衝立、獅子頭など井波彫刻の売上げも減少している。

そこで、瑞泉寺をはじめとした寺院から広がる歴史あるまちなみ、伝統ある木彫刻とともに育んできた文化や芸術、そして井波地区に住まいする又はまちづくりを進めてきた人々や300人を超える彫刻師。これら井波地区が持つ資源を結びつけることにより新たな魅力を生みだし、地区の活力を呼び戻し、地区内外からの交流人口の増加につなげ、地区の人、産業をもっと元気にすることを目的として、新たなまちづくり事業である「寺のまちアート」へ取り組むこととした。

まち全体が展示場に

「寺のまちアート」は、歴史ある町の新たな魅力づくりとして、これまでの「信仰と木彫りの里」というまちづくりの核であった瑞泉寺をはじめとする寺院や井波彫刻に、井波が持つ資源である歴史あるまちなみ、文化、芸術（アート）といったキーワードを掛け合わせて事業化したものである。

アート作品は、木彫刻・漆芸・陶芸・生け花・書・絵画・木芸等などの新作を中心に400点以上の出展があり、町全体を大きな展示場として寺院、彫刻工房、民家、商店など町のあちこちの約100箇所に展示した。あわせて、寺院の庭園やガーデニングを行っておられる民家の庭を開放し、来訪者が町なかをそぞろ歩きしながらアート作品やガーデニングを自由に楽しめる非日常の空間を創りだした。さらに、来訪者が参加できるイベントも開催しており、お寺を会場にしたジャズコンサートや観光ガイドが解説する施設見学ツアー、スタンプラリーなど、展示作品を見るだけでなく、風情ある井波のまちなみを散策しながら、体験し、住民などとの交流を行えるなど、自由な楽しみを得られる仕掛けを作っている。

これまで井波彫刻の作品展示は、主に市外で開催さ



寺のまちアートポスター


アート作品


アート作品と見学者

れる大きな展示会などに限られており、作家にとっては展示機会が少なく、鑑賞することができる人も限られていた。この事業では、毎年100箇所以上の展示スペースにより展示機会を増やすことができたことから、作家の創作意欲の向上につながることで伝統の彫りで新しい作品が生みだされ、一般の方が気軽に井波彫刻作品を鑑賞することができるようになった。これにより「井波彫刻」の精緻さ、芸術性の高さなどの素晴らしさを改めて評価してもらうこととなり、「芸術のまち　井波」として知名度を上げることにつながっている。

また、「灯り」で井波のまちなみを彩るイベントを同時開催。瑞泉寺のライトアップをはじめ、車両通行止めにして、行灯や灯りのアート作品で通り全体を彩ることで、人出が落ち込む夕方から夜間にも町なかがにぎわうよう演出している。さらに、同日に開催する市内の他イベントとも協力し、無料シャトルバスの運行により地区の住民や観光客の相互の行き来を誘導している。

このイベントを毎年継続して実施してきていることで、井波地区のイベントとして定着してきており、アート作品の出品数が年々増え、来訪者や町なかの人通りが増えたことはもちろん、住民などの意識も高まってきており、地区の活力とにぎわいを作り出している。

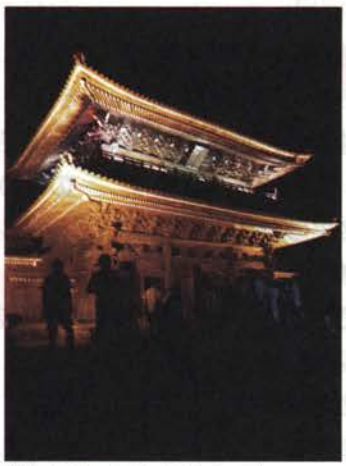
住民参加のまちづくり

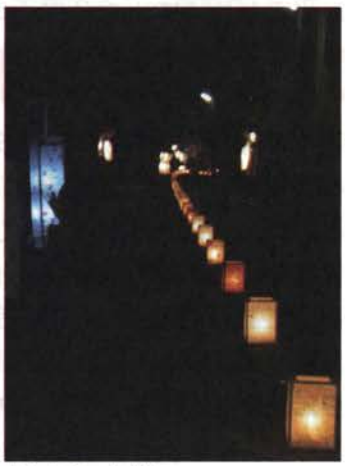
このイベントは、地区の協力なしでは実施できないことから、日程やスケジュール、展示場所などへの地区住民との調整に苦心しているところである。ただし、毎年継続して開催していくことから地区の恒例イベントといったとらえ方をしていただけるように住民の意識が変わってきており、今後、自発的な協力への流れをつくっていくことが必要である。

また、毎年継続で実施することによるマンネリ化も課題となっている。スマートフォンの機能を活用した宝探しゲームや他地域の民謡の演舞といった新しいイベントや魅せる展示方法の技術などに様々な世代の意見を聞いたり、作家や地区住民などの関係者からのアイデアを出し合える雰囲気づくりをしたりしていくことも必要である。


いけばな作品１


いけばな作品２


灯かりアートライトアップ


灯かりアート作品

自治体名　富山県南砺市（なんとし）

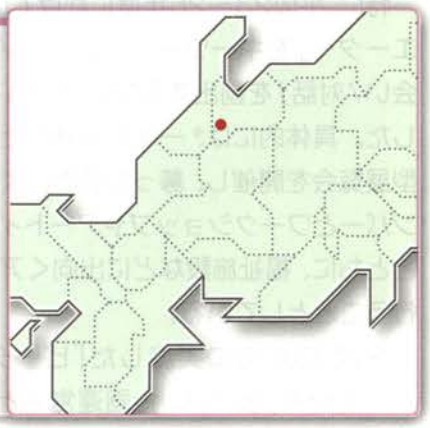
- 人　　口　54,724人
- 面　　積　668.86km²
- 事 業 名　寺のまちアートinいなみ
- 事業開始年度　平成13年度
- 事 業 主 体　寺のまちアートinいなみ実行委員会

連絡先

富山県南砺市観光協会井波支部

TEL 0763-82-2539　FAX 0763-82-2839

参考URL http://inami-kankou.group.nanto-e.com/detail-11549.html



石川県　金沢市

金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム

市区町村の概要

金沢市は、水と緑の自然に恵まれ、歴史と伝統が息づく環境において、学術や文化を育んできた。これらの地域資源を生かし、個性を磨き高めるとともに、未来を見据え、歴史と国の内外に「責任と誇りをもてるまち金沢」の実現を目指す。

美術館の教育普及事業

本事業は、「十代後半の若者の人格形成と社会関係の構築に美術館教育が有効である」というストックホルム近代美術館の教育普及プログラム「ゾーン・モデルナ」を全国に先がけて採用したものである。この事業をはじめたきっかけとしては、2000年代初めの「ニート」「フリーター」といった社会問題もあり、金沢21世紀美術館としての若者対策を視野に入れ、金沢独自の美術館教育プログラムとして立ち上げたものである。平成19年度から今年度で6回目。

美術館はメディエーター

若者（18歳以上39歳以下）を対象に、アーティストとの協働創作、協働表現を通じ、社会参加を支援するとともに、地域に根ざした芸術文化の育成と地域社会に貢献する独自の美術館活動の創出をめざすことを目的としており、特徴としては、完成した作品を展示するだけではなく、アーティスト・イン・レジデンス、ワーク・イン・プログレス、ワークショップ、パフォーマンスなど多様な手法を導入した長期プロジェクト型展覧会と称する手法で実績を重ねている。

特に、平成23～25年度にかけては「美術館はメディエーター」をキーワードに、「自己/他者/社会との出会い/対話」を創出するプログラムを実施することとした。具体的には、一年間を通した長期プロジェクト型展覧会を開催し、募った若者によるプロジェクトメンバーとワークショップやアートイベントを実施するとともに、福祉施設などに出向くアウトリーチ活動も行うこととしている。

平成23年度に実施した「ピーター・マクドナルド　訪問者」展では、企画運営者として地元の20～30代の若者12名がボランティア参加し、壁画制作やワークショップに取り組み、ほぼ毎週末DJイベントを開催し、大人から子どもまでの広い年齢層が交流する場を創出した。金沢能楽美術館との連携企画や街中で生まれた新作が当美術館の収蔵作品ともなった。

平成24年度は「Aloha Amigo! フェデリコ・エレロ×関口和之」と題して、コスタリカ出身のフェデリコ・エレロが制作し《サイコトロピカルランドスケープ》と名付けられた空間で、サザンオールスターズのベーシストでも知られる関口和之氏プロデュースによるウクレレプロジェクトを実施している。今年度は、参加したプロジェクトメンバーは18歳から39歳までの若者が26名で、サポートスタッフ19名とともに事業の運営にあたっている。毎日開催しているウクレレフリーステージ「誰でもウクレリアン」では、開設4ヶ月で約2,500人が参加し、8月26日に開催したウクレレサミットでは19団体、約150名がステージ発表して盛況を博した。今年度後半では、サタデーウクレレワークショップ、ハワイパシフィックレクチャーなども予定している。

金沢若者夢チャレンジ・アートプログラムのこれまでの取り組み

平成19年度　日比野克彦アートプロジェクト「ホーム→アンド→アウェー」方式

平成20年度　日比野克彦アートプロジェクト「ホーム→アンド→アウェー」方式 meets NODA［Ｂｕｔ－ａ－Ｉ］



「Aloha Amigo! フェデリコ・エレロ×関口和之」展
（2012-13年、金沢21世紀美術館）
《Psycho-Tropical Landscape》
画像提供：金沢21世紀美術館




「Aloha Amigo! フェデリコ・エレロ×関口和之」展（2012-13年、金沢21世紀美術館）
「ウクレレフリーステージ！―誰でもウクレリアン―」プロジェクト　活動風景
撮影：喜多直人　画像提供：金沢21世紀美術館




「Aloha Amigo! フェデリコ・エレロ×関口和之」展（2012-13年、金沢21世紀美術館）
Aloha Amigo! ウクレレ・サミット（2012年8月26日）
撮影：喜多直人　画像提供：金沢21世紀美術館

平成21年度　広瀬光治と西山美なコの"ニットカフェ・イン・マイルーム"
平成22年度　高嶺　格　Good House, Nice Body ～いい家・よい体
平成23年度　ピーター・マクドナルド：訪問者
平成24年度　Aloha Amigo! フェデリコ・エレロ×関口和之

情報と人のさらなる交流を目指して

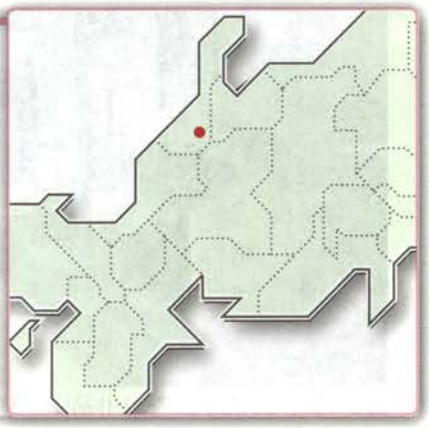
本事業は、一年間を通したプロジェクトであり、対象となる参加者が多様であるため、様々なニーズに対応するためのフレキシビリティと地道に信頼関係を築くメンタリティーという人的パワーが必要である。

また、作家の招聘や年間を通したプロジェクトの実施には財源の確保が必要であり、本事業では、平成23年度から3ヵ年、財団法人地域創造の助成を受けることができ、安定的な事業実施が可能となった。

今後の展開としては、平成25年度で、多様なメディアやスタイルによる「現代美術」を通じて出会いと対話を重ね、地域社会から世界を考える企画を展開し、「美術館はメディエーター」の集大成を図っていきたい。そして、このプログラムを深化発展させ、事業を段階的に社会化、国際化させ、地域の文化活動を海外発信することにより、さらなる情報と人の交流を創出していきたい。

自治体名　石川県金沢市

- 人　　口　461,873人
- 面　　積　467.77km²
- 事 業 名　金沢若者夢チャレンジ・アートプログラム
- 事業開始年度　平成19年度
- 事 業 主 体　金沢21世紀美術館



連絡先

金沢21世紀美術館
TEL 076-220-2800　FAX 076-220-2802
参考URL http://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=45&d=1395

福井県　鯖江市

うるしの里中道アート事業
～うるしの里中道アート事業～

市区町村の概要

鯖江市は、眼鏡枠の国内生産量９割以上を占める眼鏡、繊維王国福井の中核を担う繊維、1500年の歴史の中で業務用漆器においても８割のシェアを持つ漆器の三地場産業を中心に発展を遂げたものづくりのまちである。

福井豪雨からの復興

平成16年７月の福井豪雨で甚大な被害を受けた鯖江市河和田地区に、京都の大学生等のグループが環境調査に入ったことをきっかけに、翌17年から県内外の大学生等が河和田地区の空き家を拠点として、夏休期間にアートを制作･発表会を行う「河和田アートキャンプ」を実施するようになって８年が経過している。

また、中山間地を抱える河和田地区に集積する越前漆器産業は、経済情勢の変化はもとより日本人の生活様式の変化や海外製品の台頭等により、工業製品出荷額は年々減少しており、当地区の人口減少も歯止めがかからない状態となっている。

このような情況の中で、河和田地区の中心である河和田町は、鯖江市で唯一の景観推進地区に指定され、福井豪雨後の町並み整備により、漆器販売店や職人工房が立ち並ぶ「うるしの里」として平成22年度には整備を終え、美しい町並みが甦っている。

そこで、福井豪雨でお世話になった多くのボランティアに甦ったまちを見てほしい、厳しい情況にある越前漆器産業を何とかしたい、まちに賑わいを取り戻したいとの地域住民の思いがひとつになり、学生との連携による「うるしの里中道アート」を実施する運びとなった。

地域資源との融合

平成17年度から取り組んでいる「河和田アートキャンプ」は、「交流人口の増加」を目的に市の事業として実施しており、京都市内の大学生を中心に、毎年約100人の大学生が、夏休みの１ヶ月を河和田町内の空き家に長期滞在し、「農業」「林業」「伝統産業」「食育」「学育」などを切り口に、アート作品を制作し、発表会を開催している。

地域内に多くの学生が長期滞在することで、地域住民や漆器・眼鏡・繊維などの地場産業との交流機会が創出されており、アートキャンプに参加した県外の学生のうちの５人が、漆器や眼鏡の企業等に就職するなど、「定住人口の増加」にも寄与している。

また、平成23年度から取り組んでいる「うるしの里中道アート」は、「人で賑わうまちづくり」を目指して、地域住民や地域内の漆器関係者、商店とともにアート活動を行う学生等も参画する実行委員会を設置し事業を実施しており、漆器の販売店や職人工房が立ち並ぶ河和田町の中道通り周辺一帯を会場に、鯖江市が相互連携協定を締結している福井工業大学や京都精華大学、地元の丹南高校の学生たちが、大学や高校で制作した課題作品や現地で制作した作品を、漆器販売店や職人工房、商店等や町並みなどに展示するとともに、漆器販売店での漆器の販売や工房での漆器の説明・実演、商店での特色ある展示を通して、地域資源のPRにも努めている。



通りに展示された学生アート作品に座る来訪者


漆器販売店での受入

また、地域住民による越前漆器の器を用いた蕎麦の振舞いなどのおもてなし事業を実施することで、集客の増進を図るとともに来場者を楽しませている。

平成24年度は、9月8日から16日にかけて開催され、漆器販売店8店舗、職人工房13工房、商店14店舗が参加しており、出展者は、個々の店舗内に学生作品を展示するとともに、趣向を凝らした商品の展示や実演、販売を行っており、来場者は、街中に展示された学生作品の見学や制作者である学生との会話を楽しむとともに、漆器販売店や職人との会話や実演を通して、越前漆器の里の散策を楽しんでいる。

今日まで、越前漆器産地は、製造・卸を中心に発展を遂げた産地であるため、誘客による小売展開がなされてなかったことから、学生によるアート作品の展示が一般消費者を受け入れるための強力な後押しとなった。また、地域住民にとっても、県内外の学生がアート制作を通して地域住民と交流を図ることで、まちの活性化に繋がっている。

アートはパートナー

前途したが、越前漆器産地は製造・卸を中心とした産地であり、漆器販売店や工房は集客を図る整備が遅れており、年間を通して観光客を受け入れ、街中を散策しながら漆器販売店や工房、商店等の店内に展示してあるアート作品を見せるためには、施設の改装等の整備が必要である。

また、学生のアート活動や本イベントを継続して実施していくための資金の確保についても懸案事項となっている。

しかし、県内外の学生のアート活動や地場産業である漆器を素材とした産業観光の推進による賑わいの創出（交流人口の増加）事業については、この2年間の取り組みによって地域住民の意識が改革され、継続して実施したいとの要望もだされていることから、地域が主体となり、アート作品とともに学生をパートナーとした人で賑わうまちづくりを継続して実施するための支援に努める中で、新たなまちづくりを構築する。


工房での実演と受入

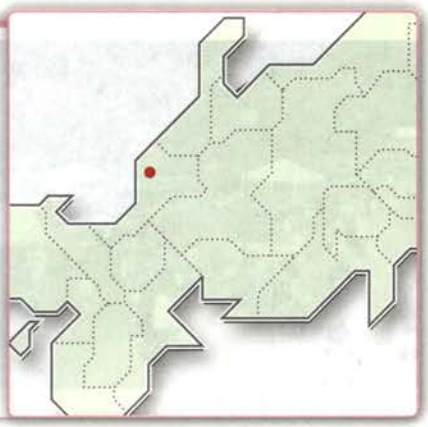

工房内に展示された学生アート作品


中道通りの賑わい


行灯ライトアップ

自治体名　福井県鯖江市

- 人　　口　68,824人
- 面　　積　84.75km^2
- 事 業 名　うるしの里中道アート
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　うるしの里河和田　人で賑わうまちづくりモデル事業実行委員会



連絡先

福井県鯖江市産業環境部商工政策課

TEL 0778-53-2231　FAX 0778-51-8153

参考URL http://www.city.sabae.fukui.jp/users/kanko/feature/nakamichi-art2012/index.html

滋賀県　甲賀市

信楽まちなか芸術祭
～やきものの里から国際陶芸産業都市へ～

甲賀市は、滋賀県の東南部に位置し、人口が約９万4,000人、面積が481.69平方km^{2}の街で、歴史・文化・産業において様々な資源を有している。東海道五十三次の土山宿・水口宿を有し、街道文化が開けた所であり、甲賀流忍術発祥の地としても全国に名を馳せている。

信楽焼産地の低迷

モノあまりが叫ばれる昨今、長引く不況や消費の低迷により、信楽焼の生産額は下降の一途をたどり、ここ20年間で４分の１の生産額にまで落ち込み、危機的な状況となっている。

このような状況から何とか打開を図ろうと平成18～22年度に取り組んだのが、「国際陶芸産業都市」特区事業である。

この制度は、地域固有の資源や特性を活かした力強い取り組みを、滋賀県が経済振興特区に認定し５年間集中的な支援を行うもので、全国でも初の試みである。

特区期間中は、これらを推進する特別部署を市役所内に設け、官民連携による事業実施を心がけながら、信楽焼産地を国際的にも通じる産業都市にすることを目的に、海外への販路開拓、新商品開発、環境関連産業推進、伝統産業保存振興、人材育成、観光振興など様々な事業を展開してきた。

特区事業を通じてデザインやクオリティーの向上など世界に通ずるものづくりやブランド強化に取り組み、世界中からバイヤーたちが訪れるような国際的なまちとなることを目指した。

平成22年秋に５年間の特区事業の集大成として、信楽陶芸トリエンナーレ2010『信楽まちなか芸術祭』を54日間の会期で開催した。

『信楽まちなか芸術祭』

平成22年10月1日～11月23日の会期で信楽陶芸トリエンナーレ2010『信楽まちなか芸術祭』を開催した。

トリエンナーレはイタリア語で３年に１度の芸術祭を意味するが、信楽地域の５会場で陶芸をテーマとした催しを展開した。

約千年の永きに渡って、産地を形成してきた信楽には、今も陶産地としての独特の風土や景観が残されており、やきものを生業にする人々は、仕事場と住まいが隣接する、職住一体型の生活をこの地で脈々と営まれてきた。

国際陶芸産業都市として世界にも認知され始めた今日でも、往時の生活と変わらないものづくりの営みがこの町には生き続けている。

『信楽まちなか芸術祭』は、このまちだから残すことができた「自然と人と創造」のかたちを、まちを歩き、触れ合うことで体感していただく催しである。

まちの地域資源を掘り起こし、磨き上げながら、決して背伸びすることのない、等身大のイベントをコンセプトとし、まちなかの空き倉庫や商店街の空き店舗、神社の境内など地域に眠る資源を、展示空間として活用した。

高額賞金を用意した陶芸展や有名アーティストを招聘するような芸術祭ではなく、街全体をフィールド・ミュージアム（生きた美術館）として捉え、新たなやきものファンの創出や地域経済の活性を目指し、イベント会社や広告代理店に頼りきらず、陶器業界関係者や関係機関そして市民を中心とした手づくりのイベントを創り上げた。

またメイン会場に一極集中する囲い込み型の手法

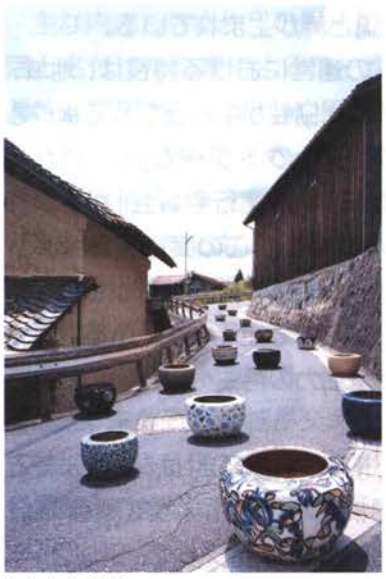

アートマーケット風景


屋内展示


屋外展示　神社境内


信楽焼


信楽焼たぬき


まちなか展示

をとらず、周遊ガイドを片手に会場を自由に散策するオープン型・まちなか周遊型のイベントが特徴といえる。

54日間の会期中には、延約1000人の市職員を動員し、ボランティアスタッフとともにまちなかでの案内誘導や来場者へのおもてなしを行い、かつて最盛期に活躍した往時の登り窯がこの催しで改めて脚光を醸し出し、素朴な陶都が表現できた。

京阪神や中部地区を中心として約23万人の来場者には、信楽のまちの心地よさや風土に触れていただき、アンケートでは「まちの人がとても親切だった」「また訪れたい」といった多くの感想や8割を超える満足度をいただいた。

次のステップへ

全国各地で数億円規模の芸術祭が開催されている昨今、新たなハコモノや目玉となる創作品も皆無である当市の取り組みは大きなチャレンジであったかもしれない。

しかし、単に芸術作品を鑑賞するだけでなく、伝統あるまちの風景を見ていただいたことが、来場者に本物を感じていただくことに繋がったと自負している。

この事業に関わった多くの市民や関係者から、地域資源の発見や自らのまちの素晴らしさを再認識したという声をいただいた。

地場産業にとっては、今後も厳しい時代が続くことが予想されるが、産地全体を牽引する若い力や地域を愛するエネルギーが更に育ち、次へのステップを踏み出す原動力となっていくことを期待している。

千年という長い間途絶えることなく続いてきた伝統産業の火を、これからも未来永劫にわたり灯し続けていくことが、今を生きる我々に与えられた使命であると考える。

自治体名　滋賀県甲賀市

- 人　口　約94,000人
- 面　積　481.69km^2
- 事業名　信楽まちなか芸術祭
- 事業開始年度　平成22年度
- 事業主体　信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会



連絡先

滋賀県甲賀市産業経済部商工政策課

TEL 0748-65-0710　FAX 0748-63-4087

参考URL http://tri.shigaraki-sp.com/

京都府　木津川市

木津川アート
～新たな文化の創造を目指す地方都市の小さな芸術祭～

市区町村の概要

木津川市は、京都府の南端に位置し、平成19年に3町合併により誕生した。関西文化学術研究都市の中核を担う都市として最先端の科学技術を誇る研究施設や企業が立地するとともに、府内では京都市に次ぐ国指定有形文化財を有しており、木津川に代表される豊かな自然も息づいている。

文化の継承と創造

木津川市には、万葉の時代から育まれた文化が受け継がれているものの、新たな市の資源を市民の共通の財産として広く共有されていない現状があった。合併から3年が経過し、市の多くの魅力や文化を広く市内外に発信することと併せて、木津川市民が自分達のまちを見つめ直すきっかけづくりとして、平成22年に奈良県で開催された平城遷都1300年祭、翌23年に京都府で開催された第26回国民文化祭・京都2011に合わせ、木津川市が総合計画に定める都市像「水・緑・歴史が薫る文化創造都市」を実現するための取組としてスタートした。

新たな魅力の発信

木津川アートは、古民家や日常的な空間といった地域が持つ既存の文化・景観・伝統等と現代芸術の持つ魅力が融和・融合することで生まれる新たな魅力を地域の総合文化や観光資源として、市の内外に広く発信しようとする芸術祭である。

『木津川アート2010』と『木津川アート2011』では、木津川市特有の歴史文化を色濃く残す古民家やふるさとの里山空間や景観を活用して芸術作品を展示することで、市民が日常に埋もれた魅力を再発見するとともに、外部から近代芸術という新たな風を取り入れることで生まれる魅力とともに広く市内外に発信することができた。

第1回目の木津川アート2010は、93名のボランティアに支えられ12日間にわったて開催、12会場に20,823人の来場者があった。さらに、第2回目となる木津川アート2011では、前年度を大きく上回る130名のボランティアの参加のもと、37名の作家自らが会場に選んだ24か所を展示会場として、11日の期間中に延べ59,485人が訪れた。

この2か年の取組から生まれた新たな動きの中には、会場となった古民家の米蔵でコンサートや展示会が開催されたり、制作活動のために地域を訪れる作家があるなど、新たな交流と絆が生まれている。

また、木津川アートの運営における特長は、地域、市民ボランティアと市観光協会が中心となって構成される「木津川アートプロジェクトチーム」に、市が加わって組織する「木津川アート実行委員会」が事業実施主体となっている点にある。この実行委員会メンバーは、多様な人材が個々の持つ強みを活かしながら木津川アートを企画・運営するとともに、ふるさと木津川市の魅力発信と地域活力の再生への思いを共有している。

3回目となる「木津川アート2012」は、これまでとは少し形を変えて、閉校となった小学校を舞台に「1日小学生になろう」というコンセプトで、平成24年11月に過去最長の16日間という期間で開催することになった。



アート作品「記憶のあとさき 2011」（料亭川喜展示）



ボランティアスタッフ（ぶた汁隊）による手作りのおにぎりやぶた汁などのもてなし

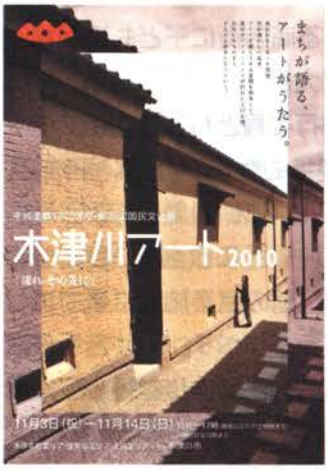


アート作品「薄紅」（北大路集会所展示）


市役所バルーン展示


上狛駅のアート
「SHIMI_PROJECTKIZU-RIVER」


大仏鉄道ぶらりアートな空間探しツアー



パンフレット



パンフレット



パンフレット

展開と継続

平成24年度で3回目を迎える木津川アートは、その形態や規模、開催地域を含め定型化にまでは至っていない。さらには、市民ボランティアと開催地域の協力を大前提とする事業であることから、運営主体の構成メンバーも毎年のように入れ替わる可能性を含んでいる。しかしながら、これまでの取組が評価され、継続を望む声が大きいことも事実である。実際に木津川アートを契機に市民や地域による文化イベントが開催されるなど、木津川市の各地域の持つ魅力の再認識、地域活力の再生に影響を与えるとともに、芸術祭としての認知も高まってきている。

今後も、木津川アートが「種」として様々な形で市の魅力と文化の創造に影響を与えることができる事業であり続けるとともに、参加する団体などが過度な負担を負うことなく、さらなる展開が期待できるような事業とするための礎を形作っていく必要があると考えている。

主な内容も芸術作品の展示だけではなく、授業や部活と名付けた作家によるワークショップやライブの開催、周辺地域の文化財や里山を散策する遠足や給食の実施など、世代を問わず参加できて1日楽しむことができるイベントを目指している。さらに、開催エリアをメイン会場となる小学校周辺地域に限定したことで、地域住民との関係性がこれまで以上に密度の高いものとなっており、地域主催の行事に参加作家やボランティアなどの木津川アート関係者が積極的に参加するなど、主催者と地域が交流する機会も増えている。これは、過去2年の成果や木津川アート自体が市内でも認知され始めている証であると評価している。

自治体名　京都府木津川市

- 人　　口　71,524人（平成24年3月31日現在）
- 面　　積　85.12km^2
- 事 業 名　木津川アート
- 事業開始年度　平成22年度
- 事 業 主 体　木津川アート実行委員会

連絡先

京都府木津川市生活環境部観光商工課

TEL 0774-75-1216　FAX 0774-72-3900

参考URL http://kizugawa-art.com/



大阪府　高槻市

高槻アート博覧会
～街がまるごとミュージアム～

市区町村の概要

高槻市は、大阪平野の北東にあって、京都と大阪の中間に位置。人口は約36万人で、平成15年に中核市となる。高槻うどんギョーザ、女子サッカー高槻スペランツァ、市のマスコットキャラクター「はにたん」をよろしく！

アートでまちづくり！

本市の中心市街地は、「高槻の玄関口」としての大切な役割を担っており、一定のにぎわいが維持されていたが、中心市街地の歩行者通行量や小売業年間商品販売額が減少傾向にあるなど、水面下には多くの課題を抱え、将来にわたって中心市街地の活力を維持・増進し、本市の「玄関口」として市民が愛着と親しみを持てるまちづくりを進めるために、積極的に事業に取り組んでいく必要があった。

そういった状況の中、市民のまちづくりへの参画を促すとともに、中心市街地におけるにぎわいを創出することを目標に、市の政策部門が民間に働きかける形で、実行委員会を組織し、市民協働の観点で平成13年に実施されたのが、「第1回わくわくストリート21」である。

当時、四季を通じて、秋のイベントが少なかったことから、開催時期を10月から11月とし、また、子どもを主役にした屋内ではなく、まちをフィールドにしたアートに関するイベントがしたいとの思いから、まちの中心にある商店街に子ども達が描いた横3.6m×縦2.7mの巨大絵画28枚を展示するアートイベントとした。

大きな画布に夢を描く

平成13年度に「第1回わくわくストリート21」が開催され、まちの中心にある商店街に子ども達が描いた横3.6m×縦2.7mの巨大絵画28枚を展示、平成15年度の第3回からは、実行委員として商店街スタッフも加わり、商業者との連携も強化された。平成21年度の第9回の時に「わくわくストリート21」から「アートdeわくわくストリート」に改名し、ひとつの商店街での開催に留まらず、他の商業施設にまでエリアを拡大し、大学生によるライブペイントや若手作家による手作り広場、子ども達と作品作りを行うワークショップ等、アート性あふれる新企画を実施した。

また、同じ年の平成21年12月に「高槻市中心市街地活性化基本計画」が大阪府下で初めて内閣総理大臣に認定され、その事業のひとつに、「子どもの総合イベント開催事業」として「アートde わくわくストリート」が位置付けられた。平成23年度の第11回の時、「アートde わくわくストリート」から「高槻アート博覧会」へと改名し、企画の開催場所を中心市街地エリア各所への更なる拡大を図り、中心市街地活性化の事業として確立させた。

平成24年度の第12回の開催では、市外への発信力を高めるためにより質の高いアートイベントを目指し、"高槻のランドマークとなる空間づくり企画"として、線路高架下広場にトリックアート（立体に見える絵）で"高槻城"を描くことに挑戦した。

本事業は、総事業費のうち、約1／3は市からの補助金を受け、差額の経費については企業からの協賛金や個人からの募金によりまかなわれ、運営のすべてがボランティアにより行われており、後援は、近畿経済産業局、大阪府、高槻市、高槻市教育委員会、高槻商工会議所、（社）高槻市観光協会、（公財）関西・大阪21世紀協会等から受けている。

事業成果として「高槻


巨大絵画アーケード展


トリックアート「高槻城」


大阪イラストガールズによるライブペイント


エコ・ワークショップ「布にいのちをあたえよう」



まちなかアートリノベーション


新聞女とつくる巨大テディベア

アート博覧会」の開催が歩行者通行量の増加など、中心市街地の活性化に資しているかの測定は現状難しいが、巨大絵画を描いた約1,000人の子どもたちと、その家族、関係者だけでも数千人単位で、中心市街地に足を運んでいると思われる。また、「高槻アート博覧会」が交流人口増加に効果があると認知されてきている動きとして、平成24年度、新たに駅前商業施設から高槻アート博覧会に参加したいとの申し出があった。

今後もこういった商業施設を増やし、中心市街地エリア内のすべての商業施設に「高槻アート博覧会」への参加を促すことで、「アートのまち高槻」を広く発信し、中心市街地の活性化につなげていきたい。

アートのまち高槻！

私たち実行委員会は、この「高槻アート博覧会」に関わった子どもから大人までのすべての人たちが「達成感」と「充実感」を味わい、多くの市民の皆さんにも「感動」と「わくわく感」を共有してもらえる、"真のふるさとイベント"となるようこの事業を推進してきており、今後もこの方針に変わりはなく取り組む所存である。

課題は、この「高槻アート博覧会」を「青少年を中心としたアートイベント」として発展・拡大を図り、市民のまちづくりへの参画を促すとともに、中心市街地におけるにぎわいを創出するために、集客力があり話題性のある企画を立案することで、高槻アート博覧会の発信力を高め、そして、より多くの人たちにこのアートイベントに参加してもらうことである。

将来的には、「アートと言えば高槻」と言われるくらいに「高槻アート博覧会」を中心にしていつでも市内のあちらこちらでアートに触れる機会が多いまちにしていきたい。

自治体名　大阪府高槻市

- 人　　口　537,137人（平成24年3月31日現在）
- 面　　積　105.31km^2
- 事 業 名　高槻アート博覧会
- 事業開始年度　平成13年度
- 事 業 主 体　高槻アート博覧会実行委員会



連絡先

大阪府高槻市産業環境部産業振興課
TEL 072-674-7411　FAX 072-675-3133
参考URL http://www.facebook.com/takatsuki.art.exhibition

兵庫県　神戸市

港で出合う芸術祭　神戸ビエンナーレ
～アートを活かしたまちづくり（文化創造都市の実現）～

兵庫県神戸市は、人口1,541,596人、面積552.83km^{2}の政令指定都市である。

北は緑豊かな六甲山系が連なり、南は瀬戸内海に面する、自然豊かな港町・神戸。

開港以来、外国文化を受け入れて独自の文化を発展させてきたこの都市は、日本を代表する国際都市の一つである。

文化創生都市の実現に向けて

神戸は古くから陸海交通の要衝として栄え、国際港として発展してきた。特に明治の開港を契機に、人・もの・情報の拠点として先駆性、多様性という文化風土を創り上げてきた。

また、阪神・淡路大震災からの復興のなかで、人への思いやりの大切さや傷ついた心を癒し、勇気を与えてくれた芸術文化の力を実体験したまちでもある。

こうした神戸のまちの歴史・経験を踏まえ、震災10年を機に「神戸文化創生都市宣言」を行い、芸術文化の力を結集して更なる振興を図るとともに、まちの賑わいづくりや活性化につなげるための具体的な取り組みとして、平成19年より2年に1度の芸術文化の祭典「神戸ビエンナーレ」を開催している。

神戸ビエンナーレの目標は、2つある。ひとつは「まちづくり」であり、もうひとつはまちづくりを担う「人づくり」である。

具体的には、

①まちづくりについては、

・アートの力で、すでにあるまちの様々な資源を再認識・再評価し、再生・活用につなげることで、神戸の魅力を発信し、賑わいの創出を行う

②人づくりについては、

・子どもからお年寄りまで気軽に芸術文化に接することで、豊かな心を育てる

・新進アーティストを発掘・育成し、創造的人材を集積する

・ボランティアを育成する

これらを目標にしている。

まちづくり　と　人づくり

「まちづくり」につながる主な取り組みとして、今なお昭和の頃の雰囲気を留める元町高架下（JR神戸駅～元町駅間）の空き店舗を活用し、アートを介した取り組みを行うことで、まちの資源を再評価し、魅力を発信している。また、会場が持つ独特の雰囲気が作家にとっても大変魅力的で、制作意欲に刺激を与え、また約6ヶ月間の制作過程をオープンにしたことで商店街にも活力を与えることができたと評価されている。

「人づくり」については、他都市で開催されているビエンナーレが国内外から一定の評価を得た作家を招聘しての作品展示に重きを置いているのに対して、神戸はコンペ方式を中心にしており、新進アーティストなど創造的人材の発掘・育成に努めている。彼らは、ビエンナーレ開催後も、機会があれば神戸で作品を展示したり、トークショーやワークショップを開催したりするなど、神戸の文化振興の一翼を担っている。また、韓国・光州ビエンナーレに神戸ビエンナーレ大賞作家が参加するなど、海外で活躍する人材も育っている。

神戸ビエンナーレ2013では、基本方針として、①まちの資源の再認識・再評価と魅力発信、②創造的人材の集積、③多様な市民参画と芸術文化の交流、④芸


メリケンパーク会場


製作過程を公開（元町高架下）


アーティストによるワークショップ


2009 ゲートアート：
高須賀昌志「Red Heels」


2009 海上アート：
植松奎二「螺旋の気配－宙」


2011 アートインコンテナ国際コンペティション：藤木隆明「人工地形」

術文化活動の連携を掲げ、まちの賑わいや活力を市民やアーティストと共に創り出すことを目的に、神戸ビエンナーレを契機に、いろいろな地域・場所でアートを活用した取り組みを実施し、多様な創造的人材によって優れた芸術文化が人やまちに刺激を与え、新たな魅力が持続的に創造される神戸の実現に努めていく。

港で出合う芸術祭「神戸ビエンナーレ2013」

テーマ：さく "saku"

会期：2013年10月1日（火）～12月1日（日）
（62日間）

会場：メリケンパーク・神戸港エリア、兵庫県立美術館・ミュージアムロードエリア、三宮・元町エリア他

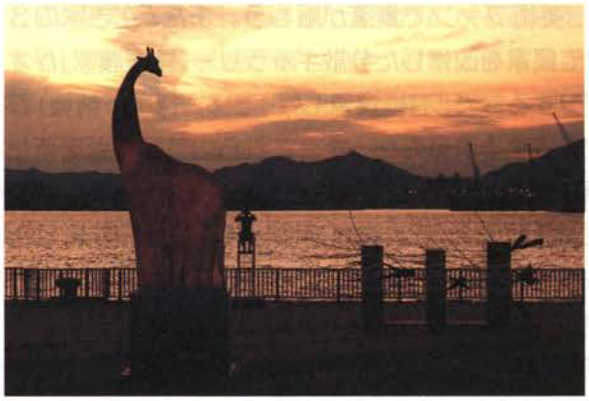
コンペティション部門：アートインコンテナ国際コンペティション、しつらいアート国際コンペティション、神戸港・海上アートコンペティション、ペインティングアートコンペティション、グリーンアートコンペティション、現代陶芸コンペティション、創作玩具国際コンペティション、ミュージック＆アートステージコンペティション、ダンスアートコンペティション

神戸力発信部門：招待作家展、いけばな未来展、書道展、兵庫・神戸の仲間たち展、まちなかコンサート、障がい者公募作品展示（ハートでアートこうべ）他

HP：http://www.kobe-biennale.jp

資金確保と地元経済への効果

神戸ビエンナーレは、主に企業等からの寄付を財源とした基金を活用した市からの補助金により運営しているが、寄付金額が年々減少しており、運営資金の確保が課題となっている。また、京阪神からの宿泊を伴わない来場者の割合が高く、広範囲での広報の必要性を感じている。今後は、西日本で開催されている瀬戸内国際芸術祭など、他地域のアートプロジェクト等と連携することにより、広範囲からの来場者を取り込み、宿泊需要等を発生させ地元経済への効果を高めていきたい。


神戸の夕暮れに染まる作品たち

自治体名　兵庫県神戸市

- 人　　口　1,541,596人
- 面　　積　552.83km²
- 事 業 名　港で出合う芸術祭　神戸ビエンナーレ
- 事業開始年度　平成19年度
- 事 業 主 体　神戸ビエンナーレ組織委員会・神戸市

連絡先

兵庫県神戸市市民参画推進局文化交流部

TEL 078-322-6490　FAX 078-322-6136

参考URL http://www.kobe-biennale.jp/



兵庫県　養父市

おおやアート村構想推進プラン
～まちをアートで楽しく～

市区町村の概要

養父市は人口26,619人で、兵庫県の北部、但馬地域の中央に位置し、交通の要衝をなし、兵庫県下最高峰の氷ノ山などがある。また、市の東部を一級河川円山川が流れるなど雄大で美しい自然に囲まれている。

アートのまちづくり

養父市大屋地域は産業構造の変革などで多くの産業が縮小・消滅し、その結果、過疎化・高齢化の進展、空き家の増加、学校の統廃合などで、まちの賑わいが急速に失われた。しかし、平成6年から続いている木を素材とした全国公募展「木彫フォークアート・おおや」は平成24年で第19回目を迎え、期間中は市内外の多くの木彫ファンが会場に訪れる。また、大屋地域には木彫家をはじめ、多くの作家が創作活動をしており、そのジャンルも絵画、陶芸、書、木工、染織など多彩である。平成8年からはいろんなジャンルの作家が合同でグループ展「うちげぇのアートおおや」を開催し、美術ファンで集落が賑わう。また、空き家の3階建て民家を改修した分散ギャラリー「養蚕農家」がオープンするなど、芸術資源（人・モノ・行事・情報）が多く集積するようになった。これらの芸術資源を新たな観光資源として活用してくため、平成22年5月に市民、関係団体、行政等が連携し芸術をテーマにしたまちづくり構想実現のため「おおやアート村協議会」を設立した。会では「アート」というキーワードでまちが賑わうことを願い、「おおやアート村構想推進プラン」を策定し、様々な取り組みを行っている。

暮らしとアートの融和

平成22年3月に廃校となった旧兵庫県立八鹿高等学校大屋校を「おおやアート村構想推進プラン」を実践するための拠点施設として養父市が兵庫県からの貸与を受け、芸術家のアート活動支援、アート情報の発信、アート体験の提供が行えるように平成23年度に体育館、木造校舎の改修工事を行った。平成24年4月29日に施設の一部をオープンし、体育館はアート作品を展示する場所に生まれ変わった。市とおおやアート村協議会が作品の展示にかかる企画から展示作業まで協働で行い、「BIGLABO Exhibition！」を平成24年4月29日から7月31日まで開催した。体育館という広い空間を最大限利用するため大型の木彫作品なども展示した。期間中の来場者は2,000人を超え、都市部からも多くの方が訪れアート作品を鑑賞した。また、8月9日からは新しい作家の作品を迎え「BIGLABO Exhibition！2」を開催し、作家が滞在しながら作品を製作するアート･イン･レジデンスなども行った。また、木造校舎では、木彫室、陶芸室、染織室、絵画室、書道室、さをり織室があり、それぞれのジャンルの作家によるワークショップを行い、子どもから大人まで多くの人がアートを体験し楽しんでいる。とりわけ夏休みは非常に多くの子供たちがワークショップに参加し、カラクリおもちゃや石ころアート、木のキーホルダーなどを作ってアート体験し目を輝かせた。また、大人はモビール風鈴、アートTシャツ、オリジナル判子、植木鉢などを作って楽しんだ。また、平成24年5月19日には「手づくり」をテーマに、出店者と来場者の交流を通じて、地域に賑わいをつくり、みんなが元気になり、そして手づくりのものの良さを知ってもらうため「大屋手づくり市」を開催した。アート作品、手づくり雑貨、


大屋手づくり市


展示場


ワークショップ


大屋手づくり市


ワークショップ


展示場

地元の加工品などを販売するブースなどが約40店集まり、またそこでは、子どもたち自身が作ったアクセサリーなどを販売する「子ども手づくり市」コーナー、音楽ライブなどを行い、イベントを盛り上げ、多くの来場者で地域に賑わいをもたらした。また、中学校の生徒にアートへの関心をもってもらい、「ものづくり」の楽しさをわかってもらうため、学校の美術の時間を利用して作家と学校の先生が一緒になって生徒に指導する授業をするなど、地域に密着した取り組みも行っている。

施設の更なるPR

平成24年度は、旧兵庫県立八鹿高等学校大屋校のRC校舎を貸アトリエ、まんが図書室、こども工作室、触れるギャラリーなどにする改修工事を行う予定である。貸アトリエには若い作家が入居できるよう、空き家などの住居が斡旋ができる仕組みを作らなければならない。また、その作家がワークショップを行うことで、更なるアートを通じた交流が広がることを期待する。市の財政状況が厳しい中、展示に係る費用や広報（チラシ）などに係る費用を、企業等が行っているアート関連事業助成などに応募し、事業費の確保に努めなければならない。そして、おおやアート村「BIG LABO」が観光ルートとなるように、兵庫県但馬地域の観光地の旅館組合、旅行会社などへPRを行い、多くの人が養父市を訪れ、アート体験、地域住民と都市住民との交流を通じてまちが賑わうこと期待する。

自治体名　兵庫県養父市

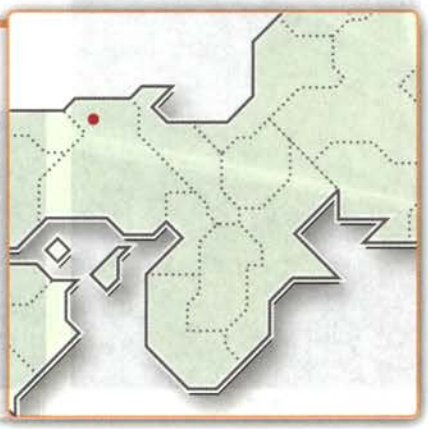
- 人　　口　26,619人
- 面　　積　422.78km^2
- 事 業 名　おおやアート村構想推進プラン
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　養父市

連絡先

養父市大屋地域局

TEL 079-669-0120　FAX 079-669-1682

参考URL http://www.biglabo.info



奈良県

奈良・町家の芸術祭HANARART（はならぁと）

奈良県の概要

奈良県は世界に誇る多くの歴史文化遺産と、それらと一体をなす歴史的風土と豊かな自然環境に恵まれた地である。北西部に大和平野、北東部に大和高原、南部に五條・吉野の紀伊山地が広がり、特に、大和平野には近世近代に発達した城下町や寺内町、商家町、宿場町などの歴史的な町並み地域が多く残っている。

アートで奈良に華を！

奈良県内には歴史的価値の高い町家・町並みが多く存在しているが、空き家の増加や老朽化が進み、地域の衰退や安全性の阻害の一因となっている。また、空き家の利活用は各地域で取り組みが進められているが、所有者と買い手、借り手のコーディネィトの難しさ、労力と費用などの面から思うように進んでいない。

このような問題に、各まちづくり団体や行政等が連携し取り組んでいこうと、平成23年2月に「大和・町家バンクネットワーク協議会」を設立し、その横のつながりを土台とし、平成23年10月に「奈良・町家の芸術祭HANARART」を開催した。

HANARARTでは、空き町家の現状を伝え、町家所有者や住民の利活用に対する意識の変化を促すと同時に、住民の町に対する誇りの醸成、地域内外の交流促進等を目的にしている。また、斬新な発想をもった現代アートは、近年、若者に人気があり、伝統的な町家に現代アートを組み合わせることで、若い世代の町に対する興味を促し、まちづくりに参加する機運を醸成していきたいと考えている。

NARA 奈良 HANARART 華 芸術 HANA ART

「ハレ（祭）の空間＝華やかな空間」を創出して
地域の活性化につなげたい、という想いを込めて。

町の変化に対する期待感を醸成！

平成23年は、重要伝統的建造物群保存地区である今井町（橿原市）、五條新町（五條市）、宇陀松山（宇陀市）をはじめ、八木（橿原市）、三輪（桜井市）、郡山城下町（大和郡山市）、ならまち（奈良市）の7つのメインエリアと、初瀬（桜井市）、高取土佐（高取町）、田原本（田原本町）の3つのサテライトエリアで開催した。その取り組みの一例として郡山城下町エリアをあげる。当エリアは豊臣秀吉の弟・豊臣秀長が築いた城下町であり、当時の町並みが今も残る。また、武士の副業として始められた金魚の養殖が盛んな地域でもある。

HANARARTは開催地域それぞれでその地域を担当するまちづくり団体がいる。当エリアは大和郡山市でアートやデザインを生かしたまちづくりを進める任意団体「K-Pool Project」が担当している。

当エリアの会場は、奈良県で最も古い創業天正13年（1585年）の和菓子店や、木造3階建ての元遊郭、西洋風の小児科医院、元酒蔵など、個性的な会場が多い。これらの各会場で現代アート作家がアート展を開催した他、K-Pool Projectが独自で「金魚が集まるアート展」や「地元の子供たちが色塗りした金魚ねぶたのライトアップ」などを行った。また、芸術大学の学生による金魚オブジェ制作ワークショップや、地元ミュージシャンとコラボした



元遊郭の旧川本邸



旧川本邸での原田要氏の作品



サポーターの様子


書道ライブパフォーマンス


金魚ねぶた展示

書道ライブパフォーマンスなどを開催した。

会期中、計５大学が研究室やゼミ等の単位でスタッフやサポーターとして関わってくれた。町の中に若いスタッフがいることで町に活気が出たとともに、地域住民の町の変化に対する期待感を醸成することが出来た。また、地域住民が地域の魅力に気付く機会となると同時に地域内外の人々の交流の場となった。

HANARARTは従来大和郡山市で行なわれてきたイベントとは異なり、地域主体でイベントを運営したこと、そのイベントが現代アートという今までになかったジャンルを取り入れたことから、多種多様な人々が関わり、地域に主体性を生むことができた。HANARART開催後、自らの手でイベント企画やまちづくりの提案をする地域住民が複数現れるという結果につながった。

まちづくりの仕掛けを

HANARARTはイベントであるが、その効果は単発的なものではなく、まちづくりの過程のひとつになると考えている。イベントを通して、人と人とがつながるきっかけを創出し、多種多様な人が町に関わることで、持続可能なまちづくりを推進していきたい。

HANARARTでは各地域のまちづくり団体が連携し、実行委員会が構成されている。この実行委員会設立の牽引役となったのは「なら・まちづくりコンシェルジュ」である。「なら・まちづくりコンシェルジュ」とは、地域主体のまちづくりを進めるため、平成19年に創設された奈良県の制度である。現在13人の奈良県職員が、地域住民に対し、まちづくり活動に役立つ情報の提供や他団体との仲立ちなどを行っている。この制度の特徴は、知事から個人で任命を受け、人事異動があってもこの役割を継続していくという点であり、継続的にまちづくり団体と関わることが可能である。

県内でも同様の制度の導入を検討している市町村がでてきている。魅力あるまちの創出を目指して、市町村のまちづくり担当職員とも連携し、地域主体のまちづくりの仕掛けや仕組みを考えていきたい。

自治体名 奈良県

- 人口 1,415,163人
- 面積 3,691.09km^2
- 事業名 まちなみ資産と芸術を活用したまちづくり推進事業
- 事業開始年度 平成23年度
- 事業主体 奈良・町家の芸術祭HANARART実行委員会



連絡先

奈良県土木部まちづくり推進局地域デザイン推進課

TEL 0742-27-5433 FAX 0742-27-7685

参考URL http://hanarart.main.jp/index.html

和歌山県　田辺市

芸術文化交流事業
～毎日が街中文化祭を目指して～

市区町村の概要

田辺市は、紀伊半島の南西側に位置した人口約８万人の県内第二の都市であり、穏やかな気候で、世界遺産に登録された「熊野参詣道」や多様な温泉郷や温暖な気候と風土に恵まれた梅、蜜柑、蒲鉾、紀州備長炭などの特産物等数多くの地域資源を有しています。

商店街に来る理由は？

田辺市では、国において認定された「田辺市中心市街地活性化基本計画」に基づき、官民合わせて62の事業を実施している。民間が実施する事業展開を積極的に支援する市のスタンスのもと、駅前商店街の役員が空き店舗を活用した「アート」を切り口にした街歩きへの展開を計画した。背景として、商店街の役員が、単発的な集客ではなく、恒常的にお客さんに街なかを歩いてもらうためには何をすればいいのか？と考えた結果「人に感動を与えられるイベント等の実施」という答えに辿り着いた。では、感動を与えられるものとは何かと考えたところ「昔も今もこれからも、人が感動するものはスポーツ・芸術・文化である」という結論に至った。商店街内でスポーツの実施は難しいため、芸術と文化に関わる内容の事業展開を定期的に実施する方向で検討に入った。

本事業は、子供の作品展等を実施する一方で、本物のアート展等を定期的に開催することにより、人が集まり、各商店の営業時間が延長され、街なかの賑わいを創出し、そして中心市街地の活性化に繋がるという計画とした。その計画が、平成23年度の和歌山県の補助事業に採択されるに至った。

商店街に新たな客層！

アートに関わる展示会等を開催することにより、商店街に足を運ぶきっかけづくりと学生等が日頃の練習の成果を発揮できる場所の提供を行い、芸術と文化に触れる機会を増やすことを目的に、平成23年７月に駅前商店街の空き店舗を「ギャラリー駅前」として整備。当初は、毎月１回土日に開催することで始まったが、商店街、南紀みらい（株）（まちづくり会社）、田辺市が一体となって取り組んだ結果、色々なジャンルのアート作品展を開催することができた。

毎年８月８日に開催している商店街の一大イベント「ヤーヤーまつり」で、地元の高校生のブラスバンド演奏を路上で行うとともに、ギャラリー内で手作り雑貨作品展の開催を皮切りに、幼稚園児の作品展、チェンソーアートの世界チャンピオンの作品展、写真やポスター展、プリザーブドフラワーや切り絵展等の体験できるイベントも実施することにより、駅前商店街では毎月何か面白いことをしているというイメージを持ってもらうことに成功した。また、他団体とのコラボレーション事業として取り組んだ、映画祭、ひなまつり作品展も好評で、中心市街地活性化を目指して活動しているまちづくり関係団体との連携は今後も重要であることを再認識することができた。

一方で、11月からは、ギャラリーが開いている期間に限り、作品の展示を希望する一般の方への貸し出しも行っており、気軽に利用できる「ギャラリー」として定着している。平成23年度の実績としては、21事業



8月8日（月）
1．神島高校ブラスバンド部演奏
（路上ライブ　約4,000人）



8月8日（月）
2．ハンドメイドフェスタ
（５人の作家による手作り作品展
約300人来場）



10月22日（土）
3．やのともこイラスト作品展
（お絵かき教室も実施　94人来場）

で7,397人の来場があった。

商店街は「無料の駐車場がないから不便である」と言われるが、当該商店街も近辺に無料の駐車場がないため、一定のクレームを予測していたが、そのようなことは皆無であった。行きたい展示会や店舗があれば、駐車場の有無は関係ないと思われる。

以上の取り組みの結果、月１回の開催予定が月２回以上の開催となった。また、目標数値（20事業で約6,000人の来店）を掲げ、１日100人の来場を目指した企画を関係者が真剣に考えるようになった。また、来場してもらうだけでなくお得な情報が入った各店舗のパンフレットの配布や商店街を歩いてクイズに答えると抽選で景品が当たる取組を実施するなど、そういった取組に対し、一定の評価をいただいたと実感している。

サスティナブルな運用

平成23年８月８日から取組を始めたが、マスコミに多数取り上げられたこともあり、今まで商店街に来たことがない世代や地域の方の来店があった。学生や子供連れ、高齢者など、様々な客層が訪れる空間になるとともに、ギャラリーに展示し切れない場合は、作品を各店舗に展示する取組も実施しており、そのことが商店街の回遊に繋がった。しかしながら、例年同じ展示会や発表内容になれば、飽きられるため、毎年違う内容のアートを見てもらえるよう努力することが大切である。

また、商店街において、将来的には２箇所で事業展開したい意向があるが、平成25年度以降も引き続き実施していくためには、財源不足が懸念される。現在は、一般利用者の利用も可能としているため、その場合には利用料を徴収するなど、今後の事業展開への積み立てを図っていきたい。



11月25日（金）～27日（日）
4．映画祭＆昔なつかしのポスター展
（田辺・弁慶映画祭プレイベント（過去の作品を上映）　80人来場）



12月9日（金）～11日（日）
5．紀南幼稚園こども絵画展・作品展
（120人来場）



1月12日（木）～16日（月）
6．チェンソーアート展
（15日（日）は、作家の城所啓二さんの講演あり　844人来場）写真は搬入の風景



3月20日（火）～25日（日）
7．切り絵展
（20日（火）・24日（土）・25日（日）は、作家の養虫さんの切り絵教室も実施　218人来場）

自治体名　和歌山県田辺市

- 人　　口　80,475人
- 面　　積　1,026.77km²
- 事 業 名　芸術文化交流事業
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　田辺市駅前商店街振興組合

連絡先

和歌山県田辺市産業部商工振興課

TEL 0739-26-9970（直通）　FAX 0739-22-9898



広島県　大竹市

巨石アート（ストーンアート）の取り組み
～巨石アート（ストーンアート）で彩るまちづくり～

市区町村の概要

本市は、広島県の西端に位置し、人口は２万８千人あまりで、日本で最初にできた石油化学コンビナートのまちとして、瀬戸内地域で有数の臨海工業地区に発展しており、日本三景の一つ「安芸の宮島」を望む風光明媚なまちである。

夢から始まった！

暴力監視追放協議会の目的は、「暴力のない、安全で、住みよいまちの実現」であり、そのためには、単に暴力団を排除するだけでなく、未来を担う子どもたちを見守り、「いじめや暴力に染まらない、強くたくましい心」を育てることが大切だと考えている。ストーンアート事業に取り組むようになったきっかけは、前会長が見た、絵が描かれた大きな石が街じゅうに置かれてある夢だった。県立大竹高校に通学してくる高校生たちに元気がない、何とかしたい！という思いの中で大竹駅前から始めたあいさつ運動で知り合った生徒から文化祭の案内を受けた。そのとき見た、美術部の生徒たちによって鳥や動物の絵が描かれた握りこぶし大の石がとてもユニークで、心に強く残っていた。石や岩をキャンバス代わりにして、思い思いの絵を描く芸術…。子どもと大人が一緒になって、ストーンアートのような芸術作品づくりに取り組むことで、楽しみながら地域の心が一つになり、街じゅうがまるで、家族のように団結できる。結果としてそうした街には暴力団は決して近寄らないはず。大竹の街のいたるところに、絵の石が置かれてある夢の話を聞いた瞬間、多くの人の頭の中にそうした思いがひらめいたのである。

大竹発地域文化の発信

ストーンアートの制作作業は当初から予想以上に難航した。まず、石をどこから手に入れるのか。次に、大きな岩は１トン以上もある。その大きくて重い岩をいったいどうやって運ぶのか。また、描く方もたいへんで、立体のキャンバスは初めての体験であり、しかも左右が非対称である。何がこの岩に描けるのか。筆を入れる前から大きな壁にぶつかった。しかし、不思議なもので、ピンチに陥り、行き詰るたびに、地域の中からボランティアでクレーン車をだしてくれる方が現れたり、石を無償で提供してくれたり、絵を描くことが大好きな方が手伝ってくれたりと、知恵や技術、そして熱いハートを持つ助っ人が現れて救ってくれた。今も、趣旨に賛同する市内の小・中学生や県立大竹高校の生徒、市役所職員、警察署員、消防署職員をはじめ、様々な市民が自分たちの得意な分野で関わりながら、心を一つにして巨石アート（ストーンアート）づくりを推進している。大人と地域の子どもたちが一つになって、制作作業に取り組むことで、各地域の青少年の健全育成にも大きく貢献している。また、多くの市民が関わることで、地域の「絆」を強くするとともに、街のランドマークとして新たな観光資源となり、市域活性化のきっかけになればと考えている。平成16年に大竹駅前の緑地（市有地）に、17体の動物をモチーフにした巨石アートを制作したのをはじめ、大



団結のこぶし



五色の鯉のぼり

竹の伝統文化である、手描き鯉のぼりや雛流しを題材にした巨石アートを制作した。さらに、駅前商店街の活性化の一助になればと、中学生が制作したストーンアートを店先に設置したり、警察署員が一丸となって「握りこぶし」のストーンアートを制作した。市役所正面玄関前には、手描き鯉のぼりをモチーフにした「五色の鯉のぼり」のストーンアートが設置され、市役所を訪れる多くの市民に愛されている。設置場所についても公共施設等の敷地内空地や道路残地等の空き地の利活用を図っており、様々な巨石自体の形を巧みに活かした、およそ100体以上の芸術作品が、まちを歩く多くの市民の目を楽しませてくれている。協議会の会員自身が発想した取り組みであり、行政からの補助を求めずに、自主的に多くの市民に働きかけながら、活動の裾野を広げている点で「市民協働」のまちづくりを進めている市政の方針にマッチしており、『大竹発の地域文化の発信』に市としても大きな期待を寄せている。

メンテナンスと世代交代

市内に点在している、小さな神社等８箇所にストーンアート「八福神」（大黒天・恵比寿・弁財天・毘沙門天・布袋・寿老人・福禄寿・お多福）を設置し、「八福神巡り」というテーマ性を設けて、日頃訪れることのない小さな神社にスポットを当てるなど、テーマに沿ったストーンアートの制作で、市内に拡げていく工夫をしている。現在は、市域の東西南北に青龍・白虎・朱雀・玄武という「四神」（しじん）の巨石アートを設置し、市民の安心・安全を守る「四神プロジェクト」に取り組んでいる。今後は貴重な観光資源と位置づけ、テーマごとの散策ルートを開発して、マップやホームページを作成していく予定である。課題としては、ストーンアートの色あせをリメイクしていくメンテナンスを行う仕組みづくりと、関わる人達の世代交代をどうしていくかの答えが見つかっていないことである。


親子ザル


親子パンダ


カメレオン


天まで昇る鯉のぼり


トラ


眠れる獅子

自治体名　広島県大竹市

- 人　　口　28,608人
- 面　　積　78.57km^2
- 事　業　名　巨石アート（ストーンアート）の取り組み
- 事業開始年度　平成16年度
- 事 業 主 体　大竹市暴力監視追放協議会



連絡先

広島県大竹市市民生活部市民課

TEL 0827-59-2142　FAX 0827-59-0003

参考URL http://www.city.otake.hiroshima.jp/

山口県　山口市

メディア芸術を活かした文化的価値創造発信事業
～メディアアートセンターから広がる活気あるまちづくり～

市区町村の概要

山口県の県庁所在地である山口市は、面積１千km^{2}を超える県内最大の市である。海から山林まで豊かな自然とともに歴史、文化遺産に恵まれて、多様な地域資源を有している。産業構造においても、地域ごとに特色が見られる。

情報と文化の新世紀へ

山口市は、地方分権社会の中で個性を発揮し、元気なまちであり続けるための施策を探る中で、21世紀の潮流を「情報」と「文化」と捉え、充実した教育機関や情報通信機能といった独自の地域資源を生かした、新しい価値創造と情報発信のための拠点が必要であると考えた。そして、平成５年「やまぐち情報文化都市基本計画」を策定し、中心市街地と温泉街を結ぶ重点地域に情報・文化機能の拠点施設を整備する方針を打ち出した。

ソフト部分の方向性については、地元の識者や芸術家によるソフト研究会において検討を重ね、「地域と世界に開かれたアートセンター」と位置づけた。検討にあたり、全国的に活躍する専門家の協力を得たほか、欧州のメディアセンターの事例も参考とした。さらに、市民の意見を吸収しながら具体化を進めたが、費用や活用方法を巡って活発な論議が沸き起こったため、市民による見直し委員会を発足し、そこでの検討、提言を経て、平成15年11月、市立図書館を併設したアートセンターとして「山口情報芸術センター」の名称で開館した。

平成24年８月までの入館者数は680万人を超え、独創性に富んだ文化・芸術事業を通して、まちづくり政策の一翼を担っている。

YCAMからまちを元気に

山口情報芸術センター［YCAM］は、芸術作品の制作機能を有することを大きな特徴としており、山口で生み出され、世界へ向けて発信される斬新なオリジナル作品は、国内外で高い評価を受けている。これは、市民の誇りであり、まちの「ブランドづくり」に繋がるものであるとともに、作品制作を通して蓄積された技術を応用することで、新たな「ものづくり」に繋がっていくものとして、その可能性を模索している。

同時に、YCAMでは、教育普及事業を通した「ひとづくり」にも力を入れており、開館以降、数々のオリジナルワークショップを開発してきた。そして、平成24年度には、このうちの４つがキッズデザイン賞のリテラシー部門において経済産業大臣賞を受賞した。これらのワークショップは、YCAM職員が市内の小学校へ出向く出張授業としても実施しており、山口に住む子どもたちのメディアリテラシーの促進とともに、創造性や豊かな感性を育む礎となっている。

また、平成24年５月～８月には、これまでの教育普及事業を総括し、新しいステップへ踏み出す一歩として、教育普及展「glitchGROUND-メディアアートセンターから提案する、新しい学び場環境」を開催した。その一環である「コロガル公園」は、YCAMのスタジオ内にメディアテクノロジーを駆使した多様な仕掛けを埋め込み、木製の不定形な床で覆った公園のような空間であり、子どもたちは、ここで、自由に遊び、体験することができる。開催３ヶ月間の来場者は、延


パフォーミングアーツ
H21「The Rainy Table」


キッズデザイン賞受賞ワークショップの１つ
「Eye2Eye」のようす


H24「コロガル公園」のようす


H24 小学校への出張授業のようす


YCAM10 周年プレイベントでアーティスティックディレクター坂本龍一氏の小学校でのワークショップのようす


YCAM 外観と H22「CLOUD FOREST」

べ4万人近くを数え、連日多くの子どもたちが駆け回り、明るい歓声に包まれた。YCAMには、「メディア」や「アート」を、気構えて学んだり鑑賞したりするのではなく、そこにあるものとして経験できる環境が用意されている。自然にYCAMに親しむことにより、個性豊かな人材の生まれる土壌が、山口のまちにはできつつある。

さらに、YCAMでは、平成25年度に開館10周年を迎えることを機に、「アートと環境の未来・山口 YCAM10周年記念祭」を開催することとし、準備を進めている。記念祭は、これまでの10年間を総括しつつ、次の10年の在り方を描き出すものとして、まち全体を巻きこみながら展開していく。併せて、山口市が力を入れている東アジアからの誘客活動と連携するなど、観光コンテンツとしてもPRしていくことにより、まちの「にぎわいづくり」へ繋げていく考えである。

10周年記念祭へ向けて

YCAMの活動を、一層まちづくりへ生かしていくためには、教育普及機能のさらなる強化及びモデル化、市域拡大による周辺地域への浸透、観光コンテンツとしてのPR強化などが課題として挙げられる。山口市では、YCAM10周年記念祭を通して、これらの課題に対する今後10年間の道筋をしっかりと示していきたいと考えている。

さらに、YCAMの制作機能を担う部門「YCAMインターラボ」は、平素からの制作活動に加えて新しい芸術表現のための様々な研究・開発を進めており、将来的には、蓄積した情報や技術、ネットワークを生かして、都市問題や環境問題など地域の課題に対応するソリューション型の研究部門としての役割も期待している。現在のところ、こうした機能を果たせるまでには至っていないが、今後、産業・学術分野との連携のあり方について研究を進め、可能性を探っていきたいと考えている。

アートと環境の未来・山口
YCAM 10 周年記念祭

「アートと環境の未来・山口　YCAM10 周年記念祭」ロゴマーク

自治体名　山口県山口市

- 人　　口　194,023人
- 面　　積　1023.31km²
- 事 業 名　メディア芸術を活かした文化的価値創造発信事業
- 事業開始年度　平成15年度
- 事 業 主 体　山口市



連絡先

山口県山口市総合政策部文化政策課

TEL 083-934-2717／2718　FAX 083-934-2670

参考URL http://www.city.yamaguchi.lg.jp

徳島県　徳島市

LEDが魅せるまち・とくしま推進事業

市区町村の概要

徳島市は、徳島県の東部に位置し、吉野川とその支流がつくり育てた三角州に発達した人口約26万人の県都であり、温暖な気候と、豊かな土壌に加えて、阿波おどり、人形浄瑠璃、藍染めなど、徳島の風土と歴史が育んだ個性的な文化を有している。

徳島＝LED

徳島市は、日本が誇る大河吉野川をはじめ、大小138の河川が市内を縦横に流れ、緑のランドマークである眉山、また、中心市街地には城山を中心として新町川・助任川に囲まれたひょうたん島があるなど、他都市に類をみない、まさに「水」とともに発展してきた「まち」である。そこで、本市では「ひょうたん島水と緑のネットワーク構想」に基づき、ひょうたん島を中心とする水を生かしたまちづくりを進めてきており、これまで整備してきた水と緑の魅力に、地域資源であるLEDの「光」の要素を加えた、新たな魅力を持つ「水都・とくしま」の創造を目指して、芸術文化の力を結集し、LED技術とアートが出逢う「徳島LEDアートフェスティバル2013」を3年に1度の芸術祭として開催する。

これにより、「徳島＝LED」というブランドイメージを全国にPRをすることで、市内に事業所を有するLED関連企業数の増加及び地域経済の活性化を図る。

アートフェスティバル

徳島市の中心部であるひょうたん島を舞台に、国内外で活躍中の作家や一般公募による作品展示に加えて、ひょうたん島に架かる橋梁への景観整備を併せて実施し、水と緑に恵まれた徳島の街にLEDの光を加えた、新しい魅力をもつ「水都・とくしま」を創造するための芸術文化と最新のLED技術が出逢う芸術祭である。

「徳島LEDアートフェスティバル」を開催することは、徳島の水辺での新たな魅力づくりにつながり、にぎわいの創出、滞在型観光客の集客が図られるとともに、LED関連企業の集積など地域経済の活性化につながるものと考えられる。

徳島LEDアートフェスティバルは2010年に開催以降、トリエンナーレ形式（3年に1度）で開催することが決定している。次回は2013年開催で、間の2年間はプレイベントとして徳島LEDアートフェスティバル2013 HOP及びSTEPを開催した。

「HOP」では、アート作品の展示として、既に設置しているひょうたん島に架かる橋梁へのアート作品に加えて、国内外で活躍中の作家によるLEDアート作品を新たに10作品展示した。「STEP」では、「HOP」で展示した作品の他、新たなLEDアート作品も登場して、3日間国内外で活躍されている作家によるLEDアート作品が徳島の夜を彩り、2013への本番へ向けて大きくJUMPする計画である。

LEDは省電力、低発熱、長寿命、かつ水銀・鉛を使



「ひかり場」髙橋匡太



「虹のラクーン」たほりつこ


「SORS と MIZU」逢坂卓郎


「虹の雲」木村崇人


Dによるオペレッタ」ミシャ・クバル


「光の航跡」髙橋匡太

わない、環境の世紀にふさわしい第４世代の光源であり、今後巨大な市場が期待されている産業分野である。

徳島には、青色、白色LEDの商品化を世界で初めて行い、LEDの売り上げにおいて圧倒的なシェアを占めている世界最大のLEDメーカーの存在がある。

「LEDが魅せるまち・とくしま推進事業」の取り組みの中で、徳島LEDアートフェスティバルとLED景観整備は大きな要素を占めており、「徳島＝LED」のブランドイメージを全国に発信するためには非常に有効な手段であり、徳島を世界に誇るLEDの先進県とするためのイメージづくりに貢献している。

LED拠点施設の開設

徳島LEDアートフェスティバルは、「徳島＝LED」のブランドイメージを全国に発信するための世界に例を見ないイベントであり、有効な手段であるが、期間が限定されているため現時点では一過性の効果で終わってしまう可能性がある。今後は、通年で参加できるワークショップ等を子どもや市民、企業を対象に開催し、作家等といつでも交流ができる拠点施設を設置することにより、年間を通して県外から訪れる観光客等においても、「徳島＝LED」のイメージを発信する必要がある。

そこで、「徳島LEDアートフェスティバル2013 STEP」の参加作家である椿昇氏と協力を得て、氏が提案するLEDの裾野を広げるためのLEDの拠点施設「TOKUSHIMA LED TERAKOYA」を開設する。

自治体名　徳島県徳島市

- 人　　口　262,919人
- 面　　積　191.62km^2
- 事　業　名　LEDが魅せるまち・とくしま推進事業
- 事業開始年度　平成22年度
- 事 業 主 体　徳島LEDアートフェスティバル実行委員会



連絡先

徳島県徳島市経済部経済政策課

TEL 088-621-5225　FAX 088-621-5196

参考URL http://tok-led-artfest.net

香川県　小豆島町

小豆島　石の魅力創造プロジェクト
～地球の恵み　海と大地と人々が創造した瀬戸内の石文化～

市区町村の概要

小豆島町は、瀬戸内海国立公園に浮かぶ小豆島の中央から東に位置する、海と山の美しい自然に恵まれた町です。日本におけるオリーブ発祥の地として、また、二十四の瞳映画村、寒霞渓、農村歌舞伎舞台など数多くの観光スポットを有しています。産業では、醤油、佃煮、素麺などの食品産業、大坂城築城からの歴史を有する石材業、オリーブ製品の製造業も盛んです。

島石の魅力を世界へ

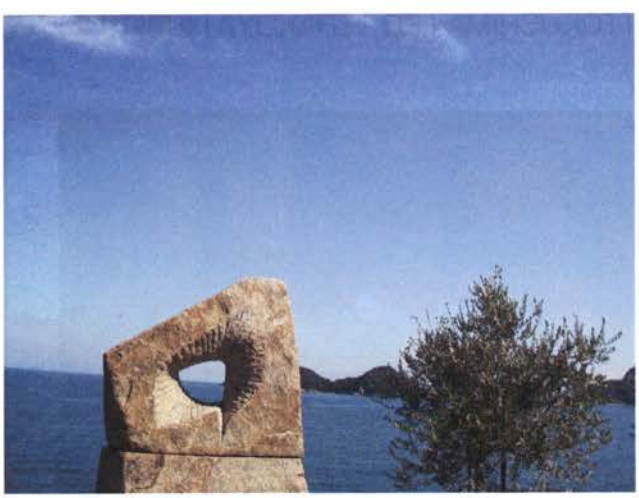
瀬戸内海の島々は、良質の花崗岩に恵まれ古くから石の産業が盛んな地域です。とりわけ、徳川大坂城修築の際には、戦国大名たちが瀬戸の島々から数多くの石垣石を競い合って大坂へ搬出するなど、瀬戸内の島石は、貴重な歴史文化遺産にもなっています。中でも小豆島にある「岩谷石垣石切丁場跡」は、石切丁場跡として日本で唯一の国指定史跡になっています。このほか、近年では、昭和43年に我が国で最初に「日本青年彫刻家シンポジウム」が開催され、平成３年には、石彫シンポジウムの父と称されるオーストリアの作家、カール・プランテル氏等を招聘しての「小豆島国際石彫シンポジウム」が開催されるなど、島石の素材と現代アートが融合した芸術活動が展開されてきました。今では、島の東海岸を中心に、100基を超える「石彫作品」が町内各所に設置され、町中が石彫美術館になっています。このように、小豆島には素晴らしい石の文化があるにも関わらず、これまではその魅力について



世界で初めて石彫シンポジウムを開催したカール・プランテルさんの作品



瀬戸内海を見渡すパラダイスゲート



瀬戸の播磨灘を見とおす石彫



震災復興支援で東北に贈られた石彫

十分な情報発信が出来ていませんでした。このため、もう一度、島石の魅力を見つめ直し、地域住民はもちろんの事、世界にむけてその価値を発信する取り組みが、石の魅力創造プロジェクトであります。

小豆島　石の文化シンポジウム

大坂城の石垣普請と瀬戸内の石切丁場をテーマに、「小豆島　石の歴史シンポジウム」を平成23年に開催。シンポジウムでは、歴史文化遺産としての価値を検証したほか、瀬戸内の石切丁場跡をめぐる「石の里クルージング」を初めて開催し、日本経済新聞をはじめとするさまざまなメディアで特集されるなど、高い評価を受けていました。本年度は、人々の生活と石の文化をテーマに、「小豆島　石の文化シンポジウム」を今秋に開催します。池田の桟敷、中山の棚田の石垣、名勝寒霞渓等をめぐる「ジオサイト探訪」の開催や瀬戸内国際芸術祭のプレイベントとして、島と海の復権を目指し、瀬戸内の石の文化に磨きをかけるものです。

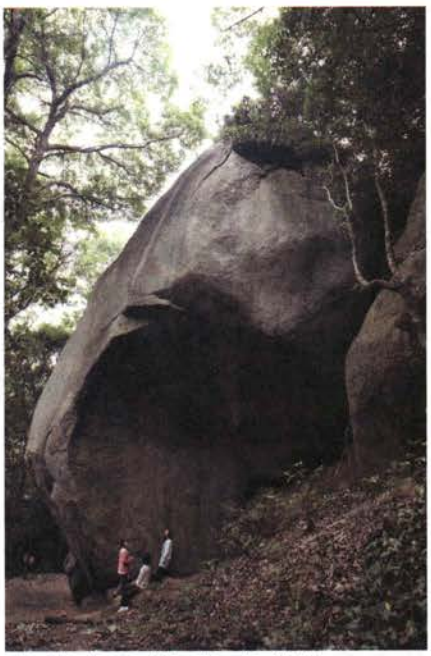


石のシンポジウム _A4 チラシ

石の文化を次世代へ

石切丁場跡地としては、我が国唯一の国指定史跡でありながら、これまで学術的に深堀りした研究がなされていませんでした。特に瀬戸内の島々から大坂城へ、いかにして巨石が運ばれたのか謎のベールに包まれており、その解明に向けた取り組みが待望視されています。


オブジェに見間違うほど美しい大坂城石垣の残石（豆腐石）


大坂城石垣の母岩である大天狗岩

自治体名　香川県小豆島町

- 人　　口　15,783人
- 面　　積　95.63km^2
- 事 業 名　小豆島　石の魅力創造プロジェクト
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　小豆島町

連絡先

香川県小豆島町企画財政課

TEL 0879-75-1800　FAX 0879-75-1500

参考URL http://www.town.shodoshima.lg.jp



香川県　直島町

ベネッセアートサイト直島による「家プロジェクト」事業
～「民」主導による現代アート活動～

市区町村の概要

瀬戸内海に浮かぶ周囲約16km、人口約3,200人の小さな島で、瀬戸内特有の温暖な気候である。金・銀・銅の製錬業が島の主力産業であり、金については東洋トップクラスの出荷額を誇る。また、漁業ではハマチ、海苔などの養殖業が盛んである。

事業に至った経緯

ベネッセアートサイト直島は、平成4年より約20年間直島本島の南部エリアにおいて様々な現代アート活動（「ベネッセハウス」「地中美術館」「リ・ウファン美術館」の建設や作品の恒久展示など）を展開してきた。中でも活動の中心となるのが、他所からアーティストを招いて直島に滞在してもらい、そこで「直島にしかない作品」を制作してもらうコミッションワーク形式によるサイトスペシフィック・ワーク（日本の原風景ともいえる瀬戸内の自然や地域固有の生活文化の中にアート作品や建築などを置くことによって特別な空間・場所を創造していくもの）を主力に展開してきた。その結果、ここでは島の風景・景観にマッチした様々な現代アート作品が屋内外各所に恒久展示されており、我々の目を楽しませてくれているエリアとなっている。

そのサイトスペシフィック・ワークの発展形・集大成として、これまでアート活動を展開してきた南部エリアから、島の古くからの歴史ある生活圏である集落＝本村地区に場所を移し、そこに点在していた空き家などを改修・復元し、建物丸ごとそのままをアート作品にしてしまう試み＝「家プロジェクト」を平成10年度より開始することとなった。



家プロジェクト第1弾「角屋」（着手前）の様子



同「角屋」（完成後）の様子

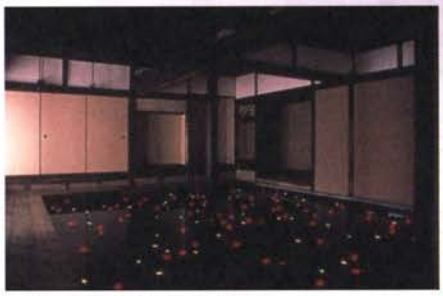
取組の内容と実施成果

「アート」「建築」そして「地域」の融合を目的に、直島の古くから歴史のある集落「本村地区」に点在する空き家などを改修・修復し、他所からアーティストを招いてコミッションワーク形式による「サイトスペシフィック・ワーク（＝直島でしか創ることのできない作品）」をその建物に半永久的に展示させる「家プロジェクト」事業を展開。

その第1弾として平成10年に制作した作品「角屋」を皮切りに年々作品を増やし、現在までに7作品が直島・本村地区の中に存在し、それぞれ鑑賞することができる。

作品の中には制作の過程で町民が参加したものもあり、例えば、先の「角屋」は、改装された古民家の内部にプールが広がり、その中にLEDカウンターがまるで小宇宙のように散りばめられている。このカウンターのスピードは、一つ一つが町民の手によって設定されたものであり「アート」と「地域」がうまく融合された契機となっている。というのは、アート活動開始当初は、地域住民に内容を理解してもらうのに時間がかかったが、作品制作に町民自らが参加することによってアートに対する理解がより深まり、次の作品制作においても協力体制が得られることになったからである。

「家プロジェクト」事業の効果として先ず挙げられるのが、地域の活力低下の元凶となってしまう空き家の有効活用ができたことである。これにより観光客は、船で島を訪れ、アートのみでなく、集落を歩くことによって、ここでしか味わえ


同「角屋」（内部の様子）


「角屋」の制作には町民が参加した


本村地区に「屋号表札」を整備

ない非日常的な体験をすることができる。おかげで度々作品（＝地域）を観に訪れるリピーターも多く、交流人口が年々右肩上がりに増えることに繋がった。

観光客が増えることによって、その受け皿として新たに民宿やカフェ、食事ができる店舗などが増えている。また、地域住民（特に高齢者）と来島者（若者）などとの交流が生まれ、それが住民の活力になっていることや、外部から本村地区が評価されることによって自分たちが住んでいる地域に対して誇りが生まれてきており、自主的に路地の清掃を行ったり、玄関の軒先に「のれん」を掲げるお宅も増えてきており、集落の景観向上にも大いに貢献されている。

行政主導でなく民間主導である「家プロジェクト」の展開を契機に、行政も本村地区を「景観重点地区」に指定したり、住民に親しまれている「屋号」を整備するなど、新たに「開発」するのではなく古くから地域に在るものを「活かす」まちづくりへと方向転換している。


本村地区の住宅の軒先に掲げられた「のれん」

課題と今後の展望

集落内に新たにできたカフェなどの店舗の中には、本村地区固有の景観に配慮していないものも増えてきており、まちなみの良さが失われつつあるので、何らかの規制が必要となっている。現在、地域内での新築・改築などには町に届出をしてもらうような仕組み作りを検討中である。また、マナーの悪い来島者による歩きタバコやゴミ等のポイ捨てなども問題となっており、その規制をする取り組みも必要となっており、「直島町環境美化条例（仮称）」の策定を検討中である。

この事業によって交流人口の増加にはなっているが、定住化や人口増加には繋がっていないのが現状である。「直島に住みたいのだが…」という問い合わせも多数あるのだが、島内には直ぐに住むことができる住宅がなく、今後、定住化促進住宅の供給も検討する必要がある。

自治体名　香川県直島町

- 人　　口　3,223人
- 面　　積　14.23km^2
- 事 業 名　ベネッセアートサイト直島による「家プロジェクト」事業
- 事業開始年度　平成10年度
- 事 業 主 体　ベネッセアートサイト直島



連絡先

香川県直島町総務課企画電算室

TEL 087-892-2020　FAX 087-892-3888

参考URL http://www.benesse-artsite.jp/

愛媛県　西条市

「水」と「芸術文化」のまちづくり

市区町村の概要

西条市は、西日本最高峰の石鎚山と瀬戸内海に囲まれた、温暖で風光明媚なところである。四国一を誇る経営耕地を持ち、多品目の農産物を産出するとともに、臨海部を中心に多くの製造企業が立地し、四国屈指の工業地帯を形成している。

豊かな水資源と「うちぬき」

西条市では、河川の表流水が地下に伏流して、全国的にもまれな被圧地下水の自噴地帯が広範囲にわたり形成されており、その自噴水や自噴井は「うちぬき」と呼ばれ、古くから市民に親しまれるとともに、多くの農水産物を育んできた。こうした豊かな水資源に恵まれた環境を背景に、昭和60年に環境庁（現環境省）から「うちぬき」が「名水百選」に、また、平成7年には国土庁（現国土交通省）から、当市は「水の郷」に認定されている。特に市内中心部の新町川水系は、「アクアトピア水系」として快適な親水空間が創出されている。

NPO法人うちぬき21プロジェクトは、これらの地域資源を活かし、自然と文化の高揚に関する事業を行い、ふるさとづくりを行うことによって公益に寄与することを目的として、平成12年に設立された（平成15年にNPO法人化）。市民が誇れる「水と芸術文化のまちづくり」をテーマに、「西条のうちぬき保全と環境美化」、「芸術文化の創造と環境づくり」、「市民が誇れる水景観づくり」を基本方針に活動を実施し、様々なイベントを通じて、住民が一体となって地域の魅力向上に努めている。

多彩なイベント開催

「水」と「芸術文化」をメインテーマに掲げ、うちぬき21プロジェクトは水景観づくりや環境美化活動を行っているほか、数多くの魅力あるイベントを開催している。幅広い世代の人々がこれらに参加することによって、少しでも多くの住民に対して、水景観や芸術文化への意識を高めてもらうことを目指している。

毎年開催しているイベントで、多くの方が参加しているものとして、「うちぬきウォークラリー」と「アートフェスティバル」の二つが挙げられる。一つ目の「うちぬきウォークラリー」は、前述の「アクアトピア水系」を中心に市内を徒歩で巡るものであり、5km、10km、史跡めぐり、環境・建築などのコース設定をし、参加者が選択できるようにするとともに、スタンプラリーも実施している。また、コース上に石彫作品があるほか、絵手紙・スケッチ教室などのイベントも同時開催しており、芸術文化の香りを味わうことができる。毎年好評を得ており、市内のみならず市外からも数多くの参加者が訪れる。

二つ目の「アートフェスティバル」は、西条市丹原文化会館を会場として、一日中様々なアートに触れながら過ごすことのできるイベントである。ダンボールアートやタオル生地アートを実際に制作したり、趣向を凝らした各種ワークショップに参加したり、多様な作品展示を見たりすることができる。また、和太鼓演奏やダンスのステージ発表なども行われる。子どもから大人まで、アートを気軽に体験できるイベントとして、大勢の家族連れで賑わっている。

この「アートフェスティバル」の開催日は、毎年「石


アートフェスティバル（布アート）


アートフェスティバル（石彫教室）


アクアトピア水系（うちぬきウォークラリー）


うちぬき21講演会（防災を学習）


石彫公開制作


うちぬきウォークラリー
（地元生徒さんも参加）


うちぬき美術館（田んぼにアート空間の創出）

彫公開制作」の期間中に設定されている。「石彫公開制作」とは何かというと、石彫作家を世界中から公募し、約1ヵ月にわたって西条市内にて「水と芸術文化」をテーマに公開制作するというものである。「アートフェスティバル」においても、実際に制作している様子を間近に見ることができる。完成した作品は各施設に寄贈設置され、市民が日常的にアートに接する機会を生み出している。さらに、各作品を自転車で巡るサイクリングマップの作成も行っている。

このほかにも、これまで「うちぬき美術館の造営」、「水辺のコンサート」、「親子石彫教室」など数多くのイベントを通じて、多くの市民に感動と喜びを与え、市民から活動が認められるに至っている。現在は、活動を通じて築き上げた絆により、地域の魅力向上、環境の維持のために「アクトピア水系」の清掃や、「88クリーンウォーク四国」などのボランティア活動にも積極的に参加し、住民からも多くの感謝の言葉をもらっている。

このような活動の結果、うちぬき21プロジェクトは、平成23年度の「手づくり郷土賞」（国土交通大臣表彰）に選ばれた。これまで多彩な事業活動に取り組んできたことが評価され、受賞につながったと考えている。

組織の拡大と魅力の発信

今後も引き続き「水と芸術文化のまちづくり」を目指していく上で、取り組みの強化と組織の拡大を図っていくことが重要である。例えば、通常総会時に、一般の方も参加することができる講演会を開催しているが、その際に、外部講師を招き、身近な話題として興味を持ちやすい内容にすることで、組織拡大のきっかけになるようにと考えている。

また、地域の魅力を発信するために、平成23年度の「ふるさとCM大賞えひめ」に応募し、西条市の「うちぬき」の水をアピールした。参加賞ではあったが、このCMは30秒間で5回テレビ放映された。今後も、様々な機会を通じて魅力ある西条を発信していきたい。

自治体名　愛媛県西条市

- 人　　口　113,845人（平成24年3月31日現在）
- 面　　積　509.07km²
- 事 業 名　「水」と「芸術文化」のまちづくり
- 事業開始年度　平成12年度
- 事 業 主 体　NPO法人うちぬき21プロジェクト



連絡先

愛媛県西条市企画情報部戦略企画課
TEL 0897-52-1707　FAX 0897-52-1200
参考URL http://www.uchinuki21.jp/

高知県　高知市

アール・ブリュット美術館運営事業
～高知の歴史と刻む場所で、高知のこれからを刻む文化を育む～

市区町村の概要

高知県の中央部に位置する高知市は、太平洋に開かれた自然豊かな地に土佐藩の城下町として発展した四国太平洋側の中核都市である。「みんなで育む文化の力」を基本理念として文化振興の考え方や進め方を示した高知市文化振興ビジョンを策定している。

藁工ミュージアム

障がいのある方や、専門の美術教育を受けることなく心のおもむくままに表現者として制作活動を行っている人々により制作された作品は「アール・ブリュット(生(き)の芸術)」や「アウトサイダー・アート」と称され、近年欧米で注目を集めていた。2010年にパリ市立アル・サン・ピエール美術館にて「アール・ブリュット・ジャポネ」が開催され、日本のアール・ブリュット作家63名約800点の作品が紹介されると、好評を博すとともに日本人のアール・ブリュット作家・作品が脚光を浴びた。

これを受け、日本財団の支援によるアール・ブリュット美術館全国10カ所設置プロジェクトがボーダレスアート・ミュージアムNO-MAを中心に始動、藁工ミュージアムの運営母体である特定非営利活動法人ワークスみらい高知がプロジェクト入りし、開館の準備が進められた。

「藁工ミュージアム」は、高知県内の美術館の中で唯一、アール・ブリュット／アウトサイダー・アートを中心に調査、公開、保存する美術館であるとともに、障がいのある方の就労する場ともなっている。また、ミュージアムを中心に、高知の食材をふんだんに使った飲食店「土佐バル」と多目的ホール「蛸蔵(たこぐら)」が隣接し、連携して運営を行っている。

専門的かつアートが身近な場所

【目的】

アール・ブリュット／アウトサイダー・アートの作品価値向上、調査、公開、作品散逸防止のため。また、誰もが気軽にアートに触れあえる場となるとともに、ジャンルに捉われず新たな文化情報を発信していくため。また、障がい者の就労の場所としても運営する。

【内容】

ジャンルを越えた展覧会の開催、五感に訴えかける体験型イベントや講演会、映画上映会、音楽・演劇などの公演の開催。アール・ブリュット／アウトサイダー・アートの作品調査、収集保存。病院施設で行われる絵画プログラムへの講師派遣やワークショップの開催。障がい者の就労支援も行う。

【実施状況】

2011年12月23日～12月25日

「オープニングイベント」(※音楽会、映画上映会・トークライブ、講演会など多数開催)

2011年12月23日～2012年2月19日

「パリに渡ったニッポンのアール・ブリュット」展／ワークショップ「影であそぼうピン・ポン・パン♪」／映画「人生、ここにあり」上映会

2012年3月3日～3月25日

「トマトアートフェスタ」展／ワークショップ「デハラユキノリとお野菜キャラクターを作ろう(粘土編)」「マンガ×トマト－トマトを食べてその感想をマンガで表現しよう！－」／イベント「おいしいトマトを食べよう！トマト即売会」

2012年4月1日～5月20日

「藁工倉庫　renovation project～写真と映像でと


アートゾーン藁工倉庫



ショップkiosk


西側倉庫群


「スピリットアート展のあゆみ～見て、感じる。～」展会場


「マンガ×トマトートマトを食べてその感想をマンガで表現しよう！－」ワークショップ


「パリに渡ったニッポンのアール・ブリュット」展会場


土佐バル

らえた美術館への100日間～」展／ワークショップ「職人さんと漆喰ボールを作ろう」「古民家を自転車で巡ろう」「映像パフォーマンスワークショップin藁工」「わらわら工作教室―ゴールデンウィークの特別おたのしみ工作教室」

2012年6月9日～7月16日

「スピリットアート展のあゆみ～プロローグ　見て、感じる。～」展／ワークショップ「お父さんといっしょ」「かきかきチョキチョキぺったぺた」／映画「まひるのほし」上映会、映画撮影監督田島征三氏トークショー

2012年7月21日～9月2日

「GO!GO!描きテツ!!」展／ワークショップ「paramodel joint factory：パラモデルジョイントファクトリー」「ダンテツ！ダンボールで作ってあそぼう～電車に線路にまちのいろいろ～」「街テツしよう♪電車ジオラマ教室」／映画「きかんしゃトーマス　みんなあつまれ！しゅっぱつしんこう」上映会

2012年9月22日～10月14日

「岡林美喜子個展～まなざしの先にあるもの～」展／イベント「藁工花火大会」「藁工倉庫のお月見会」

【成果及び今後期待される効果】

高知出身・在住のアール・ブリュット作家を発掘、紹介している。

公立の美術館ではできないような食を交えた展覧会やイベントを開催することで、アートを身近に感じてもらい、一般的な美術展には足を運ばないような新たな来館者層を創出し、年代やジャンルを超えた新たなコミュニケーションも創出している。新しい文化情報発信の場として県外からも多くの方に来ていただいている。また、あまり使われなくなっていた高知特有の建物を活用することにより、高知ならではの景観を遺すとともに、再生について考える場ともなっている。

資金安定と地域との連携

【事業継続において苦心した点、打開策、解決方法】

運営資金が不足しているため支援金・助成による資金の確保を試みているが、十分でない。また、地域の方により広く理解してもらい、さらなる支援を地域の方が自発的にしてくださるような仕組みを作ることが必要である。

【今後の展望】

隣接飲食店「土佐バル」と「蛸蔵」、西側倉庫群との連携をさらに深めるとともに、西側にある一文橋公園の活用や「地球33番地実行運営委員会」との連携を取っていくことにより、周辺一帯の地域の活性化を図り、まちづくり活動への展開を図っていく。

また、高知市文化振興プラザかるぽーとや高知県立美術館とも連携し、高知の文化振興に寄与することを期待している。

自治体名　高知県高知市

- 人　　口　340,806人
- 面　　積　309.22km^2
- 事 業 名　アール・ブリュット美術館運営事業
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　特定非営利活動法人　ワークスみらい高知

連絡先

高知県高知市総務部総合政策課

TEL 088-823-9407　FAX 088-823-9382

参考URL http://www.city.kochi.kochi.jp/soshiki/2/（高知市総合政策課HP）
http://warakoh.com/（アートゾーン藁工倉庫）



福岡県　田川市

後藤寺街並み美術館
～商店街から地域文化の発信とふれあいの街並み創出を～

市区町村の概要

福岡県田川市は、人口50,040人、面積54.52km^{2}の市である（平成24年４月現在）。かつては石炭産業が隆盛を極め、日本有数の「炭都」として知られていた。現在、炭鉱は閉山したが、本市が発祥の地とされる炭坑節をはじめ、二本煙突、伊田竪坑櫓、日本で始めて世界記憶遺産に登録された「山本作兵衛氏炭坑記録画・記録文書」など様々な炭坑遺産がある。

商店街活性化のために

後藤寺商店街アーケード内店舗で構成される「ごとうじ銀天街」では、商店街に賑わいを取り戻すことを常日頃から考え、毎月二十日に各店舗での特売や来客者へのふるまいを行う、「二十日市」を実施したり、後藤寺の古くからの花である、藤の花をイメージした統一した景観をアーケード内で作るため、藤棚・提灯・懸垂幕などを設置する事業を展開していた。

平成22年８月からさらなる取り組みとして、才能のある地元芸術家らに光を当てようと、商店街全体を美術館とし、商店街に回遊性を持たせる「後藤寺街並み美術館」構想を練っていた。そのような中、田川市と福岡県立大学が共同申請していた「山本作兵衛氏炭坑記録画・記録文書」が日本初の世界記憶遺産に登録（平成23年５月）され、作品を展示する田川市石炭・歴史博物館には市外からの観光客が急増した。この観光客を少しでも後藤寺商店街に足を向けさせることが出来ないかということを合わせて考慮した結果、第１弾として平成23年12月に「山本作兵衛氏レプリカ展」を開催することとなった。

継続が大きな力に

第１弾として開催する運びとなった「山本作兵衛氏レプリカ展」は、レプリカを所有している田川市が「ごとうじ銀天街」に貸し出すに当たって、世界記憶遺産に登録されたこともあり、劣化などを考え、有識者からは慎重に検討するようにとの意見があった。一方で、田川市としては「山本作兵衛氏炭坑記録画・記録文書」を広く活用し、市政の発展を行うこととしていたことから、貸し出す際の要綱を整備した上で貸し出しを決定した。なお、劣化を防ぐために、展示が可能な紫外線をカットするガラスケースでの店舗に限定した。作品を展示することとなった店主は、ただ展示するだけではなく、おもてなしの心を考え、店主自らが来客者へ絵の説明が出来るよう、田川市石炭・歴史博物館の学芸員を招いて学習会を開催し、万全の体制で開催当日に臨んだ。その結果、日本初の世界記憶遺産登録も相まって、期間中多数の来客者が訪れた。なお、来客者からは「世界に認められた絵を気軽に観賞出来て嬉しい。」などの声があり、順調な滑り出しとなった。

平成24年２月には第２弾として、元炭鉱員が自身の炭鉱での体験を基に和紙を使った柔らかい風合いの「炭鉱ちぎり絵展」を開催した。なお、作品を展示する店舗も１回目の18店舗から９店舗増え、27店舗となり、商店街の中でも広がりを見せている。平成24年４月には第３弾として端午の節句に合わせ、「見上げれば端午の街並み」と題し、アーケードの天井に武者絵の描いたのぼり旗と、こいのぼりを展示するとともに、開催初日には、花の苗100個及びゆで卵とアイスクリーム各50個を無料で振舞った。平成24年６月


第１回オープニングセレモニーでの作品をバックにした会長あいさつ


第１回レプリカ展での掲示風景


第２回炭鉱ちぎり絵展での掲示風景



第３回での鯉のぼりの説明文

には第４弾として、元炭鉱員が当時の炭鉱街での暮らしぶりを撮影した写真を展示する「筑豊田川思い出写真展」を開催するとととともに、開催初日には、あめ玉をハンカチでくるみ、てるてる坊主風に仕上げた「てるてるハンカチ」や、うどんなどを振舞った。

現在まで実施してきた成果としては、田川市が注目を集めている炭坑文化に焦点を合わせた企画や、時期にあわせた企画を実施することで、地域住民の関心を引くことに成功している。また、２ヵ月に１回（偶数月）と、定期的に開催していることもあり来客者からは「次はどのような企画で楽しませてくれますか。」などの声が多くあがり、徐々に「後藤寺街並み美術館」の取り組みが浸透している。

更なる発展を目指して

課題としては、現在回遊性を持たせるため、商店街全体に作品を展示しているが、年配者の方が多く利用される中、すべての作品を見るための移動が困難との意見があると言う。そこで「ごとうじ銀天街」が現在検討している案としては、商店街の空き店舗を活用して休憩スペースを設け、そこに作品を展示することで、移動距離を少なくする方策である。関係者の一人は、商店街は地域住民の憩いの場としての機能も持たせる必要があり、実現に向け早急に実施したいと語っている。

今後の展望としては、地元地区に小・中・高校があるが、児童・生徒やその両親及び祖父母を含めて、日頃から商店街を利用しており、地域から愛される商店街づくり及び日頃の利用の感謝を込めて、児童・生徒の書道や美術の作品を展示することも検討している。

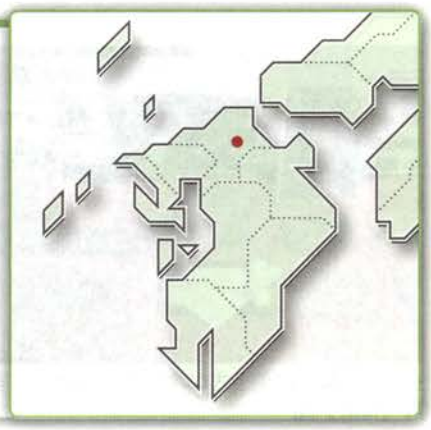

第３回での武者絵展示風景


第３回での鯉のぼり展示風景

自治体名　福岡県田川市

- 人　　口　50,040人
- 面　　積　54.52km²
- 事　業　名　後藤寺街並み美術館
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　ごとうじ銀天街

連絡先
福岡県田川市産業振興部商工観光課
TEL 0947-44-2000（内線311）　FAX 0947-46-0124



佐賀県　鹿島市

まちなか博物館
～商店街に眠るお宝でまちと地域の魅力を再発見～

市区町村の概要

佐賀県西南部に位置する鹿島市は、豊かな自然に育まれた人口約3万1千人の地方都市である。日本3大稲荷の1つで年間300万人が訪れる祐徳稲荷神社や、有明海の広大な干潟を活かしたガタリンピックなどで知られ、近年では、世界も認める良質な日本酒の産地としても、高い注目を集めている。

来街と入店のきっかけづくり

肥前鹿島駅前に広がる5つの商店街で構成される当市の中心商店街は、江戸時代の旧長崎街道沿いに発展した町並みで、昭和50年代まで近隣地域一帯の商業の中心として賑わいをみせていた。しかしその後、商店街の核をなしていたショッピングセンターの撤退や集客力の低下など、様々な要因で年々通行量は減少。空き店舗も年々増加傾向にある。

また、事業主の高齢化や、まちづくりの原動力となる後継者やリーダーの不足、さらには商店街同士の連携の希薄さが内在しているなど、商店街がもつコミュニティ機能も低調である。この点も、衰退が続く商店街にあって、活性化の機運がなかなか高まらない要因ともなっている。

このような中、地域に根ざした商店街として、まず第1に多くの人に知ってもらうため、来街のきっかけづくり、入店の仕掛けづくりを模索した。

そこで、群馬県前橋市や、愛知県豊田市の商店街における取り組みを参考に、商店や商店街が持つ隠れた魅力や素材を掘り起こし、来街者がそれらを再発見しながら、楽しんで買い物ができる雰囲気づくりの仕掛けとして、商工会議所が主催し、商店街の協力のもと平成23年度から「まちなか博物館」事業に取り組んでいる。

マップ片手に街をぶらり散策

「まちなか博物館」の事業概要は、商店や事業所の一画を「ミニ博物館」とし、これらのミニ博物館が集まった商店街全体を大きな博物館に見立ててPRし、来街者に披露する企画である。これにより、買い物や食事など様々な目的で商店街を訪れる人が、商店街の新たな一面や魅力に触れながら、楽しんで散策できる雰囲気づくりを行い、賑わいの創出につなげる事が目的である。

博物館として展示する品は、普段お目にかかれないような「お宝」で、老舗の歴史や伝統を伝える資料、書画・骨董や、店主こだわりの趣味のコレクションなど、ジャンルも問わず様々である。本事業の特徴は、展示スペースの大小や展示内容に関わらず、商店にある既存の素材を活用し、平常の店舗営業を行いながら気軽に参画できる点にある。

今回はじめて本事業に取り組むに当たって、商店街や関係団体と事業内容や手法を共有する必要があったため、平成23年11月に小規模のプレイベントを試験的に実施。翌3月には規模を拡大して3週間の期間を設け本格的に事業を展開した。プレイベントでは10箇所だったミニ博物館も、3月には協力店が大幅に増え26箇所がミニ博物館として参画した。

これらのミニ博物館の中には、商店街の空き店舗を



らくがん製造に使う古い木型や商店街の古写真（和菓子店）



昭和40年代に使用していた着物の染め見本の反物（呉服店）



昭和のフィルムカメラコレクション200台・非売品（カメラ店）

活用する形で、市内の芸術団体による美術展覧会や、趣味のサークルによる作品展を開催するとともに、商店街内にある病院の協力により、貴重な古い医学関連の資料を特別に一般公開する企画も実現。さらに、教育委員会や生涯学習センターとの共同事業として、小・中学生対象のクイズラリー、ガイド付きのまち歩きツアーも実施した。なお、散策の利便性と回遊性を高めるためにマップを作成しスタンプラリーにも取り組んだ。

事業成果としては、同時期に開催された商店街や市内各地のイベントと連携しPRや集客の面で相乗効果を図ったため、従来商店街に縁遠かった人への誘客につながった。アンケート調査によれば、１人平均で約８箇所を見学して回り、７割を超える人がイベント内容に「満足」と答えている。特に、普段馴染みの無い店に入店するきっかけとなり、「あらためて商店街の魅力の新発見・再発見ができた」、「展示品を通じて店主との対話に花が咲いた」、という意見も多く、好評を得ている。また、マスコミにも特徴ある商店街活性化の活動として幾度か取り上げられた。

これにより、商店街の新たな魅力発掘と発信による、賑わい創出という面で、一定の成果を見ることができた。

事業の定着をめざして

今年２年目を迎える本事業は、平成25年度までは県・市の補助金を活用した運営を予定している。事業の継続的な発展と商店街による自主運営のために、財源確保はもとより、コーディネーターとなる人材育成が課題である。

前述のように本事業自体は、あくまでも商店街への来街と入店を促すきっかけづくりの一つの手法で、事業単体では集客能力が決して十分とはいえないのも事実である。

このため、商店街で実施されるさまざまな伝統行事や、イベントとコラボレーションすることで、PR・集客面での相乗効果を図る必要がある。当然、売り出し企画等とも連動する事で店の売り上げにつなげなくてはいけない。

さらに、展示内容のマンネリ化を防ぐためにも、新たな魅力の発見と掘り起こしは不可欠であるし、外部のサポーターと連携を深め、商店街をお宝や作品発表の舞台として活用してもらう事も今後の事業発展の鍵になるものと思われる。

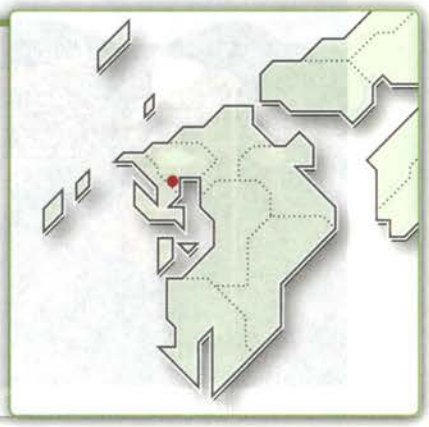

古民家ギャラリーに展示された絵画や手芸作品に見入る人ひと（フラワーショップ）


空き店舗を活用した美術人協会による展覧会　ギャラリートークも実施


市内小中学生によるクイズラリー（文房具店）

自治体名　佐賀県鹿島市

- 人　　口　31,378人
- 面　　積　112.1km²
- 事 業 名　まちなか博物館
- 事業開始年度　平成23年度
- 事 業 主 体　鹿島商工会議所・鹿島市中心商店街連合会・鹿島市



連絡先

佐賀県鹿島市産業部商工観光課
TEL 0954-63-3412　FAX 0954-63-2313

長崎県　対馬市

対馬アートファンタジア事業
～場を繋ぐ－物を繋ぐ－人を繋ぐ－時を繋ぐ～

市区町村の概要

韓国まで49.5kmに位置する対馬。面積の約９割は山林。複雑な入江が続く海岸線は915kmにも及ぶ。古来より大陸との文化の中継地点として重要な役割を果たしてきた対馬は、日本文化のルーツが数多く残る国境の島である。

文化の十字路　対馬

対馬市は、平成23年度に最後の朝鮮通信使が来日(1811年)して200周年となる節目の年を迎えた。『朝鮮通信使』や『倭館』など対馬の歴史は、今日の日韓交流の礎として注目されている。この節目の年に、文化交流の十字路として歴史的地勢を有する対馬の役割を見直す時期として、諸外国との文化交流を現代アートを介してリバイバル。あわせて地域振興を図る取り組みとして、対馬アートファンタジア事業をスタートした。

対馬市は韓国まで地理的に非常に近く、歴史的にも深い関わりがある。現在でも、学生同士のホームステイなどの交流や、市の３大イベントとして『厳原港まつり対馬アリラン祭』『対馬ちんぐ音楽祭』『国境マラソンin対馬』を実施しており、韓国との交流の機会は多い。中でも『対馬ちんぐ音楽祭』は音楽、『国境マラソンin対馬』はスポーツを介した交流イベントとして定着している。今回、芸術の分野でも賑わいをつくりだすことで、対馬市の一層の活性化と交流人口の拡大を目指している。

アートに触れる街歩き

対馬アートファンタジアキックオフイベントは、平成23年度、対馬市で行われた『最後の朝鮮通信使来日200周年記念イベント』の時期にあわせてスタートした。“場を繋ぐ－物を繋ぐ－人を繋ぐ－時を繋ぐ”をコンセプトとし、新しく多様な文化交流を促進させるという『対馬アートファンタジア構想』のもと、平成25年度までの３ヵ年事業として行われる。


朝鮮通信使易地聘礼200周年記念事業


対馬アートファンタジア2012オープニングセレモニー


2012年に新たな展示会場となった峰町木坂御前浜の藻小屋


対馬に自生する「かずら」を利用した作品



対馬アートファンタジア街歩きマップ

平成23年度の取組みとしては、朝鮮通信使が寄港したゆかりの地、広島県鞆ノ浦にある広島市立大学芸術学科のアーティストたちが参加し、対馬市役所周辺（対馬市厳原町内）の数ヶ所に作品を展示。展示場所を掲載した「街歩きマップ」を作成し、訪れる人が街歩きをしながらアートを身近に感じられるようにした。ここ数年、対馬には韓国人観光客等が多数訪れており、街歩きをしている姿をよく見かける。これらの観光客等も楽しめるよう、展示された作品を鑑賞するコースを設置したことにより、街中が賑わいをみせたのはこの事業の成果だと思われる。

対馬市ではアートに触れられる既存施設等がなく、街中にアート作品を展示するという新たな取り組みの結果、この事業の目的である“文化”と“観光”の連携を図ることができた。

また、24年度は、対馬市の中央部に位置する峰町木坂地区の御前浜にも主となる展示会場を開設。景観と現代アートの融合を試みた。さらに、韓国、メキシコのアーティストも参加し、国際性の豊穣を試みている。

その他、市内の高校生を対象とした交流ワークショップを行い、アーティストと市民の交流から生まれた作品も展示した。これにより現代アートを活用したまちづくりについて、興味や関心を持ってもらうよいきっかけになった。


対馬高校国際文化交流コースの生徒と実施したワークショップ

地域との協働を目指して

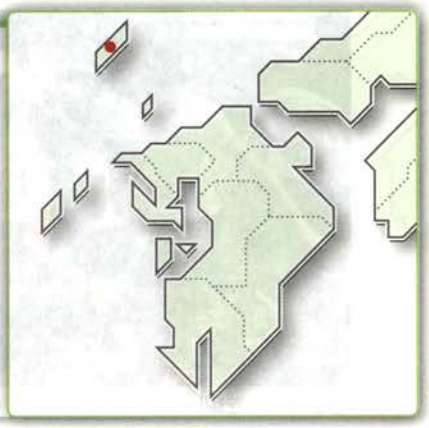
平成23年度は小学生、24年度は高校生を対象とし、アートを介した交流ワークショップを行った。事業の内容やイベントについて、対馬市ホームページや市内CATVなどで周知はしているが、市民の認知度はまだ低く、多くの市民の理解が得られているかといえば不十分である。

事業の最終年度となる平成25年度は、関係団体への早期の周知、市民とアーティストの交流イベントの実施、旅行会社とタイアップしたアート鑑賞ツアーの造成などを通じて、市内外に関わらず、更なる認知度の向上を図っていく。

また『対馬アートファンタジア構想』をもとに、対馬特有の歴史、文化交流を現代アートで表現。これらを通じて、街並みの賑わいや交流人口の拡大を目指し、他にはない対馬独自の地域振興を図っていきたい。

自治体名　長崎県対馬市

- 人　口　34,367人
- 面　積　708.89km²
- 事業名　対馬アートファンタジア事業
- 事業開始年度　平成23年度
- 事業主体　対馬市



連絡先

長崎県対馬市地域再生推進本部

TEL 0920-53-6111　FAX 0920-53-6112

参考URL http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/sightseeing/cat74/artfantasia_index.html

熊本県　津奈木町

住民参画型　現代美術プロジェクト／アートプロジェクト
～アートをツールに地域資源を再評価～

市区町村の概要

熊本県南部に位置し八代海に面していることから温暖な気候を利用した柑橘栽培が盛んで特産品にはデコポンなどがある。昭和59年から推進してきた「緑と彫刻のある町づくり」の集大成として平成13年につなぎ美術館が開館した。

美術は資源発見のツール

つなぎ美術館の来館者にアンケートを実施したところ町立であるにもかかわらず住民による利用が少なかったため何らかの改善策が必要となった。そもそも津奈木町のような一次産業を中心とする地域では都市部に比べて娯楽としての美術は馴染みが薄く、関心を寄せる住民は限られている。地域の文化系町民講座や子供たちの作品を展示すると住民の利用率は上がるが、これを頻繁に行うことで美術館本来の機能が低下し都市部から訪れる美術ファンの足が遠のく事態も避けなければならなかった。そこで美術館本来の機能を維持しながら住民の美術館に対する関心を高めるために、現代美術を地域社会における身近なツールのひとつと位置づけ、住民が現代美術を通じて地域の日常や見過ごされてきた資源と向き合う機会を提供できるプロジェクトを立案することになった。美術に関心を寄せる住民が圧倒的に少ない地域で美術を身近なツールとして機能させるためには、従来のように美術館がワークショップなどを企画し参加者を募るのではなく、住民が目的を理解したうえで能動的に企画そのもに携わることが必要であった。したがって住民による利用率向上を目的に立案にとりかかったこのプロジェクトであるが、まずは社会教育事業の原点に立ち戻り、人材の育成に力を注ぐことになった。

住民の参画にこだわる

普段は美術とほとんど縁のない地域活性化団体や婦人会など町内を拠点に活動する諸団体のメンバーを中心とした実行委員会を編成し、そこでプロジェクトで実施するワークショップの内容をアーティストとともに企画することにより住民の参画を図ってきた。平成20年度から平成23年度までは「住民参画型現代美術プロジェクト」の名称で年度毎に異なるアーティストをファシリテーターとして招聘し、テーマに沿ったタイトルを付けて実施した。５年目となる平成24年度は熊本県立劇場との協同事業による美術とダンスを組み合わせたプロジェクトのため「住民参画型アートプロジェクト」と名称を変更し、タイトルを「TSUNAGIハート！アート！パラダイス！」として取り組んだ。ファシリテーターには熊本市在住のグラフィックデザイナーでありアーティストでもある松永壮と東京都在住で舞踊家の森下真樹を起用した。４月には実行委員会による企画会議を開催し両名と実行委員で８か月に及ぶワークショップに関するアイデアを検討した。その結果、森下真樹は今回のプロジェクトのために津奈木町の自称オヤジたちが結成したTSUNAGIオヤジダンサーズを４期のワークショップで指導し12月の舞台公演を目指すことになった。また、松永壮は一般参加者とともに半年をかけて12月の舞台を飾る大漁旗を制作することになった。TSUNAGIオヤジダン



地域の陶土を焼いて未来の町を制作（H22）



閉校となった小学校を活用（H23）



4月の企画会議（H24）


松永壮展 Parallel（H24）


完成した大漁旗の一部（H24）


森下真樹と TSUNAGI オヤジダンサーズ（H24）

サーズのメンバーを募集したところ予想以上に早く定員に達したためワークショップを前倒しで実施した。大漁旗制作ワークショップは「ハートになびけ！大漁旗」と題して「其ノ壱」から「其ノ伍」まで計５回実施し、町内はもとより県外などから毎回30人前後の参加者があった。９月から11月にかけては、つなぎ美術館を会場に松永壮にとって５年ぶりの個展となる「松永壮展Parallel」を開催し津奈木町での活動からモチベーションが生じた作品など新作56点を展示した。また、松永壮は津奈木中学校で公開授業を、森下真樹は津奈木幼稚園と津奈木小学校でワークショップを実施した。さらに、両名と住民の参加により町内の名所や特産品を紹介するプロモーションビデオ「津奈木うずうず音頭」の制作を行った。この５年間で住民のアートプロジェクトに対する関心は確実に高まってきており一般参加者はもとより実行委員やスタッフとしての参加希望者も増加している。地域を拠点に活動する諸団体との連携により地域全体の活性化にも貢献している。

課題と展望

社会教育事業の一環として限られた人員と予算で実施しているため広報活動が手薄になりがちで、メディアで頻繁に取り上げられる割には地域外への周知が行き届かないなど課題は少なくない。プロジェクトは秋の展覧会とも連動しており集客力を強化するため予算の配分と人員の配置を再検討している際中である。また、人材の育成といった当初の目的は達成しつつあるが、やはり都市部に比べると美術に関心を寄せる住民の数は少ない。芸術文化による町づくりから地域アイデンティティが生じ、大きな活力をもたらす日が来ることは参加した多くの人々の共通の願いともいえるので、しばらくはつなぎ美術館が地域のアートプロジェクトを主導してゆく予定である。

自治体名　熊本県津奈木町

- 人　　口　5,062人
- 面　　積　33.98km^2
- 事　業　名　住民参画型現代美術プロジェクト／住民参画型アートプロジェクト
- 事業開始年度　平成20年度
- 事 業 主 体　津奈木町

連絡先

熊本県葦北郡津奈木町　つなぎ美術館

TEL 0966-61-2222　FAX 0966-61-2223



大分県　別府市

別府現代芸術フェスティバル2012「混浴温泉世界」
～湯のまち別府ならではのアートフェスティバル～

市区町村の概要

人口約12万人。豊後水道に面した温暖な気候と、源泉数・湧出量ともに日本一の豊富な温泉に恵まれ、国内有数の温泉観光地として古くから栄えてきた。隣接する県都大分市のベッドタウンとしての役割も担っている。

文化による観光再生

大分県全体の総宿泊者の約５割を収容する別府市は、大分県観光の大きな鍵を握っており、その動向は県全体の活力を大きく左右する。

しかし、国内観光の嗜好の変化とともに、別府市も他の大型観光地と同様に観光客が減少している。かつて人であふれた別府のまちは、若者の定住離れや高齢化が進み、活力を失いつつある。このような現状を打開し、国内外からの集客や定住の促進を図るためにも、別府市ならではの魅力や個性をいかに打ち出していくかが大きな課題である。

これらの課題解決の切り口として、文化芸術をまちづくりの柱に据え、文化芸術の創造性の力によって付加される別府の新たな魅力を発信することで、他地域からの交流人口の増加を図っている。また、文化芸術に関わるイベント開催を、地域づくりのための若手人材の育成の場とし、地域活力の再生につなげる。

このような２方向からのアプローチが相乗効果を発揮することを期待し、地域の抱える課題の解決に取り組んでいる。



別府駅前のシンボル、駅前高等温泉
（C）旅手帖 beppu　撮影：安藤幸代

表現する環境を創る



混浴温泉世界 2009 展示作品。2012 年度中学校美術科教科書に掲載されたマリケル・リンの壁画　撮影：久保貴史／（C）別府現代芸術フェスティバル 2009 実行委員会

「混浴温泉世界」と「アートマンス」の主要２事業を実施。

３年に一度開催される国際芸術祭「混浴温泉世界」では、まずコンセプトの設計と企画内容を決定するチームを組成し、地方都市ではなかなか実現できない質の高い大規模なアートプロジェクトを実施する。３年前に開催した「混浴温泉世界2009」では、世界的なアーティストが参加し、国内外の多数のアートファンや関係者を別府に呼び込むことができた。結果的には、のべ９万人の来場客数を記録し、約５千万円の経済波及効果を生んだという実績もある。

また、2012年より、笑顔でお客さんを迎える温泉の「番台さん」のように芸術祭に関わってほしいとの願いから、ボランティアスタッフを「ばんだいさん」と名付け、芸術祭のことはもちろん、別府の観光情報や宿泊施設、交通機関のことなども案内できるよう研修を重ね、地域のコンシェルジェ人材の育成も図っている。



ボランティアスタッフ「ばんだいさん」の研修風景


混浴温泉世界2012展示作品。クリスチャン・マークレー作『火と水』

一方、2010年から毎年継続的に開催している「ベップ・アート・マンス」は、市民がプログラム実施者となり、自身の表現活動や日頃の活動を発信する場である。年々、参加団体（個人）は増加傾向にあり、2010年は28団体（個人）であった参加団体は、2012年には123団体（個人）と急増している。

従来の温泉観光地としてのイメージに加え、質の高い芸術観賞の機会と、市民自らが主体となって活動できる場として別府の認知度が上がれば、住む人にも訪れる人にも付加価値となり、別府にとって大きな魅力につながることが期待される。

これら「混浴温泉世界」と「ベップ・アート・マンス」の2事業は、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会が主催する事業である。幅広く各界各層のメンバーから構成されるこの実行委員会は、これらの2つの事業を通じて、世界的に活躍するアーティストから一般市民にいたるまで、幅広い「芸術家」たちに、別府で活動する場や環境を提供している。

実行委員会は、アーティストを町に呼び込み、新たな視点を地域にもたらしたり、集客交流事業の実施を通じ、別府の持つ魅力や価値を引き出す役割を担う。また、この取組を通して創出した新たな別府の魅力や価値を、新生「観光地型・文化芸術創造都市別府」として形づくり、県内外、国内外に発信する。

アート観光を拡張する

現在の課題は財政基盤・人的資源の充実と、事務局機能の効率化の2点に集約される。特に混浴温泉世界とベップ・アート・マンスを同時開催する上で業務整理と効率化をすすめる必要がある。同時に、新たな人が関わりやすい受入体制を構築していく必要がある。

次回、混浴温泉世界とベップ・アート・マンスが同時開催される2015年は隣接する大分市に大分県立美術館が開館する。また、現在国東や竹田など県内各所で、その地域の特徴を活かした大小さまざまなアートプロジェクトが立ち上がってきている。別府は大分県観光のハブとしての役割を担っていることを考えると、県内各所で、そこでしか体験できないアートプロジェクトが立ち上がることは非常に望ましいことである。今後はそうした周辺地域との連携を深め、大分県全体でアートプロジェクトを巡る新たな観光モデルの創出に寄与していきたいと考えている。

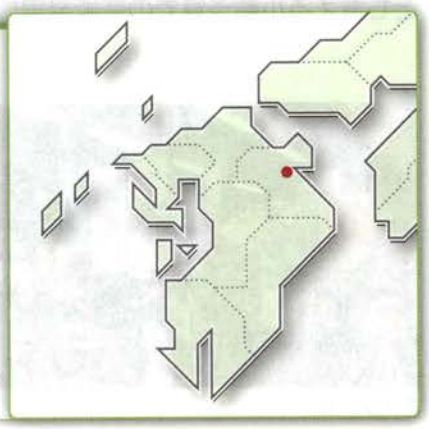

混浴温泉世界2012展示作品。チウ・ジージェ作『ローマの柱』



200ページに及ぶフリーペーパー
旅手帖 beppu 別府現代芸術フェスティバル2012「混浴温泉世界」

自治体名　大分県別府市

- 人　口　119,480人（平成24年3月31日現在）
- 面　積　125.382km²
- 事業名　別府現代芸術フェスティバル2012「混浴温泉世界」
- 事業開始年度　平成21年度
- 事業主体　別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会



連絡先

大分県別府市ONSENツーリズム部文化国際課
TEL 0977-21-1131　FAX 0977-22-1919
参考URL http://www.city.beppu.oita.jp/

宮崎県　西米良村

西米良芸術祭
～アーティストと地域住民が協働する「西米良芸術祭」～

市区町村の概要

西米良村は宮崎県の中央部最西端の熊本県境に位置し、村土の96%を森林が占め、豊かな自然に囲まれた村だが、人口約1,270名、高齢化率約41%と過疎化・高齢化が進んでいる。主要産業であった林業が衰退しているが、夏季冷涼な気候を活かしたゆず、カラーピーマン、ほおずきなどが主な産業となっている。

アーティストと住民の出会い

2008年の冬、東京から地元西米良村に帰郷して活動を続ける写真家から、県内在住のアーティスト仲間を中心に西米良村をフィールドとしながら地域の文化・伝統・慣習・自然環境などをアート的に表現した芸術祭は作れないかと相談があった。それまで村内のイベントといえば、行政主導のものばかりで、住民側からの具体的なイベントの発案はほとんどなく、また西米良村は合併をせず自立の道を選んだばかりだったので、住民主導の地域づくりのきっかけになるのではとの期待感から、10名程度の地域の有志の方々に声をかけ、とりあえず発案のアーティストと地域住民とが意見交換する場をセッティングした。

アーティストから集まった方々に対し、芸術祭の趣旨や方向性などが説明されると、みなが賛同し、西米良の資源や知恵を活かし、決して多額の予算をかけずともやれる芸術祭を宮崎県で最も人口の少ない村から発信していこうと決まった。

その後、実行委員会を立ち上げ、西米良村観光協会と協議し、予算100万円という芸術祭としては異例とも言える小額予算での芸術祭実施が決定し、月1～3回ベースで村外アーティストも西米良に足を運んでもらいながら、イベントの枠組みや内容、予算の配分などについて検討を行い、西米良の四季それぞれの特徴を活かした芸術祭を開催しようということになり、初年度は「西米良の夏」をテーマに「夏米良芸術祭」と命名し企画を進めた。

様々な人たちとの出会いとネットワーク形成

準備を進めていく上で、使われていない古民家をギャラリーとして再生することや、子供の頃作っていた「秘密基地」をモチーフとしたインスタレーションの共同制作、これまで村内であまり馴染みのなかった現代演劇の公演、アナウンサーによる語りの公演のほか、村民からも似顔絵書きの上手な方や、神楽面を制作している方、趣味でチェンソーアートや風景画をしている方なども積極的に参加してくれることとなり、「芸術祭」をキーワードに村内外、様々な方々が見る見るうちに繋がっていった。

「秘密基地」インスタレーション制作には、宮崎市内からも制作ボランティアが集まり、林業を営む青年が山から竹などを切り出し、林業の業を駆使しながら、子供の頃作っていたものを思い出し、みんなでワイワイと楽しみながら、その時の秘密基地よりも少しレベルの高い「秘密基地」をアートとして再生していった。

劇団の公演に当たっては、劇団の合宿から芸術祭実行委員会で受け入れ、合宿中に村内の保育園児や小学生を対象とした演劇ワークショップも開催した。

古民家再生には、約30名のボランティアが集まり、不用な壁を壊し、昔ならではの大きな梁をうまく見せる工夫など、作業をしながら一つ一つ確認して進めて


ポスター展


古民家ギャラリー


古民家作業

いった。

予算は100万円と決まっていたので、ポスターやリーフレットの製作費、古民家再生やその他の制作材料費に充てるとほとんど残らず、参加アーティストも含め、実行委員会のメンバーもほとんどボランティアで半年がかりで芸術祭を作っていった。

出来上がった手作りの芸術祭は2008年７月下旬から９月上旬までの約１ヶ月開催したが、その期間中に訪れた来場者は約3000名。また10数社のメディア等で広く紹介された。宮崎一人口の少ない村からアートを発信するという目的は十分達成したと思ったが、何よりもこのイベントを通じ繋がった人たちとのネットワークが重要であったし、アートフィールドとして西米良村に新たな可能性が生まれた。

また、この芸術祭実行委員会で中心的に活動してくれた村民の方々は、このあと各自治公民館が独自で開催するイベント等でも中心的な役割を果たしてくれるようになった。

新たな挑戦に向けて

2008年の夏米良芸術祭に始まり、2009年の秋米良芸術祭、2010年の春米良芸術祭、2011年の西米良芸術祭と４回にわたって開催したが、その間にも西米良村の人口減少は進んでおり、年々、マンパワーが不足していく状況は否めない。芸術祭を通じて築いたネットワークは以前として継続しているが、そこをしっかりつなぎとめる地域リーダーの育成も課題である。

村内に人材が不足している今こそ、外部の支援者の手助けを借りながら、それを大きな村の力として活用していくことが今後重要になると思われる。

2012年度の芸術祭については、実行委員会の中でそのような議論が行われ、再度足元から見直し新たな方向性を見つける期間にしようということで、開催を見送ったが、このイベントの実施で培ったノウハウやネットワークを活かした新たな展開を図ろうと考えている。


似顔絵バス

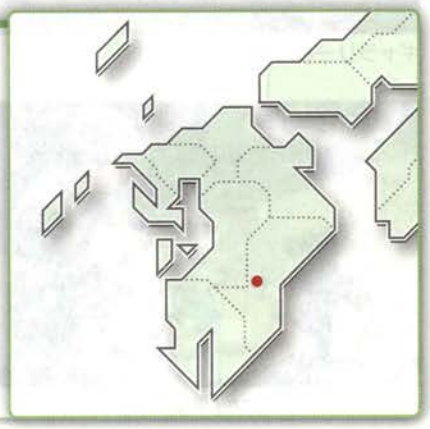

寝ころがって見る写真展


インスタレーション「秘密基地」


秘密基地制作の様子

自治体名　宮崎県西米良村

- 人　　口　1,272人
- 面　　積　271.56km^2
- 事　業　名　西米良芸術祭
- 事業開始年度　平成20年度
- 事　業　主　体　西米良芸術祭実行委員会



連絡先

宮崎県西米良村総務企画課交流推進グループ
TEL 0983-36-1111　FAX 0983-36-1207

鹿児島県　日置市

吹上ワンダーマップ
～企業の誘致から人の誘致へ。芸術がつなぐ地域の振興～

市区町村の概要

日置市は薩摩半島のほぼ中央に位置し、南北47kmに及ぶ日本三大砂丘の一つ、吹上浜から東シナ海を望む。平成17年５月に４町が合併して誕生、約51,000人が暮らしている。

海あり、山あり、田畑あり、団地あり…多様な資源を生かしたまちづくりが進められている。

廃校と芸術の巡り合い

日置市野首地区（旧吹上町）は約400人が暮らす山間の地域で、高齢化率は46%。ここには昭和60年まで野首小学校があった。廃校直後、校舎には町の方針である企業誘致に基づいて電子部品の事業所が進出、雇用や税収の確保に貢献していた。

しかし、バブル崩壊とともに業績は低迷、平成10年には操業停止を余儀なくされ、残されたのは、工場と化していた木造校舎。

吹上町では、廃校後の校区に「地区公民館」を設置、引き続き地域の連携を支援していた。その後、町は主のいなくなった校舎の活用について、初めて地区住民に投げかけた。

「学校だった建物だから、文化的なものを」。地区の回答に応えるべく、町では県や関係機関に打診。天井高の高いアトリエを探していた日展会員（当時）の洋画家、佳月優氏と偶然巡り合い、即座に話がまとまった。

氏は、傷んだ木造校舎に丹念に蜜蝋を塗り込み、建具を補修しながら、「芸術による地域情報の発信」という町との約束を果たすために、絵画教室や地域開放型ギャラリー、サロンなどを開設した。氏が地域と初めて取り組んだ展覧会「吹上の廃校展」がきっかけとなり、旧野首小学校は平成15年、文部科学省の「廃校リニューアル50選」に選ばれた。

静と動の芸術活動から

「野月舎」と名付けられた地域開放型ギャラリーでは、絵画、書道、イラスト、写真、陶芸など多彩な作家による個展が随時開催され、企業秘密の名のもとに立ち寄ることすらできなかった校舎に、県内外から多くの人が訪れるようになった。同時に、地区住民が気付かない地域の価値が、芸術を通して、再認識されていった。野首地区では漠然としながらも、地域づくりの柱のひとつとして「芸術」を標榜、地道に活動することになった。


ギャラリー野月舎


おしゃれな郷土菓子つくりからさらに…


インスタレーション「幸福の実」


ゴミもアートに　根付く活動

佳月氏のネットワークから、平成19年、敷地の一角にアトリエを開いたのが衣服創作などを手がける情熱家、博多和宏氏。舞台や音楽など多彩な表現を追及する博多氏も、地区の構想に大きな関心を示し、「芸術と地域の融合」を模索。試験的に廃校体育館を美術館に変える「体育館で芸術」を展開。その発展型が、野首発で芸術とともに商店街や温泉街を巡る「吹上ワンダーマップ」（平成21年～）である。

第１回の開催に先立ち、地域との連携を模索していた博多氏は、地区女性部に来訪者のおもてなし

を依頼。女性部は黒砂糖が原料の郷土菓子「ふくれ菓子」をいつものように準備した。ところが、氏の手にかかると、田舎の茶請けが、生クリームにミントを添えたおしゃれな洋菓子へと変身。その様に衝撃を受けた女性部は「地元産品で野首の名産を」と特産品の開発に着手、別チャンネルで芸術が地域に浸透し始める。

吹上ワンダーマップは回を重ねるごとに、メイン会場の体育館を中心に、新進気鋭の芸術作品が所狭しと地区の空間を埋める。これまで全国から延べ100人余りの若手芸術家が参加。10日間のイベント期間を含むおよそ1カ月、地域の空き家で共同生活をしながら創作、展示、インスタレーションなどの活動が繰り広げられる。商店街や温泉旅館とも協働して、芸術家の個展が開かれている。

毎回、ワンダーマップの開催に向けて、博多氏は旧吹上町の9地区公民館を芸術家らと事前取材。独自の視点でとらえた70頁の吹上ガイドブックを作成し、芸術家目線で地域の魅力を発信する。

既成概念を破った手法に地域も期待を寄せ、商店会や温泉旅館組合も積極的に支援、吹上にこだわる芸術家のイベントに、酒造会社等地元企業も応援を惜しまない。

野首地区にとって、遠い存在だった芸術。それがいまや、地域を再生・再興する手段になりうる存在になった。その機運は、10年以上の歳月をかけてゆっくり醸成されたものである。

「小学校跡を文化的に使いたい」という地区の願いは、将来に大きな根を下ろしている。

ワンダーマップに描く

過疎・高齢化が進む野首地区に突然蒔かれた芸術の種は、やせた土壌には簡単に根付かなかった。「わからないもの」から「身近なもの」へ、そして地域資源へ。15年の歳月を経てやっと、地区はその糸口を見つけたと考えている。

それを支えているのは、内外からやってくる芸術家、そして、意外なほど受容力と柔軟性を持っていた地区の女性部。不思議なほど惹かれあう両者の連携と、地域全体の協力が引き続き求められる。同時に、吹上ワンダーマップを中心とした地域振興活動の継続には、一定の経費の確保が不可欠。そこには、イベントの価値を高める展開を構築しなければならない。

企業の誘致から人の誘致へ。人と人を芸術がつなぎ、地域に元気が戻りつつある。「そこから若手芸術家の振興も図りたい」。芸術による地道な挑戦は、これから色付いていく。


サブ会場の農家レストランをデザイン


メイン会場の体育館


作品を使ったインスタレーション


住民も勝手に芸術（畑に立つ歓迎のマネキン）

自治体名　鹿児島県日置市

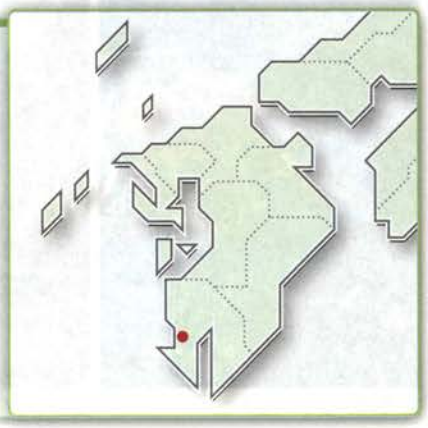
- 人　口　50,701人
- 面　積　253.06km²
- 事業名　吹上ワンダーマップ
- 事業開始年度　平成21年度
- 事業主体　吹上ワンダーマップ実行委員会

連絡先

鹿児島県日置市地域づくり課

TEL 099-273-2111（内線1271）　FAX 099-273-3063

参考URL http://wander-map.jp/



沖縄県　うるま市

島アートプロジェクト事業
～伊計島がアートの島へ～

市区町村の概要

沖縄本島の中部東海岸に位置するうるま市は、平成17年4月1日に具志川市、石川市、勝連町及び与那城町が合併した誕生した都市である。「うるま」とは、沖縄の言葉で「サンゴの島」という意味を持ち、金武湾や海中道路をはじめとする風光明媚な自然環境に恵まれ、多くの観光客や行楽客で賑わっている。また、世界遺産の勝連城跡をはじめ、貴重な歴史遺産や文化財が数多く保存され、エイサーや闘牛、獅子舞などの伝統芸能・文化が盛んなまちである。

伊計島・島おこしの挑戦

沖縄県は、全国の中で高い人口増加率を示す稀有な県でありながらも、離島部においては過疎化、高齢化による地域衰退の現実は極めて厳しい状況である。本市与勝半島の北東に位置する伊計島は一番離れた島であることから「イチハナリ」と呼ばれ、年々人口が減少し高齢化が非常に高いほか、経営悪化によりリゾートホテルが閉館するなど、島の活性化について多くの課題を抱えている。その一方、地域開発の手がほとんど加わらず、沖縄の昔ながらのたたずまいを感じることのできる町並みや自然風景は、観光客にとって大きな魅力となっている。

そこで、懐かしい風景とゆったりと流れる島の時間という伊計島ならではの島の魅力に着目し、島の原風景や自然環境という島の魅力とアートを融合した島おこしを検討した。島とアートがコラボすることによって、アートのもつ情操教育と島が生み出す時間と空間という魅力により、多くの人が島を訪れ、ひいては島の産業や雇用を生み出す契機となり、経済的にも文化的にも潤い、島の活性化を図ることができると考えている。

今回の取り組みでは、瀬戸内国際芸術祭（香川県直島）の事例を参考に、アートに親しむ島づくりとして、日本こうさく学研究会と壁画アーティストによる「イチハナリアートプロジェクト」を実施した。

島風景とアートの融合

イチハナリアートプロジェクトは、平成24年度に創設された沖縄振興特別推進交付金を活用して伊計島の旧伊計小中学校施設を主会場に、うるま市・うるま市観光物産協会・伊計自治会・日本こうさく学研究会・壁画アート作家眞壁陸二氏（金沢市）が連携し、「伊計島がアートに島へ。」のキャッチフレーズのもと、「こうさくてんinイチハナリアートプロジェクト」として、8月19日から9月2日（途中台風接近により3日間休館）までの期間、作品展を開催した。

主会場である旧伊計小中学校では、図書館や理科室をはじめ各教室をギャラリーとして活用し、うるま市出身の大学教授をはじめとする工芸家、絵画、造形、アニメなど様々なジャンルの作家の作品を展示したほか、市民参加型のワークショップを開催し、作品制作を実施した。

旧学校跡地を美術館化することを目玉に、島内に住む実在の人物をモデルに制作された「おばー」の像が県内の各観光地を訪れ、写真撮影する「おばーキャラバン」も実施した。



広告用チラシ（表）


ヒンプン（樺島優子作）


ドネガルの沖（中村真由美作）


子豚（中村真由美作）


おばーキャラバン（某食堂にて・江藤　望作）


壁画アート作成中の眞壁陸二氏とおばー


布をつなぎ合わせた作品（ライオン・樺島優子作）

また、集落のあちらこちらにも作品を展示し、メイン会場から島の集落を散策する道案内を工夫し、伊計島の集落風景にとけ込んだ作品と、ゆったり流れる島の時間を味わってもらった。その中でも、壁画作品を制作する眞壁陸二氏は、廃屋の壁を利用したアート作品に作成したほか、うるま市の景観賞を受賞した「平本家（たいらほんけ）」の敷地内のフール（豚小屋兼便所）に子豚や琉球犬の作品を配置し、昔の沖縄の生活風景を再現し、集落とアートを絶妙に融合させ、多くの来場者を楽しませた。コバルトブルーの海が眺められる広場には、ベンチに佇む「おばー」の像が置かれ、来場者が「おばー」と一緒にベンチに座って記念撮影するなど、楽しいひとときを過ごしていた。

わずか一週間足らずの宣伝広告にもかかわらず、12日間で延べ3,000人余りの来場者があった。多くの方が島に足を運んだこともあり、アートプロジェクト期間中、島の唯一の売店では売上が伸びたほか、メイン会場の中で販売した伊計島の特産品も好評で、商品（黄金いも饅頭、パパイヤサンド）を買い求めた来場者（県内企業関係者）から商談もあり、今後の調整次第では販路拡大、生産拡大に繋がる期待も出てきている。


理性の海に沈潜する潜水夫（喜久山悟作）

本イベントに対しては、「静かな村の中に小さな美術館。違う世界に来たようです。心が豊かになったような感じです。」、「散策しながら屋外展示を見て回り、伊計島そのものがアートだと思いました。」、「伊計島の大きな包容力の中にアート作品が生息している感」などの声があり、島の新たな可能性を見いだすイベントとなった。

島おこし新たな可能性

今回のイチハナリアートプロジェクトは当初、宣伝広告に時間がなく、来場者の見込みが読めないなか、新聞をはじめ口コミで情報が広がり、当初目標であった3,000人を超えることができた。次回は、テレビCMや新聞、ラジオなどを活用し宣伝広告を行い、より多くの方に伊計島とアートの魅力を感じてもらえるよう取り組みたい。

また、作品のレパートリーを増やすとともに、ゲーム形式などで大人と子供が一緒に楽しめる企画を立て、さらに県内在住の若手アーティストの発掘を実施し、継続的にアート展が開催できる仕組みを構築していきたい。

来場者や地元関係者などからは、今回の取り組みを一過性のものにせず、毎年継続して実施してほしいという声が多いことから、県内在住の若手アーティストとの連携により美術作品の充実を図るとともに、島の活性化と雇用創出の可能性についても探っていきたい。

自治体名　沖縄県うるま市

- 人　　口　119,558人（平成24年3月31日）
- 面　　積　86.08km²
- 事 業 名　島アートプロジェクト事業（イチハナリアートプロジェクト）
- 事業開始年度　平成24年度
- 事 業 主 体　うるま市（運営主体　一般社団法人うるま市観光物産協会）



連絡先

うるま市商工観光課

TEL 098-965-5634　FAX 098-965-5623

参考URL http://www.city.uruma.lg.jp/

資料編

99事例

資　料　編（99事例）

1. 北海道函館市　パブリックアート設置事業／パブリックアート推進事業…… 135
2. 北海道岩見沢市　アーバンビレッジストリートギャラリー整備事業…… 135
3. 青森県八戸市　南郷アートプロジェクト…… 136
4. 青森県七戸町　ＬＯＶＥ♥しちのへ「まちかど美術館」…… 136
5. 山形県鶴岡市　富樫実彫刻作品 「空にかける階段」貸出事業 …… 137
6. 山形県上山市　長屋門ギャラリー　アトリエSOU …… 137
7. 山形県長井市　横丁アートセッション…… 138
8. 山形県大蔵村　アートによる地域活性化プロジェクト「ひじおりの灯2012」…… 138
9. 福島県喜多方市　ふるさとの風景展 in 喜多方 …… 139
10. 福島県鏡石町　田んぼでアートだ！復興交流事業…… 139
11. 茨城県常総市　常総市まちなか展覧会…… 140
12. 茨城県牛久市　ビエンナーレうしく全国公募絵画展…… 140
13. 茨城県守谷市　アーカスプロジェクト…… 141
14. 茨城県東海村　アートロード展…… 141
15. 栃木県足利市　まちじゅう美術館…… 142
16. 群馬県前橋市　駅家（うまや）の木馬…… 142
17. 群馬県渋川市　芸術文化プロデューサー事業…… 143
18. 埼玉県さいたま市　アートストリート整備事業…… 143
19. 埼玉県春日部市　「粕壁宿」景観再生事業 …… 144
20. 埼玉県朝霞市　朝霞アートマルシェ…… 144
21. 埼玉県北本市　地域資源を活用したまちづくり事業…… 145
22. 千葉県館山市　青木繁「海の幸」を活かしたまちづくり…… 145
23. 千葉県木更津市　まちごと浮世絵ミュージアム…… 146
24. 千葉県柏市　JOBAN アートラインかしわ …… 146
25. 東京都新宿区　新宿区クリエイターズ・フェスタ2012…… 147
26. 東京都台東区・墨田区　GTS（東京藝術大学・台東区・墨田区）観光アートプロジェクト…… 147
27. 東京都渋谷区　代官山インスタレーション…… 148
28. 東京都町田市　アートで彩る街　玉川学園…… 148
29. 神奈川県厚木市　アート楽市…… 149
30. 神奈川県大和市　YAMATO イラストレーションデザインコンペ …… 149
31. 神奈川県湯河原町　中学校前歓迎塔整備事業（平成23・24年度継続事業）…… 150
32. 新潟県燕市　田んぼアート…… 150
33. 新潟県上越市　アート看板プロジェクト事業…… 151
34. 富山県富山市　ガラス美術館・ストリートミュージアム構想事業…… 151
35. 富山県高岡市　まちなかアートに関する事業…… 152
36. 富山県立山町　越中陶の里「陶農館」研修事業…… 152
37. 福井県福井市　フクイ夢アート…… 153
38. 福井県大野市　文化発信事業　越前大野感性はがき展…… 153

39. 福井県あわら市　金津創作の森事業…… 154
40. 長野県塩尻市　Shiojiring（シオジリング）アートフェスタ …… 154
41. 長野県池田町　てるてる坊主アート展…… 155
42. 長野県高山村　産学官連携地域文化創生事業…… 155
43. 岐阜県岐阜市　まちなかお月見アート、まちなか七夕アート…… 156
44. 岐阜県美濃市　美濃・紙の芸術村事業…… 156
45. 岐阜県東白川村　森の美術展…… 157
46. 静岡県静岡市　清水港・みなと色彩計画…… 157
47. 静岡県三島市　まちなかギャラリー事業…… 158
48. 静岡県富士市　富士芸術村…… 158
49. 静岡県掛川市　遠州横須賀街道ちっちゃな文化展…… 159
50. 静岡県川根本町　和紙のあかり展…… 159
51. 愛知県豊田市　小渡（おど）夢づくり・まちづくり事業…… 160
52. 愛知県西尾市　三河・佐久島アートプラン21…… 160
53. 愛知県北名古屋市　旧加藤邸アートプロジェクト＜記憶の庭で遊ぶ＞…… 161
54. 愛知県東栄町　チェンソーアートによるまちづくり…… 161
55. 三重県津市　榊原温泉田んぼアート…… 162
56. 三重県伊勢市　堤防ペインティング…… 162
57. 三重県鳥羽市　鳥羽まちなみ水族館…… 163
58. 滋賀県栗東市　アートを活かした景観づくり　―ヒカリトオトノセカイ―…… 163
59. 滋賀県日野町　桟敷（さじき）窓アート…… 164
60. 京都府城陽市　光のページェント～TWINKLE JOYO～ …… 164
61. 大阪府岸和田市　紀州街道にぎわい市　夢灯路…… 165
62. 大阪府豊中市　豊中まちなかクラシック…… 165
63. 大阪府摂津市　チューリップアート in 摂津 …… 166
64. 大阪府岬町　ウォールペインティング事業…… 166
65. 兵庫県西宮市　苦楽園・夙川キャンドルナイト…… 167
66. 兵庫県高砂市　高砂町空き家・空き店舗活用プロジェクト…… 167
67. 兵庫県朝来市　あさごアートフェスティバル…… 168
68. 和歌山県和歌山市　わぁーと！手づくり市場（マーケット） …… 168
69. 鳥取県米子市　米子彫刻シンポジウム…… 169
70. 岡山県瀬戸内市　２次元刀立体展…… 169
71. 岡山県真庭市　勝山のお雛まつり事業…… 170
72. 広島県尾道市　絵のまち尾道四季展開催事業…… 170
73. 広島県三原市　小鷺島ビオアイル計画…… 171
74. 山口県宇部市　UBE ビエンナーレまちなかアート・フェスタ …… 171
75. 徳島県鳴門市・兵庫県神戸市・岡山県倉敷市・香川県琴平町
瀬戸内四都アーキツーリズム…… 172
76. 徳島県神山町　神山アーティスト・イン・レジデンス…… 172
77. 香川県丸亀市　MIMOCA ゲートプラザ活用事業 …… 173

78. 香川県観音寺市　かんおんじまるごと美術館…… 173
79. 香川県東かがわ市　ジャンボ絵馬設置による地域活性化事業…… 174
80. 愛媛県今治市　歴史ある瓦の文化が活きるまち…… 174
81. 愛媛県鬼北町　予土線田んぼアート事業…… 175
82. 高知県佐川町　佐川　酒蔵ロード劇場…… 175
83. 福岡県筑紫野市　二日市ものづくりアート市及びイルミネーション事業…… 176
84. 福岡県春日市　春日市弥生の里児童画大賞展　まちかどギャラリー…… 176
85. 福岡県糸島市　いとしま応援プラザ設置事業…… 177
86. 佐賀県有田町　有田ウィンドウディスプレイ甲子園…… 177
87. 長崎県長崎市　ハマスカ活動…… 178
88. 長崎県五島市　モンパルナス構想事業…… 178
89. 長崎県川棚町　シャッターアート事業…… 179
90. 熊本県荒尾市　荒尾駅前広場整備工事（駅前広場万田坑モニュメントの設置）…… 179
91. 熊本県玉名市　アート　in　高瀬彫刻展…… 180
92. 熊本県菊池市　菊池市街地ポケットパーク…… 180
93. 熊本県天草市　アーティスト・イン・レジデンス in Amakusa…… 181
94. 大分県国東市　国見町工房・ギャラリーめぐり…… 181
95. 宮崎県宮崎市　Blue 愛 Land　渚の Premium Candle night
（ブルーアイランド　ナギサノプレミアム　キャンドルナイト）…… 182
96. 鹿児島県枕崎市　文化の風まくらざきアートストリート整備事業…… 182
97. 鹿児島県長島町　ながしま造形美術展…… 183
98. 鹿児島県湧水町　「芸術がある町」まちづくり事業…… 183
99. 沖縄県沖縄市　国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ推進事業
（通称：キジムナーフェスタ）…… 184

北海道函館市　パブリックアート設置事業／パブリックアート推進事業

①函館市では、市民がうるおいとやすらぎ、豊かさを感じられる魅力ある都市空間の創出を図るため、「パブリックアート設置計画（前期・後期）」（平成11年度～平成22年度）を策定し、平成11年度から19年度までに、市内20箇所・34基のパブリックアートを設置した。その後、設置したパブリックアートの市民啓発と適切な維持管理を行うため、彫刻（アート）サポーター（市民ボランティア）によるガイドや清掃活動を行っている。

②市民がうるおいとやすらぎ、豊かさを感じられる魅力ある都市空間の創出を図り、文化の薫り高い、豊かな表情のある都市の創出を目指す。作品を設置することによって、街並みの魅力を高め、広く市民や観光客にも親しまれるよう、まち全体のイメージアップや活性化に繋がる地域を選定し、地域ごとに作品設置の趣旨（テーマ）や作品イメージを決め、作家を選定し、作品を設置している。

作品設置　平成11年度～平成19年度　20箇所　34基
推進活動　平成20年度～平成21年度
彫刻（アート）サポーター養成講座実施
平成22年度～
彫刻（アート）サポーター活動開始
（現在登録22名）

③彫刻（アート）サポーターの活動も３年目となり、ガイド活動や清掃などの維持管理活動に積極的に取り組み、作品の維持管理や市民啓発に成果を上げている。また、「函館まちあるきマップ」のまちなか美術館五稜郭編として活用されているほか、観光客がパブリックアートとともに写真を撮る光景が多く見られるなど、観光振興にも貢献している。

④パブリックアートの設置にあたっては、「親しみやすさ」「わかりやすさ」を主眼に作品イメージを決めたため、小規模で親しみやすい作品が多く、市民・観光客が笑顔で作品に接している。また、市内のいたるところに作品があるため、民間等から寄贈を受けた作品とともに、観光客をガイドする際の素材のひとつとなっている。

⑤彫刻（アート）サポーターの活動者が、転居・体調不良などにより減少傾向にあるため、今後は新たな人材の確保などを検討したい。

＊自治体名　北海道函館市
＊人口　277,056人
＊面積　677.95Km²
＊事業開始年度　平成11年度
＊事業主体　函館市

連絡先

函館市都市建設部都市デザイン課
TEL 0138-21-3388　FAX 0138-27-2340
URL http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/toshiken/design/index.htm

北海道岩見沢市　アーバンビレッジストリートギャラリー整備事業

①当該敷地は、アーバンビレッジというマンションの敷地内だが、岩見沢市中心部の４条通り商店街の中に立地している。マンションの玄関は人の出入りが少なく、商店街の中に建つと界隈性を損なうことが懸念された。また、岩見沢市は豪雪地帯であり、マンション敷地内に堆雪場の設置も必要であった。そこでその二つの問題を解決するために、マンションの玄関は裏通りに設け、そして、商店街に面してはポケットパークを設置し、そこにストリートギャラリーを併設した。ポケットパーク内の空地は冬季間はマンション駐車場の雪を一時的に置いておく堆雪場とし、夏季はポケットパークと一体で使えるスペースにした。

②商店街に対する界隈性の提供。商店街に面したストリートギャラリーと、ポケットパーク内部のミニギャラリースペース。ポケットパークとギャラリーの所有はマンション所有会社であり、マンション所有会社からマンション管理組合に一括で賃貸されている。さらに管理組合から地元のまちづくり会社（株）ZAWA. Com に一括で転貸し一般利用者への貸し出しをしている。

③地元の書道サークルが継続的に利用して、作品の発表に利用している。また、岩見沢で開かれるコンサートのPR に利用されたりしている。また、日常的に休む高齢者がいたり、商店街のお祭りの時には一般市民の休憩場所となっている。

④中心市街地の真ん中にある、民設民営の公共空間である事。建設時に事業費の40%（3,000千円）の市の補助を受けて以降、管理運営費用（電気代、清掃代、植栽維持、固定資産税、保険代）は全てマンションの管理費から賄っており市の補助を受けていない事。商店街の通りに面した側は継続的に申込があるが、ポケットパーク内のミニギャラリーは利用申込が少ない。もっと PR が必要。地元の大学や高校等との連携がとれず、美術系の学生たちの作品展示などが少ない。

⑤もっと PR に努めて利用度を高めたい。民間の敷地にある民間の施設なので、行政からの補助金に頼らずに長く運営しつづける事が大事。イベントなどの派手な事業は行なわず、日常的にさりげなくそこにあるような空間にしていきたい。そのために必要なしつらえを考えて行きたい。

＊自治体名　北海道岩見沢市
＊人口　89,023人
＊面積　481.1Km²
＊事業開始年度　平成20年度
＊事業主体　株式会社 UV1 ・ 株式会社 ZAWA.Com

連絡先

岩見沢市経済部中心市街地活性化推進室
TEL 0126-31-0101　FAX 0126-24-2000

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

青森県八戸市　南郷アートプロジェクト

①八戸市では、魅力ある地域資源が豊富な南郷区を舞台に、地域の方々とアーティストとの交流による新しいまちづくりを進めている。

②アートプロジェクトでの活動を通じて、たくさんの人が多様な方法で関わりたくなるような、創造的・自律的な地域へと発展していくことを目指している。平成24年度はテーマを「家」と設定し、家の中に眠っているもの、家と家をつなぐもの、家を楽しむものなど、南郷の魅力を「家」を通して発見し、見慣れているものがいつもとは異なる光を放つプロジェクトを展開する。南郷の地域資源や住民を巻き込みながら展開するダンスコミュニティプロジェクト及びホールでのダンス公演等を実施。アーティスト滞在用のレジデンスハウスや、商店街の中の空き店舗を活動場所として確保し、アーティストがより身近に感じられる活動を行っていく。また、アーティスト定住実験プロジェクトとして、アーティストに南郷区内に移住してもらい、空き家の再生をはじめとする様々なプロジェクトを地域住民と一緒に展開する。

③平成23年度は種まきの年と位置づけ、地域の方々にアーティストに興味を持ってもらったり、アートの力を実感してもらう契機となるよう、南郷の地域資源である「ジャズ」に「ダンス」を組み合わせた作品を創作する試みを行ったところ、関わった若者が、自分の活躍の場を持てることを期待する様子がうかがえた。また、出演した地元ジャズバンドと地域住民との交流が深まり、地域の催しに招かれて演奏するなど、既存の催しに変化の兆しがみられた。更に、南郷アートプロジェクトが市内外から注目され、アート関係団体から連携事業等の提案を受けるなど、新たな事業を呼び込む雰囲気ができつつある。

④人口流出と少子高齢化により活力を失いつつある地域において、新たな活動が創出され、地域コミュニティの再構築につながっている。初年度の23年度は、地域住民の中に戸惑いも見られたが、2年目からは徐々に認知され、好意的に受け止められるようになってきた。地域の中心的人物に協力を依頼し、地域とのパイプ役になっていただきながら、アーティストやスタッフとのコミュニケーションの場を丁寧につくり出している。

⑤現在、市から文化ホール指定管理者への委託業務として実施しており、行政主導で取り組んでいるところであるが、活動の担い手となる市民団体を育成し、市民主導のプロジェクトとして発展させる。

＊自治体名　青森県八戸市
＊人口　239,630人
＊面積　305.4Km²
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　八戸市・株式会社アート&コミュニティ（八戸市南郷文化ホール・八戸市公会堂・八戸市公民館指定管理者）

連絡先

八戸市まちづくり文化観光部まちづくり文化推進室
TEL 0178-43-9156　FAX 0178-41-2302
URL http://nangoartproject.jp/ http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/12,51328,43,242.html

青森県七戸町　ＬＯＶＥ♥しちのへ「まちかど美術館」

①七戸町出身の洋画家・鷹山宇一の作品に対峙した時「子どもの感性は風土の中で培われる」との美学が成立することが実感される。しかし、町では子どもたちに対するアートな体験活動や作品発表の場は皆無であった。一方で町内の商店街では空店舗が増え集客力が低下する現状であることから、子どもたちによる町への愛情溢れる元気な作品で町を活性化し、アートに気軽に親しみ体験することのできる環境を整え、子どもたちと商店街そして美術館によるコラボレーション事業として実施に至る。

②子どもたちの純粋な視点で「七戸町」をアートに表現した作品により、子どもたちが生まれもった柔軟な感性を育み、さらに磨きをかけること。そのうえで町の新たな魅力を掘り起こし、逆に大人の意表をつく魅力の再認識をしながら、町の活性化に寄与する。天王つつじまつりなど、町内外からの集客を想定して開催される商店街での各種イベントにあわせ、町内の5歳児を対象に「七戸町の好きなところ」をテーマに22年度は絵画で表現、23・24年度はカメラで撮影し商店街の協力店舗に写真を展示。来訪者は作品により町の魅力に触れ、制作者である子どもたちは展示商店を回遊して自分の作品以外にも接することで店舗への来店の契機とする。また、展示商店すべてを巡ることで「クイズ」の答えが導き出される仕掛けにより美術館へつなげ、美術館の作品を鑑賞すると答えが完成する仕組み。年を重ねる毎に協力店舗が増加。また、これまで敷居が高かったイメージの美術館に子どもたちとその親たちが来館する契機となった。

③アート活動は美術館でのみ行われるという先入観が取り払われ、地元の空店舗や店先などを活用したイベントが新たに起こされた。事業を通して商店への入店が増えるなど今後も郷土愛を育みながらアートの力で町を活性化する新たな事業の展開が期待される。

④幅広い世代を対象に、地元に密着しより親しみやすい美術活動とは何かを考え、アートを活かした町づくりの推進に貢献。商店と子どもたち、アートを結びつける仕掛けづくりに注意と配慮が必要。企画構想に地域と美術、子どもの発達段階に熟知する人材が不可欠。

⑤収益事業ではないため、来年度以降の費用の捻出方法が決まっていない。また、事業を構想段階から主体的に実施可能な専門員の配置が可能かどうか。天王つつじ祭りに限らず、様々なイベントにあわせ開催するなどの柔軟性をもてるかどうか。

＊自治体名　青森県七戸町
＊人口　17,452人
＊面積　337.23Km²
＊事業開始年度　平成22年度
＊事業主体　公益財団法人鷹山宇一記念美術振興会

連絡先

七戸町企画財政課
TEL 0176-68-2940　FAX 0176-68-2804

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

山形県鶴岡市　富樫実彫刻作品「空にかける階段」貸出事業

①かねてより本市では、国内外で活躍している本市出身の彫刻家富樫実氏(本市名誉市民／京都府在住)作のモニュメントやストリートファーニチャー、橋梁などを市内各所に整備するなど、アートを活用したまちなかの景観づくりに取り組んでおり、市民の憩いの空間として親しまれている。これらの縁で、氏制作の彫刻作品を数多く寄贈を受け、その利活用を検討していたところ、氏より一般市民に貸し出してみてはどうかとの提案があり、平成21年度よりプログラムの運用をスタートさせた。

②ただ鑑賞に資するだけではなく、多くの市民にアートと身近に触れ合える場・機会を創出する。「見て・触れて・感じてほしい」という制作者の思いから、市内の小中学校や公共施設、民間企業などを対象に、彫刻作品を１年間ずつ合計３点までを無料で貸し出すもの。また、それら彫刻作品のWEBページも運営しており、WEB上からも、作品を選ぶことも可能となっている。現在、市内の小中学校などの公的施設をはじめ、老人福祉施設やホテルのロビーなど17の施設に34点の作品を貸し出し中である。

③これまで本市では、主に屋外のパブリックな空間に氏の彫刻作品を整備し「アートを活用したまちなかの景観づくり」に取り組んできたが、無料で市内の公的施設等に貸し出すこの事業の展開により、屋外だけでなく屋内でも芸術性の高いアートを活用した空間を作り出すことができるようになった。貸出を受けている学校や施設では、作品に直接触れることができるとあって、日頃から積極的に作品に手を伸ばし、その感触を確かめながらアートの世界を体感しているなど、芸術作品が日常生活の中に溶け込んだまちづくりの推進に寄与している。

④芸術的価値の高い彫刻作品を無料で貸し出している点。芸術作品といえば、手を触れることはできずもっぱら鑑賞のみというのが通常であるが、直接手で触れ感触を確かめてみるなど、芸術作品を五感で感じることもできる点。芸術的価値の高い彫刻作品を貸し出すにあたり、保険の加入に関する問題に苦心した。寄贈者の強い要望により、保険はかけずに貸し出しを行っている。

⑤作品が貸し出しであることから、作品の盗難や損傷など日常の管理面で借りることをためらっている施設があるため、借りるためのハードルをやわらげられるような管理運用マニュアル等を整備する必要がある。現在の貸出先の多くは公的施設であるが、芸術作品が日常生活に溶け込んだまちづくりをより推進するため、今後は民間の借受先をさらに開拓していくことを検討している。

＊自治体名　山形県鶴岡市
＊人口　136,146人
＊面積　1311.51Km²
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　鶴岡市

連絡先

櫛引庁舎総務企画課
TEL 0235-57-2111　FAX 0235-57-2117
URL http://www.city.tsuruoka.lg.jp/publicart/

山形県上山市　長屋門ギャラリー　アトリエSOU

①中心市街地にある長屋門長屋の一角を、「まちづくりのために利用して欲しい。」と所有者から申し出があり、平成21年８月、全３ブロックのうち１ブロックを学生等の作品展示場「長屋門ギャラリー」としてオープンした。平成22年９月、１ブロックを東北芸術工科大学の卒業生主宰による「アトリエSOU」としてオープン。平成22年12月、ギャラリーの利用促進を図るため、市民と行政の共同による委員会を組織し、企画運営方針を協議することにした。平成23年10月、展示者同士の活動の輪を拡げるため、ギャラリー運営に参加するクルーの募集を開始。クルー同士の交流や様々な企画の実行に至っている。平成24年４月、残る１ブロックをギャラリーの新スペースとして活用を開始した。

②設置目的は、中心市街地活性化及び空き店舗対策である。ギャラリーは市民と行政が定期的に委員会を開催しながら共同して運営しており、いろいろなジャンルの作品展示や体験教室が実施されている。アトリエでは、金属工芸作品の展示、販売、体験が行われている。

③平成24年４月から８月までのギャラリー利用実績は、利用件数は約100件、来場者数は約2,200人で中心市街地における賑わいの創出、まちなかにおける交流拠点としての機能強化、芸術文化作品の発表の場の創出等を期待している。

④まちのシンボルである上山城に近く、蔵や町屋等の歴史的建造物群が点在するエリアに立地しているため、古風な建物を活かしていくことが必要である。運営に関しては、当初、学生による展示等を開催したが、閉館期間が多々見受けられたため、学生以外の一般利用者まで枠を拡大した。それでも閉館日が目立ち、紹介、宣伝、利用者に求める運営協力金の値下げ等を実施した結果、利用者は、増加している。

⑤ギャラリーは、常駐の管理人等が不在であるため、近隣にあるまちづくりセンターの職員（市非常勤職員）が対応しているものの、管理体制が万全でない。また、大きな事業収益が期待できないため、市の予算を投入して、事業を継続しているという課題がある。今後は、収益が上がるような施設にする工夫や立地条件を活かした事業展開を行い、まちあるき拠点のひとつとして磨きをかけ、再度来訪したくなるような魅力ある展示や観光との連携、施設の充実等を行う必要がある。

＊自治体名　山形県上山市
＊人口　33,370人
＊面積　241Km²
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　長屋門ギャラリー企画運営委員会、アトリエSOU

連絡先

商工課
TEL 023-672-1111（183）　FAX 023-672-1112
URL http://nagayamon.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

山形県長井市　横丁アートセッション

①平成16年に改修工事を行い、一般開放された旧西置賜郡役所小桜館。現存郡役所として全国で２番目に古く、県内では最古のものであり、明治建築としても貴重なこの建物の活性化を目的に、横丁アートセッションが始まった。時を同じくして、小桜館周辺環境整備が市の事業として設定され、地域住民の意見集約やワークショップのとりまとめも当法人が担うこととなり、総合的な観点から小桜館界隈の活性化に取り組むこととなった。

②旧西置賜郡役所小桜館が一般利用出来るようになったことを市民に周知し、将来にわたる活用を促進する。併せて、長い年月、旧西置賜郡役所と共にあった周辺町内の賑わいを創出する。アートを「非日常」の創出と広く捉え、小桜館周辺の商店街、横丁、文化施設、空き店舗などを舞台に様々なセッション＝「交流」を生み出す。有名アーティストありきではなく、町内会、地域団体、大学など様々な組織、個人の協力を得ながら協働で事業を構築することに意義を見いだしている。平成16年より毎年開催(途中､改修工事により１年のみ中止)。毎回､テーマを設定し、趣向を凝らしながら企画実施している。

③平成20年に130歳を迎えた旧西置賜郡役所を祝うため、この年は「明治時代」をテーマに、映画、食など様々な切り口から企画を行い、旧西置賜郡役所の周知に大いに成果を挙げた。この過程で全国のアート系 NPO や大学の映像研究室との交流も深められた。また、初年度に交流を持った児童絵画の指導者との繋がりが発展し、他団体主催としたが市内に子ども達による大壁画の作成が実現した。中学生とのコラボレーションも行うなど、地域からは市民主体で賑わいを生み出す機会として期待されている。

④様々な組織、個人がすべてフラットな状態で企画に参画し、協働して取り組んでいる。事業費の確保は常に課題であり、様々な補助金制度を活用している。

⑤旧西置賜郡役所小桜館の周知には一定の役割を果たせた。今後は､別事業として行っている「まちづくり学校」(市民が歴史的建造物の活用を学ぶ講座）と結びつけるのも一案であり、その場合、場所は必ずしも小桜館に拘る必要はないと考えている。実働メンバーがやや固定化しつつあり､「まちづくり学校」を通して、新たに活動できる人材を育てる必要がある。

＊ 自治体名　山形県長井市
＊ 人　　口　29,016人
＊ 面　　積　214.69Km^2
＊ 事業開始年度　平成16年度
＊ 事 業 主 体　特定非営利活動法人　長井まちづくり NPO センター

連絡先

長井市企画調整課地域戦略室
TEL 0238-87-0817　FAX 0238-83-1070
URL http://samidare.jp/ayakka/

山形県大蔵村　アートによる地域活性化プロジェクト「ひじおりの灯2012」

①大蔵村肘折温泉では、開湯1200年の歴史ある肘折温泉の特色として脈々と伝えてきた湯治文化の魅力を次世代に継承することや新たな魅力の発掘により、観光誘客を図る一環として「ひじおりの灯」事業を行っている。東北芸術工科大学の学生が、肘折温泉で感じたことを表現し灯篭に表装。地区内の旅館や商店の軒先に展示し、観光客の回遊を促すとともにまち全体を若い作家の作品により活性化させる取り組みを実施している。

②灯篭絵を中心とした芸術作品を、長い時間をかけて蓄積することにより、肘折温泉の「美術館化」とともに、開湯1200年以降の新たな伝統として定着を図り、温泉街に安らぎの空間を創出する。肘折温泉開湯1200年を機に始まった湯治文化を100年後に継承するための事業で、本年６回目の点灯となる。東北芸術工科大学の学生が、肘折温泉に逗留し、地域の方々との交流や地域内の散策によって感じた肘折絵巻を灯篭に表装し展示している。湯治場風情の温泉街にマッチし、散策する方々にくつろぎの空間を提供している。肘折温泉の新たな夏の風物詩として定着し､温泉街を散策する来訪者が多くなっている。さらに作品を描く作家は若者のため、湯治場としての雰囲気を色濃く残しながらも、若者の来訪者が多くなり賑わいを見せている。

③毎年、新たな灯篭絵を作成し展示することにより次の世代に継承する夏の風物詩として、そして新しい伝統として定着している。回を重ねるごとに、住民と作家、鑑賞に訪れる観光客の交流が生まれ賑わいにつながっている。地元若者の組織も作品の説明、案内役に主体的な参画も見られ成果を上げ始めている。今後、さらなる地域活性化のため、地域と美術系大学の結びつきを強めていきたい。

④６回継続している産学連携型のアート・プロジェクトであり、肘折温泉の方々がホストファミリーとして学生を受け入れ創作活動を支えている。事業開始当初、湯治場としての風情にマッチするのか。アートが誘客に結びつくのかと言った意見が多く地区住民の理解に時間がかかった。

⑤事業費の捻出が大きな課題となっており、広告料の徴収やスポンサー企業の協力を求める方向で検討している。

＊ 自治体名　山形県大蔵村
＊ 人　　口　3,744人
＊ 面　　積　211.59Km^2
＊ 事業開始年度　平成19年度
＊ 事 業 主 体　肘折温泉地域協議会

連絡先

大蔵村産業振興課商工観光係
TEL 0233-75-2111　FAX 0233-75-2231
URL http://hijiorinohi.com/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

福島県喜多方市　ふるさとの風景展 in 喜多方

①喜多方市美術館の開館（平成７年度）に伴い開催された。当初から全国公募を行い、「美しい自然に恵まれた耶麻地方、この美しい四季折々の風景を描いた作品を出身、在住、国籍を問わず広く募集し、優れた作品を結集することにより、更なる芸術文化の向上を図る」ものとして、17回継続して開催されている。現在では、耶麻地方の風景画だけでなく、作家それぞれの「ふるさとの風景」を描いた作品を全国から募集している。

②自分が生まれ育ったところ、かつて住んだことがあるまち、なじみ深い土地、見なれた町並や自然の景観、なつかしい人たち、伝統的な行事、産物、大切な思い出の場所など、作家それぞれの思いのなかにある「ふるさとの風景」を作品として広く募集し、芸術文化の向上を図る。

・応募資格：16歳以上（16～19歳までは青少年の部）
・応募作品：公募の趣旨にそって表現した絵画の未発表作品。（大きさ30号以下）
・賞　　：一般の部　大賞１点、50万円。準大賞数点、５万円。奨励賞数点、２万円。
　青少年の部　優秀賞１点、２万円。奨励賞数点、１万円。
・応募料：一般の部5,000円。青少年の部1,000円。（左記の応募料で2点まで応募が可能）
・審　　査：12月初旬まで募集され、大学教授等の専門家による審査の後、入賞・入選作品は翌年３月に喜多方市美術館の企画展として約一カ月間展示される。
・その他：毎回、受賞作品や選考の結果を掲載した図録が作られている。

③全国公募のため、喜多方市の知名度アップに貢献している。喜多方市美術館の目的である地域の作家や若手作家の育成にも合致させ、今後活躍していく作家を応援するという意義ももつ。近年、アートへの関心も高まり、市内に小さなギャラリーも増え、関係者がギャラリーを巡る企画を立案し、市外から観光客が訪れる機会が増加するなど発展をみせている。

④実行委員会が作品の公募及び審査を担当し、美術館が企画展を開催しており、官民協働の運営形態をとっている。また、美術館の開館以来継続されていることや、入賞・入選作品が企画展として展示され、図録として残る点は特徴的である。

⑤一般の部には100以上の作品の応募があるが、青少年の部に対する応募が少ない。市の補助金と作品の応募料により運営されているため、財源の確保が課題となっているが、限られた財源を十分に活用し、喜多方市美術館の企画展のひとつとして継続に努めたい。

＊自治体名　福島県喜多方市
＊人　　口　51,374人
＊面　　積　554.67Km^2
＊事業開始年度　平成７年度
＊事業主体　ふるさとの風景展実行委員会

連絡先

喜多方市美術館
TEL 0241-23-0404　FAX 0241-23-0406
URL http://www.city.kitakata.fukushima.jp/bijyutsukan/

福島県鏡石町　田んぼでアートだ！復興交流事業

①鏡石町は、農業所得が県内トップクラスの町で、鉄道、高速道路や国道等主要幹線も整備されており、中心部である鏡石駅周辺は、市街地と水田地帯が調和・共存している。平成24年度は、町制施行50周年の節目の年でもあることから、この恵まれた環境を活かして、駅の東側に広がる水田に「田んぼアート」を描き、広くPRすることで、首長の政策方針である「駅に降りてみたい、歩いてみたい、住んでみたい町づくり」の推進を図る。

②農業と観光が連携した新たな観光スポットをつくり、農業の普及啓発と鏡石駅を中心とした街なかの活性化を図る。JR鏡石駅の東側に広がる約50ａの水田をキャンバスとして、先進地である青森県田舎館村や山形県米沢市の関係者の支援も受けながら実施。平成24年度の絵柄は、唱歌「牧場の朝」にちなんだ、乳牛や牛舎、鐘など町ゆかりの図柄とし、緑色のコシヒカリの他に、紫色、白色、黄色といった鑑賞用の稲を用いて色彩豊かなアートとなっている。また、一般観覧用に、水田に隣接する町図書館４階展望室を無料で開放し、事業のPRを図っている。

③見頃となる７月～８月は、町外からの観光客の増加による地元商店街への経済波及効果が期待できる。また、田植えや稲刈り体験イベントの開催、収穫した米の学校給食への提供等の取り組みを通じて、農業への関心喚起や地産地消の推進、町の主要作物である米のPRも期待できる。

④本町にある福島県立岩瀬農業高等学校の協力の下実施しており、授業の実習の中で、生徒達が絵柄の測量や育苗、田植え等を行っている。東日本大震災による被害で、昨年度は作付できなかった水田であるため、原発事故の影響による除染対策も含めた水田の整備に時間と労力を要した。

⑤田んぼアートを観覧した観光客に、町内で周遊してもらう仕組みづくりが課題である。また、事業を継続していくためには、見学者からの募金やスポンサーの確保等の財源対策も必要となる。

＊自治体名　福島県鏡石町
＊人　　口　12,680人
＊面　　積　31.25Km^2
＊事業開始年度　平成24年度
＊事業主体　かがみいし田んぼアート実行委員会
（構成団体：鏡石町、鏡石町教育委員会、福島県立岩瀬農業高等学校、鏡石町農業振興推進委員会、鏡石町農業青年会議所、鏡石米づくり部会、すかがわ岩瀬農業協同組合鏡石支店、すかがわ岩瀬農業協同組合青年部鏡石支部、鏡石町商工会、鏡石町老人クラブ連合会、福島県県中農林事務所須賀川農業普及所、鏡石町観光協会）

連絡先

福島県鏡石町産業課
TEL 0248-62-2118　FAX 0248-62-6553
URL http://www.town.kagamiishi.fukushima.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

茨城県常総市　常総市まちなか展覧会

①常総市水海道中心市街地は、幕末から明治期にかけて鬼怒川水運の中継地として栄え、河岸の名残の蔵や洋風建築などの歴史的建物が点在している。近隣の取手市に住む東京藝術大学出身の若手芸術家から市に、それら建物に作品の展示をしたいとの申し出があった。市では国のまちづくり交付金事業として、市街地内に点在する歴史的資源を回遊して楽しめるような歩道の段差解消やポケットパークなどの整備を進めていたことから、同交付金の提案事業として平成19年度から本事業を実施することとした。

②歴史的建物等の地域資源を活用したまちづくりと若手芸術作家の育成を目的とし、歴史的建物や公園などへの若手作家の作品展示と、市民に芸術を身近に感じてもらうための一般向けの図工・美術ワークショップである「こどもとおとなの図工天国美術館」を大きな2つの柱としている。展覧会期は約2週間で、会期前から会期中にかけてワークショップを行うほか,作家の作品の手作り市,ミニコンサートなども開催する。

③回数を重ね市民ボランティアなどの協力も増え徐々に市民に浸透し、初年度は参加作家14名、6会場であったが、23年度は33名、10会場と倍以上の規模になった。作家も21年度からは筑波大学の芸術学系出身者も加わり、東京藝術大学の他、筑波大学との結びつきも強くなってきている。20年度は、地域資源を活用したまちづくりと地域芸術振興への寄与が認められ、茨城県のまちづくりグリーンリボン賞を受賞。21年度にはまちづくり月間まちづくり功労者として国土交通大臣表彰を受賞した。

④歴史的建物への作品の展示だけでなく、芸術を身近に感じてもらうためのワークショップを実施している点。一般に限らず、地区の子供会、特別支援学校の子供達や市内に多く住むブラジル人学校の子供達なども対象に実施している。開始当初、事業が認知されていないことから、ワークショップの参加者集めに苦心した。

⑤平成19年度から23年度までの5年間は、国の補助事業として実施したが、24年度からは市の単独事業となり、事務局も都市整備課から商工観光課に変わり、更に中心商店街との連携等を図りながら事業を進めていく必要がある。

＊自治体名　茨城県常総市
＊人口　64,305人
＊面積　123.52Km²
＊事業開始年度　平成19年度
＊事業主体　常総市まちなか展覧会実行委員会

連絡先

常総市産業労働部商工観光課市街地活性化推進室
TEL 0297-23-9088　FAX 0297-23-1501
URL http://www.matinaka.com

茨城県牛久市　ビエンナーレうしく全国公募絵画展

①平成13年に施行された「文化芸術振興基本法」をうけて、牛久市では平成15年に「牛久市文化芸術振興条例」を制定し、芸術文化を振興することにより心豊かな市民生活の形成を街づくりの一環としている。その中の文化芸術に接する機会の拡充する具体的な施策の一つとして2年に一度の公募展を企画した。

②ビエンナーレうしくは、日本全国から作品を集める全国公募美術展として隔年で開催し、多くの市民に優れた芸術鑑賞の機会を提供するとともに、市民の文化芸術への意識を高めていくことを目的とする。1回から4回までの絵画展においては、全国よりジャンルを問わず平面作品を公募し、応募された全作品の中から大賞（買上賞300万円）・優秀賞（買上賞100万円）・佳作2作品（賞金7万円）と入選作品約100作品を決定する2日間におよぶ審査を一般に公開した。入選・入賞作品決定後、図録を作成し、市内外の人々に鑑賞の機会を提供のため入館料無料で約2週間展覧会を行っている。さらに、展覧会期間中の入場者による投票を行い,市民賞（賞金5万円）決定するなど、個人が芸術に対して親しみを持てるよう工夫している。1回展の応募総数が984点、2回展が867点、3回展が1036点、4回展が1369点と数ある公募展の中でも人気が高く、全国的に見てもハイレベルな公募展となっている。

③主催は公募によるボランティアで構成される実行委員会で、そこに牛久市と牛久市教育委員会が共催となり共働で運営している。事業を進めていくなか、ビエンナーレうしくを媒体にまちづくりに自主的に貢献し参加しているという意識が深まった。また、来場者においては、2年に一度開催される市の美術展として定着しつつあり、回を重ねるごとに、継続を望む声がアンケートに多く寄せられている。また、県外からの来場者も多く、美術愛好家によるの牛久市への観光としての集客も期待できる。

④2日間に亘り全作品を審査し、入賞・入選作品を決定する過程を一般に公開する点。準備に1年半、申し込み受付から展覧会終了まで約半年かかり、搬入搬出管理、審査会、展覧会準備ともに実働する実行委員の負担が大きい。市の職員が補助をすると同時に、できるところは外注して負担の軽減を図っている。

⑤応募に対しての広報は美術雑誌、HP、募集要項の送付等でかなり浸透しているようだが、展覧会の入場者がなかなか伸びない。今後さらなる広報手段の開拓が必要。

＊自治体名　茨城県牛久市
＊人口　81,698人
＊面積　5,888Km²
＊事業開始年度　平成18年度
＊事業主体　ビエンナーレうしく実行委員会・牛久市

連絡先

牛久市教育委員会生涯学習課
TEL 029-871-2301　FAX 029-871-1334
URL http://www.city.ushiku.ibaraki.jp/section/chuuou/biennial/main.htm

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

茨城県守谷市　アーカスプロジェクト

①東京芸大の取手キャンパスの開設等を踏まえ、県南地域において国際性と芸術をキーワードとした新たな施策の展開が求められたことを受け、平成3年度に東京芸大学長の平山郁夫氏を委員長とする検討委員会を設け、「国際芸術文化交流拠点整備構想（アーカス構想）」を策定。このアーカス構想の策定を受け、アーカスプロジェクトとして事業展開を図ってきており、本年度で19年目を迎える。

②芸術家が一定期間守谷市に滞在し、創作活動を行うアーティストインレジデンスを実施するとともに、地域の方々が身近に芸術家と交流し、楽しみながら芸術を体験する機会を提供することにより、県のイメージアップと魅力ある地域づくりを推進する。海外から現代アートの若手芸術家を3名招へいし、3ヶ月間創作活動を支援するとともに、アートと地域を繋ぐ交流プログラムとして、国内外のアーティストによる地域住民を対象としたワークショップ等を実施し、芸術を活かした地域づくりに努めている。招へいアーティストの滞在期間中、「もりや学びの里フェスティバル」などへ参加や、オープンスタジオを実施し、地域の方々との交流の場を設け、芸術家と地域をつなぐ企画を実施している。また、東京芸大教授の日比野克彦氏によるワークショップや、学校の余裕教室を利用した、ワークショップを通じ、アーティストと児童が交流を深めるアーティストインスクールを実施している。

③アーティストが地域に滞在し、地域と交流を図りながら創作活動を行うことにより、アーティストの育成につながるとともに、アートと地域を繋ぐ交流プログラムを通じ、地域の方々が芸術に関心を持ち、芸術を活かした地域づくりにつながっている。

④当プロジェクトは、自治体関与のレジデンス事業の先駆けとして定着しており、国内外から一定の評価を得ている。また、アーティストの公募数についても年々増加しており（2011年は震災等の影響により一時的に減少した）、アート関係者からは、日本の代表的なレジデンスといわれるまでに成長した。自治体が関与しているレジデンス事業であることから、芸術に身近に親しめる環境づくりや地域活性化に一層資するものにする必要がある。

⑤自治体関与のレジデンス事業として、事業の長期化に対する説明責任や運営主体のあり方を含め、レジデンス事業の再構築、芸術・文化を活用した新たな地域活性化方策について検討中。

＊ 自治体名　茨城県守谷市
＊ 人口　62,817人
＊ 面積　35.63Km^2
＊ 事業開始年度　平成6年度
＊ 事業主体　アーカスプロジェクト実行委員会

連絡先

守谷市総務部企画課
TEL 0297-45-1111（333）　FAX 0279-45-6529
URL http://www.arcus-project.com/jp/

茨城県東海村　アートロード展

①水戸市と日立市のほぼ中央に位置する本村には、在住・在勤の美術作成愛好家が、アートロード会員として集まった。昭和62年度の事業開始時には、村に美術館を建設することに繋げるという目標があった。平成6年度からは、東海ステーションギャラリーが開館し、村に展示施設が出来た。現在は、暮らしの中で芸術に触れる機会を増やすことを目標に積極的に活動している。

②「暮らしの中の美術館」をテーマに、芸術の街「アートロード」づくりを目指している。芸術作品を展示会場へ観に行くという従来の考えにとらわれず、街並みを展示館に見立てることで、憩いのひとときを味わってもらうとともに、芸術への理解を深める。村民が日頃利用している繁華街の道路に沿った商店などの協賛店舗・金融機関・事業所や役場庁舎のロビー・壁面に、会員が創作した美術作品を約3ヶ月にわたり展示する。その他、東海ステーションギャラリーでの展示を行っている。展示活動を行うのみではなく、過去の展示作品等は「アルバム」として後援をもらっている東海村文化協会ホームページ上に掲載してもらうなど、ウェブ上での広報活動も広く行っている。また、役場庁舎や文化センターに設置する「アートロード展」と記載した大きな看板は、来訪者への強いPRとなっている。

③身近な場所で美術に触れることができるようになり、東海村の文化のまちづくりに寄与している。平成24年度事業で、25周年記念事業として、子ども達に創造の楽しみを体験してもらい展示することで、アートロードの取組みが広がる、体験型の展示事業のキッズアートロードフェスティバルを開催予定である。

④「絵画」「写真」というような一分野にとらわれるのではなく、約3ヶ月間にわたり「書」「写真」「華道」等さまざまな芸術分野の展示を行っていること、また、村には文化協会という大きな文化団体があるが、本会は事業の趣旨に賛同した個人会員、事業者の協力により成り立っている。事業の趣旨を理解してもらい、協賛店舗の確保や、事業経費の助成を得ることに苦労した。現在は、公益財団法人東海村文化・スポーツ振興財団より文化振興費の助成を受けている。

⑤会員の高齢化が進んでいるので、若手会員の確保と協賛店舗数を増やすことによる展示スペースの確保の取組みが課題である。

＊ 自治体名　茨城県東海村
＊ 人口　37,837人
＊ 面積　37.48Km^2
＊ 事業開始年度　昭和62年度
＊ 事業主体　アートロード実行委員会（東海村文化協会、東海村教育委員会後援）

連絡先

東海村政策推進課（生涯学習課）
TEL 029-287-0854（0851）　FAX 029-287-0317
URL http://league.bunka-tokai.org/pdf/artroad/artroad_top.pdf

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

栃木県足利市　まちじゅう美術館

①「足利花火大会」は明治に創始され、北関東で最も伝統があると言われる大会であり、現在も市民が主体となって実施されている点も含め、夏の風物詩として広く親しまれている。この大会の実施にあたり、まちの雰囲気を盛り上げ、PR する一環として本事業を実施した。

②花火大会 PR を目的として、花火をテーマとした小学生の絵画コンクールを行う。
本事業は市民が主役となって実施されており、応募作品は市内店舗のショーウィンドウに展示することで花火大会の期待感が高まるとともに、作品展示店舗に親子が訪れることで町の賑わい創出や、郷土愛醸成といった効果も見込まれている。
事業実施体制として、足利市教育委員会の後援のもと、全小学校に応募依頼を行うとともに、作品展示店舗を募集する。その後、作品を店舗に届け、自分の作品の展示場所を記載した葉書を送付する。花火大会前後の約１ケ月間展示した後、市内小学校の教諭による審査会を開催し、特選や金賞、佳作などの232点を選定する。特選作品は花火ポスターに採用するほか、特選・準特選の４作品を絵葉書にすることで、来年度の花火大会 PR につなげる。
平成23年度実施内容応募点数：6,370点（市内全小学校、足利特別支援学校から応募）応募率：78%
展示期間：平成23年７月23日～８月21日（30日間）
展示箇所：318箇所（市内商店、大型店、金融機関、公共施設等）
入賞点数：特選１点、準特選３点、金賞、銀賞、佳作（合計232点）

③多くの店舗のショーウィンドウに飾られた作品が、花火大会への期待感を高めることで、イベントの PR という効果に加え、小学生らしい元気溢れる作品が町に広がることによる景観向上や賑わいにつながっており、展示店舗としても多くの方が訪れることによる経済効果も生まれている。
また、小学生と商店主のふれあいが生まれることで、まちに明るい雰囲気が生まれることとなり、市民が主役の花火大会としてより身近な形で郷土愛の醸成に繋がる。

④本事業には小学生の約80%が応募し、花火大会の運営等も含め、商工会議所が主体となった実行委員会によって実施されるなど、市民が主役の事業として広く親しまれ、認知されているものの、作品展示店舗の新規開拓に苦心しており、意義やメリットを説明し、協力いただいている。

⑤小学校からは、事業の趣旨を理解した上で参加しているため、作品展示店舗の新規開拓に今後も注力していくことで、より多くの市民に親しまれる取組みとなるよう取組みたい。

＊ 自治体名　栃木県足利市
＊ 人口　152,451人
＊ 面積　177.82Km²
＊ 事業開始年度　昭和52年度
＊ 事業主体　わたらせ・サマー・フェスタ実行委員会（足利商工会議所）

連絡先
足利市政策推進部企画政策課
TEL 0284-20-2110　FAX 0284-21-1384
URL http://www.ashikaga.info/

群馬県前橋市　駅家（うまや）の木馬

①前橋市では平成19年度から美術館構想をスタートさせ、平成25年度中の開館に向けて芸術文化施設の開設準備を進めている。また、平成23年度に行われた群馬 DC に際して、市街地での幅広い世代間や、地域内外の人々の交流の機会をつくるため、前橋在住の美術家・白川昌生が書いた「駅家（うまや）の木馬」物語をもとに、地域の商店街や教育機関と連携したアートプロジェクトを実施した。

②前橋の史実をもとに中心市街地を機軸にして文化人や地場産業、観光資源を結び付けてひとつの歴史小説をつくり、群馬 DC 時に実施することで、前橋の観光産業を盛り上げること。また、前橋市民に対する芸術文化活動の啓蒙、芸術文化施設の開館に向けた機運の醸成などを目的とした。平成23年８月、中央公民館で開催された子ども向けイベントと、中心市街地に位置する中央小学校・桃井小学校で、子どもたちが小さな木馬に色を塗るワークショップを実施。平成23年９月には、商店街を中心とした中心市街地において、ワークショップで制作された小さな木馬4体と物語で登場する弁天様とお付に扮した子どもが乗るための大きな木馬１体を引きまわすお祭りを実施した。中央公民館で開催された子ども向けイベント、中央小学校・桃井小学校のいずれのワークショップにも、約40名の子どもたちが参加した。木馬まつり当日は音楽隊とチンドンの演奏もあり、賑やかな雰囲気の中、観客とスタッフを含めて延べ約800名の市民が参加した。

③木馬まつり当日は、木馬に乗ることを楽しみにしていたワークショップ参加者も数多く訪れ、同伴していた家族とともにお祭りを楽しむ姿を幾つも見かけることができた。また、木馬まつり開催中に地域の商店から差し入れをいただくなど、少しずつではあるが、地域住民の理解を得られてきている。参加者から翌年度も継続的に実施してほしいという声も多く、今後、地域に根付く活動として広がりを見せる可能性は高い。

④「駅家の木馬」物語と市内の名所やお店めぐりのマップを掲載した冊子を無料で配布し、地域の情報を見やすく、わかりやすい形で提示できた。今年度はまだ、継続的な事業を実施するための資金繰りが出来ていない。補助金・助成金以外での運営予算の獲得方法を検討中である。

⑤運営予算にしてもそうだが、運営スタッフ側の人材育成もあわせて行なっていく必要がある。地域で活動する文化団体や NPO 法人、商店街の人たちとともに、協働で企画運営ができる体制を整えたい。

＊ 自治体名　群馬県前橋市
＊ 人口　338,365人
＊ 面積　311.64Km²
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　駅家（うまや）の木馬まつり実行委員会・まえばしフェスタ実行委員会

連絡先
前橋市政策部文化国際課芸術文化推進室
TEL 027-898-5825　FAX 027-221-5717
URL http://artsmaebashi.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

群馬県渋川市　芸術文化プロデューサー事業

①芸術文化プロデューサーは、専門的見地から見た本市の文化振興への提言、文化関連事業への協力、その他文化行政全般に係る指導・助言を行う、本市にゆかりのある文化·芸術に関する専門家である。平成21年度に任命し、陶芸教室、セラミックアート教室を単年度事業で行ってきた。平成23年度、区画整理事業で四ツ角まんなか公園を整備するにあたり、渋川市文化行政基本構想の基本方針の一つ「愛着とほこりのもてるまちづくりを進める」の一環として、渋川市芸術文化プロデューサーを活用した公園整備に取り組む事となった。

②公園づくりに文化的視点を取り入れ、市民参加型の公園づくりに取り組むことを目的とし、実施にあたっては、小学生の親子連れを中心に市民100人の参加を募り、親子のふれあいの場を提供した。芸術文化プロデューサーを講師に迎え、市の花、紫陽花をデザインした陶板を作成し、焼き上げ、当該公園の日本のまんなかモニュメントの周囲に設置した。焼き上げた陶板は、市のイベントに併せて展示会を行いイベントとの相乗効果を図った。平成23年度は、陶板教室を計４回開催し、陶板の作成から、公園設置までを行った。子供には、花びらを重ねる作業が難しく苦労している様が見られたが、親子で協力して作品を作り上げるなど随所でほほえましい光景を見る事ができた。

③現役の一流芸術家から指導を受ける事で、文化芸術を身近に体験する事ができ、感受性豊かで文化的視野を身につけるきっかけ作りをする事ができた。日本のまんなかモニュメントとのコラボレーションを行う事で、日本のまんなか、へそのまちなどを市民に根付かせる事ができた。市の花をモチーフにする事で紫陽花に愛着を持たせる事ができた。

④参加者の感想やメッセージをQRコード化し、作品に焼き付けを行った。公園を訪れた人が携帯でコードを読み取ると、それらを読む事ができる。地元や関係課との調整や公園の活用方法についての検討に時間を費やしたが、単年度事業で参加者固定のため、継続についての問題点は特にない。

⑤導入段階から３年間の事業として実施し完了した。今後、市内の施設整備等の機会を捉え、芸術文化プロデューサーを活用した事業を計画したい。現在は、陶芸関係者２名であるため、他分野の文化人を入れるなど委嘱者の増員も検討していく。

＊自治体名　群馬県渋川市
＊人口　83,485人
＊面積　240.42Km²
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　渋川市企画部企画課

連絡先
渋川市企画部企画課
TEL 0279-22-2396　FAX 0279-24-6541

埼玉県さいたま市　アートストリート整備事業

①さいたま市中央区の地域資源の一つである「彩の国さいたま芸術劇場」（以下「芸術劇場」という。）を、市民により身近にするため、第３期中央区区民会議から、JR与野本町駅から芸術劇場までのアクセスであるたつみ通りに芸術劇場出演者の手形・サインを設置し、賑わいを創出しようとする「アートストリート事業」の提言が平成20年度に提出され、その後、アートストリート整備事業が開始される。

②JR与野本町駅から芸術劇場までの主要なアクセスルートを、劇場への誘導や芸術的雰囲気を演出する「アートストリート」として整備する。JR与野本町駅から芸術劇場までの主要なアクセスルートのへ入口である、与野本町駅前公園にはさいたま市中央区の区の花である「バラ」や芸術劇場をイメージするバナーを設置し、たつみ通りには芸術劇場で上演する「彩の国シェークスピアシリーズ」の出演者の手形とサインをレリーフとして作成設置するなど、アートストリートとして芸術的雰囲気が演出できるような整備を行う。

平成23年度

○与野本町駅前公園内
バナー及び掲揚ポール設置

○たつみ通り沿い
芸術劇場出演者サイン手形レリーフ、「彩の国シェイクスピアシリーズ」解説板設置

③バナーを設置した駅前公園では、芸術劇場へのアクセスを印象付け、レリーフを設置したたつみ通りでは、それまで素通りした芸術劇場への来訪者を、レリーフ設置場所で見学させることで、周辺ににぎわいを創出する一助になっている。

④手形レリーフの対象者は、芸術劇場で上演される「彩の国シェークスピアシリーズ」各作品の主役を演じた俳優をはじめ、芸術監督の蜷川幸雄氏など、著名な方が多い。芸術劇場出演者の手形採取にあたり、対象者の範囲を絞込むことや、芸術劇場担当者との調整協議、俳優及びマネージャーとの日程調整など。

⑤与野本町駅前公園・たつみ通りのアートに浸れる空間を創出するための整備を検討。平成23年度以前に芸術劇場で上演された「彩の国シェークスピアシリーズ」各作品の主役を演じた俳優の手形レリーフの作成。

＊自治体名　埼玉県さいたま市
＊人口　1,241,010人
＊面積　217.49Km²
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　さいたま市

連絡先
さいたま市中央区役所区民生活部コミュニティ課
TEL 048-840-6020　FAX 048-840-6161

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

埼玉県春日部市　「粕壁宿」景観再生事業

①春日部市は、かつて日光街道第四の宿場町として栄えてきたが、当時を思わせる蔵造りの建造物の数も少なくなってきており、市民や来街者にもそのイメージは薄れつつある。しかしながら、粕壁宿は、本市のルーツでもあり、貴重な地域資源でもあることから、改めて粕壁宿に光をあてることで、まちのにぎわいの創出につながることを期待した。

②春日部駅東口地区の歴史的な建造物や風景など、宿場町情緒を生かした景観を創出することにより、景観力を向上させ、市民及び来街者に市の歴史的資源「旧宿場町」の魅力を視覚的にアピールする。春日部駅東口商店街連合会の商店の中から、希望する商店等を募り、その商店のシャッターや壁面に粕壁宿をイメージさせる絵を描く。なお、施工費用については、約3分の1を自己負担、3分の2については、補助金を活用している。平成23年度には、市補助金、県補助金を活用し、現在30店舗のシャッターや壁面にシャッターアートが描かれている。

③この事業により、各店舗のモチベーションが上がってきている。シャッターアートを利用して商売につなげる工夫を始めた店舗や、シャッターアートにより、店の利用者だけでなく、通りがかりの人からも声をかけられるなど、市民との触れ合いの機会を創出している。また、新聞やNHKの情報番組にも放送されるなど、マスコミを通じて、「粕壁宿」が効果的にPRされた。今後も様々なメディアに取り上げられ、まちのPRにつながることを期待する。

④この事業をきっかけに関係者同士での勉強会が開催され、シャッターアートの活用方法や今後の展開を検討し始めるなど、商店街活性化に向けて動き出すなどの活力が生まれ始めている。当初は、自己負担が生じることもあり、各商店に事業の趣旨を理解してもらう点について苦心したが、実施した店舗が増えるにつれ、希望する店舗が増えてきている。

⑤より多くの人にシャッターアートを実際に目にしてもらうことが課題といえる。そのためには、シャッターアートを活用したまち歩きツアーを定期的に開催するなど、PR事業を展開していきたい。

＊自治体名　埼玉県春日部市
＊人口　240,233人
＊面積　65.98Km²
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　春日部駅東口商店会連合会

連絡先

春日部市総合政策部政策課
TEL 048-736-1111　FAX 048-734-3846
URL http://www.kasukabe-cci.or.jp/image_top/catalog.html

埼玉県朝霞市　朝霞アートマルシェ

①朝霞市では、東武東上線朝霞駅周辺のにぎわいをつくるため、「アートのあるまち朝霞」を目指した運動に取り組んでいる。平成21年度からは、朝霞TMOが事業主体となり、商店会等の活性化を目的とした「朝霞アートマルシェ」を開催している。これは、朝霞駅周辺中心市街地活性化の取組の一環として、朝霞駅周辺地区のまちづくりや商業等の活性化のために、中心市街地の3つの商店会が中心となり取り組む事業をまとめた朝霞TMO構想の事業の一つである。朝霞駅前広場（南口・東口）において、市内外の若手アーティストや芸術サークルなどの文化活動を支援するイベントを開催することで、中心市街地のイメージアップや魅力づくり、市民相互の交流促進をはかっている。

②アート作品の展示や販売の場を提供することにより、市内外の若手アーティストなどの文化活動を支援するとともに、「アートのあるまち朝霞」の実現を目指した朝霞駅周辺地区のイメージアップや魅力づくりの一助とし、朝霞駅周辺地区の活性化・集客力の向上につなげる。毎年10月に朝霞駅前広場を会場に、出店者自らが製作した手づくりアート作品を展示し販売する「市」（いち）を開催している。そのほか、工作教室や絵の展示、子ども向けイベント（道路にお絵描き他）や音楽コンサート、路上パフォーマンスなども企画している。高校生ジャズバンドによるコンサートなど様々な催し物が企画・実施され、朝霞駅のホームからもにぎわう声が聞こえるなど芸術の秋を楽しむことができるイベントである。

③道路にチョークで絵を描くことができるブースを設けるなど、大人も子どもも楽しめるアートなイベントであり、「10月は朝霞でアートマルシェ」として定着しつつあり、開催を心待ちにしているとの声があるなど好評である。このイベントを続けることで「アートのまち朝霞」のイメージが広がることを期待している。

④イベント会場と商店会を巡るスタンプラリーを実施している。参加者には、朝霞ブランド品などの景品をプレゼントしており、商店会と朝霞ブランドを一度にPRできる絶好の機会と捉えている。現在、市の補助金を支出しているが、今後は協賛スポンサーを募集するなど自主財源の確保が必要である。

⑤イベントも4年目を迎え、市民に定着してきていることから、今後は市の補助金に頼らず運営できるよう、参加者の意見等を積極的に取り入れて、お金のかからないイベントにしていきたい。

＊自治体名　埼玉県朝霞市
＊人口　131,203人
＊面積　18.38Km²
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　朝霞TMO（朝霞市商工会）、朝霞駅前商店会、朝霞本町商店会、仲町商工振興会ASAKAアートスクール、朝霞市文化協会、アトマンモス、朝霞市

連絡先

朝霞市産業振興課
TEL 048-463-1903　FAX 048-467-0770
URL http://www.asaka-sci.or.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

埼玉県北本市　地域資源を活用したまちづくり事業

①北本市では、平成20年度から、日比野克彦氏による「明後日朝顔プロジェクト」への参加を契機として、ソフト型のアートプロジェクトを実施している。平成23年度より、所管を生涯学習課から産業観光課に移し、文化振興としての取組みから、市の知名度向上や観光客の集客等を目的に市内の地域資源を活用した、地域活性化の取組みとして事業を実施している。

②地域活性化に繋げていくため、現代アートを通じて、地域資源を活用した、市民と行政の協働によるまちづくりを推進し、北本市の知名度向上、魅力アップを進める。北本市の特徴である雑木林や、地域に点在する空き地・空き家や、地域で活躍する住民等を「地域資源」と捉え、これらの地域資源にアーティストが関わることで新たな活用方法を提示し、地域の活性化に繋げていくための取組「おもしろ不動産」事業を実施している。平成23年度の取組として、雑木林の中に1日限りのレストランというコンセプトでカフェの出店や音楽イベント等を開催する「森のレストラン」や、駐車場をアトリエとして、全長50mの腕時計を制作・展示する「World Record Watch」などを開催した。平成24年2月に開催した「おもしろ不動産お披露目会」では、5,000人以上の参加者を集めたほか、平成23年度全体を通して1万人以上の参加者があった。

③おもしろ不動産事業を市内各地で通年実施することで、住民が地域の魅力を再発見することができた。また、目新しい取組みであることから、数多くのメディアに取り上げられ、北本市の知名度が向上した。さらに、現代アート関係者からも注目され、活動場所やアトリエを求めて新進アーティスト数名が市内に移住した。

④本事業は、北本市や周辺出身の若者が中心となって組織されたNPO法人キタミン・ラボ舎によって運営されている。キタミン・ラボ舎は、アートプロジェクトの中心的なメンバーとして、また、まちづくりへの参加を希望する市民とのつなぎ手としての役割を担っている。地域住民、市議会議員、関係団体に事業を理解してもらうことに苦心している。

⑤主に市からの委託料で事業を実施しており、事業経費の確保に苦慮している。また、運営しているキタミン・ラボ舎のメンバーも人数が少なく、活動実施に苦慮していることから、財源や運営の協力者確保が必須であり、活動実績を積み上げ、協力者を増やしていく。

＊自治体名　埼玉県北本市
＊人口　69,656人
＊面積　19.84Km²
＊事業開始年度　平成20年度
＊事業主体　NPO法人　キタミン・ラボ舎

連絡先

北本市市民経済部産業観光課
TEL 048-594-5530　FAX 048-591-1244
URL http://kitaminlabo.com/

千葉県館山市　青木繁「海の幸」を活かしたまちづくり

①青木繁の代表作「海の幸」（重要文化財）は、1904（明治37）年、館山市布良の小谷家で制作された。この小谷家住宅（館山市指定文化財）を、当時の姿に復元し保存することと、その公開を計画するNPO法人青木繁「海の幸」会（東京）が、地元の青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会と連携し、文化財保存活動を展開している。

②青木繁「海の幸」に関係する文化遺産を活用したまちづくりを目指し、市民や来訪者がくつろぎ、楽しめる空間を創出する。青木繁が「海の幸」を描いた館山市富崎地区を中心に、歴史・文化遺産を案内するガイド養成や、生活文化や日常の課題などを語り合える機会を設け、市民が生きがいをもって活躍できる場づくりを推進する。また、青木繁「海の幸」を顕彰し、「海の幸」が制作された小谷家を当時の姿に復元し保存することと、その公開を確かなものにする機運を醸成する。地域の文化遺産に対する認識が深まり、それらの保存等を通して、地域の活性化を目指そうという住民の意識向上を図ることができた。また、積極的に情報発信をしたことにより、来訪者数が大きく増えた。

③昨年2011年は、青木繁没後100年にあたり、福岡県久留米市の石橋美術館・京都国立近代美術館・東京のブリヂストン美術館で「青木繁展」が開催された。それにあわせて、当事業の情報発信を行ったところ、遠方からの来訪者が大幅に増えた。また、青木繁生誕の地、福岡県久留米市との市民レベルの都市間交流が深まり、ネットワークの輪を広げることができた。さらに、青木繁「海の幸」を活かした地域活性化を探る、さまざまなアイデアが地域住民から提案された。

④地域住民、NPO法人、行政とのコミュニケーションが活発化し、協働によるまちづくりの推進に貢献している。事業立ち上げの前段階で、地域住民に事業の主旨を理解してもらうことに時間がかかった。そのことは、事業取り組みの実質的な初年度となる平成23年度に、実際に事業を推進していくなかで、理解を図ることができた。

⑤取り組みは、文化庁の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業を活用して実施されているが、平成25年度で補助が終了する。また、文化財保存活動のための基金は、現在の景気状況等により、計画通り進捗していない。さらに、官民の連携を強め、目標の実現のために、取り組みを進めていく。

＊自治体名　千葉県館山市
＊人口　48,775人
＊面積　110.22Km²
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　NPO法人青木繁「海の幸」会、青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会

連絡先

館山市教育委員会生涯学習課
TEL 0470-22-3968　FAX 0470-22-6560
URL http://uminosac.web.fc2.com/　http://aoki-shigeru.awa.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

千葉県木更津市　まちごと浮世絵ミュージアム

①みなと木更津再生構想推進協議会では、平成19年度から、歴史を活かしたまちづくりとして「まちごと浮世絵ミュージアム」事業を実施している。駅前の大型店舗や駅西口地区に点在する古い店舗に、みなとまちの情緒あふれる鳥瞰図（ちょうかんず）や、本市の郷土博物館に残る「浮世絵」をモチーフとした壁画・パネル等を作成・展示し、新たな観光スポットとすることにより、まちなかの回遊性を向上させ、地域の賑わいを取り戻すことを目的とした取組みを実施している。

②地域の歴史を活用した景観の形成、観光スポットの創出によるまち歩き促進、回遊性の向上を目指すものである。市内の博物館「金のすず」が所蔵する「切られ与三郎」など、地域にゆかりある人物の浮世絵をモチーフとした壁画等を地元高校生に依頼して作成する他、市内に現存するレトロな建物に、約80年前の鳥瞰図と近隣の昔の写真を組み合わせたパネルを作成・展示することで、当時の雰囲気を偲（しの）ばせる空間を創出する。少しずつではあるが、設置場所に観光客が立ち止まって眺める様子を見られるようになり、地元住民と観光客の交流する機会ができている。

③本事業に積極的に協力をしている店舗が、国の登録有形文化財として登録されたこともあり、「歴史のまち」として少しずつ知名度が上がっている。また、地元小学校などと連携し、地域教育に活用した例もあるので、今後は地域住民に対しても、自分たちのまちを知ってもらう機会を提供していく予定である。

④地域の商店、学校教育機関を巻き込んで、埋もれている地域の宝物を歴史ある景観としてまちなかに表出させている。鳥瞰図と昔の写真を組み合わせた「鳥瞰図パネル」を作成するにあたっては、地元の商店等を回り、取材を重ね、写真提供を受けている。このことにより、地域の本事業に対する理解も向上しつつある。平成24年度は、地区内にある金融機関の協力により、新たな作品が展示される予定である。

⑤郷土博物館が所蔵する、木更津を舞台に描かれた浮世絵の数に限りがあるため、今後は他市の博物館等から借りるなど、事業継続に向けて検討を行っている。また、浮世絵壁画の展示場所に限りがあることから、設置に協力してもらえるよう、近隣の店舗に依頼する予定である。

＊ 自治体名　千葉県木更津市
＊ 人口　130,119人
＊ 面積　138.73Km^2
＊ 事業開始年度　平成19年度
＊ 事業主体　みなと木更津再生構想推進協議会（事務局：木更津市）、千葉県立木更津高等学校美術部

連絡先

木更津市企画部みなと再生推進課
TEL 0438-23-8078　FAX 0438-23-9338
URL http://www.city.kisarazu.lg.jp/14,750,40,267.html

千葉県柏市　ＪＯＢＡＮアートラインかしわ

①アートをキーワードとして相互に関わりあい、常磐線と沿線地域のイメージアップと活性化を図ることを目的とするJOBANアートライン協議会（台東区・荒川区・足立区・葛飾区・松戸市・柏市・我孫子市・取手市・東京藝術大学・JR東日本支社）の設立を契機に、柏駅周辺商業関係者及び市民有志で「JOBANアートラインかしわ実行委員会」が組織された。

②常磐線沿線のイメージアップと、柏市がより一層、文化的で創造的な街として再構築され、「住んでみたい街」「住むことを誇れる街」としてシビックプライドを高めることを目指している。10～11月をアートライン月間として、各種展示、ライブペイント、ワークショップ、演劇、シンポジウムなどを開催。他、５月に開催される柏市民活動フェスタへの参加や、摘水軒記念文化振興財団助成事業の募集、対象選定、実施を行っている。活動開始から６年を経て、秋のライブペインティングなどは、もはや風物詩として定着している。そして、委員会の参加希望者や会に賛同する団体が年々増えており、また、学校教育と連携した取り組みや、イベントでは商業施設やホテル、証券会社から展示場所を提供されるなど活動の輪が広がっている。

③これまで柏駅周辺の中心市街地は、主に百貨店を中心とする商業店舗の集客により活性化されてきたが、新たにクリエイティブな創作活動という別なアプローチが加わることで、街なかにアートの拠点が生まれ文化的な街としての認識が高まると共に、幅広い年代・ジャンルの市民がまちづくりの主体としての自覚を持つものと期待される。

④平成22年から江戸川大学社会学部ライフデザイン学科と連携して、アートラインプロジェクトを通じたまちづくりに関する活動を共に行っている。また、Ｊリーグ柏レイソルのゲートデザイン、ホテルやデパート、店舗など柏ならではの地域資源を積極的に活用している。運営資金について、全体運営及び自主事業に係る費用が膨らまないよう留意しながら、コンパクトな安定運営となるよう心がけている。

⑤安定的な活動資金の調達及び組織作りが課題。今後は、訪れた人が他の地区も回遊できるような仕組みづくりのために、①常磐線沿線のアートラインプロジェクトとの連携②つくばエクスプレス沿線地域を含めたアートによる地域活性プロジェクト「ARE（Art Round Eastの略）」の参画・運営を展開していきたいと考えている。

＊ 自治体名　千葉県柏市
＊ 人口　404,252人
＊ 面積　114.9Km^2
＊ 事業開始年度　平成18年度
＊ 事業主体　JOBANアートラインかしわ実行委員会

連絡先

柏市企画部企画調整課
TEL 04-7167-1117　FAX 04-7167-6644
URL http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/toshiken/design/index.htm

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

東京都新宿区　新宿クリエイターズ・フェスタ2012

①新宿区は、新宿駅周辺及び歌舞伎町を中心に多くの人で賑わっており、訪日外国人にも大変人気がある。また、新宿は多くの文化人や芸術家を輩出してきた文化·芸術·芸能のまちでもある。昨年、こうした特性を活かし、このまちに新たな賑わいと活力を創出することを目指したアートイベント「学生クリエイターズ・フェスタ in 新宿2011」を開催した。本年は、イベント内容をより充実させ、会場を駅周辺に拡大した「新宿クリエイターズ・フェスタ2012」を開催し、昨年以上の効果を上げる。

②（1）まちの魅力づくり、イメージアップを図り、新たな賑わいと活力づくりに取り組む。
（2）区民及び来街者が文化芸術に触れる機会を提供するとともに、若手芸術家等の発表の場を創出する。

【平成23年度】
期　間：平成23年10月15日～23日
会　場：新宿駅東口・モア４番街、歌舞伎町
内容等：学生アート・コンペティションを中心に実施
集客等：延24万５千名の観覧者

【平成24年度】
期　間：平成24年８月24日～9月２日
会　場：新宿駅周辺全域
内容等：学生アートに加え、著名芸術家の特別展や映像制作関係者によるセミナー、親子で楽しめるアートイベント、学生のアートフェスタ等を実施
集客等：延29万６千名の観覧者

③昨年は、駅東口から歌舞伎町までの通りや広場を活用して実施した。これにより、人の動線を作り、回遊性を向上させることで、まちに新たな賑わいと活力を創ることができた。本年は、事業内容を充実させ、会場を駅周辺に拡大したことから、より大きな効果を得ることができた。また、協力する主体が増えており、今後、イベント規模の拡大や集客の増大が期待できる。

④区、地元商店街、民間企業、大学・専修学校、芸術家等が強く連携して開催する一大アートイベントである。また、イベント会場は、公共の空間・施設、協力可能な民間施設を有効活用している。昨年、延24万５千人の観覧者を得たが、知名度が依然低く、協賛金集めに苦心したが、本年は、著名芸術家等の協力を得て内容をより充実させたことで、昨年以上の協賛企業を得ることができた。

⑤【課題】多くの企業が協賛しているが、予算確保は将来的に不透明である。企業広告を多数掲出するなど、協賛メリットを用意することで協賛企業を確保していく必要がある。全国各地でアートイベントが多数開催され、また、大量の情報が溢れる中、いかに本事業の知名度を上げ、多くの人に来場してもらうかが課題である。
【今後の展開】①、②を克服し、イベント内容を毎年充実させながら、都内有数のアートイベントとしていく。

＊自治体名　東京都新宿区
＊人口　318,936人
＊面積　18.23Km²
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　新宿クリエイターズ・フェスタ2012実行委員会、新宿区

連絡先
同フェスタ実行委員会事務局（新宿区区長室特命プロジェクト推進課内）
TEL 03-5273-4220　FAX 03-5273-3931
URL http://www.sccf.jp/

東京都台東区、墨田区　GTS（東京藝術大学、台東区、墨田区）観光アートプロジェクト

①東京藝術大学から台東・墨田両区（昭和52年姉妹都市提携）に対し、東京スカイツリーと浅草を結ぶ隅田川両岸エリアに、新たな観光アートラインの形成を目指すプロジェクトの提案があった。東京スカイツリーの建設に伴い、墨田区では「国際観光都市すみだ」にふさわしい新しい観光ネットワークの構築を進めており、また、従来より東京藝術大学と連携して事業を実施している台東区でも、「国際観光都市」として、東京スカイツリーの開業を絶好の機会と捉えた観光施策を推進していたため、3者連携により、本アートプロジェクトを平成22年度から3か年計画で実施することとなった。

②東京スカイツリーと浅草を結ぶ地域において、観光の視点を採り入れたアートプロジェクトを実施することで、地域の芸術環境を充実し、新たな賑わいを創出する。また、東京スカイツリーを訪れる観光客の回遊性を高め、まち歩き観光を推進する。（1）東京スカイツリーのビューポイントにアート作品を設置し、新たな回遊ルートを造成する。【アート環境プロジェクト】（2）東京藝術大学生や国内外のアーティストによるアートイベントや、コンサート、地元小学生等が参加するワークショップなどのイベントを実施した。【隅田川 ArtBridge】。実施状況については、（1）平成22年度から始まり、本年が最終年。毎年、アート作品２基を各区に設置し、現在、両区で９基設置されており、平成24年度末には両区で12基となる。（2）隅田川 ArtBridge では、地域の歴史や文化をアートによって捉え直す質の高いプログラムを数多く展開している。

③本事業によって設置したアート作品はその斬新なデザインと実施主体の特有性から新たな観光拠点創出の一翼を担っている。また、複合的に実施しているアートイベントにより、地域の文化的土壌が醸成され、芸術文化発信の拠点ともなっている。今後、東京スカイツリーの観光客が隅田川両岸エリアを回遊する仕掛けとして大きな可能性を有している。

④隅田川両岸エリアにおいて、東京藝術大学が制作するアート作品や各種イベントにより観光のアートラインが作られていること。作品のデザインと安全性を両立させることに苦心した。

⑤本事業が終了する平成25年度以降に、両区に設置したアート作品を効果的に観光や地域振興に結び付けていくことが課題であり、そのための体制等について3者で協議を進めていく。

＊自治体名　東京都台東区、墨田区
＊人口　台東区170,539人、墨田区250,676人
＊面積　台東区10.08Km²、墨田区13.75Km²
＊事業開始年度　平成22年度
＊事業主体　東京藝術大学、台東区、墨田区（3者でGTS観光アートプロジェクト実行委員会を組織）

連絡先
台東区文化産業観光部文化振興課　墨田区産業観光部観光課
TEL 03-5246-1146 03-5608-6500　FAX 03-5246-1515 03-5608-6934
URL http://gts-sap.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

東京都渋谷区　代官山インスタレーション

①ヒルサイドテラスの完成を機に、翌1999年、ヒルサイドテラスにギャラリーを構えるアートフロントギャラリー代表 北川フラム及びヒルサイドテラスオーナー兼住民の朝倉氏が将来の代官山を見据え、点ではなく代官山全体をつなぐソフトプログラムとして企画、11月に第1回展を開催。代官山のまちのさらなる価値向上とともに、都市における諸問題をも視野に入れて、次世代のまちづくりの在り方を代官山から発信する試みであった。

②まちの景観を材料に仮設アート作品を点在展示し、まちを回遊しながら作品を楽しむことを通して、人々の景観に対する意識の喚起・街並みの美化推進等を含めたまちづくりを実施。また、展覧会の運営により住民や来街者などのネットワークを構築する。世界レベルの審査員を立て、作品プランを国内外に公募。応募プランの中から審査で8～10点（予定）を選び、地域住民の協力を得て制作、展示する。会期中はワークショップや関連イベントを開催し、アートと街を媒介に多くの人を巻き込む機会を企画。行事名：代官山インスタレーション2011　行事期間：平成23年10月9日～10月30日　実施場所：代官山の街並み　実施状況：作品プラン応募数154点　期間中の各種イベント参加人数合計：約60人　展覧会の作品鑑賞者数は街並み（屋外）展示のため不明。

③2年に一度、12年間で7回の展覧会を開催し、代官山の文化的なまちの印象づくりに寄与。また公募展として、特に若い作家には、建築、アートの枠を超えて、認知度の高いものとなっている。周辺地域との関係では、理解と信頼が深まり、プライベートな場所はもとより代官山駅や公園、店舗など、公共性の高い場所での実施へと広がり、2005年には未利用だった都市計画道路の中央分離帯に作品が設置されたのを契機に、その後「ひまわりガーデン」として有効利用されるなど、他のコミュニティ活動につながる。

④都市におけるまちを舞台にしたアートの展覧会としての先駆的な活動であり、10年以上続いている点。ここ数年の経済状況により新たな企業協賛が困難であり、2009年からは個人寄附も呼びかけているが十分とはいえない。また、作品の設置においては都市の規範と様々ぶつかり合うため、粘り強い話し合いと十二分な安全対策を講じている。過去に事故を起さなかったことが実績となり地元の協力と信頼につながっていると考えている。

⑤活動の継続により知名度も上がり、若手作家の登竜門としてレベルの高いアーティストの参加が増えている一方で、質の高い作品実現のため資金面でのサポートの充実を図ることが課題である。

＊ 自治体名　東京都渋谷区
＊ 人口　200,595人
＊ 面積　15.11Km²
＊ 事業開始年度　平成11年度
＊ 事業主体　代官山インスタレーション実行委員会

連絡先

渋谷区都市整備部都市計画課都市計画係
TEL 03-3463-2619　FAX 03-5458-4915
URL http://d-insta.com/

東京都町田市　アートで彩る街　玉川学園

①町田市玉川学園は、「学校法人玉川学園」開設とともに文教地区として発展してきた街であり、文化、芸術、教育等の分野で著名人が住む街として知られ、ギャラリーも点在し地域住民の文化活動も活発である。商店街も文化的なイベントを開催しその一端を担ってきたが、商店街の設えは統一感がなく、地域住民が街づくりの中で求めているアートな街のイメージがそれほどない。そこで、商店街の設えを地域のまちづくりに添った形で演出し街全体に統一感を与えるとともに、アートで「楽しむ・楽しませる商店街」として商店街への集客力をアップさせようと事業が計画された。

②・商店街の設えを地域のまちづくりに添った形で演出し街全体に統一感を与える。
・商店街の景観と関連したグッズを製作し様々な形で利用することで「玉川学園」のイメージを内外にアピールし商店街への集客を図る。●「芝生の風（丘と緑と水）」をコンセプトとした街並み景観整備（既存街路灯をフラッグや学生製作作品で装飾／歩道にフラワーポットを設置／各店舗に統一的な看板を設置／学生によるお店のシャッターアート／グッズで製作した絵本に登場するオブジェやベンチを店舗前に設置／商店会管理の広場を整備）●整備した街並み景観と関連したグッズ（絵本、タオル、クリアファイル、地域小冊子）の製作。平成23年度に東京都（東京都新・元気を出せ！商店街事業補助金）と町田市（町田市新・元気を出せ商店街事業補助金）の補助金を初期投資的に利用し事業を開始した。整備された商店街の街並みを見るために、訪れる人が出てきた。

③商店街だけでなく地域の各種団体や学生との協働により事業を実施したことで、地元商店街への理解が深まり、商店街をより利用してくれるようになった。店舗看板やオブジェを見に来る人が増えた。今後も継続的に活動することで、より多くの人を玉川学園に呼び込み、商店街の活性化を図る。

④商店街だけでなく、地域の各種団体や学生との協働により事業を実施している。最初のコンセプトがなかなか決まらなかったが、何回も地域の人も交え話し合いを重ね解決していった。

⑤補助金は初年度しか出ないので今後の事業資金をどのように確保するか。また、店舗看板やオブジェを見に来る人をいかに店舗内へ呼び込むかが重要課題である。

＊ 自治体名　東京都町田市
＊ 人口　420,243人
＊ 面積　71.64Km²
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　玉川学園商店会、玉川学園南口商店会

連絡先

町田市経済観光部産業観光課
TEL 042-724-2129　FAX 050-3101-9615

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

神奈川県厚木市　アート楽市

①平成20年から行っている「にぎわい爆発！あつぎ国際大道芸」にアクセサリー作家が知恵と技を振り絞り小物などを展示・販売する手作りアートマーケットを開設している。個店を持たなくとも、作る楽しさ、販売する楽しさを市民みんなでわかち合い、街のにぎわいを創出することを目的に始めた。

②中心市街地の活性化における起爆剤として始まったあつぎ国際大道芸、さらに市民参加型のイベントを盛り込むことによって、市内外から中心市街地へ集客を図り、街のにぎわい創出と市内経済の活性化を目的とする。厚木に大道芸を見に来るだけではなく、市民参加型の手作りのアクセサリーや小物などを販売する『手作りアートマーケットを平成21年から実施しており、平成24年で４回目の開催となる。』１回目60ブース弱の出店者が現在では85ブースを超えている。

③趣味で作ったアート作品をみなさんに買ってもらうことで、販売意欲が増し、出店舗も年々増加し、地域としても活性化に繋がっている。最初は市外からの出店が多く厚木市民は興味本位でしかなかったものが、見て感じてできる手作りアートの輪が広がり現在は３分の１が厚木市民の出店者である。

④フリーマーケットとは違い、自分で創意工夫した作品を作り、販売すること。店舗数が増え、来客者も増加しているので時間を延長してほしいとの要望がある。（冬場のため夕暮れが早く時間を延ばすことで電気代が別途必要になる。）出店料等増やすことで、夕暮れの暗い時間でも、公園内を明るくし、転倒防止及び片づけを早くできる照明器具のレンタルを考えている。

⑤アート楽市は、店舗数の増加による場所の確保が難しく、雨天時の対応に苦慮する。今後は、市民協働による開催を展開して、年１回だけの開催ではなく、長期的に展示をした作品がアート楽市で集大成となるよう、さらには、アート楽市だけの単独開催が長期的に行えるように、手作りの芸術性を市内幅広く市民全体に広げ、芸術の街厚木となるようにPRしていきたい。芸術が認められた際には、手作りのお店がオープンでき、街の活性化としても期待したい。

＊ 自治体名　神奈川県厚木市
＊ 人口　224,038人
＊ 面積　93.83Km²
＊ 事業開始年度　平成21年度
＊ 事業主体　厚木市産業振興部商業にぎわい課

連絡先

厚木市産業振興部商業にぎわい課
TEL 046-225-2840　FAX 046-221-7790

神奈川県大和市　ＹＡＭＡＴＯイラストレーションデザインコンペ

①大和市では、文化芸術の素晴らしさや感動を伝えるための活動が、市民の手によって日常的に展開されているが、現在の大和市には、文化芸術の拠点となるホール、劇場、ミュージアムといった施設がない。このため、本市では、市民の文化芸術活動を内外に発信することが十分にできない状況にあった。

②アーティストとして活動したい、新たな挑戦をしたいと考える若い世代の発表活動を支援し、創造の担い手を発掘するとともに、これらの人材が持つ優れた才能を活用して、大和をイラストあふれる魅力的なまちに変えていくことを目的に実施する。このコンペでは、オリジナリティ溢れたイラスト作品を募集し、市内在住のイラストレーター・及川正通氏を中心とした３名の審査員による選考を経て、入賞作品を決定し、表彰を行う。入賞者については、翌年度の大和市のイベントのポスターなどを制作するイラストレーターとして起用し、市内外にその存在をアピールするとともに、イラストを取り入れた魅力的な生活空間の創出につなげていく。YAMATOイラストレーションデザインコンペ作品募集・出品数358点（うち入賞作品４点、一次審査通過作品43点）YAMATOイラストレーションデザインコンペ入選作品展・展示数47点（入賞作品４点、一次審査通過作品43点）、来場者数650人。

③若者の創造活動の意欲が喚起され、本市の文化芸術の活性化につなげることができる。
市政とのかかわりが薄い若い世代のまちづくりに対する関心を高めることができる。
入賞者が描いた作品を日常の生活空間の中に取り入れる取り組みを進めることにより、良質な文化芸術に触れる機会を創出することができる。
入賞者が、その後有名なイラストレーターになっていくことになれば、大和の文化的なイメージアップを図ることができる。

④コンペ入賞者を市の刊行物等のイラストレーターとして起用したり、「ぴあ」の表紙イラストで知られる市内在住のイラストレーター及川氏を審査員長に据えたりするなど、コンペへの期待感を高める取り組みを行っている。

⑤事業開始から２年目となる今年度は、初年度の入賞者たちに市のイベントなどで活躍の場を提供しながら、併せてコンペ自体の知名度、認知度を高めていく。

＊ 自治体名　神奈川県大和市
＊ 人口　230,439人
＊ 面積　27.06Km²
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　大和市

連絡先

大和市文化スポーツ部文化振興課
TEL 046-260-5222　FAX 046-263-2080
URL http://www.city.yamato.lg.jp/web/shakai/illustcompe.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

神奈川県湯河原町　中学校前歓迎塔整備事業（平成23・24年度継続事業）

①国道135号沿いに設置されている歓迎塔について、作成後30年が経過し老朽化が著しい為撤去するという意向は以前からあったが、撤去後どのようにするのか具体的な方策が決定していなかった。平成23年度に、湯河原ロータリークラブから陶板を寄贈するので歓迎塔を整備したらどうかという話をもらい、事業に着手したもの。

②湯河原へ来町してくれた方を歓迎し、また湯河原町へ足を運んでもらうよう、新たな湯河原町のシンボルとして設置。高さ3.8m及び2.5mの２面のコンクリート壁に、湯河原梅林の紅梅･白梅、湯河原名産のみかん、千歳川･新崎川の清流をモチーフとしてデザインされた陶板が取り付けられている。歓迎塔の周囲には芝を張り、樹木を植栽して、隣接するポケットパークには幕山の稜線をイメージしたベンチ等を設置し、くつろぎの空間を創出。熱海側の歓迎塔については、４件の広告が掲出できる形状になっている。２ヵ所の歓迎塔が整備され、見通しも良くなり、湯河原町への入口として観光客等を迎える形になっている。

③国道135号沿いに歓迎塔が整備され、来町者を迎え入れるシンボルが出来たことで、一つの玄関口が形成された。熱海側の歓迎塔は広告掲載により、観光客等が町内へ流入することが期待される。

④陶製のレリーフを取り付けた歓迎塔であることと、広告看板の掲出できる歓迎塔であること。歓迎塔を設置する土地の隣接地の管理者との折衝に時間がかかったが町側の要望に沿うような形で工事を進めた。

⑤歓迎塔周囲の清掃及び芝や樹木の管理を定期的に実施する。熱海側の歓迎塔の広告について、継続的に広告が掲出されるよう管理する。

＊ 自治体名　神奈川県湯河原町
＊ 人口　26,488人
＊ 面積　40.99Km²
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　湯河原町

連絡先
湯河原町まちづくり部観光課
TEL TEL 0465-63-2111（712） FAX 0465-64-0300
URL www.town.yugawara.kanagawa.jp

新潟県燕市　田んぼアート

①近年の農業情勢は担い手の減少、高齢化の進行や米価の引き下げ等により農村地域の活力の低下が懸念されている。一方、農業農村は食料を安定的に供する食糧基地であるとともに多面的機能を有する資源であると位置づけられている。このことから地域の方々に少しでも農業を理解し、農業農村の素晴らしさを認識していただく場を提供し、アートを利用した田んぼの多面的機能を広くPRする取り組みを実施している。

②燕市の地域における「安全・安心な米作り」の推進を図る一環として、農地を景観的に活用することによって地域住民が農業にふれあう場を提供し、農業や農村が有する多面的な機能を広くPRするとともに農業の素晴らしさを普及することを目的とする。参加者に昔ながらの稲作（手植え・手刈り）を体験していただき、田んぼをキャンバスに見立て、古代米など色の異なる４種類の苗を使用し、絵や文字を表現する。毎年テーマを考えデザインを変え開催しており、見学会を実施することにより、年を重ねるごとに参加者並びに見学者が増えている。

③活動６年目を迎え、地域住民が昔ながらの農業を体験できることや、田んぼに絵や文字を表現することができ、アートで田んぼの多面的機能をPRする取り組みは好評で、８月に開催された見学会や秋の稲刈りについても参加者が増加している。今後は、さらなるPRに取り組み、農家・地域住民・学校等との交流を発展させて行きたい。

④アートのテーマやデザインは、合併した３市町の地域にちなんだものや、時代背景を考えたデザインとしており、毎年新しいデザインやテーマとなっている。事業開始当初は、地域住民の参加が少なかったが、広報誌やマスコミに取り上げられ、PRも順調に進み年々参加者の増加が見られる。

⑤活動６年目を迎え、マンネリ化を招かないようにテーマや実施方法を関係機関と協議し実施する方向でいる。

＊ 自治体名　新潟県燕市
＊ 人口　82,763人
＊ 面積　110.94Km²
＊ 事業開始年度　平成19年度
＊ 事業主体　燕市景観作物推進協議会

連絡先
燕市農林部生産振興課
TEL 0256-97-2111 FAX 0256-97-2115

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

新潟県上越市　アート看板プロジェクト事業

①上越市浦川原区の月影地区にある横住集落（41戸）では、地域のシンボルである小学校の閉校が決まり、過疎と高齢化、少子化の進む地域を元気にと、ワークショップを重ねアートイベントを選び、平成12年７月に有志で会（サインズ・オブ・メモリー実行委員会）を立ち上げ活動している。

②花いっぱい活動や芸術を通じた環境整備から、地域づくりを推進し、地域の活性化のため、集落全体が参加するアートイベントを実施している。最初の年は、「住民の顔が見える」「元気」をコンセプトに屋号を絵で表し、看板を集落全戸の入口に配置した。次年度は集落全戸の窓にパネル絵をはめ込み、三年目は集落を一冊の絵本に見立て、各戸を絵物語に位置付け、千五百枚に着色した。その後も「村の小さな道しるべ」と題してメッセージのれんを各戸に掲げ、平成22、23年は、案内サインやシンボルタワーを集落内に設置している。平成24年度は、案内サインやシンボルタワーの修復とアート看板を設置した。設置後、道行く人が足を止めることが多くなったことから、環境保全活動に関連する新規看板を今年度設置する。

③アートを通じた活動の輪が広がり、賑わいづくりが進み、年長者の仲間づくりの場「おーい元気会」も生まれ、きづなと活気が深まっている。

④小さな集落が元気を発信したこのアートイベントは、活動を開始してから10年以上、徐々に活動の輪が広がり、人の縁が生まれ、他地域の人たちとの交流が進み、今も着実に歩み続けている。運営は、サインズ・オブ・メモリー実行委員会で行い、活動は多くの地域住民の協力を得て実施している。

⑤芸術家や大学生の協力を得ながら制作及び設置しているアート看板を、地域住民自ら修復や維持の方法を理解してもらうよう研修の場を設ける。また宿泊体験交流施設「月影の郷」と連携し、地域住民と利用客の交流の場としてアート看板制作を活用することも検討している。

＊ 自治体名　新潟県上越市
＊ 人口　203,904人
＊ 面積　973.61Km^2
＊ 事業開始年度　平成12年度
＊ 事業主体　サインズ・オブ・メモリー実行委員会

連絡先
上越市自治・市民環境部浦川原区総合事務所総務・地域振興グループ
TEL 025-599-2301　FAX 025-599-2225

富山県富山市　ガラス美術館・ストリートミュージアム構想事業

①新たな地域文化の創造を目指す本市では、昭和60年の市民大学ガラス工芸コースの設置以来、「ガラスの街とやま」をキャッチフレーズに掲げ、ガラス芸術を活用したまちづくりを推進してきた。そうした取り組みの一環として、平成16年度より市内の歩道や公共施設内にガラス作品を展示するためのショーケースを設置し、街全体を美術館に見立てた「ガラス美術館・ストリートミュージアム構想事業」を実施している。

②まちなかの各所にガラス作品を展示し、市民や観光客が気軽にガラス芸術に触れられる空間を提供することで、「ガラスの街とやま」の魅力を街全体を通してアピールする。まちなかの歩道や公共・民間施設に「エキシビション・ショーケース」を設置し、市の収蔵作品や地元ガラス作家の作品などを展示している。

③ガラス作品を鑑賞する機会が増えたことで、市民のガラス芸術に関する関心が年々高まっている。ガラス作品の制作体験が可能な富山ガラス工房では、制作体験者数が年々増加しており、「ガラスの街とやま」の裾野は確実に広がりつつある。また、美しいガラス作品をまちなかに浸透させることで、都市景観の向上にも貢献している。

④通常は美術館等の閉鎖的な空間の中に展示されるガラス作品を、ショーケースごと屋外に出すことで、普段は芸術に関心のない人々に対してもガラス芸術の魅力を伝えることができている点。ガラスは屋外に野ざらしにできない繊細な素材であるため、それを保護するためのショーケースの設計・設置に苦心した。

⑤ショーケースのメンテナンスや作品の入れ替えなど、設置後の維持管理に経費がかさんでいる。また、市では現在、中心市街地にガラス美術館の建設を計画中であり、今後は新美術館とストリートミュージアムの関係性や、収蔵作品の活用方法などを検討する必要がある。

＊ 自治体名　富山県富山市
＊ 人口　416,223人
＊ 面積　1,241.85Km^2
＊ 事業開始年度　平成16年度
＊ 事業主体　富山市

連絡先
富山市企画管理部企画調整課
TEL 076-443-2018　FAX 076-443-2170
URL http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/glasscity/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

富山県高岡市　まちなかアートに関する事業

①高岡市では、憩いやうるおいのある都市景観の創出を目的として、昭和53年より段階的にアート作品を市内各所に設置してきた。アートは、「ものづくりのまち高岡」をアピールするために、高岡の伝統たる鋳物技術等によって製作されている。平成22年度には、市内外の人たちに実際に市内を歩いてアート鑑賞してもらうために「まちなかアート散策マップ」を作成した。

②憩いやうるおいある都市景観の創出、及び高岡の伝統技術を活かしたアート作品を通して「ものづくりのまち高岡」をアピールすることを目的としている。昭和53年より、高岡市の伝統産業の代表である銅像作品等を、順次市内各所に設置してきた。設置は、民間によるものもある。また、設置場所については、作品との関連性を踏まえて選定しているものもあり、作品にまつわる高岡市の歴史等を伝える工夫もしている。平成22年度に作成した「まちなかアート散策マップ」については、各公共施設等で配布しているが、現在までのところ好評を得ている。

③市内各所で配布している「まちなかアート散策マップ」は、初回5,000部を印刷したところであるが、追加印刷が必要なほど好評を得ている。また、全国各地に設置されている人気キャラクター等のブロンズ像が、高岡市で製作されていることを紹介するマスコミ報道が増えた感じを受ける。今後は、市内外の人たちにマップに従ってまちなかアートの鑑賞を楽しんでもらうことで、歩いて楽しいまちづくりに繋がっていくことが期待されている。

④これまで設置されてきたアート作品の中には、民間によるものや市民会議の活動の一環として設置されたものもあり、市民参加によるまちづくりに繋がっている。一方で、アート作品の保守管理及び周辺環境の整備が徹底されていない等の問題点もある。

⑤まちなかアート作品の保守管理及び周辺環境の整備を徹底し、作品の良好な状態を維持し続けていくことが課題として挙げられる。今後の展開については、引き続き「まちなかアート散策マップ」の配布を通して、市内外の人たちにアピールしていく予定である。

＊自治体名　富山県高岡市
＊人口　175,944人
＊面積　209.42Km²
＊事業開始年度　昭和53年度
＊事業主体　高岡市、その他市民会議等

連絡先

高岡市都市整備部都市計画課
TEL 0766-20-1407　FAX 0766-20-1414
URL http://www.city.takaoka.toyama.jp/toshi/1001/html/keikan/public%20art.html

富山県立山町　越中陶の里「陶農館」研修事業

①「越中瀬戸焼」は、400年前の桃山時代に加賀藩主・前田利長が尾張・瀬戸村から陶工を招いたのが始まりとされる。江戸時代には藩の御用窯として栄えたが、明治時代には陶工達は一時瓦業に転業したものの、昭和に入り復興、現在は５人の陶工が活動している。ここの焼き物は、良質な粘土、釉薬、薪、窯の全てがこの地域の産物という優れた特徴があり、海外からも高い評価を得ている。近年は担い手の育成や陶工が集まる「新瀬戸地域」の高齢化が課題となっていた。

②越中瀬戸焼を振興するため、越中瀬戸焼の技術を学ぶ研修制度。また、研修後の陶工として独立を支援し、将来的な定住と地域活性化につなげることを目的としている。研修期間は３年間。株式会社たてやまの社員として「越中陶の里　陶農館」でのイベント開催の企画・運営、陶芸体験の講師やホームページの更新などを実施する。その空き時間を利用し、陶農館で陶芸の作業をしたり、地元の陶工を回り、教えてもらったりするといった研修を行う。４月から新瀬戸地域に移住し、陶農館の研修生兼従業員として活動中である。日々の業務としては、陶農館のホームページの更新や陶芸教室の募集・講師等を行っている。陶芸教室については、現在は初級者向けのコースしかないが、今後は通年で陶芸が学べるしくみを検討中である。また、研修生としては、陶工との師弟関係を構築中である。

③従来、地域のコミュニティ活動と越中瀬戸焼としての陶工の活動は接点があまりなかったが、昨年より研修生の受入の話を進める中で、陶工達が越中瀬戸焼を起爆剤として地域を活性化していこうという機運が高まってきた。研修生の受入開始にあわせ、初めての試みとなる陶工全員が集まった陶芸展を４月１日から陶農館で開催し、地域の住民はもとより、町外からも多くの来場があった。今後も定期的に開催し、地域の代表的なイベントとしていく予定である。

④地域として、陶芸を中心とした村おこしに活路を見出そうと検討しており、来年度以降に２人目、３人目の研修生を募集し、陶芸村にしようといった声も聞かれる。研修後、陶工として独立した際、生活していける収入がえられるかなどの課題がある。

⑤陶農館は新瀬戸地域を陶芸と農業を中心に活性化させようという目的で建設されたが、陶芸の活用面が弱かった。今後は研修生を中心に地域住民と陶工とが一体となり、新瀬戸地域を盛り上げていく活動が期待されている。

＊自治体名　富山県立山町
＊人口　27,410人
＊面積　308.79Km²
＊事業開始年度　平成24年度
＊事業主体　株式会社たてやま（陶農館の指定管理者）

連絡先

立山町企画政策課
TEL 076-462-9968　FAX 076-463-1254
URL http://www.yoshimine.or.jp/play/02.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

福井県福井市　フクイ夢アート

①市民ギャラリー（えきまえ KOOCAN）や NPO が運営する E&C ギャラリー等、まちなかにアートの下地はあるものの、それぞれの活動が市民に認知されるには至っていなかった。アートによって、人と人、人とまちを結び、継続的な賑わいにつなげるとともに、まちなかが文化の拠点であるという認知度を高めるため、フクイ夢アートを開催するにいたった。

②アートを通して、人と人、人とまちを結びつけ、継続的な賑わい創出につなげる。開放された公共空間で、市民団体、アーティスト、地元、大学、行政等が様々なアート企画を持ち寄り、「まち」という場で表現する。複数のアートプログラムが集まり相互に連携しながら、まちの魅力を創造、発信する。写真、映像、音楽、屋外インスタレーション等、多彩な作品が「まち」を飾った。地元商店街や行政だけではなく、福井大学や福井工業大学、仁愛女子短期大学等、多くの学生がスタッフとして関わり、若者がまちなかに目を向けるきっかけとなった。

③フクイ夢アートは平成24年度で３年目となる。２年目からは実行委員会形式をとり、マスコミを含む様々な分野の人々に委員を委嘱、事業全体の深まりと広がりを生み出してきた。会場の一つであった市民ギャラリーの利用者も飛躍的に増え、回遊性の向上につながっている。店主がアーティストに依頼して店舗の外壁に絵を描く等、波及効果も生まれている。今後は、商店街を含むまちなか全体を巻き込むような仕組みづくりを目指し、回を重ねるごとに認知度を高めつつ、地元との連携を深めていきたい。

④地元商店街、NPO、企業、大学、行政といった横のつながりが生まれ、コミュニケーションを図りながら「まち」の賑わいづくりに努めている。開始当初は、地元商店街の関わりが弱かった。そこで、２年目の平成23年度には、商店街からも委員を招き、商店街を舞台とした企画を開催した。３年目の平成24年度は、事前の「まち歩き」を予定しており、作家同士あるいは作家と地元との連携強化を図っている。

⑤現在は、市からの負担金のみで運営している。今後は、企業からの協賛や広告等も募集し、民間に協力いただく部分を増やしていきたい。そのためには、フクイ夢アート事業のより一層の認知度向上が求められる。

＊ 自治体名　福井県福井市
＊ 人口　268,106人
＊ 面積　536.19Km²
＊ 事業開始年度　平成22年度
＊ 事業主体　フクイ夢アート実行委員会

連絡先

福井市都市戦略部中心市街地振興課
TEL 0776-20-5677　FAX 0776-20-5133
URL http://www.city.fukui.lg.jp/d360/sigaichi/yume-art/index.html

福井県大野市　文化発信事業　越前大野感性はがき展

①地域のリーダー育成を目的に実施した越前大野平成塾事業に参加した２期生が、まちづくりの一環として企画立案したイベントで、1998年から２期生のメンバーを中心とした越前大野感性はがき展実行委員会を組織し、大野市の委託を受けて実施している。大野市が、水環境保全を目的に平成８年に自然林（ブナ林）196ha を購入したのをきっかけに、ブナ林のようにたった一枚の葉がたくさん集まれば、木となり林となり、大地を造り生命の源となる水の恵みを与えてくれることから、一枚の葉を葉書に置き換え、一人ひとりの小さなメッセージを集め大きなメッセージにしようとの思いを基に開催している事業である。

②自然をテーマに葉書サイズの様々な作品を募集し、応募作品の中から審査によって入選作品500点を決定し表彰式を開催し、作品募集の翌年には、入賞作品をまちなかの観光スポット等に高札にて展示するとともに作品集を発刊している。今までのテーマは、水、森、空、川、山、星であったが、平成23年度の第７回展では、「花」をテーマに作品を募集したところ、日本の全国各地をはじめ海外から過去２番目に多い7,530点の応募があった。平成24年度は、入賞作品500点の通常展示だけでなく、ひまわり畑で開花にあわせ、ひまわりの作品だけを集めた特別展を開催した。現在、作品集の発刊に向け編集作業に取り組んでいる。

③表彰式や作品集発刊、作品展示等は、受賞者の方々をはじめ、応募者の創作意欲を高めるとともに、大野市を訪れる良い機会となっている。また、まちなか全体を美術館に見立て、観光の名所等に展示することにより、市民はもとより観光客にも作品を通じて大野市を PR することができる。まちなかを歩いて作品を鑑賞してもらうことで、ゆっくりと自然に恵まれた美しい大野を感じてもらうことができ、まちなかの賑わいにもつながっている。

④大野市の委託事業であるが、行政主体でなく、市民が企画立案し、実行委員会形式にて環境保護や文化芸術の振興の観点から実施しており、地域への愛着を高めるとともに市民自らまちづくりを考える事業となっている。

⑤今までのテーマの作品が、全部で42,000点余りあり、作品の整理や保存場所の確保が難しくなっている。今後は、事業を継続しながら作品の整理等を実施し、各種イベントでの過去の作品展示等、新たな活用方法を考えていきたい。

＊ 自治体名　福井県大野市
＊ 人口　36,392人
＊ 面積　872.3Km²
＊ 事業開始年度　平成10年度
＊ 事業主体　大野市・越前大野感性はがき展実行委員会

連絡先

大野市教育委員会事務局文化課
TEL 0779-66-5410　FAX 0779-66-5418
URL http://www7.ocn.ne.jp/~k-topgun/index.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

福井県あわら市　金津創作の森事業

①合併前の旧金津町で、「自然や歴史があり、農工商も発展しているが、町の活気が足りない」といった現状から、アートによる地域活性化をめざしたのが始まりである。その実現方法として、里山に居住し工房を持って活動する作家を公募し、芸術活動の場を提供することにより作家活動を支援することとした。その他、教室・体験ができる陶芸工房、ガラス工房の整備、現代アートの展覧会開催。また、屋外に現代アート作家が制作した作品を展示し、散策を兼ね芸術作品の鑑賞ができるよう整備し、市民の創作感性を高めるとともに、ここで生まれた文化を全国に発信する事業を展開している。

②「文化や芸術に親しむ心を育む」、「分かりやすい展覧会等の開催」を柱に、市民の文化意識の向上を図る。金津創作の森入居作家の公開制作が見学できる機会を年２回設け、市民と触れ合う機会を提供している。また、児童生徒を対象にした陶芸・ガラスの物作り体験を実施するとともに、展覧会を通してアートに触れる機会を設けている。その他、分かりやすい展覧会の開催を心がけ、広報誌やケーブルテレビ等を利用し啓発活動に努めている。市内小中学生及び高校生を対象に物作り体験を行い、体験後は、森の散策及び展覧会の鑑賞を行っている。また、秋には体験制作した陶芸等の作品展を行っている。広報誌では、創作の森の展覧会紹介や教室案内等の紙面を設け、毎月市民に情報提供している。ケーブルテレビでは、２ヶ月に１回展覧会の見どころ解説を行っている。

③金津創作の森入居作家と触れ合う機会や入居作家作品展を開催することにより、芸術文化が徐々に市民に浸透している。また、金津創作の森で講座体験をした児童生徒に芸術や文化に親しむ心を育むことができた。その他、敷居の低い、分かりやすい展覧会を開催することで、観覧者数が増えた。

④金津創作の森は、あわら市の芸術文化の発信拠点として、市民はもとより他市の方にも影響を与えている。現代アートを分かりやすく理解してもらうことに苦心している。展覧会の企画段階で企画委員等多方面の方から意見を聞き反映している。

⑤金津創作の森入居作家の高齢化により、将来的に創作活動ができなくなる可能性がある。今後は、若手作家の育成の場としての活用を考えていきたい。

＊自治体名　福井県あわら市
＊人口　30,212人
＊面積　116.99Km^2
＊事業開始年度　平成16年度
＊事業主体　あわら市、財団法人金津創作の森財団

連絡先

あわら市文化学習課
TEL 0776-73-8041　FAX 0776-73-1350
URL http://sosaku.jp/

長野県塩尻市　Shiojiring（シオジリング）アートフェスタ

①塩尻市では平成22年度から、高校生が自分たちの地域をもっと知り、目を向けるための活動として、首都圏の美大生とアートを通して地域を再発見する「学生交流ワークショップ（通称：アラジオワークショップ）」を行ってきた。この「地域をアートでアラわす」という活動をきっかけに、平成23年度には「シオジリングアートフェスタ」という、市民が「アート」に気軽に触れ、楽しめるアートイベントを開催している。

②本市には美術館がなく、県内には美術大学もないため、学校の授業以外には美術に触れる機会がないのが現状である。「アラジオワークショップ」では、地域の特色を取り入れたワークショップの実施により、授業に関係なく美術に触れる場を作り、アートを通して多世代交流を図る目的がある。塩尻市市民交流センター（愛称：えんぱーく）を会場に、地域の特徴を活かした「ぶどう」「ワイン」「漆器」を使い市民参加のアートワークショップを実施し、それぞれ50名～100名の参加があった。「ぶどう」のワークショップでは、ぶどう色の風船に、塩尻市の花「桔梗」の種を入れて、一斉に空に放した。また、ぶどうの皮を染料にして、布製のバッグに絞り染めを行った。「漆」のワークショップでは、木製のうちわに「色漆」を使って絵付けを行い、市民と楢川地域の職人との交流や、展示機会の提供に繋がった。その他には「ワインコルク」をスタンプとして使い、絵葉書を作るワークショップや、絵本の読み聞かせを交えたワークショップを実施した。

③アートワークショップを定期的に開催することで、参加者のリピート率も高くなるとともに、アートワークショップの認知、活動の周知に繋がっている。地域の特徴をアートを通して表現するこの事業は、市民にも「地域の新しい魅力」として捉えられており、若者による地域に根ざした活動になってきている。

④事業の主体は高校生であり、その中で大学生のリーダースタッフを中心にワークショップの企画を行っている。高校生は学校間を越えて活動しており、大学生の参加によって世代を越えた交流の場となっている。しかし、進路に伴い学生メンバーが変化するため、集約に苦労している。学校や地域住民との連携で事業を継続的に実施するための工夫が必要である。

⑤えんぱーくのみならず、周辺の地域を会場として巻き込める事業にする必要がある。また、事業の主体である高校生や大学生の年代が変化しても継続的な参加が出来るように、学校間の連携を深めていきたい。

＊自治体名　長野県塩尻市
＊人口　67,482人
＊面積　290.18Km^2
＊事業開始年度　平成22年度
＊事業主体　塩尻市

連絡先

塩尻市市民交流センター総務課
TEL 0263-53-3350　FAX 0263-53-3362
URL http://www.city.shiojiri.nagano.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

長野県池田町　てるてる坊主アート展

①童謡てるてる坊主の作者・浅原六朗が当町出身であることから、『てるてる坊主のふるさと』として作者の功績を讃え、町の啓発活動につなげるため開催。当町は、国道・鉄道が存在しておらず、知名度の低さが課題となっていた。しかし、来訪者からは、「こんな素敵な景色の場所があるなんて知らなかった」「安曇野の田園風景と北アルプスの眺望を楽しむならこの町が一番」などの声が多く寄せられている。当町を“知ってもらう”、“一度訪れていただく”ことも開催の目的となっている。

②『てるてる坊主』のふるさとをキャッチフレーズに、町の観光推進・知名度向上を目指して開催　全国公募による手作り「てるてる坊主」を屋外展示するコンテスト（芸術・一般・子供・ファミリー・造書の５部門）形式の展覧会。パーク内の施設では、池田町の一年を紹介する「映像祭」も同時開催。併せて芙蓉が咲き誇る他会場にて、擬人かかしを展示した「かかし芙蓉祭り」を開催。町を横断してアート一色になる夏休み最後の週末を演出。毎年８月の最終週の週末に開催。作品はここ２年600点超の応募があり、北は東北から南は沖縄まで全国各地からユニークな応募がある。土日は、１日３千人ほどの来場者。

③当初念頭においていた、展覧会開催による知名度アップ・来訪者の動機付けとしては、大きな成果が認められている。町内在住の児童・生徒からの関心も年々高まりを見せ、町内の意識向上にも成果として出てきている。

④見事な景観立地にある『あづみ野池田クラフトパーク』の広大な芝生広場に、てるてる坊主を屋外展示し、老若男女の皆さんにのんびり過ごしてもらえる展覧会。年々応募される作品のクオリティーが上がるにつれ、応募を躊躇う参加者が発生。また、新規の一般参加者からの応募数の減少など、展示作品の確保に苦心。昨年より、『工作は苦手でも書き物だったら』という皆さんをターゲットに“造書部門”を新設。作品数の増加・注目度向上など効果は大きかった。

⑤入選作品を活用したグッズ開発・商品化や『てるてる坊主』をモチーフにしたご当地土産品の商品化など商業との連携を基にした町内の活性化を推進していく。

＊自治体名　長野県池田町
＊人口　10,492人（H24.４月現在）
＊面積　40.18Km^2
＊事業開始年度　平成19年度
＊事業主体　てるてる坊主アート展実行委員会【町・観光協会・議会等で構成する組織】

連絡先
池田町観光協会
TEL 0261-62-9197　FAX 0261-62-5688
URL http://www.ikeda-kanko.jp

長野県高山村　産学官連携地域文化創生事業

①地元にいては気づかない村の良さについて外部から提言を得て、村づくりにつなげたい。須高ケーブルテレビ（株）の紹介により、村と大学の思惑が一致し実現に至っている。平成18年度から長野県高山村、須高ケーブルテレビ（株）、女子美術大学による産学官連携事業に着手。その後、感性豊かな女子美術大学の学生と村民との交流が始まり、地元のテレビ局である須高ケーブルテレビ（株）が、その活動の様子を村内外に発信している。

②アートやデザインを活かした地域づくりを考える女子美術大学の学生が、授業の一環で高山村を訪問し、村内の自然や環境、農業、観光をテーマにフィールドワークと制作活動を実践し、学生の視点から新たな村づくりへの提言や、村民や村の子どもたちとの交流を通じた様々な取り組みを行う。毎年、２泊３日で３回程度高山村に来村し、住民や子どもたちとの交流や作品制作に取り組んでいる。

③村の特産品であるリンゴ、ブドウ、ワインブドウ等をテーマにした「高級林檎箱、葡萄化粧箱」「ワインラベル（シャルドネ）」「りんごジャムラベルシール」「エコバッグ」「てぬぐい」などの制作、「りんごアートコンテスト」、「バスストップギャラリー（元々あった果樹の形のバス停を装飾）」等の各種デザイン。作業体験として「ワインぶどう収穫」「ワインぶどう踏み」「そば猪口製作、そば打ち体験」等、その他、「小学校児童とのワークショップ」「アイスクリームラベル」「温泉郷土産和雑貨試作」等。平成18年度に着手した本事業も今年で7年目となり、当初はなぜ女子美術大学なのか、何をやるのか尋ねられる事も多く手探りでの事業展開であったが、来村を重ねる毎に顔なじみの学生も増え、交流を通じ深く村民に受け入れられてきている。

④学生たちの優れた感性で制作されたバスストップギャラリー等は、住民の日常生活に親しまれているが、観光土産の試作品については、多くの素晴らしい提案があるが、現在成果品は日本手ぬぐい１作品のみとなっており、制作原資の問題があり試作品を最大に活用できるよう解決したい。

⑤高山村は一昨年「日本で最も美しい村」連合に加盟し、景観条例の制定とともに村の豊かな原風景をいつまでも大切に守り育てる努力をしている。今後も産学官連携事業により女子美術大学と交流を深め、学生の素晴らしい感性により「信州高山村」のブランドづくりを進めたい。

＊自治体名　長野県高山村
＊人口　7,573人
＊面積　98.5Km^2
＊事業開始年度　平成18年度
＊事業主体　長野県高山村、須高ケーブルテレビ（株）、女子美術大学

連絡先
高山村産業振興課商工観光係
TEL 026-245-1100　FAX 026-248-0066
URL http://www.vill.takayama.nagano.jp/life/co-operation/improvement%20.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

岐阜県岐阜市　まちなかお月見アート、まちなか七夕アート

①正法寺（岐阜大仏）等の寺社仏閣や町家等の歴史的建造物など、地域に残る歴史や文化の保全・継承と、良好な景観形成を図るため、まちづくり会を設立した。その活動の一つとして、アートによるまちづくりを実施する。

②井の口に残る城下町の風情と静かで趣のあるまちなみを活かして、賑わいとまちの一体感、そして美しさを創出する。まちなかお月見アートについて、まちの建物の軒先や玄関先にススキを飾り、お月見の風情を演出し、金華山に映える秋の名月を鑑賞する。エリア内の3か所のスポットを回るスタンプラリーを実施し、参加者には、湯茶等（ぜんざい）を振る舞う。期間中、正法寺の大仏殿では、月をイメージしたアート作品を展示し、ライトアップにより幻想的な雰囲気を創出する。

まちなか七夕アートについて、笹と七夕飾りのセットを配布して、軒先や玄関先に飾り、町家のまちなみを演出する。町家を活用して、岐阜市ゆかりの音楽家によるコンサートを実施する。この事業に賛同する住民が増加し、地域コミュニティが強まった。又、口コミや雑誌、新聞等の宣伝により来訪者が「井の口」を回遊し、賑わいが生まれている。

③七夕コンサート、お月見アート、寄席など日本古来の行事やアートで仕掛けたイベントを実施し、県内外から人を集めている。特に、近隣で開催している長良川おんぱく（長良川温泉泊覧会）と協賛したことで、県内外の観光客の誘致に貢献した。又、歴史・自然と調和したまちづくり活動が評価され、平成23年度岐阜市景観賞まちづくり活動部門を受賞した。今後は、若手アーティストの活動の場の提供や、この美しいまちなみを守る活動を次世代へ繋げていく活動を展開する。

④道三公・信長公が築いた城下町の中心であることや、金華山のふもとという立地を生かして、地区の貴重な歴史的、文化的資産を活用している。天候に左右されるので、常設できる展示物や演奏会を実施する。

⑤現在、市からの助成金とまちづくり会の会費等で運営しており、助成金交付終了後の持続可能な事業活動が課題である。

＊ 自治体名　岐阜県岐阜市
＊ 人口　418,498人
＊ 面積　202.89Km²
＊ 事業開始年度　平成22年度
＊ 事業主体　井の口まちづくり会

連絡先

岐阜市まちづくり推進部まちづくり景観課
TEL 058-265-4141（2680）　FAX 058-264-1760
URL http://www.gifu-np.co.jp/tokusyu/shoutengai/20100911_1.shtml

岐阜県美濃市　美濃・紙の芸術村事業

①観光資源の目玉としていた中心市街地の空洞化が著しかったため、その活性化が望まれていた。そのひとつとして、国際交流と文化芸術の面からの活性化を促進するため、平成9年度に文化庁の「アーティスト・イン・レジデンス事業」の補助を受け、事業がスタートした。文化庁の補助期間が経過した後も、市単独経費と各種機関の助成金等を活用して事業を継続してきた。平成23年度からは、再び文化庁の補助を受け事業を進めている。

②国内外のアーティストが創作活動を通じて、芸術家相互並びに地域との交流を深め、高度で独創性にあふれた芸術文化の創造を図ることを促進するとともに、地域からの紙芸術・紙文化の発信を促し地域文化と地場産業の振興に資する。市の中心部は、江戸時代初期に町割が完成し、重要伝統的建造物群保存地区に指定された「うだつ」の町並みが残っている。この町並みに国内外からアーティストを招へいし、空家を創作活動の拠点となる工房として利用し、和紙を使った創作活動を行なっている。招へいアーテストは29ヶ国、81人に及ぶ。3ヶ月間滞在し、期間中に制作した作品は、市の施設において展示会を開催し市民等に披露する。また、工房の公開、プレゼンテーション、ワークショップ等を行ない、芸術家相互、地域住民、児童生徒との交流を行なっている。

③他の観光施策等との相乗効果で観光人口が増加し、市民も中心市街地の価値を再認識している。市民が再認識することが中心市街地活性化の大きな原動力となる。最初は、外国人に対して尻込みをしていた市民が多かったが、日常の中に外国人を自然に迎えるようになってきた。田舎町の国際化ということでマスコミ等の取材も増えてきた。

④アーティストの滞在期間中のサポートは、市民を中心としたボランティアで対応している。住居はホームステイ方式で対応し、日本の文化、風俗習慣についてもより深い関わりを持ち、帰国後も交流ができるようにしている。また、地場産業である和紙を使用した作品作りを行なっている。ホストファミリーには大きな負担をかけているが、ボランティアの協力を得て対応している。また、厳しい財政の中で、各種機関の助成金等を活用して財政負担を軽くするよう努めている。

⑤この事業は、ボランティアが中心となって運営されているが、最近は新規の応募者が少なくなっている。今後、更にこの事業を広く周知し、まちの活性化と国際交流の推進につなげたい。

＊ 自治体名　岐阜県美濃市
＊ 人口　22,846人
＊ 面積　117.05Km²
＊ 事業開始年度　平成9年度
＊ 事業主体　美濃・紙の芸術村実行委員会

連絡先

美濃市教育委員会（美濃市文化会館）
TEL 0575-35-0522　FAX 0575-35-0144
URL http://www9.ocn.ne.jp/~mino-bnk/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

岐阜県東白川村　森の美術展

①総面積の９割が山林である東白川村では、平成22年度より村の誇るべき大切な自然資源である母樹林（特産東濃ヒノキの採種林）を公園化した「母樹林公園」を会場に都市の皆さんとの交流づくりの場として、東白川の森林の魅力と、自然と芸術が融合して生まれる癒しの空間を多くの人に提供するため、「森の美術展」を実施している。このイベントは、村の自然を活用し、さまざまな活動を展開しているNPO法人青空見聞塾の企画によるものである。

②母樹林公園は、森林づくりの目標林型として東白川が誇る自然資源であり、この森林公園を利用してアートイベントを開催することは、森林の重要性の理解を深めるとともに都市住民との交流の場を提供するものである。美術展は、母樹林公園内の遊歩道に絵画、写真等の芸術作品を展示するもので、作品については、屋外展示のため、原画は展示せず、絵画及び写真の複製をラミネート加工して展示を行っている。平成23年度については、期間を４月29日～８月31日までの４カ月間としたため、ゴールデンウイーク中に来場者が多くみられた。また、夏休み期間中には、青空見聞塾の「自然体験プログラム」のコースとして親子参加等５団体の受け入れを行ったほか、スタッフへのコース案内依頼が300人弱あり、３年目を迎え、このイベントが根付いてきたことが伺える。

③開始３年目を迎え、すっかり定着した感があり、出展者である芸術家の皆さんからも好評を得ている。また、東白川村は平成23年NPO法人「日本で最も美しい村」連合に加盟した。この連合は、全国で49地域が加盟しており、東白川村と同じような条件下にある過疎に悩む山里が、いかにしたらこの美しい自然を守っていくことができるか、を試行錯誤しながら取り組んでいる。小さな取り組みではあるが、村が持つ森林を生かしたこうした取り組みは、今後村の自然環境を守っていくための一つの方策となることを期待している。

④地域住民やNPO法人がホスト役として都会から訪れる皆さんを迎え、おもてなしの心が育まれている反面、展示会場づくり等は、NPOで独自に行っており、スタッフ不足は否めない。今後は地域住民をもっと巻き込んだ方法をとることが必要と考えられる。

⑤現在は村からの補助金により運営しているが、今後は出展者や出品数も増えることが考えられるので、出品者から僅かでも参加費等の協力も考えていくべきではないか。

＊自治体名　岐阜県東白川村
＊人口　2,656人
＊面積　87.11Km^2
＊事業開始年度　平成22年度
＊事業主体　NPO法人青空見聞塾

連絡先

東白川村総務課企画財政課
TEL 0574-78-3111（240）　FAX 0574-78-3099
URL http://www.aozora-kenbun.com/

静岡県静岡市　清水港・みなと色彩計画

①清水港は、日本三大美港として霊峰富士山を借景にし、三保の松原などの自然景観を有しながらも、国際拠点港湾として発展し物流、製造や工業等に特化した殺伐として騒々しい空間であり、市民が立ち寄りにくい港であった。美しい自然と調和した景観により活気、うるおいある清水港を目標に、色彩を重点とする「清水港・みなと色彩計画」を策定し、清水港・みなと色彩計画推進協議会、アドバイザー会議を発足させ、平成４年から美しく快適な港づくり活動がスタートした。

②豊かな自然景観と調和した人工景観による「美しい港づくり」の本計画は、住む人、働く人、訪れる人にとって快適・活力・魅力ある港づくりを目指し、清水港の臨港地区周辺（約500ヘクタール）の施設・工作物を対象としたカラーコーディネートによる港の景観計画である。シンボルカラー等の配色構成、５年～７年の塗り替え時期に合わせた無理のない取組み、アドバイザーによるCGシミュレーションによる配色デザインの提示等取組体制に工夫を凝らしている。その成果により毎年、50件ほどの事業実施により20年間美しい港づくりが行なわれている。また、ホームページや企業セミナーでの情報発信を行い、本計画の普及に努めている。

③本計画による港湾関連企業の施設・工作物の塗替えによる美しい港づくりへの取り組みは「見られる・魅せられる風景づくり」を創出し、美しさ、快適性という港湾空間の付加価値を高めた。この港を活かした空間では、みなと祭りをはじめ、マグロまつり、大道芸など様々なイベントが開催され、賑わいのある港として成功している。市民・企業のアンケート調査結果から約７割の回答者から港が美しくなったと評価されている。

④本計画は、補助金や、条例等の法的制度がなく企業の参画意識によって進められている。計画当初は費用面、Clカラーがある等から、３割程度の賛同しか得られなかった。通常航空法の安全基準では紅白塗装であるガントリークレーンが立地条件等により日本で初めて、規制が解除され清水港のシンボルカラーであるホワイトとアクアブルーの洗練された配色でデザインされている。煙突、ガントリークレーンのシンボル的施設が美しくリニューアルされ、港湾関連企業の協力の輪が年々高まっている。

⑤清水港は、物流・生産機能の充実に加え、企業・市民の観光、交流、賑わい、環境・景観形成等の快適な港空間の充実への期待が高い。今後は「みなとまちづくり」として市街地と連携のとれた景観形成が課題である。

＊自治体名　静岡県静岡市
＊人口　721,967人
＊面積　1,411.85Km^2
＊事業開始年度　平成４年度
＊事業主体　清水港・みなと色彩計画推進協議会

連絡先

静岡市経済局商工部清水港振興課
TEL 054-354-2044　FAX 054-353-1022
URL http://www.shimizukou-shikisai.net

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

静岡県三島市　まちなかギャラリー事業

①三島市内には、中心市街地を中心に27のギャラリーがあるものの、個人で運営しているものも多く、総合的に紹介する媒体がなかった。また、近隣の商店に寄る客からもギャラリーの場所を聞かれたりもするが口頭以外に案内する方法がなかった。そこで、市内の商店会長からの提案をきっかけに各ギャラリーを総合的に紹介するホームページの作成が始まった。

②市内各所ギャラリーの企画や展示内容を総合的に案内することで、ギャラリーや商店の利用者の利便性を向上させるとともに「水と緑とアートの街三島」として、市内回遊者やファンを増やす。さらに、まちなかの回遊性を高めることで商店街への来客を増やす。現在は、ホームページを作成し、三島市内中心市街地に立地しているギャラリーを中心に、場所や内容等を紹介している。ホームページでは、各ギャラリーあたり12～14枚の写真を掲載して、作品やギャラリーの雰囲気のイメージを深めやすくするとともに、2名の女性レポーターと店主との会話形式で各ギャラリーの楽しみ方を紹介することで、閲覧者が気軽にギャラリーに訪問できるように内容を工夫している。現在三島市内19ギャラリーをレポートし、ホームページで紹介している。各ギャラリーで企画している展示情報については、毎日のカレンダーで表示することで閲覧者が必要な情報が得やすくなっている。

③ギャラリーや商店街の利用者は女性が多いことから、女性をターゲットとしたホームページを作成したところ、女性からの問合せが多くなり、ギャラリーへの来場者も増加した。商店街においても、ギャラリー来場者の増加に伴い、商店街や店舗に立ち寄る客が増え、ギャラリーを核にしてまちなかの回遊者が増加するという好影響が生まれた。

④小さいギャラリーが点在しているので、ギャラリーを巡る中心市街地回遊が可能となる。企画展などの情報が常に更新が可能となっている。ギャラリー間のつながりが弱く（各々が独立した感性を持つため）、マップ作成などの調整が難しい。

⑤三島市のホームページ上のみでの運営になっているため、今後はギャラリー関係者や商店街と協力し、紙媒体などのマップ作成やワークショップの開催等を通じて、より多くの人にアートやギャラリーを身近に感じてもらえるよう取り組んでいきたい。特に子供に対しては、親子向けのワークショップなどの内容の充実に協力し、子供がアートに触れる機会を増やしていきたい。

＊ 自治体名　静岡県三島市
＊ 人口　113,119人
＊ 面積　62.13Km²
＊ 事業開始年度　平成21年度
＊ 事業主体　市内ギャラリー関係者、三島市の各商店街、三島市

連絡先

三島市産業振興部商工観光課
TEL 055-983-2655　FAX 055-983-2754
URL http://service.city.mishima.shizuoka.jp/mportal/mgallery/

静岡県富士市　富士芸術村

①富士芸術村は、市に遺贈された旧家を、富士地域で活動する芸術家達を中心とした「富士芸術村」に無償貸与を行い、地域の文化・芸術を愛する市民や芸術活動に開放された空間として、平成16年9月12日開村した。（現在は、施設は専用ではなく、広く市民に開放しており、申請により施設使用許可を出している。）村の運営は、同運営委員会や市民ボランティアスタッフによって支えられており、運営に係る経費は、市の補助金のほか、賛同者からの村民登録費、年間2,000円（一口）等によって賄われている。村長は、彫刻家で美術研究所主宰の漆畑勇司氏。

②富士芸術村は、若手芸術家の育成、個人アーティストの育成を主眼にしながら、さらには、市民との連携を図り、創作活動から啓蒙活動まで幅広い事業展開をすることによって、富士市の文化芸術振興のすそ野を広げる役割を担っている。具体的な活動としては、開村日である金、土、日曜日を中心に子どもから、大人までを対象としたワークショップ等を主催しているほか、施設使用に係る、市との調整を行い、新進の芸術家への展示場所やアトリエの提供などをサポートしている。富士芸術村の活動が年々認知されてきており、市内外より、来場者や展示希望者が来ている。また、2009年より市教委主催、富士芸術村協力により開催している「紙のアートフェスティバル」では、作品の募集、展示を通じて、全国に「紙のまち富士市」を発信している。

③これまでの8年間の活動により、「富士芸術村」は、市外、県外へもその名を知られることとなり、富士山のふもとを目指し、多くの芸術家が集まってくるようになっていることに加え、主催、企画展等事業のほか、村を会場とした祭り等イベントを通じ、地元住民が芸術を身近なものと感じるようになってきている。殊に子ども達にとっては、体験を重視したプログラムによって、総合的な学習の場ともなっている。

④もともと、数人のボランティアを中心に事業をスタートさせているが、地域住民との交流を積極的に行うことによって、スタッフと住民との協働が行われてきており、年1回の祭りなどは、地域のイベントとして定着してきている。芸術村単独での大規模な事業を行うのは、容易でないため、地域団体や行政との連携を継続して行っていく。

⑤将来的には、子どもから大人まで気軽に集まれる場所として定着させていきたい。

＊ 自治体名　静岡県富士市
＊ 人口　260,559人
＊ 面積　245.02Km²
＊ 事業開始年度　平成16年度
＊ 事業主体　富士芸術村運営委員会

連絡先

富士市総務部企画課
TEL 0545-55-2718　FAX 0545-53-6669
URL http://fujiyama-art.main.jp/toppage/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

静岡県掛川市　遠州横須賀街道ちっちゃな文化展

①遠州横須賀倶楽部は掛川市横須賀地区を中心とした市民団体で、昭和62年より50人前後で地域を元気にする事を目指し活動を続けている。文化展は、県の街道文化振興事業を契機に活動の集大成にしようと取り組み始めた。郊外型大型店進出による商店街衰退防止のための実践部隊として、フリーマーケットや観光案内、イベントを数多く実施してきたが、その中で城下町の文化を軸にしたまちづくりに重点をおく結果、文化展にたどりついたため、まちなみ保存運動の意味あいもある。

②目的は、まちなみの中に非日常である「美術品」を配置することで、昔ながらの横須賀街道の持つ魅力を、何より地元のひとに気づいてもらうこと。万単位の集客が可能になった現在は、地域からの情報発信も目的に加わった。横須賀街道内およそ70か所以上の民家の玄関や軒先を展示場にして、約100人の芸術家の作品を毎年10月第４金土日に飾る。その際、地域に根付いた職人の仕事ぶりも併せて紹介。出展する作家に、住民や来訪者との交流をお願いしている。平成24年で14回目を向かえ、地域の秋の風物詩として定着。来客もコンスタントに３日間集まる。

③文化展での注目により、地元に誇りを感じる人が増えた。口コミにより３回目以降はコンスタントに集客、マスコミ発信ができるようになり、地域の知名度は確実にアップした。横須賀地区は三熊野神社大祭が有名だったが、文化展の集客が大祭にも足を運んだり、逆もあったりと交流人口増加の効果がみられた。

④特徴は、生活空間を提供する会場主が70以上存在することと、作品展示場のほとんどで作家と来客の間で交流することは全国的にも珍しい。運営の多くを学生ボランティアが支える点も誇れるポイント。

⑤来客数の増大に伴う車と会場の調和（駐車場確保や事故防止）と、増大する自主出展者による文化展の質的変化（地域経済の自発的活性化含む）が喫緊の課題。両者解決のため、地域自治会や出展者との協議を深め、また、各種発行物等で情報発信や問題提起を行っている。
その他、目前の課題は来客の安全確保と自主出展者のマナー向上、短期的には運営資金の地域浄財の割合向上、中・長期的にはまちなみ保存機運の増大による遠州横須賀街道独自文化の保護・育成がある。

＊自治体名　静岡県掛川市
＊人口　115,168人
＊面積　265.63Km²
＊事業開始年度　平成11年度
＊事業主体　遠州横須賀倶楽部・掛川観光協会大須賀支部

連絡先
掛川市企画政策部企画調整課経営戦略係
TEL 0537-21-1127　FAX 0537-21-1167
URL http://www.city.kakegawa.shizuoka.jp/kankou/event/chittyanabunkaten.html

静岡県川根本町　和紙のあかり展

①奥大井地域の観光交流の拠点である寸又峡温泉は「日本一清楚な保養地づくり」を目指して様々な魅力づくりや誘客対策を行っているが、地域の歴史・文化等、新たな視点での資源を活かした地域づくりを目指そうと考えた。そこで以前から町内各地で作られていた和紙に着目し、昔を顧みながらアートとして和紙と天然素材を盛り込んだ「あかり造形作品」を広く募集する「和紙のあかり展」を平成18年度から実施している。この和紙のあかりは「日本一清楚な保養地」をめざす寸又峡温泉の情緒に相応しく、アートを利活用することによって当地区の魅力を更に高めるものとなっている。

②漆黒の闇の中に佇む寸又峡温泉街の風情を更に高め、来客を幻想的な世界に導く「あかりと和紙」をキーワードに、作品を募集するという形式をとることによって、多くの人が作品を応募するとともに参加できる誘客対策事業としている。アートを取り入れた事業展開によって、興味ある人々を強くひきつけるだけではなく、関係者の輪が確実に広がりつつあり、この事業の実施をとおして地域の一体感が醸成されてきている。和紙と天然素材を使った「あかり」づくり体験等を実施、応募作品を展示するとともに、優秀作品を表彰する。事業開始以来、延べ900人から1,000作品が寄せられており、紅葉前のイベントとして定着している。

③当イベントを目的として宿泊客、日帰り客が増加してきた。また、公募を通して多くの人に関心が高まり、新たな地域資源として定着している。

④「和紙とあかり」という日本古来の文化とアートが融合するとともに、それを展示するに相応しい環境の中で行われる「和紙のあかり展」は、日本一清楚な保養地を目指す寸又峡温泉にとって最適なイベントである。当初は作品の確保に苦心したが、マスコミ等の報道により次第に関心も高まりつつある。その他、問題点として、作品の管理運営に当たる旅館等の対応が難しくなっている。

⑤応募者が固定化してきた傾向もあるが、「あかり」づくり体験イベントの実施等により今後も多くの応募者を確保していきたい。また展示に関しては、風雨への対応など管理運営面で課題がある。いずれにしても、奥大井のメジャーなイベントとして定着してきているが、今後もアートを積極的に盛り込んだプロジェクトを展開し、地域活性化を図っていくために、この事業を目的としたツアー等も積極的に誘致していきたい。

＊自治体名　静岡県川根本町
＊人口　8,112人
＊面積　496.72Km²
＊事業開始年度　平成18年度
＊事業主体　寸又峡美女づくりの湯観光事業協同組合

連絡先
川根本町企画課まちづくり室
TEL 0547-56-2221　FAX 0547-56-2235
URL http://www.town.kawanehon.shizuoka.jp/news/newsview.asp?cd=10&id=1683

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

愛知県豊田市　小渡（おど）夢づくり・まちづくり事業

①平成15年に清流や川風といった自然の特徴を活かした賑わいのあるまちづくりを目指して、商店や民家の軒先に6,000個の風鈴を飾りつけ、住民を巻き込む地域ぐるみの「夢かけ風鈴事業」を7月中旬から8月末まで実施してきたが、観光客の関心を引く事業へのステップアップが課題であった。

②小渡町の自然や歴史を地域資源として捉え、「夢かけ風鈴」や「小渡霊場巡り」を通して訪れる人々にやすらぎを与え、観光事業によって地域に活気をもたらす。7月中旬から8月末まで、ふたつの通り沿いの商店や民家の軒先に風鈴を展示する「夢かけ風鈴まつり」を開催している。地域の寺院では風鈴の短冊に願いをかける「夢かけ風鈴の奉納」「風鈴行列」、24年度からは「小渡霊場巡りスタンプラリー」など、年間を通して観光客誘致での賑わい創出を行っている。風鈴短冊のデザインや展示をアーティストが行うことで事業全体が洗練され、都市部からの観光客が増加している。観光ガイドも兼ねた散策マップもアーティストにより個性的な地図が制作され、観光客がゆったりと充実した時間を過ごせると好評である。

③地道に続けていた「夢かけ風鈴事業」にアートの視点が加わることで、他の観光地との差別化が明確になりメディアに取り上げられる機会が増え、平成23年度は事業開始以来、最高の観光客数を記録した。交流人口が増えることで、地域住民の意識も高まり、積極的に新しいアイデアを出し、それを具体化している。観光地として魅力的な要素、環境が整ってきており、今後は地道な広報活動でより魅力を増して更なる観光客を誘致したい。

④全国的にも珍しい風鈴による地域活性化を、住民主体で展開している。行政や民間のアートディレクターとの協働による地道な活動が交流人口の増加に結びついている。住民主体でスタートした事業も数年後には住民のモチベーションが下がり、新展開が望まれた。観光アドバイザーでもあるアートディレクターの参加により、アートを活用した効果的で具体的なプランが提案され、その成果が出たことで、地域住民のモチベーションも再び上昇した。

⑤活動は助成金で運営されているが、助成期限があるため早急な経済的自立が望まれている。24年度からは、運営資金を確保するため、オリジナルの土産物や飲食を開発し、風鈴の展示期間に観光客向けに提供する準備をしている。

＊ 自治体名　愛知県豊田市
＊ 人口　422,830人
＊ 面積　918.47Km²
＊ 事業開始年度　平成22年度
＊ 事業主体　小渡の夢をかなえる会

連絡先

豊田市社会部旭支所
TEL 0565-68-2211　FAX 0565-68-3476
URL http://www.kankou-asahi.toyota.aichi.jp/

愛知県西尾市　三河・佐久島アートプラン21

①佐久島では、昭和22年に1,634人であった人口が、減少の一途を辿り、平成7年の国勢調査では400人を割り、過疎・高齢化に悩んでいた。その頃、旧国土庁の離島振興調査委員会である「よい風が吹く島が好き女性委員会」が佐久島を視察し、豊かな自然や景観こそが佐久島の貴重な資源であることを提唱した。これを機に佐久島の自然をアートと融合した「アートによる島おこし」の取り組みがスタートした。

②「アートによる島おこし」を基軸として、佐久島固有の自然、風土、歴史、産業といった資源を発掘・研磨し、交流人口の増大など島の活性化を図る。佐久島固有の資源と融合したアート作品を設置することで佐久島にしかない魅力を発信することや、アートイベント・展覧会等を展開することで、さまざまな出会いの場や交流機会を創出している。　島内各所に常設展示されている19点のアート作品を巡るスタンプラリーや、アートと融合した佐久島弘法八十八ヶ所巡りは通年楽しむことができる。また、期間限定展示やアートイベントなどを行うなど、変化をつけることで、マンネリ化しないよう心がけている。

③これまでの地道な活動により、「アートの島・佐久島」として、テレビ・新聞・雑誌等に取り上げられる機会が多くなり、佐久島の知名度が上がった。知名度が上がったことで交流人口は増加している。交流人口の増加に伴い、レンタルサイクル業やカフェ、土産屋が新規開業するなど少しずつではあるが、佐久島は着実に活性化している。

④佐久島の資源をアートと融合することで、他にはないオンリーワンのアートによる島おこしを行政と島民の協働により行っている。当初、前衛的なアートを展開したが、佐久島の資源を活用したアートではなく、また感性の違いなどから島民に受け入れられず、佐久島の資源を活用する取り組みに方向転換した。

⑤常設展示しているアート作品のメンテナンスはこれから避けることのできない課題。また、今後は島内でもアートがほぼ手付かずのハイキングコースや海岸沿いにもアート作品の設置などにより、新たな散策ルートの設定を展開する予定。

＊ 自治体名　愛知県西尾市
＊ 人口　169,573人
＊ 面積　160.34Km²
＊ 事業開始年度　平成8年度
＊ 事業主体　西尾市、島を美しくつくる会

連絡先

西尾市地域振興部佐久島振興課
TEL 0563-72-9607　FAX 0563-72-3731
URL http://www.japan-net.ne.jp/~benten/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

愛知県北名古屋市　旧加藤邸アートプロジェクト＜記憶の庭で遊ぶ＞

①北名古屋市と名古屋芸術大学とは、モニュメントの制作・設置、演奏会の開催等さまざまな分野で協働してまちづくりを進めてきたが、平成20年10月、「北名古屋市と名古屋芸術大学との連携に関する協定」を締結し、お互いが持つ知的・物的資源を有効に活用し、教育、文化、まちづくりなど幅広い分野でより活発に協力しあうことで合意した。これを契機とし「名古屋芸術大学」、「北名古屋市歴史民俗資料館」、「旧加藤家住宅」及び「回想法センター」が連携を図り、『旧加藤邸アートプロジェクト』が実現した。

②芸術を探求する学生たちが「旧加藤邸」という場から触発されて生まれた発想やイメージを、美術・造形物やパフォーマンスとして形にすることで、観客である市民と一体となって、この「場」の記憶を新たに作り出すことを目的とする。明治時代に建てられた国登録有形文化財「旧加藤家住宅」には「回想法センター」が併設され、「懐かしさ」や「記憶」を喚起することで高齢者の介護予防や認知症予防につなげる様々な活動が行われている。この旧加藤邸を会場として『記憶の庭で遊ぶ』をテーマに、名古屋芸術大学の学生等を対象として公募し、選考された作品の展示等を行っている。継続したイベントの開催により、コンセプトの理解が進みひとつひとつの作品に込められた意味合いが深まりを見せている。また、演奏会が加わったことにより、アート空間に新たな趣が加わり、より多くの市民参加を得た。

③本市と大学が協働して歴史ある日本家屋を舞台としたアートプロジェクトを開催することにより、若い学生たちの感性を刺激し、そこで生み出されたアートを媒介として、学生や高齢者を始めとする地域市民の交流を図ることができた。また、事業を継続することによって「記憶」「アート」をキーワードに地域アイデンティティを醸成していくことが可能となった。

④名古屋芸術大学とその学生が、歴史民俗資料館や回想法センター等と協働することによって、既存の施設やスタッフを有効に活用し費用対効果の高い事業を実施している点。文化財の保存と活用という相反する目的を調整し、旧加藤家住宅を展示の舞台として最大限活用する点。展示技術の考案、新たな空間利用の提案によって解決を図り、様々な作品の展示に対応している。

⑤現在、市域の中で点として旧加藤邸で実施しているが、今後、様々な場所を活用することで面的な展開を図っていきたい。

＊自治体名　愛知県北名古屋市
＊人口　82,260人
＊面積　18.37Km^2
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　名古屋芸術大学　北名古屋市

連絡先

北名古屋市総務部経営企画課
TEL 0568-22-1111　FAX 0568-25-0611
URL http://www.nua.ac.jp/prog07/details.php?key=2582

愛知県東栄町　チェンソーアートによるまちづくり

①2000年度、東栄町において山林資源を生かすべく、テーマを「木」とした「2000年記念イベント」を企画した。その際、ゲストに「チェンソーアート世界チャンピオン・BRIAN　RUTH　氏」を招きデモンストレーションと技術講習会を開催したことがきっかけである。

②地域資源を活かした「まちづくり」の構想から、その山林資源を活かした様々な活動を通して、未来を担う子供たちへ「木の素晴らしさや楽しさ」「森林の持つ豊かな可能性」「自然環境・循環の大切さ」を伝える。チェンソーアート競技大会を毎年開催している。また、町内の国道沿い、店舗の入り口等にアーティストがつくり出したチェンソーアート作品が置かれ、地域資源である木による芸術空間を提供している。チェンソーアート競技大会は毎年多くの人が訪れ、平成24年度の大会では２日間で１万２千人が来場した。また、町内に置かれたチェンソーアート作品は来町する観光客等の目を楽しませている。

③大会も12回目を迎え、毎年マスコミに取り上げられている。チェンソーアート作品は多くの方に認められるようになり、高速道路のサービスエリアにも置かれている。また、東栄町は日本のチェンソーアートの発祥の地として認識されるようになった。今後はさらに、町内へのチェンソーアート作品を増やすべく取組を行い、丸太から削り出した彫刻だけでなく、ランプシェードも作品として作られているので、町内各地へ設置していく予定である。

④2000年度のイベント開催時から、住民参加で行われており、現在もチェンソーアートのプロ・愛好家のグループであるチェンソーアートクラブ「マスターズ・オブ・ザ・チェンソー東栄」が活動している。大会を運営していくための予算を確保するため、スポンサーを募っているが、その数が徐々に減少していった。しかし、継続することにより知名度が上がり、また多くの事業者に働きかけることによって、現在では再び多くのスポンサーに支持されている。

⑤大会の参加者、来場者が増えているが、スタッフ不足、町内協力者の高齢化により運営に支障をきたしている。今後、さらに町外も含め、協力者、後継者を増やしていくことが課題である。

＊自治体名　愛知県東栄町
＊人口　3,866人
＊面積　123.4Km^2
＊事業開始年度　平成12年度
＊事業主体　東栄町、チェンソーアートクラブ「マスターズ・オブ・ザ・チェンソー東栄」、とうえい宝の山づくり実行委員会

連絡先

東栄町企画課
TEL 0536-76-0502　FAX 0536-79-3554
URL http://www.town.toei.aichi.jp/basic/tourism/02_chainsaw/chainsaw.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

三重県津市　榊原温泉田んぼアート

①三重県津市の代表的な観光資源である榊原温泉においては、近年、入込客の減少が続き、地域においても、少子高齢化、耕作放棄地の増加、森林・里山の荒廃等、地域力が低下傾向にある。
このような状況の打開を目指し、地域に芽生えたまちおこしの気運に乗り、中山間地農業地域の特色を生かした「田んぼアート」の実践に至った。

②農地・水・環境保全向上対策事業の景観形成、生活環境保全の実践活動として「田んぼアート事業」を行い、農地の遊休地化の防止、食の安全・安心の普及、地産地消の啓発を行うとともに、田植え等で参加者を募り「都市と農村の交流」を図り、榊原温泉観光客の誘致にも繋げている。地元の小学生からデザイン画を公募し、三重県立久居農林高等学校の生徒たちが設計・測量を行い、市内及び近郊から応募のあった親子らで田植えを行っている。平成24年度は約220人が参加し、地域の農業者の指導により、古代米などの３色の稲苗をデザイン画のとおり手植えを行っている。田んぼアートの見頃は例年７月中旬から。平成22年度から実施し、今年で３年目を迎えた。デザインは１年目は津市榊原町にある「風力発電施設の風車」、２年目はアニメのキャラクター「ちびまる子ちゃん」、３年目は「カエルとホタル」を約17アールの田んぼいっぱいに表現している。榊原温泉郷からほど近い距離にあり、宿泊客などの目を楽しませている。

③ポスター・チラシなどの宣伝に加え、新聞・テレビ等にも取り上げられ、榊原温泉郷のイメージアップにつながっている。田植え等のイベントを開催することにより都市部の子ども達にも農業に興味をもってもらうきっかけとなることを期待している。また、地域の子ども達には地元に対する誇りの気持ちが芽生え、地域の絆が強化されている。

④中山間部の農地を利用しているため、約８メートルの高低差がある道路から容易に全景が見下ろせる位置にある。平成22～23年度と二年連続で、黄色の稲苗が原因不明の稲病にかかり枯れてしまったため、平成24年度は黄色の稲色を止め、白色の稲苗を用いている。

⑤榊原温泉郷周辺には豊かな農業地が多くあることから、周辺の集落へも田んぼアートの企画を呼び掛け、田んぼアートの周遊コースのようなものが出来ればより大きな観光スポットへと広がっていくのではないかと期待している。

＊自治体名　三重県津市
＊人口　287,376人
＊面積　710.81Km^2
＊事業開始年度　平成22年度
＊事業主体　榊原みずすまし会

連絡先

三重県津市
TEL 059-255-8803　FAX 059-256-7666
URL http://hisaichan.mie1.net/e406253.html

三重県伊勢市　堤防ペインティング

①NPO 法人神社みなとまち再生グループでは、江戸時代よりお伊勢参りに、伊勢湾を船で渡った、船参宮で栄えたみなとまちの再興を目指し、まちづくり活動を行っている。特に伊勢神宮の干鯛の奉納で有名な御幣鯛船の入港行事が70年振りに平成10年に復活した。その後現在まで15年間に亘り行われているが、華やかな入港行事の会場となるみなとは、高潮対策用のコンクリートの堤防で黒ずんで殺風景なため、この景観を何とかしたいとの必要性があった。

②みなとが堤防でさえぎられ川も見えない為、地域住民でさえ寄り付かない場所であった。まちづくりの上では、人々が気軽で楽しめる海岸を目指している。親が足を運ぶ為には、まず子供達による、景観用のアートを仕上げる方法が有効と考え、指導者として当地出身の知名度のある画家に相談をした。一度に仕上げる数は少なくても毎年の卒業記念と銘うち、地元小学校、中学校の卒業生を対象に学校側の理解を得て、画材もみなとまちにふさわしい内容としている。平成18年度より７年間継続して実施している為、海岸通り全体がアート会場となりつつある。

③活動７年目となり、みなとに集まる地域住民も序々に増え、人々が集うまつり、月１回の地産地消市場、カヌー大会等のイベントも通常化している。さらにお願いした画家の理解もあり、地域の老人会では、図画教室が平成24年度から、月２回開催され、生涯教育への効果が発揮されている。今後は子供教室も計画されている。

④堤防アートの為、本来の堤防は黒ずみ時には落書きもあったが、色彩豊なペイントは現在まで全く損傷を受けることなく、７年前のものも修正する必要がない。事業継続において苦心した点は、プロの画家に依頼する為数日かかること、準備作業と本番において、謝金が必要なことである。すべて NPO の自己資金の為、今後は助成金を得る方法を研究したい。

⑤堤防は、港湾施設であり、管理者の理解を得て、同じ堤防を持つ隣町に広がるまちづくりとなってほしい。近年は津波の問題もあり、高潮対策から津波対策に堤防の改修が懸念される。

＊自治体名　三重県伊勢市
＊人口　131,906人
＊面積　208.53Km^2
＊事業開始年度　平成18年度
＊事業主体　NPO 法人　神社みなとまち再生グループ

連絡先

伊勢市都市整備部監理課
TEL 0596-21-5582　FAX 0596-21-5585

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

三重県鳥羽市　鳥羽まちなみ水族館

①鳥羽市を訪れた観光客に「数ある観光地の中から鳥羽を選んでいただきありがとうございます」という気持ちをおもてなしという形で表したい、また流木等の海のゴミなどを活用することで環境問題を考えていきたいという思いから、平成17年度より活動を開始した。

②手作りの海の生き物の作品を展示することにより、鳥羽を訪れた観光客をおもてなしする空間づくりをするとともに、地元の子どもたちに海ゴミを拾う事により環境問題について興味を持つ機会を提供する。海に漂流した流木やペットボトルなどの海ゴミを回収し、それらを用いたアート作品展の開催や、市内の小中学生等に紙粘土を無料配布し、海の生き物に関する作品づくりを行っている。また、それらの作品を市内各所で展示し、地域の活性化や観光客にも喜ばれる空間づくりに貢献している。市内各小、中、高校の他、支援施設などで紙粘土や流木を用いた体験教室を実施している。また、作製した作品を市内各所（鳥羽駅、佐田浜マリンターミナル、協賛・協力施設など）に展示している。

③海の生き物をモチーフとした作品を市内に展示することによって、まちなかを水族館のように賑わせており、地元や観光客の人達を楽しませている。また、子どもたちと作品作りの材料集めをしながら、身近な海辺の環境を学ぶ機会を与え、さらに多くの人の海ゴミに対する意識改善の啓発にもつながっている。

④鳥羽市は三重県内で海岸漂着ゴミの漂着量が最も多いまちである。その漂着ゴミをアートという形に生まれ変え、賑やかな空間づくりに取り組んでいるだけでなく、作品づくりを通じ子どもたちにおもてなしの心を育て、環境問題を学習する機会を与えている。毎年子どもたちに配布する紙粘土や広報周知のためのチラシ・ポスター等の経費に係る資金繰りが課題である。しかし、まず自分たちが元気になる。そして地域も元気にしていくという思いを基本とし、自分たちができることをできる範囲で行う無理のない活動によって８年という継続的な取り組みに育っている。

⑤引き続き市内の旅館や団体、企業、行政等と連携し、周知・活動の拡大・充実を図り、地域の活性化に努める。また、より多くの子どもたちが参加でき、楽しみながらおもてなしや環境について学ぶ機会を提供していく。

＊自治体名　三重県鳥羽市
＊人口　21,429人
＊面積　108.03Km²
＊事業開始年度　平成17年度
＊事業主体　鳥羽まちなみ水族館実行委員会

連絡先

鳥羽市企画財政課
TEL 0599-25-1101　FAX 0599-25-3111
URL http://www.geocities.jp/tobakirari/

滋賀県栗東市　アートを活かした景観づくり - ヒカリトオトノセカイ -

①平成21年度、国土交通省の「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業の採択を受け、観音寺天水木族と栗東市街道百年ファンクラブが主体となり、実施プロジェクトの一環としてヒカリトオトノセカイを開催した。この企画を通じて、観音寺集落の魅力を発信するとともに、集落住民に地域の魅力を再発見・再評価するため実施した。

②観音寺天水木族では少子化や高齢化が進むなか「定住促進」に向け、一方、栗東市街道百年ファンクラブでは観音寺の素晴らしさを、心に響く形で伝えることを目的に開催した。この企画では、観音寺の美しい風景や家並みを背景にヒカリのイルミネーションで幻想的な世界を演出した。また、これらを背景に善徳院でのコンサート（オトゲシキ）では水、風、やまびこなどの自然の音とアーティストが奏でる音色のコラボ、そしてこれらを地元住民のナレーションでつなぎ１つの物語として構成した。企画にあたったメンバーやコンサートの演者自身が、この自然風景に囲まれた舞台に夢中になり、まさに自然とアートの融合を体感する企画となった。来客や集落住民からも非常に好評であり、定期的な開催を求める声があがっている。

③観音寺での景観まちづくり活動では、利便性や合理性よりも、真の暮らし良さや心の充足感を意識した取り組みを進めており、アートの力をいかして観音寺集落の魅力を発信するという意味で大きな成果があった。しかし、助成事業やボランティアによる活動を前提に進めているため、一定の安定収入を確保しながら継続的に開催できる仕組みを構築することが望まれる。
また、こうした活動は、平成22年度美の里づくり表彰（農業企画委員会）の審査会特別賞の受賞に繋がった。

④観音寺天水木族と街道百年ファンクラブが中心として企画を進め、実践に向けて他地域との交流が生まれ幅広いネットワークが構築された。約20戸の小さな集落であるため、どんな活動でも人手不足が課題であるが、家族的なコミュニティによる協力体制や、ヨソモノを受け入れる寛容さを強みにし、人と人のネットワークが拡大している。

⑤定住促進にという目標を掲げるなか、定住希望者への住まう場所の提供や、観音寺ファンのヨソモノを受け入れ、ともに活動を展開する仕組みづくりが課題であり、現在、様々な角度から検討している。

＊自治体名　滋賀県栗東市
＊人口　65,913人
＊面積　52.75Km²
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　栗東市街道百年ファンクラブおよび観音寺天水木族

連絡先

栗東市建設部都市計画課
TEL 077-551-0116　FAX 077-552-7000
URL http://www.kkr.mlit.go.jp/atarashiikoukyou/kannonji/index.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

滋賀県日野町　桟敷（さじき）窓アート

①桟敷窓のある昔ながらの街並が、しだいに空地になったり、今風の家になったりし、街並が壊れていく。何とか、この町の素晴らしい伝統文化、そして街並も人の暮しも（落ち着いた景観・良い風習を）、次の世代に伝えたい。そう思い、地元の工芸作家の協力を得て、昔ながらの街並の中でアート展を始めた。

②町に活力を取り戻したい。ここに住む皆が活き活き暮らせるようにしたい。日野の古い歴史と文化を大切に守りたい。町の歴史と文化の紹介、並びに地元等の工芸作家の作品の展示販売。10月中旬の土・日および5月2～3日の年2回。秋10月は、「日野まちなか歴史散策と秋の桟敷窓アート」、春5月は、「日野祭の桟敷窓アート」。

③ほとんど日野の街の中を観光で訪れる人などいなかったが、桟敷窓アートを2001年より実施して以来、日野の歴史を知ろうと訪れる観光客が見られるようになった。町内の人も、改めて日野の古い歴史と高い伝統文化を認識されたようである。

④主に、全く私的なボランティアグループや町内会や各ご家庭のご好意によって運営している。公の資金援助は無い。（1）アート展の会場として、借用できる家が不足していること。（2）休憩所、昼食会場の設営と協力者が不足していること。（3）広範囲にPRする為の手段や資金が不足していること。

⑤より幅広い分野のアーテイスの参加協力を得て、アート展としての魅力を高めていかねばならない。観光資源としては十分と思われるが、休憩所や食事処の不足について不満の声があり、この解決が難しい点となっている。

＊自治体名　滋賀県日野町
＊人口　22,763人
＊面積　117Km²
＊事業開始年度　平成13年度
＊事業主体　地域住民（世話人：中田 穣）

連絡先

日野町企画振興課
TEL 0748-52-6552　FAX 0748-52-2043
URL http://sajikimado.gozaru.jp/

京都府城陽市　光のページェント～TWINKLE JOYO～

①平成13年3月に城陽市観光協会が設立された際に、大きな観光資源のない城陽市に新しい観光資源をつくりだすことを目的としてイルミネーションイベントを企画し、将来的には城陽市全体を光らせることを目指して取組みが始まった。

②市民参加型のイルミネーションイベントによる、総数約55万球を用いた市民・市民団体などの手づくりによる装飾作品が、会場である城陽市総合運動公園一帯に広がる壮大な光のページェント。また、「きらめくサウンド広場」と銘打ったイベント会場を設け、音楽やダンス等によりイベントを盛り上げている。回を重ねるごとに、出展作品の質が向上しており、見応えのある作品が増えている。提供できる球数に余裕が生じてきたこともあり、出展者が作品づくりを楽しめる環境が整ってきている。

③城陽市における観光資源はこれまで市の木でもある「梅」に限られていたが、「光のページェント～TWINKLE JOYO～」は、京都府内でも最大級の規模を誇るイルミネーションイベントに成長し、府内外を問わず多くの来場者を獲得していることから、近隣の商店街などでも関連したイベントの開催など、地域の賑わいづくりを生みだすきっかけとなっている。また、市内コミセンにも装飾がなされており、市民がイルミネーションに親しむ素地を整えている。

④【特徴的な点】市民や市民団体の手づくりによる装飾作品が出展されること。出展者は毎年違った作品を出展し、来場者を飽きさせないよう努力している。【苦心している点】装飾作品出展団体が固定化し、参加数が伸び悩んでおり、球数の増加や全体としての装飾のノウハウの共有など、作品出展を楽しめる環境づくりに取り組んでいる。

⑤【①交通渋滞の緩和】伸び続けている来場者数に対応できる駐車場の確保と、公共交通機関利用の呼びかけ【②装飾参加団体の固定化】新しい観点からの作品を展開するため、市民団体や大学等への参加呼びかけ【③作品の質的向上】年度ごとに作品の統一テーマを決めるなど作品を洗練させる仕組みづくり

＊自治体名　京都府城陽市
＊人口　79,159人
＊面積　32.74Km²
＊事業開始年度　平成13年度
＊事業主体　城陽市観光協会

連絡先

城陽市市民経済環境部商工観光課
TEL 0774-56-4019　FAX 0774-56-3999
URL http://www.joyo-kankou.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

大阪府岸和田市　紀州街道にぎわい市　夢灯路

①城下町の風情を残す岸和田本町地区において、平成２年度から道路修景や家屋修景などのまちなみ整備が進む一方で、当該地区の認知度が低い状況であった。そこで、市内をはじめ広く知ってもらおうと、平成10年に、地域による手作りイベント「紀州街道にぎわい市」を開催、平成15年から、その前夜祭として「夢灯路」が実施されている。夢灯路で使用する灯籠には、地元小学校の協力のもと、子ども達が絵を描き、イベントを盛り上げている。

②本町地区の歴史的まちなみの魅力に触れてもらい、歴史的まちなみ保全の大切さを広めるとともに、交流の活性化を目指している。「夢灯路」では、子ども達が絵を描いた200張の灯籠が、歴史的まちなみを幻想的に照らし出し、本地区ならではの魅力を創出している。「紀州街道にぎわい市」では、工芸品やアートの出展もあり、アーティストと地域住民との交流の場としての広がりを見せている。また、本地区内に位置する「岸和田市まちづくりの館」において、写真展や絵画展などを実施し、アートを通して地域の歴史や魅力を発信している。歴史的まちなみとアートと組み合わせたり、アートを通すことにより、新たな視点で地域の歴史や魅力を発信することができ、毎回、多くの人が訪れている。

③継続的に地域の子ども達に絵を描いてもらうことにより、地域内の活動の輪が広がり、またイベントとして認知度が高まり、毎年多くの人が訪れている。また、当該地区がマスコミに取り上げられる機会も増えるなど、地区としての認知度も高まりつつある。

④紀州街道にぎわい市実行委員会は、本町地区の歴史的まちなみの保全に取組む地元まちづくり団体「本町のまちづくりを考える会」が中心となり、地域団体などと連携しながら組織されている。実行委員会によって、事業費の確保、運営体制、催し物の工夫などが行われている。また、「本町のまちづくりを考える会」は、平成21年４月から指定管理者として、「岸和田市まちづくりの館」の管理・運営を実施している。

⑤活動の担い手確保、次世代への継承が今後の課題。このため、歴史的まちなみの魅力や、まちなみ保全活動に関する情報を積極的に発信するなど、歴史的まちなみ保全の大切さ広めるとともに、活動に参加しやすい環境づくり、また次の世代への参加呼びかけなどが地域で行われている。

＊ 自治体名　大阪府岸和田市
＊ 人口　202,226人
＊ 面積　72.32Km^2
＊ 事業開始年度　平成15年度
＊ 事業主体　紀州街道にぎわい市実行委員会

連絡先

岸和田市まちづくり推進部市街地整備課
TEL 072-423-2121（3310）　FAX 072-437-9171
URL http://kishiwadahonmachi.com/

大阪府豊中市　豊中まちなかクラシック

①今後とも都市の活力を維持、発展させていくためには、都市のブランドイメージの向上をはじめ、さまざまな手法により、交流人口、定住人口等の増加を図り、地域経済活動の活性化や地域への愛着、誇りの醸成につなげていく必要がある。その方策の一つとして、日本センチュリー交響楽団が本拠地を市内に置くなど、音楽資源に恵まれた本市の特長を生かし、都市のブランドイメージ向上のために、それらの音楽資源が内包する創造的な可能性の発現を促進し、改めて創り出す本市ならではの魅力を、市内外に発信していくものである。

②市内の音楽資源等を活かしながら、本市ならではの魅力を創りだし、それらを市内外に発信し、”音楽あふれるまち　とよなか”として、都市イメージの向上をめざす。日本センチュリー交響楽団とタイアップし、教会、寺院その他歴史的建造物等をはじめ豊中の歴史や文化を象徴するさまざまな場所を演奏会場とし、身近でありながらも質の高いクラシックコンサートを同楽団員によるさまざまなアンサンブル編成で開催する。
＜平成24年度は以下の日程により合計10か所の会場で開催＞
○平成24年11月３日（土）（１）原田しろあと館（原田城跡（市指定史跡）・旧羽室家住宅（国登録文化財））、（２）カトリック豊中教会（昭和14年築。豊中市都市デザイン賞受賞）、（３）市立伝統芸能館（はにわ等展示併設）
○11月４日（日）（４）本家土手嘉（江戸時代創業のうどん店。現店舗は昭和元年築）、（５）桜の庄兵衛ギャラリー（江戸時代に遡る庄屋屋敷。国登録文化財）、（６）センチュリー・オーケストラハウス（同楽団練習場）
○11月10日（土）（７）東光院萩の寺（８世紀開創。萩の名所）、（８）ノワ・アコルデ音楽アートサロン、（９）日本キリスト教団豊中教会（パイプオルガン附設）
○11月14日（水）（10）市立アクア文化ホール（大阪都市景観建築賞受賞）

③周辺地域から際立つ“音楽あふれるまち　とよなか”という都市イメージの向上につながるとともに、クラシック音楽と組み合わせることにより、会場となる教会、寺院やその他歴史的建造物等の地域資源の新たな魅力の創造にもつながっていくものと考えている。

④歴史的建造物などを会場とし、クラシック音楽と組み合わせることにより、それらの地域資源の新たな魅力を生み出すことをめざしている点。

⑤今後は、より多くの主体に関わってもらい、規模の拡大も視野に、毎年度継続して実施していくことができるような体制づくりが必要。

＊ 自治体名　大阪府豊中市
＊ 人口　390,294人
＊ 面積　36.6Km^2
＊ 事業開始年度　平成24年度
＊ 事業主体　豊中市、日本センチュリー交響楽団

連絡先

豊中市政策企画部都市活力創造室
TEL 06-6858-2863　FAX 06-6858-2667

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

大阪府摂津市　チューリップアート in 摂津

①平成16年、景観まちづくりワークショップのメンバーでチューリップの花を富山県入善町の農家まで摘みに行き、景観まちづくりのテーマの一つとしてその花でアートを描いたことから始まり、平成17年度に市民参加によるチューリップアート in 摂津実行委員会が組織された。

②チューリップの花で描かれた巨大なアート作品を観賞してもらうことで、市民の景観意識の向上と、より良い都市景観まちづくりの推進に貢献することを目的とする。毎月の例会で、干支をヒントにしたアートの絵柄を決めていく。実施の際は、花摘班と下絵班に分かれ、花摘班は入善町でチューリップの花約10万個分を摘み、下絵班は絵柄の縁取りを会場に描く。持ち帰った花によるアートの作成は、実行委員会メンバーや市民、協力団体等の有志によって行なわれる。例年、４月下旬から約５日間開催する。回を重ねるごとに市内外への認知度が高まり、イベント情報誌等でも取り上げられるようになった。それに伴い、来場者数も増加傾向にある。毎年、実施年の干支をヒントにした絵柄とコンセプトを掲出している。平成24年度は絵柄を「龍」、コンセプトを「協働」とした。

③平成24年度で９回目を迎えた本事業は、摂津市の風物詩と言えるほど、地域住民による手づくりイベントとして定着している。平成21年１月には大阪ミュージアム登録物として認定された。また、実行委員で市内の花壇にチューリップやコスモス等を植え、花とみどりによる景観向上に取り組むほか、入善町の農家から購入した球根を市内小学校等に無償配布する等、摂津市と入善町との交流だけでなく、チューリップを通じ市内関係機関との交流も図られている。

④景観まちづくりワークショップを出発点とした市民主体の実行委員会により運営され、活動資金も行政からの支援だけに頼らず、メンバーによる会費負担や賛同者からの寄付・協賛等で賄われる。過去に、チューリップの開花時期が当初予定より前後することで、開催期間を直前になって変更したことが４回あった。自然相手の事業であるので、実施直前には現地との連絡を密に取り、実施に向けて判断する必要がある。

⑤メンバーの高齢化、また女性会員がメインであり、花摘みや開会式当日の設営等、力仕事の部分を市職員が担う等、人的な負担が問題となりつつある。また、富山県でもチューリップ農家が減ってきており、現地に摘み取りに行って必要数量を確保することが難しくなってきている。

＊ 自治体名　大阪府摂津市
＊ 人口　84,414人
＊ 面積　14.88Km²
＊ 事業開始年度　平成16年度
＊ 事業主体　チューリップアート in 摂津実行委員会

連絡先

摂津市都市整備部都市計画課
TEL 06-6383-1111（2613）　FAX 06-6319-5225
URL http://www.city.settsu.osaka.jp/soshiki/1-65-2-0-0_6.htm

大阪府岬町　ウォールペインティング事業

①大阪府内に唯一残された自然海岸である岬町内の長松自然海岸は、年々町外の来訪者も増え、岬町の観光スポットとしての魅力を備えていた。この魅力ある自然資源を活かす手法の一つとして、岬ライオンズクラブで『海と緑！やっぱり岬』と目標を定め、"であいのまち"の創造に向けたイベントが検討され、防潮堤を絵画で飾る「ウォールペインティング事業」が企画された。

②防潮堤の有効活用や美しい自然資源を活かした景観づくりに役立てるため、町内部に限らず、広く地域から参加者を募り、交流の推進を図ることを目的とする。作画テーマを「自然」・「夕陽」・「夢」とし、地域の人々が壁面をキャンバスとして、自らの手で自由にペインティングする。参加者は公募により募集し、耐久性と環境に配慮し、事業者が準備した塗料を使用する。平成11年より継続事業として実施し、平成23年には約550mのシーサイドギャラリーが完成した。テーマに沿って描かれたほのぼのとした絵画は、一つ一つの作品に描き手の個性が溢れている。

③この事業が開始されてから、防潮堤への落書きやゴミの放置がなくなり、環境美化対策としての成果も上げている。また、長松自然海岸は「日本の夕陽百選」に選ばれて以降、多くの観光客が訪れるようになったが、夕陽の美しさに加え、防潮堤の心温まる絵画により訪れる方々に楽しい時間を提供している。このように、ウォーペインティング事業は、アート鑑賞としてだけではなく、自然保護と環境美化への貢献など、さまざまな相乗効果を生み出している。

④他のボランティアの人による花壇も設置され、見違うばかりの環境となり、地域のまちづくりの推進に貢献されている。絵画の修正及び水洗い・コーティング作業を行っていたが、経年劣化に伴い、平成21年から絵画のリニューアルが実施されている。

⑤ペインティングされていない防潮堤があと約250m残っており、この区間の実施が検討されている。

＊ 自治体名　大阪府岬町
＊ 人口　17,544人
＊ 面積　49.1Km²
＊ 事業開始年度　平成11年度
＊ 事業主体　岬ライオンズクラブ

連絡先

岬町まちづくり戦略室企画地域再生担当
TEL 072-492-2775　FAX 072-492-5814

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

兵庫県西宮市　苦楽園・夙川キャンドルナイト

①苦楽園・夙川地域では、有志のお店が中心となって、地域の魅力あるお店を広く、多くの方に知ってもらうため、2009年からキャンドルを使った話題性がある事業を展開することで、集客につながる街の魅力作りに取り組んでいる。

②こころ豊かな暮らしにつながるきっかけづくり、集客につながる街の魅力づくり。キャンドルナイトとは、夏至と冬至の日を中心とした期間に夜８時から10時までの２時間、電気を消してキャンドルのあかりで過ごすというもの。苦楽園・夙川キャンドルナイト“2012年夏至”のイベントではキャンドルナイトインスタレーション（空間演出）など様々なイベントを開催し街のにぎわいを創出した。毎年、夏至と冬至の日を中心とした期間に様々なイベントを行っている。2009年から開始された当該事業は2012年で４年目を迎え、夏至のキャンドルナイトインスタレーションでは、過去最も多くの来訪者があった。

③開始当初は参加協力店が24店舗だったものが、2012年では97店舗となり、街全体で街の魅力創出に取り組むきっかけになると考えている。また、イベント実施日は盛況で、他地域からの参加者も多く、街のにぎわい創出に成功している。今後はこの取り組みが参加協力店だけでなく、家庭にも広がり、地域住民を巻き込んだ地域活性化策になることを目指している。

④他のキャンドルナイトイベントと異なる点として、キャンドルを使った催し物だけでなく、イベントント期間中、参加協力店の入り口・ファザード・店内などにキャンドルを灯し、街全体で本事業に取り組んでいる。また、学童児童たちに願い事を描いてもらい、それを子ども灯ろうとして各参加協力店に配置している。これは、子ども灯ろうを本人又はその両親等が確認するために、実際に店内に入ってもらおうという、顧客獲得のための仕組みである。地域の各店への新規参加協力の呼びかけに一番労力を要している。担当者が各店に足を運んで本事業の主旨説明・協力依頼を直接行うことにより、参加協力店を増やしてきた。

⑤参加協力店は年々増えているが未参加の店もあり、これらの店に参加して頂くことが課題である。地域に本事業及びその主旨が浸透し、自然発生的に地域全体で本事業に取り組んでいけるよう、今後も根気良く活動していきたいと考えている。

＊自治体名　兵庫県西宮市
＊人口　482,858人
＊面積　100.18Km²
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　苦楽園ストアーズミーティング

連絡先

西宮市産業文化局産業文化総括室商業振興課
TEL 0798-35-3387　FAX 0798-35-4045
URL http://event.candle-night.org/detail.php?id=5158

兵庫県高砂市　高砂町空き家・空き店舗活用プロジェクト

①高砂町には風情のある美しい町並みや歴史的な建物など多くの観光資源があるが、あまり知られておらず、空き家・空き店舗が増えている状況である。空き家・空き店舗対策、また、個性的で魅力的な町づくりによる地域活性化を図るため、平成23年度より高砂商工会議所・高砂市観光協会が中心となり高砂町にある空き家・空き店舗を活用し、事業者（カフェ、ショップ等）や、アーティスト（アトリエ、作業場等）を誘致する「高砂町空き家・空き店舗活用プロジェクト」活動を実施している。

②高砂町の建物や固有の景観を活かしながら、高砂町にある空き家・空き店舗を活用し、アート活動等を行う方を誘致することにより、個性的で魅力的な町づくりを目指す。高砂町空き家・空き店舗活用プロジェクトの趣旨に賛同した空き家・空き店舗の所有者と入居希望者をマッチングさせ、空き家・空き店舗を低家賃でカフェやショップ、芸術家のアトリエ等の活動場所として貸出し、町を活性化する活動を行う。原則週１回プロジェクト会議を開催し、登録物件及び入居状況の報告、今後の取組み内容などを協議している。平成24年６月現在、空き家・空き店舗に４件が入居し、アート活動及び事業活動を実施している。（革道具屋、アトリエ、エステなど）

③昨年から開始した活動であるため、活動内容が市内でもあまり知られていないが、空き家・空き店舗に入居した事業者や芸術家が４名となり、点が線に繋がっていく活動も行われている状況である。今後は、空き家・空き店舗を活用したイベント等を実施し、アーティストと地元住民が協働して、個性的で魅力的な町づくりを行い、地域の活性化を図っていく。

④高砂商工会議所、高砂市観光協会、行政、各種団体等が協力してプロジェクトに取組み、アートに特化したまちづくりを目指している。空き家・空き店舗の所有者や地元商店街や地元自治会にプロジェクト内容を理解してもらい、協力を得るのが難しい。現在、地元自治会等に事業内容の説明及び事業報告をする方向で検討中である。

⑤空き家・空き店舗の荷物整理・処分や改修等について、ボランティアを募集し、ゴミの整理・処分、改修の手伝い等を実施し、空き家・空き店舗物件の確保を行う方向である。また、空き家・空き店舗を活用したイベントを実施し、多くの方にこの事業をPRし、高砂町に人を呼び込んでいく。

＊自治体名　兵庫県高砂市
＊人口　95,259人
＊面積　34.40Km²
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　高砂商工会議所、高砂市観光協会

連絡先

高砂市生活環境部産業振興課
TEL 079-443-9030　FAX 079-443-0009
URL http://tks-akiyataisaku.seesaa.net/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

兵庫県朝来市　あさごアートフェスティバル

①1999年の美術館開館以降、入館者数の伸び悩みや、広域でのPR不足などの問題があり、美術館の存在を広くPRし、入館者の増加をはかり、地域住民や子供たちが気軽に訪れることのできる事業が必要であった。

②親子・家族づれなどで美術館を訪れ、気軽に芸術に触れ、また自ら体験することができる事業、また普段、美術館等に足を運ばない方が、美術館に足を運ぶきっかけとなることを目的に開催している。美術館敷地内彫刻公園で野外仮設ステージを組み、フォーク・ポピュラーミュージックのコンサート、美術館ゆかりの若手作家を講師とした主に子供向けの半日・1日単位で参加できる工作ワークショップ、小学生対象の1泊2日でさまざまな講座を体験するチャイルドアートキャンプ、開催中の企画展関連の各種体験型ワークショップ、芸術の森ウオークラリーなど野外コンサートには例年、2,000人規模の観覧者がある。またチャイルドアートキャンプは例年、定員を超える申し込みがあり、キャンセル待ちとなるほか、日帰りのワークショップも週末はのべ100人ほどの参加があり、たいへん人気の高いイベントに成長している。

③野外コンサートには例年、2,000人規模の観覧者がある。またチャイルドアートキャンプは例年、定員を超える申し込みがあり、キャンセル待ちとなるほか、日帰りのワークショップも週末はのべ100人ほどの参加があり、たいへん人気の高いイベントに成長している。

④美術館ゆかりの若手および地元の芸術家がワークショップの講師をしている。もともとある石積みのダム（ロックフィルダム）を背景にした、世界でもここにしかない風景の中での野外コンサートや彫刻公園内でのワークショップを行っている。講師をお願いしている芸術家の皆さんもだんだんと年齢を重ねてきておられ、新しい若手の講師の発掘を続けている。何人かは当市が全国公募している公募展で優秀な成績を収められた方や、個展を開催した方などに講師として就任いただいた。

⑤経済情勢の悪化や市の財政状況やが厳しい中、毎年の予算の削減や、また館の前まで来ていても子供だけを入館させ、親は入館しないなど、財源の確保に苦労している。特にPR経費を削減されるので、お金のかからないPR方法を模索中。

＊ 自治体名　兵庫県朝来市
＊ 人口　33,252人
＊ 面積　402.98Km²
＊ 事業開始年度　平成17年度
＊ 事業主体　朝来市・あさご芸術の森美術館

連絡先

朝来市市民文化部芸術文化課
TEL 079-672-6114　FAX 079-672-0500
URL http://www.city.asago.hyogo.jp/

和歌山県和歌山市　わぁーと！手づくり市場（マーケット）

①和歌山市では『中心市街地活性化法』に基づき、平成19年8月27日に『和歌山市中心市街地活性化基本計画』の内閣総理大臣認定を受け、基本計画事業等に基づき市民の方々と協力しながら活性化に向け平成24年3月31日まで取り組んできました。その一つの事業として、アートで街づくりをということで、わかやまの玄関口であるJR和歌山駅前のけやき大通りにおいて、地元商店街、自治会、行政が一体となって実行委員会を組織し事業をスタートしました。計画終了後もまちの活性化に資する事業として継続しています。

②人々がアートに触れながらまちなかを楽しく歩くことで回遊性や滞留を高めるとともに、文化交流することにより新たな『まち』の賑わい創出に寄与することを目的としています。オリジナル雑貨やこだわり手づくり品、写真や絵、自主制作CD等ジャンルを超えたアート作品のフリーマーケットになっています。また、手づくりアート作品の製作実演、体験、さらには、歌や楽器演奏、似顔絵などのアートパフォーマンスを通し、歩いて楽しい空間作りをしています。毎月第3土曜日午前10時～午後4時（荒天時翌日順延）。最大出店区画数110区画、出展料1区画1,500円／日。平成21年度から延べ32回実施。平均出展区画数、平成21年度50.5区画、平成22年度65区画、平成23年度70.4区画。

③当事業実施前の歩行者・自転車の通行量875人に対し、開催日当日の通行量は平均約2,400人と定着しています。また、地元商店街の方々も定着していくことで地域コミュニティが構築されつつありますし、自分たちの事業という自覚も芽生えてきており今後の展開に期待しております。

④他都市の手づくり雑貨系のイベントに対し、出展料が安いことと、交通の利便性が良い。和歌山市中心市街地活性化法基本計画の期間中は、社会資本総合整備交付金を活用していたが資金繰りが厳しくなっている。

⑤定着はしてきているが、更なる集客に向けた取組が必要である。また、出展料の値上げ等の事業費の捻出が課題である。

＊ 自治体名　和歌山県和歌山市
＊ 人口　367,591人
＊ 面積　210.25Km²
＊ 事業開始年度　平成21年度
＊ 事業主体　野外アートプロジェクト実行委員会

連絡先

和歌山市まちづくり局まちおこし部商工まちおこし課
TEL 073-435-1233　FAX 073-435-1256
URL http://www.city.wakayama.wakayama.jp/machiokoshi/wartte dukurimarket/syutten.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

鳥取県米子市　米子彫刻シンポジウム

①米子市在住の若手芸術文化愛好家により「彫刻のあるまちづくり」の希求という形で、企業、団体、個人のボランティアを中心とした募金活動と、民間主導による実行委員会により、彫刻シンポジウムが開催された。その後主体が行政に移り、一般市民や団体のボランティアによる参加、協力を得ながら事業が推し進められた。

②米子市は、近・現代彫刻の偉大な先駆者と早くから深い関わりをもっている土地柄であり、そうした先駆者の偉大な精神と遺産を讃え継承するとともに、彫刻のあるうるおいに満ちたまち、文化芸術都市づくりを目指す。国内外から彫刻家を招集し、制作にあたっては市民ボランティアの参加を募り、市内各地において公開で実施。また、シンポジウム関連事業の一環として、「夏休みこども彫刻教室」、まちづくりと彫刻をテーマにしたパネル討論会、彫刻シンポジウム写真展などを開催。昭和63年から平成18年にかけて隔年で10回のシンポジウムが開催された。また、制作された作品については、米子市が実施主体となって計画的に彫刻ロードに設置された。

③制作過程を公開することで、彫刻に対する理解や関心を深めることができ、また、制作に参加することにより、市民としてのアイデンティティが自覚され、まちづくりへの参加意欲が育てられた。さらに、優れた彫刻作品を計画的に設置することで、文化の香り高いまちづくりと、自然と調和した都市景観を創造することができた。設置場所となった彫刻ロードは市民の憩いの場となっている。

④市民と行政が一体となり、彫刻のあるまちづくりが官民協働で進められた。まちづくり計画の中にマッチし、環境に調和していくような作品をつくり設置していくことが重要であるため、作家の意見や主張を聞きながら、彫刻設置場所の選定、「景観」との調整などについて、関係者間で意見交換などを活発に行った。

⑤彫刻ロードは「美しい日本の歩きたくなるみち500選」に選ばれているが、彫刻ロードに対する市民の認知度が低いため、彫刻作品をもっとたくさんの人に見て楽しんでもらえるよう、さらなる周知徹底を図っていく必要がある。

＊自治体名　鳥取県米子市
＊人口　148,866人
＊面積　132.21Km²
＊事業開始年度　昭和62年度
＊事業主体　米子彫刻シンポジウム実行委員会

連絡先

米子市教育委員会事務局文化課
TEL 0859-23-5437　FAX 0859-23-5414
URL http://www.city.yonago.lg.jp/10674.htm

岡山県瀬戸内市　２次元刀立体展

①世界中で、日本刀はよく知られているが、日本刀についてきちんと説明できる日本人は少ない。また、愛刀家が減少する中、現存する日本刀をより良い状態で次代に残していくためにも、今の若者に日本刀の手入れの仕方などを広く知らせる必要がある。若者に影響力のあるサブカルチャー（アニメや漫画、ゲーム）を通じて日本刀に興味を持つきっかけ作りを行う。

②日本刀世界一の生産量を誇り、日本刀の聖地ともいわれる備前国長船にて、日本刀に興味を持つきっかけ作りを行う。また、日本刀のものづくりを見ることを通じて、将来の日本刀職人の卵を育てる。古いもの（刀剣、甲冑、火縄銃などの武器･武具）と新しいもの（アニメや漫画、ゲーム作品）を同時に展示し、伝統の技の伝承や、刀剣文化に対する理解を深める。夏休み時期の開催及び、展示品撮影ができることから、ネット上での評論、小・中学生たちの自由研究の素材ともなるなど、多角的な見方や展開が行われている。

③特別展開催に伴い、周辺飲食店等にて売り上げが向上した。通常の展示では、地元の方の入館者比率が少ないが、こうしたサブカルチャーとのコラボ展では地元の方の入館が多くなり、博物館運営に理解が得られた。平常では50代以上の方の比率が多いが、20～30代の比率が逆転し、若者に浸透している。さらに、男女比率も７：３で通常は男性が多いのに対し、６：４若しくは完全に男女比率が逆転することもあり、通常最も入館者が少ない20代の女性の入館者が増え、若者への刀剣文化の伝承が図れた。

④サブカルチャーと日本刀並びに古いものとのコラボレーションが初めてであるところ。一過性の興味で終わらないよう、また来たいと思えるような余韻が残る展示を心がけている。

⑤第１回目は古い名品を、現代のキャラクターを通して見てみる。第２回目は日本刀を作る職人が新しいデザインで日本刀のものづくりに挑戦し、今後は日本刀を題材にアニメや漫画家たちによる新たな日本刀文化のクリエイトを目指す。

＊自治体名　岡山県瀬戸内市
＊人口　38,861人
＊面積　125.53Km²
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　瀬戸内市

連絡先

瀬戸内市教育委員会備前長船刀剣博物館
TEL 0869-66-7767　FAX 0869-66-7971
URL http://www.city.setouchi.lg.jp/~osa-token/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

岡山県真庭市　勝山のお雛まつり事業

①とある土雛作家が勝山で展示会を開催した際に、地元の関係者に「町並みが雛まつりにとても適している」との提案から始まった。当初、有志による実行委員会が立ち上がり、各実行委員の人的ネットワークにより協力者を募り、その後、しだいに行政や商工会の全面的な協力を得て軌道に乗っていった。

②ロマンと歴史を語るお雛様を展示し、多くの観光客に勝山の人のぬくもりと良さをPRし、地域観光振興に寄与するとともに、地域の活性化を図ることを目的としている。桃の節句を祝って町並み保存地区から新町商店街の約1キロの区間で、民家や商家の軒先や沿道にお雛様を飾って、観光客を楽しませるイベントである。現在、約100軒の参加がある。素材、形態、ディスプレイなどそれぞれの家で工夫をこらしているところが見所である。回を重ねるごとに参加する個人や団体が増え、町並み保存地区を中心に様々な場所でお雛様がみられるようになった。来訪者も年々増加している。

③活動15年を迎え、地域に欠かせないイベントに成長した。マスコミ等にもしばしば取り上げられ勝山＝雛祭りのイメージが定着している。また、民家の玄関を装う「のれん」も見所で、お雛まつりを盛り上げている。

④地域住民、NPO法人、企業や商店街とのコミュニケーションが活発化し、協働によるまちづくりの推進に貢献している。当初から14年が経過し、マンネリ化の進行と、中心となる実行委員会の世代交代の時期になっている。若い層の積極的な参加を進め、みんなで応援できる体制づくり

⑤現在、市と真庭市商工会の助成金及び有志の協賛金で運営しており、市の財政状況が厳しさを増すなか、運営費の圧縮が必要となっている。また、近隣で同種のイベントが行われるようになり、勝山らしさを創出していくことが重要となっている。

＊自治体名　岡山県真庭市
＊人口　49,987人
＊面積　828.43Km²
＊事業開始年度　平成11年度
＊事業主体　勝山のお雛まつり実行委員会

連絡先

真庭市勝山支局総務振興課
TEL 0867-44-2607（101）　FAX 0667-44-4569

広島県尾道市　絵のまち尾道四季展開催事業

①オイルショック以降の造船業の低迷などによるまち全体の活力低下という状況の中で、地域、特に商店街の活性化を図る必要を感じた行政、経済界双方の協力のもと、「絵のまち尾道」という特性を生かした美術公募展を開催することとなった。

②風光明媚な景観と情緒豊かな風情から有名画家らに描かれ、絵のまちとして知られる尾道を描いていただくとともに、これら作品の鑑賞機会の提供に努め、市民の文化意識の高揚に資する。絵のまちとして知られる尾道の風景・風俗を題材にした、全国絵画公募展。隔年開催で、全国の絵画愛好家の支持を受けている。著名な審査員らの選考により、尾道賞グランプリ（賞金200万円）を筆頭に入賞作品は市立美術館に、入選作品は商店街の店先に展示公開する。会期中はまちごとギャラリーの様相となり、町の散策と絵画鑑賞を同時に楽しむことができる。地方開催にも関わらず、出品数は1,000点を越え、美術振興を基盤に広くまちづくりに貢献する事業として定着している。また、多くの美術愛好家をはじめ一般観光客らの交流促進にも繋がっている。

③30年近くの開催実績を持ち、全国的にも知られた絵画公募展である。事業を継続実施するなか、近年なお作品出品数が増加傾向にあることには、本事業が定着し、一定の成果が得られている様子が伺える。全国から訪れる絵画愛好家が市街地でスケッチを行う様子は、絵のまち尾道を象徴づける風景として、芸術文化活動を通じた交流の促進となっている。継続開催により出品希望者や鑑賞者の意に沿う事が見込まれ、芸術文化都市を標榜する尾道市の広報面でのイメージ効果も期待できる。

④市内商店街の協力により、商店街店舗のショウウィンドゥなどに作品を展示する。期間中は街ごと美術館の様相となり、美術愛好家をはじめ多くの人々が尾道を訪れる。展示期間中、販売可能な作品を、購入希望者に斡旋も行う。多様化する絵画技法や、絵画愛好家の要望に応えていくため、募集要項の見直しを繰り返すなど、出品者の目線に立った運営に取り組んできた。

⑤当該事業が本市の活性化に繋がるまちづくり事業として一層有効に機能していくために、関係機関等との緊密な調整を図りつつ事業を推進していく。また、本市の財政状況や美術館の収蔵スペースを考慮に入れ、賞金額など賞の設定等を今後検討する必要がある。

＊自治体名　広島県尾道市
＊人口　145,937人
＊面積　284.85Km²
＊事業開始年度　昭和58年度
＊事業主体　絵のまち尾道四季展運営委員会

連絡先

尾道市教育総務部美術館
TEL 0848-23-2281　FAX 0848-20-1682
URL http://www.city.onomichi.hiroshima.jp/www/info/detail.jsp?id=2430

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

広島県三原市　小鷺島ビオアイル計画

①「製品を通じてより良い環境づくりに貢献したい」と考えて活動してきたポエックが平成20年１月に出会ったのが、小佐木島である。その島が環境破壊の危機に瀕していると聞き、約３万坪を購入して乱開発から守ることにしたことがきっかけである。そして、平成21年１月、プロジェクトを発足し「小鷺島ビオアイル計画」と名付け奮闘している。

②私たちを育む自然環境、歴史、文化の保護に貢献するとともに、広く一般的に瀬戸内海の里海文化への理解と関心を、アートを活用した観点から醸成し、社会に貢献することを目的とする。小佐木島（人口12人：H24.4.1現在）を舞台とし、島の古来の名称である「小鷺島」が表すような自然と共生する誇りある文化と歴史を、アートの力を借りて島を一個の生命体と捉えて自然環境保護と里海文化の再生を行う。また、瀬戸内海里海文化を芸術としてとらえ、表現し普及していく。平成22年１月、芸術的視点を取り入れたホームページを開設。平成23年４月、島の古民家を借りて芸術家・建築家のチームによるセルフビルドの古民家再生が完成し、活動拠点とし活用している。平成23年７、８月、島にある大型廃棄物の撤去作業では、三原市とも協力して小佐木島のクリーン化を実現した。

③活動４年目を迎え、毎年４月の恒例行事となった島の方々との絆を深めるためのお花見会はポエックと島の方々の友好な交流の場となっており、人口減少の続く離島の住民に活力を与えている。

④芸術家のディレクションとポエック里海財団、ポエックの協働で、後世に美しい里海を残すため長期に継続して行われる事業である。美しい里海文化を発信することにより、地域貢献を通して日本全国・世界へとメッセージを発信することを考えている。現在、活動資金の関係から運営母体がポエックとポエック里海財団となっているが、今後はポエック里海財団を公益財団法人化し、運営の一本化を図ることを考えている。

⑤現在、活動は島民の方々やポエック及びプロジェクト関係者中心の活動となっている。今後、公益財団法人での運営をすることにより、公益性及び社会貢献の度合いを増やす方向でいる。廃屋化しつつある空き家を芸術家・建築家のチームによって創造的に再生し、滞在型農園などの拠点として活用することで、耕作放棄地と集落の再生を継続的に行う。自然に負荷を与えない自活型のアートサイトや芸術と建築と環境が一体となったクラブハウスを建設し、島民に活用してもらうとともに、島外との交流と情報発信の起点とする。

＊ 自治体名　広島県三原市
＊ 人口　99,543人
＊ 面積　471Km²
＊ 事業開始年度　平成20年度
＊ 事業主体　ポエック株式会社・一般財団法人ポエック里海財団

連絡先

三原市生活環境部生活環境課
TEL 0848-67-6168　FAX 0848-67-6199
URL http://www.puequ.co.jp/kosagi/index.html

山口県宇部市　UBE ビエンナーレまちなかアート・フェスタ

①宇部市では、大規模な野外彫刻の公募展「UBE ビエンナーレ（現代日本彫刻展）」を開催しており、平成23年に50周年を迎え、日本屈指の野外彫刻の国際コンクールとなっている。この UBE ビエンナーレ50周年の開催に合わせ、市民が気軽に参加できるアートイベントを中心市街地で開催し、まち全体をアートで活性化させる取組みを実施するに至った。

②商店街を中心とした会場で各種芸術イベント等を実施することにより、中心市街地を市民の芸術の表現の場、芸術とのふれあいの場とし回遊性の向上や、賑わいの創出を図ること。アーケードを利用した巨大絵画展、空き店舗などを展示スペースとした芸術ジャンルを問わない自由な美術展、アートワークショップ、アートライブパフォーマンス、まちなか彫刻ウォッチングの開催。アートフェスタのシンボルである巨大絵画をアーケードに常時展示し、空き店舗にも常時アート作品を展示することで、ワークショップなどのイベントを開催しない平日でも来街者の増加を図った。

③空き店舗を利用したことにより、商店街にどのような空き店舗があるのか多くの人の目に触れ、アートフェスタ終了後、空き店舗の利用が促進した。巨大絵画展については毎年、まちなかアート・フェスタについては隔年で継続的に開催する予定である。今後、地元のイベントとして定着し、にぎわいの創出につながると期待される。

④商店街が事務局となり、運営協議会を設置。協議会メンバー（ボランティア）の一般募集などを行い、市民、市内芸術団体、地元商店街等が協働で運営を行った。協議会メンバーを一般公募したが、平成23年に初めて開催したイベントということもあり、十分な人数が集まらず、メンバー１人１人の負担が多くなってしまった。今後より充実したイベントを開催するためにはさらなるメンバーの確保が必要である。

⑤イベント開催にかかる費用は市からの委託費でまかなっているが、市の財政状況が厳しさを増す中、地域企業からスポンサー協力を得ることが必要である。今後、音楽や舞台などの様々な芸術活動についても表現の場を提供し、地域の人々が芸術に触れる機会を増やしていきたい。

＊ 自治体名　山口県宇部市
＊ 人口　173,327人
＊ 面積　287.71Km²
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　まちなかアート・フェスタ運営協議会

連絡先

宇部市土木建築部都市政策推進課
TEL 0836-34-8468　FAX 0836-22-6050

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

徳島県鳴門市、兵庫県神戸市、
岡山県倉敷市、香川県仲多度郡琴平町

瀬戸内四都アーキツーリズム

①本協議会は、瀬戸中央自動車道及び高松自動車道並びに神戸淡路鳴門自動車道によって結ばれた瀬戸内海東部の個性ある観光資源を持つ四都市が、それぞれ個性ある観光資源を活かしながら、連携・協力により、より魅力的で広域的な周遊観光の振興を目指すため設立した。「瀬戸内四都アーキツーリズム」は、都市の歴史·文化·アートの要素を総合的に体現する街並み・建築物に焦点を当て、この機会に４つの都市をもっと深く楽しんでもらう企画であり、新しい感動と発見の旅を創造する。

②本事業では、「建築と芸術」をテーマとして各都市の特色のある建築物を巡る旅のガイドブックを作成し、建築·デザインを学ぶ学生や建築関係者の旅行客の増大を図ることを目的とした。さらに、2013年3月に開催予定の第2回瀬戸内国際芸術祭との相乗効果も視野に文化的意識の高い観光客の獲得を目指すとともに、瀬戸内四都市共通のテーマを掲げたPR事業を推進することで、四都市の認知度を高めることを目的としている。「建築と芸術」として、各都市のイメージを形成するテーマをつくり建築等の選出を行い、これまで知られていなかった歴史的建築を掲載することで、新たな観光資源とする。各市町で主題を変え、紹介内容にバリエーションを持たせている。神戸市は、居留地時代の洋風建築、鳴門市は、公共施設のモダニズム建築、琴平町は、伝統的な家並み、倉敷市は、生活の中で活気づく古民家と町並みを主に紹介している。

③観光の視点をもって、アートとして建築をとらえることで、建築雑誌などで取り上げられるだけでなく、地域の人にも地元の魅力の再発見につながる一助となっている。アートを手法として観光PRを行うことで、これまでにない視点で各都市の魅力を発信する。

④本協議会は、県を超えた広域的な周遊観光の振興を目指しており、アーキツーリズムは、建築という芸術に特化した事業を展開している。この事業を通じて、観光客として単に名所を観光するのではなく、暮らしの中に息づいている建築を通じて、生活者の視線で街を歩き、その場所ならではの生活を経験できるツールとして活用できる。アーキツーリズムという内容なので、PR対象がコアになり、一般向けにPRするのに苦慮したが、第２回瀬戸内国際芸術祭とのタイアップやインバウンド事業において、他の市町にない魅力発信に活用していく。

⑤予算化できれば、パンフレットを多言語化し、訪日誘客の手法として使用したい。そして、HPに掲載し情報発信していきたい。

＊ 自治体名　徳島県鳴門市、兵庫県神戸市、岡山県倉敷市、香川県仲多度郡琴平町
＊ 人口　鳴門市60,572、神戸市1,514,596、倉敷市477,069、琴平町9,729人
＊ 面積　鳴門市135.46、神戸市552.26、倉敷市354.72、琴平町8.464Km^2
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　瀬戸内四都市広域観光推進協会

連絡先
鳴門市経済建設部経済局観光振興課
TEL 088-684-1453　FAX 088-684-1339

徳島県神山町　神山アーティスト・イン・レジデンス

①神山町には人形浄瑠璃の文化が残っており、町内には江戸後期から明治、大正時代にかけて制作された1,459枚（日本最多）の、舞台の背景画「襖絵（屏風絵）」が現存している。これらは、招待作家として招かれた絵師たちが、庄屋や富豪の屋敷に滞在しながら、地域住民の協力のもと制作したものである。つまり19世紀半ばにはすでにこの地で、アーティスト・イン・レジデンスが盛んに行われていたわけである。これを現代に復活させ、地域おこしにしようと始まったのがきっかけである。

②新しい発見、新しい価値観、新しい交流を享受する　毎年９月から２ヶ月間、日本国内および海外から３名のアーティストが神山町に滞在。作品を制作し、11月初旬に展覧会を開いている。展覧会には、約500名の人々が訪れている。1999年から始まった本事業で招聘された作家は16カ国から42名。自然に恵まれ、人情味にあふれる日本の田舎町・神山での滞在から生まれるインスピレーションと、住民との出会いから生まれるカルチャーショックで紡ぎだされる創意あふれる作品を制作している。

③小中学校での課外授業をプログラムに取り入れているが、子ども達への英語教育や人権教育、国際理解、グローバルな広い視野など教育面で好影響を与えている。町外に対しては、神山町のイメージアップや宣伝効果があり、大きな注目を集めており、観光客の増大につながっている。町内の住民についても、国際交流により新たな刺激と生きがいを見つける方もいる。また、使われていなかった施設を再利用するなど、様々な面で活性化が見られる

④地元住民による手作りのプログラムであること。制作期間を通じた住民とアーティストの交流の質に自信あり。作った作品を展示する場所に苦心している。ランドアートは朽ちるが、写真でしか紹介できないことが惜しい。

⑤NPOが中心となって活動しているが、メンバーが限られているためもう少し多くの地域住民に理解を求め、活動を展開する必要がある。

＊ 自治体名　徳島県神山町
＊ 人口　6,350人
＊ 面積　173.31Km^2
＊ 事業開始年度　平成11年度
＊ 事業主体　神山アーティスト・イン・レジデンス実行委員会

連絡先
神山町総務課
TEL 088-676-1111　FAX 088-676-1100
URL http://www.in-kamiyama.jp/art/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

香川県丸亀市　MIMOCA ゲートプラザ活用事業

①丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（MIMOCA）は、谷口吉生の設計と現代美術中心の展示構成という特徴ゆえ、開館以来20年を経た現在も大勢の美術・建築愛好家が訪れているが、その大半は市外・県外からの来館者が占めており、市民の美術館としての認識は希薄である。このため、MIMOCA を中心とした本市の文化振興の推進や中心市街地活性化施策はあまり効果があがっていないという現状があった。

②JR 丸亀駅前広場の一部でもある MIMOCA 正面壁画前のゲートプラザを、高松市の丸亀町壱番街前ドーム広場のように定期的に鑑賞型・参加型等の文化事業の場として活用することで、美術館のオリジナリティを保ちながら市民に美術館に対して愛着を持ってもらうほか、本市の文化振興を推進するものである。また、この事業を行うことにより、中心市街地への人の入りこみを促進するとともに、市民主体の文化によるまちづくりや観光振興にも寄与するものである。県内を中心に活動するプロ・セミプロ芸術家の発表の場、市民等による文化活動発表の場、クラフト（手工芸作品）のフリーマーケット等を実施し市民が気軽に美術館を訪れることができるような機会を提供している。年間３～５回程度事業を行い、ジャズコンサートをはじめ、夏にはフラダンス、春は県内外作家によるアートの要素を取り入れたクラフト（手工芸作品）のフリーマーケット等さまざまな趣向を凝らしたものを実施している。

③事業を開始して４年目を迎えたが、市民にも MIMOCA ゲートプラザで行っている文化事業として広く知れわたり、報道に取り上げられることも多くなった。市民が MIMOCA に対して少しでも親しみや愛着を持ってもらうことができたためか、近年の一日あたりの入館者数も増加傾向にある。今後も MIMOCA を市民の美術館として認知していただくために活動を継続していくとともに、入館者数を増やしていき本市の文化振興をさらに推進してまいりたい。

④地域住民や市民文化団体との協働事業としても行っており、MIMOCA を中心とした一つのまちづくりとしての側面も持っている。事業開始当初は、MIMOCA で芸術鑑賞以外の事業をすることについて、入館者をはじめ様々な人々から戸惑いや不安の声が上がっていたが、まちづくりの一環として実施していることや MIMOCA に愛着を持ってもらうために行っていることを認識していただくことにより理解が深まった。

⑤現在は市から委託料を受け実施しているが、財政状況も厳しいため実施回数が減少傾向にある。将来、市民文化団体が独自で実施できるような状況が整ったならば、市は場所の提供のみで携わっていきたい。

＊ 自治体名　香川県丸亀市
＊ 人口　110,568人
＊ 面積　111.8Km²
＊ 事業開始年度　平成21年度
＊ 事業主体　丸亀市文化振興事業協議会

連絡先

丸亀市産業文化部文化観光課
TEL 0877-24-8822　FAX 0877-24-8863
URL http://www.city.marugame.lg.jp/

香川県観音寺市　かんおんじまるごと美術館

①予てより新たな施設を建設する際や中心市街地における街路の改築に合わせ、彫刻家の和泉正敏氏の作品やイサム・ノグチ遊具彫刻を整備し、市民の文化・芸術への関心を高めるとともに賑わいの創出に努めてきた。しかし情報発信が十分でなかったため、市民の認知度が低く、来訪者も少ない状況であった。本市一の宮公園に西日本最大規模となる22基のイサム・ノグチ遊具彫刻を整備（平成22年）したことを機に、市内各所に整備したアート作品と地域資源等を巡るモデルコースを構築することとした。

②本市に点在するアート作品と地域資源等を巡るモデルコースを構築することにより、交流人口の増加による地域の活性化を図る。自動車、自転車及び歩いて巡るルートを紹介するため、パンフレット「かんおんじまるごと美術館」を作成し、市内外で配布した。来訪者及び市民がまち歩きを実施しながら本市の魅力（文化・観光・食）やアートに触れられる機会を提供した。

③市民自身がアート作品と地域資源等を理解することによって、本市の文化、自然環境、食など、魅力ある地域情報等の新たな発信者となる。モデルコースの構築によりリピーターを増加させ、定住へ繋げたいと考えている。また、瀬戸内国際芸術祭2013の一部会場として伊吹島が選ばれているため、伊吹島の文化・習慣及び新たに設置されるアート作品等と既存アート作品を連携させることにより、本市の知名度を上げ、地域の活性化を図る。

④市民が今まで気づいていなかった地域資源に触れる機会を提供することにより、本市に対する愛着が増加する。新たなまち歩き等の体験型観光に協力してもらえる市民ボランティア等の確保に苦慮した。まち歩きに関わる市民を増加させることにより、新たなニーズが生まれ、それに応えるために事業等を始める市民の出現を期待する。

⑤観光ガイドブックと併せてパンフレット「かんおんじまるごと美術館」を作成したが、来訪者の増加等に寄与したことの検証ができていない。観光入込客調査を行い、現状を把握することにより新たな施策の方向性を探る。また、市民が自発的に運営を行うことができる体制づくりが必要であるため、プラットフォームを行政が提供し、そこに市民の自発的な提案によるルート情報等を掲載することにより連携を図る。

＊ 自治体名　香川県観音寺市
＊ 人口　63,349人
＊ 面積　117.47Km²
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　観音寺市（経済部商工観光課・観音寺市観光協会）

連絡先

観音寺市政策部企画課
TEL 0875-23-3917　FAX 0875-23-3920
URL http://kanonji-kankou.jp/guide_book.html#art

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

香川県東かがわ市　ジャンボ絵馬設置による地域活性化事業

①地域の青年団のOB会として、昭和56年に結成された。旧白鳥町が主催するイベントの手伝いやコンサートの舞台作り、白砂青松で有名な白鳥の松原へのマツの植樹など、旧町内のさまざまなイベントの企画や運営のサポート、環境整備活動に取り組んでいた。その後、当時はまだ馴染みの薄かったフリーマーケットスタイルの「おたび市」を主催したことを転機として、日本一低い山の開山や神社境内へのジャンボ絵馬設置などにより、地域のにぎわい創出に欠かせない活動を主体となって取り組んでいる。

②ジャンボ絵馬の活用などをとおして地域のにぎわい、また観光資源として地域活性化に寄与することを目的としている。初詣客が新年の抱負や合格祈願などを自由に書き込めるジャンボ絵馬の作成を平成8年の年末から行っている。ベニヤ板が使われた絵馬の大きさは高さ約5.5メートル、幅約7.5メートルで干支の絵が描かれている。地域のお正月の名物にしようと企画されたこの取組は来年で17回目を迎える。毎年、絵馬に描かれた「神様お願い」というキャッチコピーが見えなくなるほどの書込みとともに元旦に奉納されている。

③12月中旬、何十枚ものベニヤ板を張り合わせて会員が絵馬を作成しているが、この様子や完成時には、新聞各社やテレビ各局がこぞって取材に訪れる。このようにマスメディアの注目を集めて止まないジャンボ絵馬は、地域はもとより県内の師走の風物詩となって、新年を迎える人々に夢や希望をもたらしている。

④ジャンボ絵馬を地域資源とし、地域活性化に寄与する一つの手段としている。また、日本一低い「御山」のPRや関連イベント、「おたび市」や「コマ回し大会」などの各種イベントをとおして、総合的に地域活性化に寄与している。会が結成されて31年。その間に地域にもたらしたにぎわいは枚挙にいとまがない。ジャンボ絵馬も含めて、身近な資源をこれほどの長きに渡って活用している例は県内でも非常にまれである。継続性だけでなく実績を上げていくことに苦心しながらも進めている。

⑤マスコミ報道などにより相乗効果が生まれ、「次は何をやってくれるのかな」といった地域の期待や注目度は会の活動年数に比例して高くなっている。こうしたうねりは、地域内にとどまらず、交流人口の増加といった地域活性化をもたらしている。

＊自治体名　香川県東かがわ市
＊人口　34,210人
＊面積　153.35Km²
＊事業開始年度　昭和56年度
＊事業主体　こま犬会

連絡先
東かがわ市総務部政策課
TEL 0879-26-1215　FAX 0879-26-1334

愛媛県今治市　歴史ある瓦の文化が活きるまち

①伝統産業である菊間瓦を生かした「瓦からのまちづくり」をテーマに、地域住民の様々な出会いの場、憩いの場を提供すると共に、屋根材としての需要が停滞している菊間瓦の新たな取り組みを、他の市町村の人々に広く紹介して、観光誘客と伝統産業の活性化を目指し実施した。

②瓦のモニュメントの紹介や瓦にまつわるイベント等を開催することで、菊間瓦の新たな取り組みを周知すると共に、人々がくつろぎ、楽しめる賑わいのあるまちづくりを目指し実施する。菊間瓦は、約750年の歴史を持つ地域の地場産業である。いぶし色の瓦は、屋根材をはじめ鬼瓦など、瀬戸内の風土にはぐくまれ独自の進化を遂げてきた。市内外には、瓦灯籠、瓦製の狛犬、鬼瓦のモニュメント、壁画などアート的要素の高い作品が数多く展示されている。また、窯業の振興・発展などをテーマに実施されているイベント「ゆめロード」は、約2000本の瓦の灯籠を来場者らがレイアウトや点灯を行うもので、幻想的でアートな空間を作り上げるイベントとして定着してきている。市内の各所に様々な瓦製のモニュメントなどが設置されおり、アートとしての評価が見直されている。「ゆめロード」では、回数を重ねるごとに、瓦の灯籠製作の参加者が増え、愛媛県を代表する陶磁器「砥部焼」とのコラボレーション作品も誕生して、アート作品が多数生まれることとなり、作品鑑賞と幻想的でアートな空間を楽しむ来場者で賑わっている。

③愛媛県武道館の屋根瓦、鬼瓦のモニュメントの展示などをはじめ、菊間瓦の新たな取り組みが認知されるようになった。このようなことから、若い担い手らは、瓦を屋根瓦のみとしてとらえることだけではなく、様々な作品を通じて、新たなデザインや色、防災瓦など窯業の可能性やニーズに合った商品開発などで大きな刺激を受けている。瓦のふるさと公園かわら館の「ゆめロード」は3年目を迎え、アートな空間を楽しめるイベントとして、マスコミに取り上げられる機会が増え、来場者も年々増加し賑わっている。また、地域住民からは瓦の灯籠の製作の申し込みやイベント参加の申し込みが多数寄せられており、菊間瓦の新たな取り組みが認知されるようになった。今後はアーティストと地域住民、学校等の交流の場として様々な広がりにつなげたい。

④地域住民、各種団体、企業との連携が活発になり、協働によるまちづくりの推進に貢献している。高齢化や担い手不足などで、窯業が低迷している中で、新たな取り組みに賛同する事業者が少なかったが、地元企業や一般の方、学生などのボランティアの参加から、逆に新たな作品やアイデアのヒントを学ぶことになった。

⑤今治市の指定管理を受けての運営であるため予算も限られており、今後は地元企業、団体との協力体制を築くことで、より事業を拡充させ、新たな取り組みも実施したい。

＊自治体名　愛媛県今治市
＊人口　168,496人
＊面積　419.90Km²
＊事業開始年度　平成21年度
＊事業主体　菊間町窯業協同組合

連絡先
今治市菊間支所産業建設課
TEL 0898-54-3450　FAX 0898-54-5254
URL http://www.city.imabari.ehime.jp/kouen/kawara/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

愛媛県鬼北町　予土線田んぼアート事業

①愛媛県宇和島市と高知県四万十市を結ぶJR予土線は、沿線地域の住民にとって通学・通院等のための重要な公共交通機関であるが、沿線市町の人口減少に伴い、年々利用者が減少している。また、交通事業者としてのJR四国は高速道路料金の大幅値下げや、愛媛県松山市以南の高速道路無料化社会実験等の影響を受けて経営状況が悪化しており、他路線と比べ極端な不採算路線である予土線については、路線の存続が危ぶまれている。そこで、予土線の運行存続のための利用促進を図り、もって産業、経済、観光、教育、文化等地域の発展を図るための活動を推進する、「愛媛県予土線利用促進対策協議会」を平成22年に設立し、様々な事業を展開しており、「予土線田んぼアート事業」もその一環として実施している。

②田んぼアートを予土線の車窓から見ることを前提とした絵にすることにより、予土線の利用を促進し、ひいては沿線地域の活性化を図る。減反による休耕田（約1,700m²）を利用し、一般の稲とは色の異なる6種類の古代米等の稲を植えて、田んぼにトロッコ列車の絵を描く。5月8日～6月7日に育苗、6月4、5日に現地測量、6月9日に田植え、6月18日に捕植及び除草を実施し、稲は順調に成長している。アートの見ごろは9月下旬の予定である。

③予土線の愛媛県側の田んぼアートと、高知県側の四万十川とを抱き合わせて、予土線を観光路線として広くPRすることにより、予土線の乗客が増え、それに伴う沿線地域の活性化も期待できる。

④田んぼアートは東北地方を中心に全国各地で実施されているが、愛媛県では今回が初めての取組みであり、遠近法を用いた田んぼアートは四国で初めての取組みである。また、列車の車窓から見ることを前提とした事例は、全国的にも珍しい。古代米の入手経路や遠近法を用いた田んぼアートの手法についての知識や経験が全くなかったため、情報収集に苦慮した。古代米については農協や学校等に問い合わせ、古代米を栽培している農家を紹介してもらい種籾を入手し、遠近法を用いた田んぼアートの手法については先進地に問い合わせ、ノウハウを教わった。

⑤台風などの自然災害の影響を受けやすいことや、鳥獣被害などが課題として挙げられる。今後の展開としては、今年度一定の成果が得られれば、面積を拡大してよりスケールの大きな図柄に挑戦したい。

＊自治体名　愛媛県鬼北町
＊人口　11,582人
＊面積　241.87Km²
＊事業開始年度　平成24年度
＊事業主体　愛媛県予土線利用促進対策協議会（愛媛県宇和島市、松野町及び鬼北町で組織）

連絡先

鬼北町企画財政課（愛媛県予土線利用促進対策協議会事務局）
TEL 0895-45-1111（2232）　FAX 0895-45-1119

高知県佐川町　佐川　酒蔵ロード劇場

①佐川町上町地区は、藩政時代の酒蔵や町人まちの佇まいを今に残す地域で、町の総合計画であるHOPE計画などにより街並み保全活動が行われてきた。平成19年、同地区内の竹村家住宅が重要文化財（国）に指定されたことを契機とし、住民による街並み保存活動が組織化され活動が盛んになり、平成21年3月には歴史まちづくり法による歴史的風致維持向上計画が認定され、同地区を含む地域が計画地域となった。また、上町地区には書道家の方が古い商家を活用し、自身の作品を展示するギャラリーにするなど、古い街並みとアートの融合も図られている。（今年度からではあるが、酒蔵に植物画のシャッターペイントを実施。好評を得ている。）そうした中、見せるだけの文化財から体験する文化財活用を推進するため、また、街並み保全の啓発を図るため、街並み全体をPRできる事業として、酒蔵や商家の白壁をスクリーンに見立て、切り絵を映し出す催しを開催するにいたった。

②地域住民及び町外観光客等に同地区の街並みをPRするとともに、体験する文化財活用を目指し、街並み保存活動の理解を深める。酒蔵や商家など伝統的建造物の白壁等に切り絵作家酒井敦美氏作成の切り絵を映し出す。イベント会場では、ギター、琵琶などの演奏やダンス披露も併せて開催。来訪者は、切り絵の中を回遊しながら、歴史的街並みを歩く。平成20年より毎年7月末に開催。平成23年は1,000人を超える来訪者があった。

③来訪者数の増による同地区の街並みの認知度及びブランド力の向上、イベント実施による発信力の向上により地域及び町全体での街並み保存活動への理解が深まった。また、街並み観光ガイドを行っている特定非営利活動法人佐川くろがねの会がイベントを主催することで、組織の活性化に効果があった。

④切り絵を白壁に投影し、街並み全体を演出することが可能のため、切り絵の趣向を変化させることで毎年違った色彩を醸し出すことが出来る。平成24年は、牧野富太郎博士（同地区出身）生誕150年にあたることから、植物画などをモチーフに博士の顕彰を実施する。特定非営利活動法人佐川くろがねの会の高齢化及び自主財源不足から行政の補助が必要である。

⑤高知県内では、同種のイベントとしては先駆的取組であったが、類似イベントが県内各地で実施されるようになり、それら事業との差別化が必要である。平成24年については、武蔵野美術大学と連携し、イベント会場へのインスタレーション設置など新たな取り組みを模索中である。

＊自治体名　高知県佐川町
＊人口　13,996人
＊面積　100.84Km²
＊事業開始年度　平成20年度
＊事業主体　特定非営利活動法人　佐川くろがねの会

連絡先

佐川町産業建設課商工観光係
TEL 0889-22-7708　FAX 0889-22-4950
URL http://sakawa-kuroganenokai.org/sub/event_inquiry/2011/2011-event.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

福岡県筑紫野市　二日市ものづくりアート市及びイルミネーション事業

①ものづくりアート市は商店街の空き店舗対策と、地元のアーティスト達の活躍・発表の場を中心市街地に作れないかという二つの課題を解決するための事業である。当時から様々な地域で一会場に集約した同様のアート・イベントはあったが、会場をあえて商店街内の空き店舗に分散することで来場者がイベント参加と同時に商店街内を回遊させることで商店街の賑わいも生み出す効果を狙った。イルミネーションは商工会青年部のイルミ・イベントを引継いでこの部材を利用して商店街全体をイルミで彩り、夜も歩いて楽しい商店街づくりを目指して始めた。

②中心市街地の活性化を目的に、商店街に来るきっかけを作り、新たな魅力を再発見してもらう。二日市ものづくりアート市は、年に１回、中心市街地の16店舗前後の空き店舗を利用して、アーティストによる手作りアート作品の展示即売会を実施。また、大賀酒造の蔵開き、中央通り商店街のスプリングフェスタも同時開催する。またイルミネーションは、商店街内の広場をメイン会場として、商店街の各店舗やJR二日市駅前にイルミネーションの飾り付けを実施。二日市ものづくりアート市は、回を重ねるごとに参加アーティストが増え、賑わいを見せている。イルミネーションは、回を重ねるごとに、イルミネーションの充実を図り、来場者も年々増加していき、評判となっている。

③二日市ものづくりアート市、イルミネーションは、共に来場者も多く、非常に賑わいを見せている。そのため商店街の魅力を再発見する機会は増えていると考えられる。今後は、各商店がこの賑わいを個店繁盛へ結び付けるきっかけづくりに活かせるよう期待している。

④地域住民や商店街店主でNPO法人を設立しているため、連携がとりやすく、協働によるまちづくりの推進に貢献できている。地区により空き店舗の流動化に差があり、また賃貸できる空き店舗も毎年違うため、その都度全体の配置計画から練り直し、賃貸交渉も個別にせねばならないので作業の効率化が難しく、手間がかかる。

⑤平成22年から子どもとものづくり・アートといったキーワードで他の事業者、団体等と協働して事業の充実を図ることを模索している。現在は酒蔵開き、スプリングフェスタなど他のイベントと共同開催しているが、スタッフが分散してしまう、各商店がイベントに参加できない等のデメリットもあるため、次回は同時開催の成否も含めて検討中である。

＊自治体名　福岡県筑紫野市
＊人口　101,072人
＊面積　87.78Km²
＊事業開始年度　平成20年度
＊事業主体　NPO法人　ほっと二日市

連絡先

筑紫野市建設経済部商工農観光課
TEL 092-923-1111　FAX 092-923-9634
URL http://hot-futsukaichi.com/

福岡県春日市　春日市弥生の里児童画大賞展　まちかどギャラリー

①春日市における文化振興事業の１つとして、平成４年度から福岡県の児童を対象とした「弥生の里児童画大賞展」を実施している。事業を行うにあたり、児童画を市民や市外の方に発信していく必要があると感じていたところ、市のサイン（地図等）計画と方向性がマッチし、サイン計画の一部に「まちかどギャラリー」を組み込むことができた。

②市民をはじめ本市を訪れた多くの人々が、子ども達の絵を通して心に潤いをおぼえ、ひいては本市が文化の薫るまちとなることを目的として行っている。上位に入賞した作品を陶板あるいは表示板化し、御影石のモニュメントに組み込む。これを小学校や公園、道路や駅など市内各地に設置している。この「まちかどギャラリー」は春日市のお宝文化百選に登録されているほか、マップをパネル化し屋外に設置することで市民への周知を図っている。第１回から第10回までは上位５作品を陶板化した。（第６回のみ６作品）第11回から第14回までは上位３作品、第15回以降は大賞１作品を陶板あるいは表示板化し設置した。第19回から御影石は用いず、表示板化したパネルを壁面に設置している。工事による一時撤去分を含め、現在68基の「まちかどギャラリー」が点在している。

③市内児童の受賞作品を、通学する校区内（小学校や公園等）に設置したことで、他の児童や地域の方の目に触れ、より身近に児童画を感じてもらうことができた。他にも展示日や時間を気にすることなく、市内を散策することでいつでも児童画を見ることができる。

④児童画を陶板、表示板化することで半永久的に形に残すことができる。市内の児童画だけでなく、福岡県各地の児童画についても制作し設置している。予算削減に伴い、事業１回分における設置数の減少、陶板から表示板への材質移行、御影石を使用しない設計検討など、財政状況に応じた形態をとりながら本事業を継続している。

⑤ひび、えぐれ等による陶板損壊が一部見受けられ、改修が追いついていない。また、設置候補地の不足が課題として挙げられる。今後は陶板の改修を重視するとともに、点在型から集約型へ移行し、市文化センターに隣接する公園壁面に集中して設置していき、より市民の認知度を上げていきたい。

＊自治体名　福岡県春日市
＊人口　110,283人
＊面積　14.15Km²
＊事業開始年度　平成4年度
＊事業主体　春日市・春日市教育委員会

連絡先

春日市社会教育部社会教育課社会教育担当
TEL 092-575-4121　FAX 092-593-7380
URL http://www.city.kasuga.fukuoka.jp/tetuzuki/manabu/04yayoinosato.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

福岡県糸島市　いとしま応援プラザ設置事業

①本市では、陶芸や木工、ガラス工房など、多彩な創作活動が行われている。また、福岡中心部から30分ほどの位置にありながら、新鮮で豊富な農水産物を提供できる地、山や海などを中心としたリゾート地として注目されており、産業面でも、九州大学の移転に伴う研究施設や関連企業の進出など、大きな可能性を秘めている。こうした環境を生かして活躍する芸術文化活動者・コミュニティビジネスの起業家の支援を行うことで、積極的な地域資源の活用や地域の魅力向上などを促進し、糸島全体の活性化を目指すため「いとしま応援プラザ」を設置した。

②地域資源活用や地域の魅力向上などを促進し、糸島全体の活性化を目指す。指定管理者による施設の管理、事業の実施を行う。施設内には、作品の展示スペースを設け、市内の工房等の作品を展示・販売する。定期的に体験教室やイベントを実施し、芸術文化活動者と来訪者の交流を促す。市内の芸術文化活動者に関する情報の収集と整理を行い、作品のPRなどの情報発信を行う。平成23年10月の施設オープンに先立ち、市内の工房等が実行委員会を立ち上げ実施するイベント「糸島クラフトフェス」内で、プレオープンイベントを実施した。オープン後は、作品の展示販売のほか、体験教室や企画展などを定期的に開催している。

③市内に点在する工房等の作品を一堂に展示し、紹介することで、より効果的に情報発信を行うことができるようになった。また、市内を巡回する無料観光バス「糸島周遊バス」の乗降ポイントとし、より多くの観光客に工房等を紹介することができた。施設を介して、地域で活動する作家の紹介や、交流機会の創出が行われるようになった。今後、芸術文化活動の力を活用し、市全体の活性化につながるような事業展開が期待される。

④合併前に庁舎として使用していた施設を活用し、本施設の整備を行った。また、本施設を介して、作家と来訪者だけでなく作家同士のネットワークづくりを行い、芸術文化の力を活用した新たな連携事業へ発展することを目的とした。応援プラザ利用者、訪問者拡大のための方策に苦心している。地域の特産品を使ったカフェの設置など、人が訪れたくなる仕組みづくりを検討中。

⑤利用者、訪問者の恒常的な維持、増加が課題となっている。今後、前述のカフェ設置を検討するなど、集客力向上のための事業展開を検討する。

＊自治体名　福岡県糸島市
＊人口　99,919人
＊面積　216.15Km^2
＊事業開始年度　平成23年度
＊事業主体　糸島市及び指定管理者(特定非営利活動法人いとひとねっと)

連絡先

糸島市企画部経営企画課
TEL 092-332-2061　FAX 092-324-0239
URL http://itopla.com/

佐賀県有田町　有田ウィンドウディスプレイ甲子園

①焼き物の町である有田町では、春の「陶器市」や「秋の陶磁器まつり」、冬の「雛(ひいな)のやきものまつり」といったイベントが季節毎に開催されている。しかし、近年夏場の観光に関する取組み不足が課題となっており、暑さもあって客足が鈍る傾向にあった。そこで、夏の誘客を狙ったイベントとして、有田町に古くから残る内山地区商店街のショーウィンドウを地元の高校生をはじめとする若い世代の感性を取り入れてディスプレイを行うコンテストを企画した。

②夏場の誘客対策として、内山地区商店街のショーウィンドウを高校生たちの斬新なアイデアで飾り付け、若い感覚のアートで有田の夏を彩り、新たな客層の取込みを狙う。高校生たちが商店街のショーウィンドウを借りて、お店がこの夏売り出したい商品を使いテーマに沿って飾り付けを行い、その作品を競う。ディスプレイ後は作品のコンセプトなどを発表し、ディスプレイとプレゼンテーションの総合点で評価を行う。平成17年度にスタートし開催8回目を迎え、有田の夏のイベントとして定着している。平成24年度は前年度より6チーム増え、県内外の12校から計18チームが参加した。平成25年度は高校生の総合文化祭九州大会が有田で行われ、九州各地より約30チームがこのディスプレイ甲子園に参加する予定である。

③商店の顔であるショーウィンドウをディスプレイすることは重要な要素であり、高校生たちのアイデアで夏場の暑い通りが華やかに演出されることにより、商店にとっても有意義なイベントとなっている。また、ディスプレイしたショーウィンドウを夜間にライトアップし、ウィンドウ・ナイトツアーを開催して夜の有田の町を楽しんでもらうといった取組みも生まれるなど、新たな展開を見せている。

④若い世代が地域住民との触れ合いを通して有田を知り、町の魅力を再発見しながら協働でまちづくりに取り組んでいる。当初、イベントの主催は任意のまちづくり団体で毎年補助金制度を活用していたが補助金申請の回数にも限度があり財源確保に苦慮していた。平成24年度からは有田観光協会に事業提案をして取り上げられることになり事業継続できるようになった。

⑤町外からの参加者が少ないため開催の周知と他県への呼びかけを行うなど運営方法の見直しを図っている。また、参加店に負担金が生じることもあり、参加店の拡大を難しくしている事から、今後はイベント趣旨の理解を深めてもらい、参加店を増やして開催区域の拡大を目指す。

＊自治体名　佐賀県有田町
＊人口　21,353人
＊面積　65.8Km^2
＊事業開始年度　平成17年度
＊事業主体　一般社団法人　有田観光協会

連絡先

有田町企画課
TEL 0955-46-2990　FAX 0955-46-2100
URL http://www.arita.jp/news/001034.html

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

長崎県長崎市　ハマスカ活動（※）

①浜んまちは長崎市の中心商店街であるが、近年は周辺部の大型商業施設の影響を受けており、その打開策として様々な企画が実施されてきた。このような中、この地域に残った唯一の映画館と商店街が連携し、映画を活用してまちの賑わいを創出することを図った「浜んまち映画祭」を市民グループが提案・実施し、2004年に成功させた。この映画祭を重ねる中で、浜んまちに文化によってまちなかの賑わいを創出する素地が出来上がり、2008年に商店街とNPOが連携して、映画祭だけでなくアートや音楽などの広範な文化の発信事業を行う団体として「ハマスカ実行委員会」を組織化し、以後積極的な活動を展開している。

②浜んまちエリアは商業地域であるだけではなく、そこは人々のコミュニティが生まれる場でもある。文化発信基地として一味違った個性あふれる地域として、長崎市のまちなかの核となることをめざす。（1）フリーペーパー「ハマスカ」発行（毎月）（2）参加型アートイベントの開催（3）路上ライヴコンサート（毎月）（4）大型店舗建替え工事に伴う仮囲い壁の活用（5）詩のボクシング長崎大会（年1回）（6）浜んまち映画祭（本年度は毎月1作品）継続的活動により市民の中に定着し、様々な団体等とのコラボレーションの機会も増えている。

③ハマスカの活動が、市内の各種団体が浜んまちエリアで文化活動を行うにあたっての受け皿となり、まちなかの新たな賑わいづくりに寄与していること。

④浜んまちの商店街、NPO等が一体となった活動であること。成果としてまちの賑わいにつながること。ジャンルに拘らない良質な先進的活動であり、浜んまちのイメージアップと長崎市の文化向上に寄与できること。収益性を高めながらこれらを維持しつつ、活動の継続性を実現していくこと。

⑤（1）収益性と継続性のしくみの実現
（2）まちなかの賑わい創出の担い手としての体制づくり
（3）浜んまち以外の他エリアなどでの活動によるその地域との連携と来街者の増加

（※）浜んまちのストリートから文化の発信を行う活動。「ハマスカ」とは「浜んまちストリートカルチャー」の略称

＊自治体名　長崎県長崎市
＊人口　438,746人
＊面積　406.40Km^2
＊事業開始年度　平成20年度
＊事業主体　ハマスカ実行委員会（商店街、NPOにより編成、行政はオブザーバー）

連絡先
長崎市経済局商工部商業振興課
TEL 095-829-1150　FAX 095-829-1151
URL http://www.hamasuka.jp/

長崎県五島市　モンパルナス構想事業

①五島出身の画家である笠松宏有さんの遺族とNPO法人現代美術普及協会から笠松宏有さんの絵画を島に展示し、島民の芸術性を高め、芸術の都フランスのパリにあるモンパルナス地区のような芸術村を五島市に実現する構想の提案があったため。

②多くの芸術家や芸術家志望者が定住、又は長期滞在して創作活動をするとともに、美術教室を開催するなど、交流人口を拡大してにぎわいを創出し、地域の活性化を目的とする。廃校を利用して設置された笠松宏有記念館に笠松宏有さんの絵画を展示するとともに、館内にモンパルナスの仲間たちコーナーを設置して数多くのアーティストに呼びかけ絵画展を行っている。さらに、賛同していただいたアーティストを先生に絵画教室を行っている。また、他の会場に絵画を移動しての移動展や他の美術館と連携した共同展を開催している。1人の芸術家が島に滞在し、美術教室を開催しており、市民が日常的に芸術活動に参加できる環境ができている。記念館では、モンパルナスの仲間たちコーナーに賛同いただいたアティストや協力していただくミュージアムがあり、色々な絵画にふれることができ、島民の芸術性を高めることができている。

③1人の芸術家が島に滞在していることにより、市民が日常的に芸術活動に参加できるようになった。また、ミュージアム同士の連携が図られ、他のミュージアムの展示品を島で鑑賞することができ島民の感性を高めることができた。今後は、モンパルナスの仲間たちコーナーを軌道にのせ、さらに質の高い芸術作品を展示することで島内外からの交流人口の拡大を図り、賑わいのあるまちづくりにつなげていきたい。

④NPO法人、地域住民、他のミュージアムとの連携が活性化し協働による、賑わいのあるまちづくりの推進に貢献している。事業開始当初、地域住民、NPO法人に事業を理解してもらうのに時間がかかった。現代美術普及協会から構想や具体的な手法を説明してもらうことで理解をいただき事業が進んだ。

⑤長期滞在するアーティストの確保。空いている教員住宅等を芸術家に確保し、希望する芸術家には働く場を提供する。仕事と芸術活動を両立できる島として、あらゆるメディアやルートを通じて幅広く広報していく。

＊自治体名　長崎県五島市
＊人口　41,079人
＊面積　420.87Km^2
＊事業開始年度　平成19年度
＊事業主体　五島市

連絡先
五島市文化推進室
TEL 0959-72-6782　FAX 0959-74-1994
URL http://navi.gotoshi.net/contents/detail/index.php?id=281

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

長崎県川棚町　シャッターアート事業

①本町の中心街に位置する栄町商店街アーケードが、郊外型大型店の影響による客足の減少や経営者の高齢化等の要因で閉店する店舗が目立つようになり、いわゆる「シャッター街」化してしまった。新たな出店があることが一番ではあるが、低迷する地方経済の中、なかなか困難なことであるため、即効性があり、なにかできる事業はないかと思案した結果、取り組むに至る。

②終日シャッターが閉じている箇所が増えてしまい殺風景になったアーケードの景観に彩りを与える。併せて商店主との信頼関係を築く。自分の住んでいる町のことをよく知ってもらい、郷土に愛着を持ってもらうため、作画のテーマは郷土に関するものとした。【21年度】 風景画２点、生物画１点【22年度】 風景画１点、生物画１点【24年度】 ご当地戦隊キャラクター画１点、静物画１点、商店関連イメージ画１点、人物画１点

③商店街を行き交う人の目を楽しませることで明るい気分になってもらい、引いては町の活力を醸成するきっかけにつながると考えている。また商店主の反応も概ね好評であり、商店主との信頼関係を構築することができた。

④無制約に展開してしまうと「落書き風」に陥ってしまう危険性があったため、郷土に関するテーマを持たせた。新たな出店があることが一番であり、あくまで過渡的な事業と考えている。本事業が話題づくりのきっかけとなり商店主らによる自発的な活力創出の起爆剤になればと希望する。

⑤「まちなか」に人を呼び戻し、交流人口を増加させることで再びにぎわいを創出することが最終的な目的であるため、上記事業はその一助とはなるものの、やはり過渡的な事業であるとの位置づけは否めない。

＊ 自治体名　長崎県川棚町
＊ 人口　14,848人
＊ 面積　37.25Km^2
＊ 事業開始年度　平成21年度
＊ 事業主体　川棚町楽しく笑ってまちづくりの会

連絡先

川棚町企画財政課
TEL 0956-82-6116　FAX 0956-82-3134

熊本県荒尾市　荒尾駅前広場整備工事（駅前広場万田坑モニュメントの設置）

①荒尾市は、万田坑の世界遺産本登録申請に向けた準備や、辛亥革命100周年を契機とした国内外との交流促進に向けた各種記念事業の取組みを進めているところである。本市の地域の浮揚を図るため、更に荒尾市の知名度を高めて交流を促進する必要がある。このことから、地域のシンボルである万田坑をモニュメントとして設置するため、学生に設計依頼して制作が始まった。

②荒尾市（熊本県）の玄関口として相応しい姿に整備するものである。公共交通の機能向上を目的とした整備だけではなく、駅前広場全体に「万田坑」の雰囲気が出る様にモニュメントやレンガを使用した各施設等を整備することで、観光振興及び地域の交流拠点とする目的である。平成23年度で荒尾駅前広場整備工事を実施し、広場の意匠については万田坑の雰囲気がでるようにレンガ等を多様に用いたデザインにしており、そのシンボルである万田坑第二竪坑櫓のモニュメント作成については、地元の有明工業高等専門学校や地元鉄工所等との産学官連携を行い製作した。荒尾駅前広場については、整備前は雑然としたものであったが、整備後は交通連結点としての機能だけでなく、市民が集い、話をできる場（地域コミュニティー）の中心的役割を果たしている。中でもモニュメントは、駅前の待ち合わせの場や、通勤通学時にモニュメントを観て万田坑に関心を高める役目も果たしている。

③モニュメントを見ることにより、万田坑を知り、荒尾市の産炭地域としての歴史にふれ、その地域のシンボルである万田坑を、市民一丸となって世界遺産本登録を目指すための機運を盛り上げるものとしての効果がある。また、荒尾市への観光客等が駅を出て最初に目に入ってくるのが万田坑モニュメントとなることから、観光PRとしても効果がある。

④高度経済成長を成し遂げた日本のエネルギー（石炭）を供給してきた我が町のシンボルを、駅前広場に設置でき、それを市民協働で作り上げているところと、石炭産業が最盛期だった荒尾市の力強さが、モニュメントのディテールに表現されているところが特徴的である。万田坑の力強さをモニュメントでどのように表現するかが苦労した点であり、リベット止めをボルト止めにしたりなど、規模が縮小する部分でどの部材をデフォルメし力強さを表現するか苦心したところである。

⑤駅前広場整備により、万田坑を内外にPRする土台はできたものの、今後は如何に活用し、PRしていくかが課題となる。モニュメントも万田坑が世界遺産本登録してこそ、より輝くものになるので、この広場から万田坑を如何に多種多様な業種にPRしていくかが課題である。

＊ 自治体名　熊本県荒尾市
＊ 人口　54,708人
＊ 面積　57.15Km^2
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　荒尾市

連絡先

荒尾市建設経済部土木課
TEL 0968-63-1487　FAX 0968-64-0940

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

熊本県玉名市　アート　in　高瀬彫刻展

①菊池川の水運に恵まれた高瀬地区は、物資の集積地として商人のまちとして江戸時代には肥後藩の五ケ町に数えられ、戦後も玉名地域の中心として多くの人で賑わっていたが、社会構造の変化等から、今では人通りが激減し多くの商店が閉店した。これに危機感を持った商店会や地元有志が中心となり町屋建築や路地が残る町並みを整備する機運が生まれ、平成19年に「高瀬まちづくり協議会」を発足し「高瀬のまちなみ修景計画」を作成、平成24年３月末までに７件の町屋を改修した。また、町並み整備に並行し商店会やNPO法人高瀬蔵が中心となり、当地にサテライト研究室を置く崇城大学との協働で路地等の古い町並みや建築物を活用、そして様々なイベントを実施し地域の活性化を図ってきた。

②高瀬地区独特の古い町屋建築や迷路のような路地、石垣と石橋が調和した裏川沿いに崇城大学芸術学部のアート作品を展示、また、地域住民のおもてなしで非日常的空間と時間を創出し地域の活性化を図る。

名　　称：アート in 高瀬　彫刻展
開催期間：平成24年11月24日～12月９日
会　　場：高瀬蔵及び高瀬裏川水際緑地公園
内　　容：古い町屋や緑地空間等に彫刻作品を展示
協　　力：崇城大学芸術学部　勝野研究室

高瀬蔵や商店、路地、高瀬裏川水際緑地公園に、崇城大学芸術学部勝野研究室協力のもと先生・学生の彫刻作品を展示する。過去には、臨時カフェや伝統芸能披露等も実施した。

③「くまもとアートポリス推進賞」や「くまもと景観賞」を受賞した町並みとアートとの競演の演出で、高瀬地区への集客を促し、生活者も来訪者も楽しめる潤いのある景観と暮らしの創出ができる。

④彫刻作品を、建物内だけではなく緑地公園に点在させて展示する。また、これらの作品に夜間照明を当て幻想的空間を創造する。

NPO法人高瀬蔵は、彫刻展が一過性のイベントであり、街の活性化には地道な継続した活動が大切であると考え、「高瀬まちづくり協議会」が主体となり、地域の活性化に向け情報収集・発信はもとより、空き家・空き店舗の管理や活用の取り組みを進めていく。

⑤ボランティア会員の減少や中核メンバーの固定化、高齢化等による組織の活力やダイナミズムの低下は、今後のイベント事業及びNPOの運営に影響を及ぼす。これを踏まえ、これまで積み上げてきたものを基礎として高瀬蔵の原点である“まちをマネジメントする”段階へとステップアップしていく。

＊自治体名　熊本県玉名市
＊人　　口　69,587人
＊面　　積　152.55Km^2
＊事業開始年度　平成20年度
＊事業主体　NPO法人　高瀬蔵

連絡先

玉名市企画経営部地域振興課
TEL 0968-75-1421　FAX 0968-75-1166
URL http://www.tamana-cci.or.jp/NPO/indexf.html

熊本県菊池市　菊池市街地ポケットパーク

①菊池市の観光入込者数は、夢美術館や観光物産館の整備により増加傾向にあるが、宿泊者数は年々減少し、通過型の観光地としての特性が強くなっている。特に、商店街と温泉街や市民広場などに点在する拠点施設間の連携が乏しく、これらの回遊を促す仕組みが課題となっている。また、施設間のネットワークづくりには、ハード整備だけではなく、地域住民が一緒になったソフト事業が重要であることから、一つの出会いの場となり、滞留できる空間として各施設をつなぐことを目指して、ハード・ソフト事業を一体的に進める必要があった。

②菊池市の隈府地区を訪ねる人が、地域の文化や歴史、温泉と触れ会うことのできる交流・滞留の場として、また地域住民の憩いの場となることを期待するものである。また、案内板やサインを設置することで、街中の観光空間を創り出し、ポケットパークをポイントとして歴史・文化財や商店街等との回遊性を持った歩行者ネットワークを形成し、一つの出会いの空間となることを目的として整備を行った。

熊本県アートポリス事業として取組み、地域住民とワークショップを重ねてトイレと足湯を組合わせた菊池市街地ポケットパークをオープンした。

切明地区、横町地区２つのポケットパーク〔公衆トイレ、足湯〕が、完成し、今後更に、来訪者が回遊し賑わいが生まれることを期待している。

③軽トラ朝市と併せて県主催で「くまもん」も登場して、フォトコンテストが実施された。隈府中央地区の賑わいにつなげたい。

④管理について地元の参加を呼びかけており、１つのポケットパークでは、すでに清掃作業（区で実施）の約束ができている。

ポケットパークの必要性については、理解を待っていたが、その管理については、さまざまな意見があり、今後も慎重な対策が必要である。

⑤市民・観光客の利用を促しているが、十分とは言えず、今後の活用方法について、さらなる検討が必要である。

＊自治体名　熊本県菊池市
＊人　　口　51,173人
＊面　　積　276.66Km^2
＊事業開始年度　平成24年度
＊事業主体　菊池市都市整備課

連絡先

菊池市都市整備課
TEL 0968-25-7242　FAX 0968-25-5398

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

熊本県天草市　アーティスト・イン・レジデンス in Amakusa

①天草市天草町並びに天草郡苓北町一帯は陶石の採掘量は日本一であるが、その陶石を利用した窯業は、有田、唐津等の窯業が盛んな地域と比べると知名度が低いのが実情であった。
平成12年に天草で開催された熊本県民文化祭がきっかけとして、「陶石の島から陶磁器の島へ」のスローガンのもと、窯業従事者数の増加、窯元数の増加を目指し、地域をあげて陶芸のまちづくりを行うこととなった。

②若手陶芸家、芸術家の育成や増加。更に、感性と技術を高めることを目的に国内外から、著名な陶芸家や、新進気鋭の芸術家を招聘。
地元（天草）の若手陶芸家・芸術家等と交流の場を持ちながら創作活動に取り組んでもらう。
内容は公開制作、共同制作や講演会などを実施しているが、今後はその成果を確認する意味でも招聘作家からの紹介等を通じ、全国的な展覧会やコンテストにも参加するような方策が必要。

③感性的な面もあるため、陶芸家・芸術家等の育成は長期間に渡って取り組む必要があるが、毎年11月に天草市で開催される陶磁器展での陶芸展の大賞は地元の若手陶芸家が受賞するなど、徐々に成果があらわれている。
また、県内外の個展やグループで出展するなどの動きも出てきており、販路拡大に結びつく事例も見受けられる。

④感性的な面もあるため、陶芸家・芸術家等の育成は長期間に渡って取り組む必要があるが、毎年11月に天草市で開催される陶磁器展での陶芸展の大賞は地元の若手陶芸家が受賞するなど、徐々に成果があらわれている。
また、県内外の個展やグループで出展するなどの動きも出てきており、販路拡大に結びつく事例も見受けられる。

⑤窯元数は増えてきており、天草市を代表する産業のひとつとして更に技術面と芸術面の向上を図り、併せて地元の陶芸家、芸術家の所得向上に繋げること。また、事業を実施したことで対外的な評価を向上させる必要がある。
自治体と地元の陶芸家、芸術家がともに同じ目的意識を持って事業を推進するため、天草市で毎年開催する天草大陶磁器展に併せて、レジデンス事業を実施するなど効果的に行う。

＊自治体名　熊本県天草市
＊人口　90,343人
＊面積　683.26Km²
＊事業開始年度　平成11年度
＊事業主体　天草市

連絡先
天草市経済部商工観光課物産振興課
TEL 0969-23-1111　FAX 0969-32-1999

大分県国東市　国見町工房・ギャラリーめぐり

①国見町内に作家が友を呼び、作家たちが次第に移住し、工房ギャラリー等が増え始めた。このことにより、一定期間を決めて国見町工房、ギャラリーめぐりを開催し、アートの町として県内外の一般の方々にアピールできるようになった。

②「アートの町」として国見町の魅力を県内外にアピールし、以前にも訪れたことのある再訪問者や多くの観光客を誘致するために「国見町工房・ギャラリーめぐり」を開催し、地域の活性化に寄与することを目的とする。年2回（春・秋）10日間程度の「国見工房・ギャラリーめぐり」を開催する。この期間中、各作家が自身の工房やギャラリーに常駐し、各工房・ギャラリーのほか、寺院や空き家、公共施設などに展示し、見学場所の増加を図る。また、自ら訪問者に作品を解説・PRを行なうことで、イメージアップによる集客や再訪問者の増加、販売の促進をはかる。事業では、「工房・ギャラリーめぐり」の広報・PRのためチラシの作成やDMによる開催案内を行い、福岡アクロス等でチラシを配布する。また、招待作家30名において、より一層アートの町としての印象を県内外の人にPRし、期間中のみオープンする古民家ギャラリーの増加を図る。

③「アートの町くにみ」を宣伝するとともに、各メディアに取り上げられることにより、在住作家の作品を知り触れてもらう機会を提供する。また、招待作家の作品展示・販売、実演やワークショップなどを行い、在住作家とのコラボレーション展示を試みることにより、今後の誘客に向けて新たな展開が期待される。また、古民家をギャラリーにすることにより、多くの空き家に作家の移住や工房の増加につながる期待がもてる。

④招待作家が町内各所に宿泊することにより、国見町に移住希望者が増える。事業に対して市から「まちづくり補助金」をもらっているが、事業を展開発展させるには額は足らない。

⑤国東半島には鉄道が走っていないため、JR宇佐駅や杵築駅からの交通手段を考慮しなくてはならない。また、各工房やギャラリーの場所がわかるような案内板や看板の設置、県外での宣伝活動費などの費用の捻出等。

＊自治体名　大分県国東市
＊人口　31,743人
＊面積　317.8Km²
＊事業開始年度　平成22年度
＊事業主体　国見アートの会

連絡先
国東市政策企画課
TEL 0978-72-5161　FAX 0978-72-1822（代表）

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

宮崎県宮崎市　Blue 愛 Land　渚の Premium Candle night
（ブルーアイランド　ナギサノプレミアム　キャンドルナイト）

①青島地区は、宮崎県を代表する観光地の一つであるが、昭和40年代の観光地としての繁栄をピークに衰退の一途を辿り、廃業するホテル・商店等が相次ぎ、活力を失った。平成18年度に、地元、観光関連団体、学識経験者、行政で「青島地域活性化検討会」を組織し、地元住民自らが誇れるまちづくりを目指す取り組みを実施するなど、地域をあげて活性化の機運が高まっていた。その後、平成19年５月より、この検討会を発展的に解消し、「青島再勢プロジェクト」が組織され、キャンドルライトアップなどの事業を実施してきている。

②青島ビーチセンター（渚の交番）周辺において冬季の魅力を創出し、青島地域の再勢を図るとともに、イベントが少ない冬にイベントを実施することで、年間を通して青島でイベントを実施し、地域の活性化を図る。キャンドルライトアップやワシントニアパームツリーへのライトアップ、イルミネーションで装飾し、「トマト鍋」「ホットワイン」のふるまいの他「音楽の演奏やダンスパフォーマンス」などのイベントを実施した。平成19年度にキャンドルライトアップのみの事業として実施し、パームツリーライトアップなどを加え、開催時期も模索しながら継続して実施してきている。年を重ねるごとに、参加者が増加しており、更なる集客を図りたい。

③当イベントの開催により、冬季の青島の魅力を創出することができ、新たな青島の魅力を発信することができた。県内外からの多くの来場者があり、青島の活性化に繋がった。また、青島で活動する団体だけでなく、他地域の団体からの参加協力を得る事ができ、交流を図るとともに、事業の拡大に繋がった。多くの来場者や参加団体により、活性化事業に対する取り組みが活発になり、当プロジェクトの活動が定着してきた。

④青島再勢プロジェクトは、地元住民、自治会、企業、団体、NPO 法人等で構成されており、それらのメンバーが協働して、青島の再生、地域活性化を図ることを目的に実施している。プロジェクトメンバーが、ボランティアで活動している現状においては、活動範囲や資金確保にも限界があるのが実状である。

⑤現在、事業のほとんどが市の補助金で運営されている。市の財政状況が厳しさを増す中、補助金の増額が望める状況にない。規模を維持、拡大していくには自主事業を行うなど、資金確保を行っていくことが必要となる。

＊ 自治体名　宮崎県宮崎市
＊ 人　　口　401,239人
＊ 面　　積　664.61Km^2
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　宮崎市

連絡先

宮崎市観光商工部観光課
TEL 0985-21-1791　FAX 0985-20-2132

鹿児島県枕崎市　文化の風まくらざきアートストリート整備事業

①枕崎のまち全体を青空美術館として捉え、本市が平成元年度から開催してきた風の芸術展ゆかりの立体作品を市街地の主要な通りに設置することで、まちなかに魅力的な空間を創造し、九州新幹線全線開通による本県への流入人口の増加を踏まえ、その流れを南薩地域へも呼び込むために特徴と魅力ある街並み整備を図る。

②「風の芸術展」ゆかりの立体作品を通りに設置し、主要観光施設間を繋ぐことで、来訪者がアート作品にふれながら本市の観光や買い物を楽しめる魅力的な空間を創造し、交流人口の増加を図る。主要な通りに立体作品やベンチを設置した。また、作品を紹介する案内看板やパンフレットを作成・活用し、観光案内所等とも連携を図りながら、既存イベントと連携したソフト事業や、新規ソフト事業を実施した。平成23・24年度で新たに32基の作品や案内板等を設置されることになる。これまで市や通り会が独自に設置した公園等への設置分も合わせて72基となる。

③平成23・24年度設置の32基を含め72基の立体作品が集積されることから、市民や来訪者に「アートストリート～青空美術館」として定着しつつある。設置した立体作品を描く親子スケッチ教室や市内の音楽グループが歌を作るなど、様々な広報媒体を利用して周知に努めている。アートストリートの問合せ等が増えていることから、アートストリート作品鑑賞を含めた観光客は増加傾向にあると予想され、本市経済への波及効果も含め、徐々にではあるが確実に来訪者確保に繋がっている。

④これまで公園等に設置されていた立体作品や主要な観光施設の間を、立体作品を設置したアートストリートで繋ぐことで、市民や来訪者がまち中を歩きながら立体作品に触れつつ観光を楽しみ、食事や買い物ができるようになる。また、通りへ設置した作品は、破損時の維持補修以外の管理は全て通り会にお願いしている。本市の厳しい財政状況から、作家に対して当該補助事業採択時のみの購入を条件としたり、安価な価格での提供をお願いするなど、作品購入に際しては大変な苦労がある。

⑤当該補助事業により、アートストリートへの立体作品の設置は飛躍的に進みつつある。今後アートストリートを印象付けるために、通りの要所に大型の立体作品を設置したいとの要望もあるが、本市の財政状況同様大変厳しい状況にある。また、今後はこれまで以上に、まちの活性化に繋げられるような関連するソフト事業を展開していきたい。

＊ 自治体名　鹿児島県枕崎市
＊ 人　　口　23,502人
＊ 面　　積　74.88Km^2
＊ 事業開始年度　平成23年度
＊ 事業主体　枕崎市

連絡先

枕崎市教育委員会文化課（文化係）
TEL 0993-72-9998　FAX 0993-72-9998

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

鹿児島県長島町　ながしま造形美術展

①町内の集落や各学校単位で、地元にある身近な素材を活用して造形作品を作成し展示することで、観光の振興や産業発展を図る。各作品を一会場に展示して、町内外からの観光客を集客し、共生・協働、地域の活性化を目指して本町をPRするものである。

②地元にある素材を活用し、町内の地域住民、各学校の児童・PTAらが総力で迫力ある造形物を作成、展示し観光客の集客を図るイベント。町民の創造性を育むとともに、豊かな地域文化を確立し、広域的な交流を積極的に進め地域全体の活性化に努める。回を重ねるごとに、作品のスケールが大きくなり細部にまでこだわった作品が多く見られるようになった。また開催前に流行したモノや人物等を作成することも多くなった。

③地域や参加団体の絆が深まり、まとまりが良くなり、住民参加型のイベントとして定着し始めた。また、町外からの流入人口が増加し、会場周辺において農産物・海産物を中心に地元特産品を試飲・販売することで町のPRに繋がっており、地元小売店や道の駅等の販売額も伸び、経済効果も図られてきている。

④材料に既製品ではなく地元にある身近な素材（ススキ、竹、杉の葉、貝殻等）や廃材（空缶、ペットボトル等）、更には町内の海岸に漂着した漂流物等を利用している点等からエコや環境について考える機会にも繋がっている。２年に一度の開催であり、住民は地域の活性化策と認識してはいるものの、製作過程に日数を有する上、高齢化等により人材・素材の収集等が大変になり、参加自体に難色を示し始めている団体もある。

⑤回数を重ねるたび、作品の質の向上と大型化している。運搬・設置に支障をきたす場合もあるが、これまで以上に地域の活性化と、共生・協働社会になることを目指し継続していきたい。

＊自治体名　鹿児島県長島町
＊人口　11,408人
＊面積　116.23Km^2
＊事業開始年度　昭和60年度
＊事業主体　長島町

連絡先

長島町企画財政課
TEL 0996-86-1111　FAX 0996-86-0950
URL http://www.town.nagashima.lg.jp

鹿児島県湧水町　「芸術がある町」まちづくり事業

①日本で最初の国立公園に指定された豊かな自然・景観等の地域資源がある霧島地域では、平成２年６月に策定された鹿児島県総合基本計画において、伝統文化と新しい文化、高いレベルの芸術活動と県民の手作りの文化活動などの様々な文化が共鳴しあう文化圏域を築くことを目的とした「かごしま文化シンフォニー」が戦略プロジェクトとして掲げられた。この一環として霧島国際音楽ホールの建設をはじめ、霧島地域の豊かな自然を生かした文化ゾーンの整備を目指す「霧島国際芸術の森」が位置づけられ、平成12年10月「創造の森」として旧栗野町（現湧水町）に「霧島彫刻ふれあいの森（現霧島アートの森）」が整備された。これらの計画・整備を受け、旧栗野町（現湧水町）でも、地域にある素材を使用して住民が制作した造形作品の展示を行う彫刻造形展や丸太をチエンソーで削って作品を制作するチエンソーアート大会を開催し、地域一体となった取組を行った。平成17年３月22日に旧栗野町と旧吉松町が合併し、「湧水町」が誕生した。湧水町は、「人と自然が織りなす　芸術のまち　心豊かで伸びゆく美しいまち」をまちの将来像として掲げ、更なる芸術のまちづくりに取り組んでいる。

②住民の芸術に対する認識を高めることと芸術によるまちの活性化を図ることを目的としている。　民間企業と湧水町が協働により、芸術大学校学生等が制作した作品を町内主要場所（公共施設・道路の空き地等）に展示している。平成18～23年度で芸術大学校を訪れ、作品提供の依頼等を行い、現在、68作品を展示（屋内22作品、屋外46作品）している。

③町内主要場所に芸術大学校学生等の作品や住民が制作した「彫刻造形展」「チエンソーアート大会」の作品を設置することにより、住民や町外から訪れた人々が芸術に触れ親しむ環境づくりが図られた。また、「鹿児島県霧島アートの森」や「彫刻造形展」、「チエンソーアート大会」が行わる場所は、町の中心部から離れていることから、その場所へ向かう沿線沿いにも作品を設置したことにより、町内全体での雰囲気づくりを行い、一体感を高めた。

④有名作家の作品ではなく、学生の課題作品や練習作品等の芸術作品を無償提供してもらい、展示の場となっている。

⑤若手芸術家が、湧水町で作品の制作に携わり、工房ができるなど、湧水町が創作活動の拠点となり、より多くの人々が芸術に触れ親しむ「まち」として、また、イベント等により町内外からの交流・滞在人口の増加により経済効果に発展するような更なる取組みが必要となる。

＊自治体名　鹿児島県湧水町
＊人口　10,845人
＊面積　144.33Km^2
＊事業開始年度　平成18年度
＊事業主体　湧水町

連絡先

湧水町企画課
TEL 0995-74-3111（2261）　FAX 0995-74-4249
URL http://www.town.yusui.kagoshima.jp/

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

沖縄県沖縄市　国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ推進事業
（通称：キジムナーフェスタ）

①沖縄は、古より東アジア諸国との交易を図りながら文化交流をすすめ、独自の文化風土を培ってきた。しかし、先の沖縄戦では、住民の４人に一人の尊い生命が失われ多くのこどもたちも犠牲になった。沖縄市は、戦争のない平和な世界と、世界中のすべてのこどもたちが人類の大切な宝物として、すくすく元気に成長することを願い、優れた世界中の劇団が沖縄市に集う、こどものための演劇祭－キジムナーフェスタが生まれた。

②国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ（キジムナーフェスタ）は、次代を担うこどもたちが、世界の優れた舞台芸術の鑑賞やワークショップなどを通した仲間たちとの共通体験を持つことにより、互いに理解し尊重し合う心を育み、友情を深め、豊かな感性・創造力・人間性を育てていくことを目的に平成17年度から開催されている。世界の優れた演劇作品を集め、９日間の日程でフェスティバルを開催。期間中は公演だけでなくワークショップやセミナー、シンポジウムを開催し、演劇が果たす平和や教育、福祉の役割等、演劇の可能性を考える場を提供している。平成23年度は、14ヶ国、51作品、170ステージ等を開催。（観客動員数31,120人）平成20年には、これまでの実績が評価され文化庁長官表彰を受けるなど、こどもたちの豊かな感性や人間性を育む場の創出及び文化の振興に寄与している。

③本事業は、街なかに広く会場を設置した演劇フェスティバルであり、文化施設のみならず、空き店舗の活用やクーポン券の発行等、地域活性化にも寄与する仕組みづくりに取り組んでいる。

④オープニングやクロージングパーティーを街なかで開催しており、世界中から集まったパフォーマーを舞台で観るだけでなく、誰でも気軽に交流することができる。行政のみならず主催団体がそれぞれ助成金を活用した作品を持ち寄ることで、多彩なプログラムが提供できるフェスティバルとなっている。また、市民の参加を高めるため、招聘した劇団によるアウトリーチワークショップを地域の学童を対象に実施している。

⑤本事業の持つ文化的価値は、これまでの開催実績から内外の評価も高く、平成20年には、文化庁長官表彰を受賞している。本事業の持続的発展には社会的、経済的価値を高める取り組みが不可欠である。今後地域との連携や経済波及効果を見込んだ地域活性化への具体的な取り組みを強化し定着させていく必要がある。

＊ 自治体名　沖縄県沖縄市
＊ 人口　136,330人
＊ 面積　49Km^2
＊ 事業開始年度　平成17年度
＊ 事業主体　沖縄市

連絡先
沖縄市経済文化部文化観光課
TEL 098-939-1212（3553）　FAX 098-939-7341
URL http://www.jp.kijimuna-festa.org

※①事業、活動の背景・経緯　②目的、実施内容及び実施状況　③成果や今後期待される効果
④特徴的な点、事業継続において苦心した点や解決方法　⑤課題と今後の展開

地域づくり（別冊）
「アートを活用したまちづくり」

平成25年１月発行

編集・発行　財団法人　地域活性化センター
〒103-0027　東京都中央区日本橋2-3-4
日本橋プラザビル13階
TEL：03-5202-6138　　FAX：03-5202-0755
印　　刷　株式会社　丸井工文社

宝くじは、
地方自治体の公共事業等に
幅広く使われています。

ワクワク、
ドキドキ。



宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。

財団法人　日本宝くじ協会